

赤い弓の断章

ぽー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アーチャー視点で繰り広げられる第五次聖杯戦争。

しかしある瞬間から物語は乖離を始め……

最果てに至る、一つの可能性としての断章。

自サイトで掲載していた作品ですが、ジオシテーズのサービス終了にともないこちらに移行させて頂きます。

目次

第一章	第一話	1
	第二話	7
	第三話	21
	第四話	38
	第五話	45
	第六話	63
	第七話	86
	第八話	103
	第九話	115
第二章	第一話	136

第二話	142
第三話	157
第四話	173
第五話	187
第六話	216
第三章	
第一話	232
第二話	238
第三話	261
第四話	281
第五話	294
第六話	307
第七話	323

第四章

第一話

第二話

第三話

第四話

第五話

第六話

第七話

第八話

第九話

第十話

最終章

第一話

453

434

422

409

400

391

380

368

356

343

338

第二話

第三話

第四話

第五話

第六話

エピソード

プロローグ

533

530

514

503

485

467

456

第一章

第一話

幾度目となるか此度の戦。血で血を洗わば何があらんや。千万の罪を以つてしかしそを叶えんとす。

欲さば敵を討ち、望むなら之を守り、かくして己が最強を証明するならば。

再び我が前に臨んで力を示せ。

「我が望みを叶えるべく」

是とする。

契約開始を告げる鐘。奔流堰を切る。

理念と要素を、幻想とも妄想ともつかない意志にて設計し吸収し乱立し型に嵌め希望ないし絶望を付与。

この世においてただ一なる大地にして、掴む豪根にして、聳え立つ巨幹にして、錯綜する枝であり包む葉である揺るがぬ『世界』より望まれる落下の速度。要求という言葉は強要という腕力に塗りに塗るかえられ、逸脱という追放は現実と地獄を曖昧にする。

鍵はそも契約のみ。是とされる。

果実なる君。枝より伸びし呪縛を色にて切断。音の引力にて血の奔流。

十の十乗をさらに十乗。

初めの一にて因子は揃い、中を紡いだ十より至り、百を用いて衣服を纏い、千を以つては剣を携え、万を持して世界を覗く。億届きて運命を見定め、兆より先もはや要すべきものはなし。

より先に進みし落ちるきざはし。

残る全てのの数を星に変え、ただ己が覚悟を飲むべくに使うべし。

身命之鉄。他を圧倒せし身を奮い、囚われし命を呪え。

「否。身命之剣」

是とする。

十の十乗をさらに十乗。残すは一のみ刻印を結ぶ。

約を結びし者との魂系結合。その者携えし部品が最も重き門を外す。

刻まれし刻印。世界への解放門を秒数的定義にて限定解放。落下。力場は十分と断する。

あらゆる断層を貫通し、銀河の数の制約を振り切り、平行の鎖を刻んだ君は弓引く呪いとして定義される。壺式参の印綬に従い契約者へと三度屈服せよ。

「我が怨念を果たすべく」

是とする。

総じて突破せしめし関門八億二万。あらゆる因果を再構築。君の現界を全ての星は黙認した。

強力な魔力の導きが、全身を縛っていた。

一部の隙もないがんじがらめは、そのまま世界変換の摩擦に耐えうる防護服となる。

この摩擦に燃やされる程度の誘導ならば、現界することは出来ず、そのまま焼かれて再びアカシック・レコードの紙面へと舞い戻ることになる。

こじ開けられていく世界の門。熱が迸った。私は小さく呻いた。誘導が、半ば乱れている。方向性が一手に定まらず、渦を描いて混乱の様相を呈していく。

いくらかの破片が散った。それは私の記憶と呼べるパーツだ。通り過ぎる門に身を

擦り、破片が一つ二つと砕け散っていく。重要な要素ではないが、現界した直後は混乱を呼ぶであろう。

痛みもある。歯を食いしばった。愚かにも、不安定な魔力を用いての召喚のようだった。この時点で私は私の召喚主——マスターに見切りを付けることを決定した。不完全な方法論。期待は出来まい。力に溺れた、愚か者であろう。この程度の腕前しか持っていないというのに、殺し殺される鉄火場へ踏み入ろうとは——

まあいい、と鼻を鳴らす。

聖杯戦争の概要は既に報告されている。サーヴァントとして、敵を討ち聖杯を手に入れる。マスターに期待できないとなると、単独行動をとることを予想して臨まなくてはなるまい。おあつらえ向きにクラスはある程度自由行動の取れるアーチャーである。一人夜に潜み、一人敵を討ち、愚かなマスターが愚かなりに知恵を絞るならば、無駄死にはしないようにしてやるのが慈悲というものだ。私が殺しはしないという前提の、今のところただ一人の人間であるマスターは。

世界の入り口が近づいてきた。

さあいつの時代か。次はどれだけの骸を積みばいいのか。また一つ、世界を焼き払えばいいのか。

呪文が届く。形式は立派に形をなしているが、しかしどこまでも不安定なそれ。し

かもまだ声質も幼く、こんな子供が戦うというのか。

やがて訪れた衝撃。魔力を放ってわずかに相殺する。

丁寧には程遠い過程を経て、私は右足から幾十度目の降臨を果たした。

地に響くような衝撃波は次第に収まっていき、視界が晴れていく。

「ヤッ」

赤を基調に整えられた部屋だった。いや、整えられていた、という言い表し方が実にしっくりくる。質の高い家具が整列し、厳かな雰囲気を持つて主人も客ももてなす良き居間であつたのだろう。ついさつきまでは。

ソファーは根っから碎けていた。鏡面台はもはや原形すらとどめていない有様で、引き裂かれた絨毯とカーテンが実に痛々しい。あられのように飛び散つたシャンデリアはかすかに機能を留めてはいるが、ジジと音を立てていつその生命を全うするかは知れたものではない。亀裂の走つた床。鉄筋の覗く壁。満身創痍の身で、懸命に秒針を歩かせる時計台が実に健気だが、他と同じで臨終のときは近そうだ。

そしてあるはずのものがそこにはなかった。正しくは、居るべき人間であるが。

「どうも、いったのやら、まったく」

脱力して、私は何かの残骸と何かの残骸が折り重なつて何かの残骸となつた上で足を組み、呆然ともたれた。

なあ、まだ見ぬ我がマスターよ。まさか君は魔術試験か何かで私を呼び出したんじゃないかあるまいな。そうなら満点を上げるから、どうかさっさとリタイヤしてくれ。

眩いて、途端に地下からダダダと階段を駆け上がってくる足音が響いてきた。

よほど急いで駆け上がってきたのか、殊勝なマスターは扉の向こうからも息切れが聞こえるほどに忙しく吐息を繰り返している。そのままガチャガチャとノブをまわすが——残念なことにノブというパーツが機能するほど、扉全体はまともじゃなかったわけだ。

「——ああもう、邪魔だこのおつ……！」

長い歴史を旅してきた扉も、その前蹴りの一撃で天に返る。息を荒げながら部屋に踏み込んできた下手人は、まだ見目も幼い女の子であった。

少女であった。赤い服を纏い、赤い魔力を纏った。

匂いがあった。何の匂いかはわからなかった。私は、かすかな、理屈の通らない戸惑いを感じながら、決してそんなものに動揺すまいと、懸命に表情を固くした。

静止の時間。ありがたいことに、彼女が口を開くまではしばらく間が空いていた。本当にありがたい。私は不可解な動揺を鎮めることに成功した。

第二話

現界の混乱を収めたのも束の間、また違う混乱に私は閉口する。

貧乏くじを引いたか、と後ろ向きな考えがめぐった。頭痛を呼ぶほどに深刻なものが。

世界の英霊が頭痛など全く馬鹿馬鹿しいが、聖杯戦争を勝ち抜くために私を召喚したのが、能力も未熟な年端も行かぬ少女であるのなら、仕方もないものであろう。

私を召喚した主——マスターである可能性を持った彼女は、部屋に踏み込んだ姿勢もそのまま、束の間静止し、あちやー、といった具合に天を仰いでやつちやつたとか何とか呟いている。私の存在が目に入っていないのか、意図的に無視してるのか、しばらく部屋の惨状に目をやりながらブツブツと独り言を繰り返して、ようやく私の方に目をやると不機嫌を貼り付けたような表情で言い捨てた。

「それで。アンタ、なに」

「開口一番それか」

これはまた、とんでもないマスターに引き当てられたものだ、と呟いて、自分の運気のなさは筋金入りではないかと半ば呪う。

「これは全く……予想を裏切ることなく、本気の貧乏くじに違いない」

自分で召喚を果たしておいて、アンタなにもない。魔力だけではなく、このお嬢さんは性根までイビツなようだった。魔術師で性格がゆがんでいるのも珍しくはないが、ならば目の前の女性は実に魔術師然としているということになるが。

あとどうやら威勢もいいうで、私の存在に何ら臆することなく鼻を鳴らして彼女は言い捨てる。

「——確認するけど、貴方は私のサーヴァントで間違いない？」

「それはこちらが訊きたいな。君こそ私のマスターなのか。ここまで乱暴な召喚は初めてでね、正直状況が掴めない」

状況が掴めない、というのも実に真実だった。抜け落ちた記憶が未だ戻らず、時代に関する報告までもが欠落していて、私は少々混乱をしているようだ。なにもかも全て、へたな召喚をした目の前の少女の責である。

ふと部屋に目をやる。召喚の過程より感じていたものがあつた。この時代、私が生身でいた時代とそう遠くないのではないか、という予感である。見れば、家具も部屋の作りもどこかしら見たことのあるようなカタチをしている。

暗い期待と同時に、少なからず苛立ちが募つた。いざ目的を果たさんとして、この少女を引き連れて戦いなど赴けるだろうか。なんとも、聖杯というのもいい加減なもの

だ。この程度の力量で呼べるのならばその奇跡とやらも大したものではあるまい。

言いそうになったが、しかし私は齒がゆい思いを何とかこらえることが出来た。その代償に、素直に話に応じようという気持ちも失ってしまったのだが。

「私だつて初めてよ。そういう質問は却下するわ」

「そうか……。だが私が召喚されたときに、君は目の前にいなかった。これはどういう事なのか説明してくれ」

「本気？ 雛鳥じゃあるまいし、目を開けた時にしか主を決められない、なんて冗談は止めてよね」

「む」

やり込めた気であるのか、少女はさもえへんと言わんばかりに意識を高揚させている。確かに、いわゆる私の理は通らないそれだが、かといって彼女におとなしく従おうという気が起きるわけもない。

つまり、腕も前もないくせに一人前ぶるのが、いつかの誰かに見えて、腹が立つのだ。自分ひとりで納得をしたのか、彼女は話を続ける。

「まあいいわ。わたしが訊いてるのはね、貴方が他の誰でもない、このわたしのサーヴァントかつて事だけよ。それをはつきりさせない以上、他の質問に答える義務はないわ」

「……召喚に失敗しておいてそれか。この場合、他に色々言うべき事があると思うのだ

が」

具体的に言えば、侘びの一つや二つや三つや四つのことだが、現状説明というのも妥協できる線ではある。

「そんなのないわよ。主従関係は一番初めにはつきりさせておくべき物だもの」
そしてこうくる。

ああ、ならば私にも考えがあるというものだ。今後において役立つ提案であるのから、いつかは言わねばならない話だったが手間が省ける。ついでにわずかながら持つていた、少々気の毒なと思う憐憫を主成分にする気持ちすらも、綺麗さっぱりどこかへと飛んでった。

「ふむ。主従関係はハッキリさせておく、か。やる事は失点だらけだが、口だけは達者らしい」

ピクリ、と彼女の眉が動く。威勢も達者だな、と付け加えたくなつた。

「——ああ、確かにその意見には賛成だ。どちらが強者でどちらが弱者なのか、明確にしておかなければお互いやり辛かろう」

「どちらが弱者ですって……？」

無論、この場合の弱者をわざわざ言うまでもない。召喚手順もともに踏めない、そんな彼女とこの私がどちらが脆弱なのかわざわざ指摘するまでもないだろう。

「ああ。私もサーヴァントだ、呼ばれたからには主従関係を認めるさ。だが、それはあくまで契約上の話だろう？　どちらがより優れた者か、共に戦うにふさわしい相手かを計るのは別になる」

見れば——もはや堪忍袋も何とやらといったところで、今にも頭から湯気を発さんばかりに血が上っているようだ。それを確認して、私はしつかりと言いつける。

「さて。その件で行くと、君は私のマスターに相応しい魔術師なのかな、お嬢さん」
くつ、と口の端を尖らせるが、まだガマンは利くようである。

相乗的に私のやり返しの楽しみも増える。

「——貴方の意見なんて聞いてないわ。わたしが訊いているのは、貴方がわたしのサーヴァントかどうかで事だけよ」

虫くらいならば殺せるであろう、中々具合のいい殺気のこもった視線を向けながら言う。私もいよいよ興が乗ってきたのか、久しぶりに味わう楽しい気持ちで言い返した。

「ほう。なるほどなるほど、そんな当たり前の事は応えるまでもない、と？　実に勇ましい。いや、気概だけなら立派なマスターだが——」

「だ・か・ら順番を間違えるなっていうのっ……！　一番初めに確認するのは召喚者の務めよ。さあ答えなさい、貴方はわたしのサーヴァントなのね……!!？」

「——はあ。強情なお嬢さんだ、これでは話が進まん。……仕方あるまい。仮に、私が

君のサーヴァントだとしよう。で。その場合、君が私のマスターなのか？」

地団駄を踏みながら、詰め寄ってくる彼女のその剣幕に、少々ならば妥協しても良いという気持ちになった。

しかし勘違いされても困るので、あくまで仮の話だが、と付け加える。

「あつ、当たり前じゃない……！ 貴方がわたしに呼ばれたサーヴァントなら、貴方のマスターはわたし以外に誰がいるっていうのよ……！」

ほう。と勿論ウワベだけだが、一応考慮する振りくらいはしてみる。

鼻息荒く契約を迫る少女。私は、私を仮にでも召喚しきつたその力量を過小評価はしていない。私も生前同じ魔術師であったのだから、事の困難さ及び難渋さは重々承知している。なので、試験の一つでもしようという気になった。私が、全身全霊を持って協力できるか、というテストである。サーヴァントがマスターを試すなどという話も聞かないので、楽しんでいっているというのは否定はしないが。

「まあ仮の話なんだが、とりあえずそうだとしよう。それで。君が私のマスターである証は何処にある？」

これで、ただ呆けたように印綬を示すだけならば、

「……よ。貴方のマスターである証ってコレでしょ」

その程度、ということである。

赤く浮かび上がる、三つのマナの具現によって彩られた幾何学模様の紋章。聖杯戦争参戦の証。

しかしそれもただの形骸に過ぎなかった。

ふふん、と何が嬉しいのか自慢げに右手をかざしながら、彼女は言い捨てる。

「納得いった？ これでもまだ文句を言うの？」

これはもう、本気で頭も痛くなろうというものだ。

私は彼女を過小評価したとは思わないが、聖杯を過大評価している可能性もでてきた。

「……はあ。まいったな、本気で言っているのかお嬢さん」

「ほ、本気がって、なんでよ」

むつと頬を膨らませる。確かに令呪はサーヴァントを縛る戒めの類であり、それを御する資格を持つものとしての最低限の持ち物であるが、それとこれとは話の次元が違う。我らは一方的に隷属を誓う「使い魔」とは一線を画すことを、彼女は全く理解していないようである。

もはやそれを説明することすら億劫ではあるが、私の内部に残ったかすかな親切心が口を開く。自分でもまだまだ人がいいとは思いますが、これでも一応、どういうハチャメチャな工程を経たかは想像もつかないが、一つの奇跡とも呼べるサーヴァントの召喚に

成功しているのだ。

あと恥や外聞もあるようで、私の説明を聞くと閉口したようにしばし口を噤んだ。

「あ——う」

ぐうの音も出ないのか。しどろもどろに何かを言おうと引つ込め、くつと唇を噛んでからまた言う。

「……なによ。それじゃあわたしはマスター失格？」

「そう願いたいだが、そうはいくまい。令呪がある以上、私の召喚者は君のようだ。……信じたがたいが、君は本当にマスターらしいな」

まったく、なにが起こったのかは判然としないが。それこそまさに奇跡ではないのか。肩をすくめるほかない。

「まったくもって不満だが認めよう。とりあえず、君は私のマスターだ。だが私にも条件がある。私は今後、君の言い分には従わない。戦闘方針は私が決めるし、君はそれに従って行動する。これが最大の譲歩だ。それで構わないお嬢さん？」

とりあえず。この単語の部分を一段と強調して言う。どんな愚か者であろうと私の意図が伝わるように。私の要求に、納得がいくのかいかないのか、少女はフルフルと肩を震わせながら呟いた。

「……そう。不満だけど認めるくせに、わたしの意見には取り合わないって、どういうコ

トかしら？ 貴方はわたしのサーヴァントなんでしょ？」

肩ばかりでなく、声までもがやや震えている。泣くかもしれない、と思ったがこの程度で泣き崩れるのなら御しやすかろう。

「ああ、カタチの上だけはな。故に形式上は君に従ってやる」

だが戦うのは私自身だ。告げて、不意に彼女が聖杯を手にして何を願うのかが気になった。

取るに足らない愚かな願いだろうとは思うが、まあ新たな滅びを呼ぶような類のものでも、それを防ぐため降臨したわけではないので私には何の関係もない、のでどうでもいい。とりあえず君は無力だという前提に立ち、言うとおりに行動させ、一週間ほど地下にでもいてもらったらとりあえず死なすことはない、となるべくやんわりと告げた。

「ん、怒ったのか？」

見ると、なにやら不満そうな顔でこちらを睨んでいる。心なしか眉の角度がありえないように目える。それとも自分の無力を悟ったのだろうか、何となしに、私は同情することにした。

「いや、もちろん君の立場は尊重するよ」

形式上の参加者としてのの。

「私はマスターを勝利させる為に呼ばれたものだからな」

こんな小娘だとは思わなかったが。

「私の勝利は君のものだし、戦いで得た物は全て君にくれてやる。それなら文句はなかろう？ どうせ君に令呪は使えまい。まあ、後のことは私に任せて、君は自分の身の安全」

ふっ、と私は否応なく寒気を起こさせる——いつぞや、地雷を踏んだときに感じたのに似た——何かしらの前兆めいた予感。

ダンと床を蹴り、

「あつたまつきたあー!! いいわ、そんなに言うなら——!!」

轟く怒号。不意の出来事に、私は上手く聞き取ることが出来なかった。

彼女は、なんと言ったのか。

令呪を使うと、いまだ耳鳴りの続く私の耳には、そう残っているような気がする。

「Anfang……!」

ふっ、と魔力がもれる。

「な——まさか……!?!」

その文句は起動を意味する言葉。

令呪発動の、第一の解呪コードである。

まさかも何も、本気で令呪を使用するというのか、目の前の少女は。

奇跡の具現。

サーヴァントを律する最後の三つ。

聖杯戦争の代替不可能のジョーカー。

切り札の中の切り札。鬼札の中の鬼札であるそれを、まさか真剣にただの口汚い罵り合いのせいで使うというのか。

「そのまさかよこの礼儀知らず！」

口から流れ出る魔術仕儀の呪文。正式な手続きであった。これ以上なく流麗に流れる呪文式は、まず間違はなく、彼女の右手のラインと私の内部構造を直結するであろう。

なんとというか。まさに、度を越えた無鉄砲。

「ば……!?! 待て、正気かマスター!?! そんなコトで令呪を使うヤツが……!?!」

「うるさーい!?! いい、アンタはわたしのサーヴァント!?! なら、わたしの言い分には絶対服従つてもんでしよう!?!」

「なんだとー!?!」

そんな馬鹿な、と内心呟くがそれは口に出す気力もないということだ。何という傲慢、無鉄砲、考えなし。

一片の齟齬もなく令呪がその機能を発動させる。史上初、口喧嘩の帳尻合わせに世界の至宝が発動される。

「か、考えなしか君は……い……、こんな大雑把な事に令呪を使うなど……い……」

言うが、もはや後の祭りも三日か四日。私の基本構造が連鎖を起こし、召喚者と直結したラインのおよそ六乗ほどのエネルギーが湧き上がる。亀裂が走る。浸透する。熱。魔力が渦を巻いた。私の存在を抽象的な鎖が取り巻き、熱を奪い、力を与え、そしてそれもまた召喚者の抽象の口へと直結する。

とめどなく検索されは実行される言葉の意味。永続的な言葉の概念は、緩やかに変化を起こして私に襲いかかる。

巻き起こる魔力の風。一言いってやろうと、張本人を見た。

が、言う前に言葉はどこかへ消えた。あきれてものも言えないとはこのことだ。

どうでもいいが、自分でやつといて、やつちやつた、という顔はやめろ。

やがて令呪の発動が正式に許可され、刻印が示され、しとやかな強制力を以って、私の存在に核変を起こす。壺の令呪の使用を確認。

と同時にマスターと精神的なレイラインが貫通した。私は思わず呻いた。枯渇気味の私の霊体に、十分すぎるほどの供給が流れてくる。私は思わず呻いた。枯渇気味

驚くのも無理はない。その量たるや、並大抵の魔術師など歯牙にもかけぬ圧倒的なものであった。

奔流は固く、流麗で、時の流れの中で研磨された極上の質を保ち、方々に熱を振りま

きながら私の中に流れ込んでくる。

魔力を補充された令呪の刻印が、低くうなりその役割を明白にさせる。

命令の名。絶対服従。私は二重の意味で頭が痛くなつた。

なんと後先考えないマスターであるのか。そして、なぜこれほどの力量を見抜けなかつたのか。己もまだ未熟であると思わざるを得ない。

真綿で全身を包まれているかのような違和感。

その一つ一つに契約者の名が刻まれている。もし仮に指示に従わない場合は、真綿は全ての筋肉を鈍らせるほどに収斂し、私を縛るであろう。

しかし逆に、彼女の命に従うならば程よい緊張を保つ素晴らしい衣服となる。

永続的な命令であるにもかかわらず、これほどまでの質量と密度を保つには、やはり術者の才に依存するところが大きく、つまるところ、目の前の少女の魔術師としての力量は、私の目算を嘲笑つてしかるほどに、強力なものであつたのだ。

彼女の評価を私は改めた。聖杯戦争に参加し、この私を使役するに足る能力を、確かに保持したすばらしいマスターだと。

令呪が完全に浸透する。脈打つ内部の鼓動を感じながら、此度の戦争で真に勝とうとするならば、彼女との協力なしには成し遂げることは出来ぬであろうと知つた。

彼女は我が忠誠に足る。アーチャーのクラスはマスターを決して裏切りはしないで

あろう。

その力量を一度で見抜けなかった己の未熟さを恥じながら——我がマスターの類まれに後先考えないその性格をうらみつつ。

第三話

しん、とした部屋で、先に口を開いたのは彼女だった。

「えーと、どうなった、のかな？」

彼女に聞かれるより先に、自分の状態のチェックを始めていた。魔力、構成元素、レイライン。どれも異常はないが、違和感がぬぐわれない。私は目に魔力を透して身体を見下ろした。

薄く、煙るような魔素。

身体に、令呪の渦を感じている。赤い螺旋状のものが、くるくると私の全身を取り巻いていた。

令呪の発動は、何かの間違いだった、というわけではなさそうである。

「えーと……とりあえず、場所移るわよ。戦地じゃあるまいし、こんな崩れかけの部屋で話もなにもあつたもんじゃないもの」

言つて、二人して部屋の惨状を確かめた。

「なるほど。君の口から初めて賢明な意見がでたな。無論賛同だ。綺麗好きでね。この部屋は正直見るに耐えない」

「誰のせいよっ……まあいいわ。どうせ後で泣きを見るのはあなたなんだから」

「む。何か言ったかね？」

「いいえ？　ちやつちやと行くわよ」

階段を上がり、彼女の私室に入ったときには、今の状態のおおよその部分は把握することができた。同じくらい、このような無謀な命令をその場限りの勢いで発した、新たなマスターの無謀さ加減も、大体掴んだつもりだ。

本来の令呪の働きのとは、命令の持続時間に反比例して効力が決定する。より瞬間を限定したときにこそ、術者とサーヴァントの能力を相乗した、未曾有の技を達成する秘儀である。

だからこそ、「術者の命令に服従せよ」などという永い期間常に作用する命令は、毛ほども意味を持たない愚鈍なもののだが、彼女の魔術師としての力量が、常識を覆した。赤い螺旋は、彼女の命令に従う場合、私の魔力の巡廻を促し、良き衣となつて作用する。逆に、命に逆らうようなことになればギチリと収縮して私の動きを鈍らせるだろう。それは、本来ならあり得ない状態なのだが、それも全て術者のキャパシティでどうとでもなる、ということだ。

彼女は私の説明に、やや納得がいかない風だが、それでも一応の頷きを見せた。

「じゃあ、わたしのさっきの令呪は無意味ってこと……？」

「……通常ならそうなのだがな」

不意に笑みがこぼれてきた。なんとも、嬉しい誤算というものは起こるものである。「どうも、君の魔術師としての性能はケタが違ったらしい」

この体を充滿させる濃厚な魔力。私の全知全霊を發揮させるに足るその量は、非常に満足できるものだ。思わず口元の笑みが戻らないほどに。

レイラインより流れてくるその膨大さは、通常の魔術師が全く問題にならないほどで、一つの地脈とダイレクトに接続しているのかと錯覚してしまうほどである。

「ケタが違ったって——もしかして。ちよつと貴方。自分が今どんな状態なのか、正直に話してみなさい」

「ああ。誤算というのはそれだ。先ほどの令呪では、少しはマスターの意見を尊重しよう」という程度の心変わりにはならない」

もしそのとおり——意見を尊重しようという程度の令呪の縛りであったならば、口をきけない状態にでもして私一人が戦う予定だったのだが。むしろ強い縛りを感じている。マスターの意向にすぐわかない動きをするならば、気持ちが進まないどころか、スキルのランクが一つぐらい落ちてしまうだろう。

それもこれも、目の前の少女の膨大な魔力貯蔵、それを扱う才、決定的な意志力あつたのことだった。

そのどれもが魔術師として大成するために不可欠な要素である。私は告げた。

「前言を撤回しよう、マスター。年齢は若い、君は卓越した魔術師だ。子供と侮り、戦いから遠ざけようとしたのは私の過ちだった。無礼ともども謝ろう」

頭を下げた。素直に、頭を下げてもいいと思えた。その力量に感服したといつてもいい。

ただの一つのみを追求するしかなかった愚かな私とくらべ、彼女はあらゆる秘儀を使いこなすことの出来る、稀代の魔術師となるであろう。未だ到達出来ぬ奇蹟の類にまで、手を伸ばすことが出来るかもしれない。

可能性に満ちた若さというのは美しい。いつか、いまだ眠れる数々の力たちが咲きほころぶ姿は、きつと花のそれに似て美しいものに違いない。

不意に、死んだはずの記憶の欠片が疼いたような気がした。

「え——ちよつ、止めてよ、確かに色々言い合ったけど、そんなのケンカ両成敗っていうか……」

彼女が慌てて手を振った。そういわれて従わない理由もない。

「そうか。いや、話の解るマスターで助かった」

いいつつ曲げた体を正す。

「……なんか、切り返し早いわねアンタ」

素直な私の態度にまだ不満があるのか、彼女は口を尖らせて言った。

ふ、と笑った。やはり誰かに似ているような気がしたのだ。

私の記憶は死んでいる。ならば彼女を、忘れた誰かと比べるなどということは止めよう。心なしか浮かれているのかもしれない。

「なに、誤算は誤算だったが、嬉しい誤算というやつだからな。これほどの才能があるのなら、君を戦いに巻き込むことに異論はない」

「え——じゃあ令呪抜きで、私がマスターだつて認めるのね？」

「無論だ。先ほどは召喚されたばかりで馴染んでいなかったが、今では完全に繋がった。魔術師であるのなら、契約による繋がりを感ぜられるだろう」

「契約……？」

彼女は自分の手の平を見やった。マスターになるということは、己の魔力の何割かをサーヴァントに供給し現世にとどめておかなくてはならない。初体験の少女には負担が大きいかも思れないと思つたが、その能力を考えれば下らない杞憂に過ぎないだろう。

「魔力提供量は十分だ。経験的に問題はありそうだが、君の能力は飛びぬけている。普通の魔術師ならば、サーヴァントを召喚した瞬間に意識を失っているだろう。だというのに君は活力に満ちている。先ほどの令呪といい、この魔力量といい——マスターとし

て、君は間違いなく一流だ」

言うのと、気恥ずかしいのか彼女はあさつての方を向きながらぶつくさと呟く。なに、そのあたりでやはり少女なのだと思う。

やがて、気をとりなおしている。

「……で？ 貴方、何のサーヴァント？」

「見て判らないか。ああ、それは結構」

私の服装を見て、すぐに弓を扱う者だと判らないのは、せいぜい年相応に考えれば仕方ないかもしれない。一般常識に關しては不問にしようと思う。あくまで魅力的なのは、魔術師としての才だけなのだから。

「……分かったわ、これはマスターとしての質問よ。ね。貴方、セイバーじゃないの？」
「残念ながら、劍は持っていない」

言うのと、本当に残念そうに彼女は眉根を寄せた。口元に手をあて、何事が考える。

むつとなる。アーチャーはお呼びでなくても言うのか。

「……ドジったわ。あれだけ宝石を使っておいてセイバーじゃないなんて、目も当てられない」

む。

「悪かったな、セイバーでなくて」

「え？ あ、うん、そりやあ痛恨のミスだから残念だけど、悪いのはわたしなんだから——」

しかもその上、このアーチャー召喚が『痛恨のミス』ときた。

これはいいよ、私の沽券に関わる発言である。英霊としてであれ、男としてであれ、目にモノを見せねば落ち着かない。

「ああ、どうせアーチャーでは派手さにかけるだろうよ。いいだろう、後で今の暴言を悔やませてやる。その時になって謝っても聞かないからな」

睨み付ける。ははあん、と小悪魔的な笑みを浮かべて、アーチャーにはあまり興味のないマスターは言った。

「なに、癩に触った、アーチャー？」

「触った。見ていろ、必ず自分が幸運だったと思い知らせてやる」

「そうね。それじゃあ必ずわたしを後悔させてアーチャー。そうなったら素直に謝らせて貰うから」

「ああ、忘れるなよマスター。己が召喚したものがどれほどの者か、知って感謝するがいい。もつとも、その時になって謝られてもこちらの気が晴れんだろうがな」

ふん、と鼻で笑う。そのときになつたら、それこそ腰でも抜かすがいい。

「まあいいわ。それでアンタ、何処の英霊なのよ」

自然に開きかけた口を、私はつぐんだ。

現界の際、そのプロセスの混乱によって私の記憶にも欠落が生じた。

欠落、というよりはまだ記憶が召喚されきっていない、という方が適切かもしれない。私の本体というのは英霊の座に保存されていて、その中の本質をコピーしたものが、現世にダウンロードされている。だからいずれ、今はまだはつきりとしらない記憶も鮮明に甦るであろう。

反面、しっかりと残っている記憶もある。ただ彼女にそれを言っていないものか。言うならばどこまで言うのか。

この時代、場所、いやここが日本だと、そして私の死よりおおよそ百年前後する時代だということは、家具やその他の装飾品で分かる。

近い。可能性はあるのだ。私が、私の目的を果たすに、限りなく近いという可能性がある。

聖杯の力を借りずとも、願いを達成させる可能性があるということとは、私の一つ一つの発言がそれぞれ重大な分岐ということだ。

「アーチャー？ マスターであるわたしが、サーヴァントである貴方に訊いてるんだけど？」

焦れたように眉根を寄せるマスター。私は慎重を期することを選択した。

「——それは、秘密だ」

私の素性に関して、白を切る。

「は……？」

「私がどのようなモノだったかは答えられない。何故かと言うと——」

「あのね。つまらない理由だったら怒るわよ」

つまらない理由。不意に、つまらないという言葉を私の目的に当てはめてみた。

——英霊となった男が、英霊を止めたいがために過去の自分自身を殺害する。

その理由が、つまらないかどうか、私には判別できない。ただ、ひどく矮小なことは違いない。私利私欲だった。醜い辻褃あわせ。

しかし、それでも、砕け散った夢と——いや、妄想だった——憧れた世界と——血塗られていた——積み上げるはずの幸せと——積み上げたものは骸——それら全てを、過去から未来にいたる全ての過程で、清算すべきだという思いだけは、覆る気がしない。誰が為に。我が為に。

「何故かと言うと、自分でも分からない」

あらゆる危険を冒さない。ただの一つの取りこぼしもしない。

私は、私の願いを叶える為に現界した。聖杯はマスターのみならず、守り戦ったサーヴァントにも願望達成の権利を与えるという。いいだろう。今回召喚された聖杯が、ア

レと違つて真に願いを叶える物ならば、私は輪廻の回転から逃れることができる。しかし今、そればかりが方策ではない。

この部屋の造りや、素材、さらには世界に漂うマナの匂いに至るまで、私が生前暮らしていた時代、西暦二千年付近のものにひどく似ている。場所も、日本だ。

昂る。聖杯を手にいれれば問答無用、叶わなくても次善の策がある。

これは機だ。率としては、決して低くはない。私は目的を成す、チャンスを得たのだ。戦い。いつからか、この目的のためだけに私は、剣を振つていたのだから——
分らない、という私の言葉に案の定彼女は怒号を上げた。

「はああああああ!!」　なによそれ、アンタわたしの事バカにしてるわけ!」

「……マスターを侮辱するつもりはない。ただ、これは君の不完全な召喚のツケだぞ。どうも記憶に混乱が見られる。自分が何者であるかは判るのだが、名前や素性がどうも曖昧だ。……まあさして重要な欠落ではないから気にする事はないのだが」

慎重に言葉を選んだ。マスターに疑問を持たれ、思い出せ、と意識を持つて言われたならば、身体に令呪の縛りが適用されて告白せずにはいられない。それだけは何としても避けねばならない。

といつて全て嘘というわけでもなかった。事実私はおのが名前を失念している。思い出せない、とはいつてもせいぜい『喉の辺りはまでは来ている』というやつで、いず

れ思い出せるに違いないが、それは伏せることにした。

「気にする事はない——つて、気にするわよそんなの！ アンタがどんな英霊が知らなきや、どのくらい強いのか判らないじゃない！」

「なんだ、そんな事は問題ではなからう。些末な問題だよ、それは」

「些末つてアンタね、相棒の強さが判らないんじゃないや作戦の立てようがないでしょ!? そんなんで戦つていけるワケないじゃない！」

「何を言う。私は君が呼び出したサーヴァントだ。それが最強でない筈がない」

真つ直ぐにいった。私のセリフが意外だったのか、彼女は喉を詰まらせた。

これもまた、嘘ではない。サーヴァントはマスターの器に満たされる分の存在しか、呼び出されることはない。仮に呼び出されるとしても、英霊と縁の深い代物を供物として補助適用した場合である。そんなもの使ったとして、実際に戦闘が始まれば術者のキャパシティを越えることを避けたことにはならない。

彼女の能力を超える存在というのも、私には居ると思えない。実際そう信じさせてしまうほどに、目の前の少女の力は真実なのだ。

「……ま、いつか。誰にも正体が分からないつて事には変わりはないんだし……敵を騙すにはまず味方からつていうし……」

聖杯戦争。間違いない、先頭には我々が立っている。地力では恐らく他の追随を許し

はしない。

やがて、これから私が従うマスターが、最初の指令を下した。

「分かった、しばらく貴方の正体に関しては不問にしましょう。——それじゃアーチャー、最初の仕事だけだ」

「さつそくか。好戦的だな君は。それで敵は何処だ」

私と言いつ終る前に、放り投げられた二つのものを受け取った。

長い杖のような先に、一直線にそろえられた毛先が並ぶ、そのシルエツト。

平べたく、取っ手が付いており何かをすくうにはかなりの能力を発揮するその形状。ていうか、ホウキとチリトリだった。

「下の掃除、お願い。アンタが散らかしたんだから、責任もってキレイにしといてね」
キラリと、極上の笑みで彼女はいった。

反論抹殺。

令呪の縛りを盾にされ、終いにはサーヴアントを使い魔扱いし、結局言いくるめられるような形で、私は渋々居間の掃除をすることとなった。

台詞を吐き捨て、私は扉のノブを握る。ため息をこぼして一階下の居間へと戻る。惨憺たる部屋の散らかり具合は、どこから手をつければ良いのかすら迷わせてくれる。

「まったく……」

確かに目前の惨状を作り出したのは自分がこの部屋で現界した衝撃によるものであるのだが、その前に私を呼んだのは彼女だということ忘れているに違いない。

そもそもが、望んでこの居間に出現したのではなく、術師であるマスターの導きによつて現れたのだ。

この部屋を滅茶苦茶にしたのは不可抗力以外のなにものでもなく、責任の一端どころかそのほとんど以上の部分はこの屋敷の家主の持ち物だということになる。

「……む」

ぐつと体に負荷が増すのを感じる。令呪がある限り癒されることのない気だるさは、私に拒否の意を持つことを許さない。

澁々とホウキとチリトリを手にした。もともと綺麗な部屋だったので、ここまで散らかしてしまった罪悪感も実際のところなくはない。しかし行動に踏み切るまでの過程は無視できるものではない、と口に出しながら、ゴミというゴミを消していく。割れたガラスを魔術で修復。呪を唱え、砕けたコンクリートを元に戻していく。

やがて、部屋が破壊される以前の姿に戻ったときには、もうそろそろすれば空に群青が差し始めようか、という時刻になっていた。

片付け終えた部屋。私は柔軟なソファアーに腰を下ろした。

ソファアがしなつた。音を立てて軋んだ。

「とうとうだ」

目的を、果たすという、己への盟約。

幾年月、それを写し、熱で打ち、鋼に鍛え、血で振るい、欠片を毀したのか。悠久の時を彷徨う行為を終局へと導く。数多の骸をこの身は踏んできた。それは罪悪という単語ですら御しかねる行為。正義を履き違えた愚行は、この手で終焉へと切り換える。その機が、今私の手の平の中にスルリと滑り込んできたかもしれないのだ。

窓を開けた。飛び越える。別段、家に閉じこもれと命令を受けているわけではない。土地にはしつかりと結界が巡らされているので、外にでるくらいなら何の問題もない。他のサーヴァントが襲ってくるという確率は、今のところまだ全然低いのだ。いまだ暗い現実世界に、私は跳躍した。

外に出て、屋根から屋根を伝い屋敷の上に立つ。静かに考えた。街並みに、見覚えがあつた。思い出すためにかかつた時間は、決して短くはなかつた。冬。寒くはない。そうだった、冬木の季節は、いつも優しかった。

電柱が立ち、民家の屋根にはアンテナがある。遠く地平の道程には、高くそびえるビルディングが列を成している。

衛宮士郎が、生きた町だった。呼吸を静かに繰り返した。決して乱さないように、何

回も吐いては吸い、吐いては吸った。

衛宮士郎がここにいる。私はどうとう、たどり着いた。まさか、という気持ちがある。信じがたいという思いもあった。しかし予想より感慨は少ないものだった。頭には白々とした空白が浮かんでは消えた。

西暦二千年付近の冬木市。おそらくその推測に間違いはない。いくつか欠落した記憶のせいで、曖昧な箇所も見られるが、事実を目視にて確認したので、元々在った知識は、根源より急速にダウンロードされる。

「だが、磨耗していることに違いはない」

私に記憶などというものは残っていない。脳などに記録されるような儂く脆弱なもの、血みどろの星霜を歩く間に全て死んでいった。

だから、推測でしかものを考えることができない。もし仮に私の推理が的を得て、真にここがそうならば、やはり私は僥倖を手にしたということになる

衛宮士郎。正義の味方になりたい未熟な魔術使い。

「くっ」

目の前の事実を実感した。

腹の底がぶるぶると震えて、そのあまりの激しさに私は耐えることが出来なかった。

空白は、溶岩の熱に霧散した。

全身全霊で、私は笑い声を上げた。

呼吸のたびに体内に取り入れられる酸素という酸素を、全て私は笑い声に変えて口から吐き出した。

怒号のような、嗚咽のような笑いであると、自虐的に感じた。しかし誰にもこの歓喜を妨げることなど出来ない。

悲願であった。いや、願いなどという生ぬるいものではない。怨念。妄執。呪い。血と怨嗟をノミにして削った、正義の味方などという臭い臭い呪縛を断ち切るために、私は今まで在ることに耐えられた。

とめどない笑いに喉が焼け付けを起こした。けれど嬉しくて嬉しくて私はまだまだ笑い続けた。

これを僥倖と呼ばずになんと呼ぶ。ここに現界した私が何度目の私かは想像することもできないが、果てしない道程であった。確率論を用いるならば、必然とも呼べるかもしれない。いずれにしろ、私の興味は今この瞬間に、奴と同じ空気を吸っているということだけだ。

聖杯戦争におけるアーチャーというクラスで存在を果たしたのは予想外だったが、しかしこの推測が的を射ているのだとすれば、取るに足らない誤差でしかない。

どう殺してくれようか。背中に背負った全ての死体をぶちまけて呪ってやるのもい

い。貴様の全ては無駄と無力を培うことなのだ。と絶望させてもいい。聖杯など用いずとも、この手であればどうにでもできる。

朝日が近い。

夜はいつでも暗いが、果たしてこの時代の空は何色をしているのだろうか。赤い空も、いつまでも暗い空も見てきた。ここが私の生身のころの世界なら、見失ってしまつた青い空に再び会えるかもしれない。

腰を下ろした。私は屋根の上に座っている。決して、骸の山に腰を下ろしているわけではない。しかしどうにも、その錯覚は脳裏を離れてはくれない。尻の下は、冷えた肉の肌触りに似ていた。

しかしそれも終焉を迎えるであろう。此度の聖杯戦争を置いて、もはや私の目的を果たす契機は二度と訪れまい。

マスターと共に、聖杯戦争を勝利し、前後して私は私の目的を果たす。

播るがない。この決意は、どうしようもないほど、私の奥底に根付いているようだった。

そこまで考えて、私はまだ彼女の名前を聞いていないことに気付いた。

やがて懐かしい世界が、群青をまといだす。

第四話

いい水が汲めた。

魔術師は水を大事に扱うが、この家は特に質がいい。代を重ねた、古い井戸水を汲み上げているのだろう。元々の土の匂いや味が殺されていない、生きた水だった。

日が完全に昇るのを見届けると、私は屋敷の台所に戻り、どれほど整理が行き届いているのか確かめた。とはいうものの破壊された部屋を修繕したのだから、物色などとは今更な物言いでもある。物はそろっていた。ある程度の整理もされていた。ただあるだけではなく、しつかりと考えられた配置でもあった。マスターの性格にしてはまともなものだと感心した。

しばらくはあれこれと道具や具材を見回っていたが、やがて紅茶をみつけた。

名のある中国紅茶で、上品な香りのたつファーストフラツシュの一品物だった。フォートナム・アンド・メイソンの銘柄を見て、私も生前淹れたことがあると、思い出した。体はさらしにしっかりと覚えていよう。缶の蓋を開け、香りを確かめてみる。芳醇な香りだった。蒸らす時間は、四分もいらぬ。

時計を見る。そろそろ、彼女が起きてきてもおかしくない時間だった。もう朝とは呼

べないが、召還を果たした次の日なのだから、体力も魔力量も大幅に削られているのだろう。そう考えたら、自然と水を火にかけていた。しばらくすると水はグラグラと揺れだし、カップとポットに注いだ。蓋をして香りを閉じ込める。時間を計りだしたとき、上の階の扉が開く音がした。寝たろうがようやくやく起きたのだ。

「日はとつくに昇っているぞ」

言つて、私は彼女の寝起きの顔を見てさらに付け加えた。

「また、随分とだらしないんだな、君は」

熊でも殺すのか。目は剣呑に垂れ下がって、眉間の皺が威嚇じみている。返ってくる皮肉もどこか気だるげだった。頭が痛いのか、しきりにコメカミに指を当てていた。さもありなん。魔力切れの影響はやはりあるようで、体調はベストの二割くらいとみた。

「なるほど、本調子ではなさそうだな。昨夜は元気だったが、睡眠をとって疲れが出たのだろう。——ふむ。紅茶で良ければご馳走しよう」

頭の中で計っていた時間も、ちょうど頃合の針に達していた。温めておいた陶器のカップに紅茶を注ぐ。最後の一滴が落ちるまで辛抱強く待ち、ソーサーに乗せて渡した。新茶の優しい香りが、束の間辺りに満ちた。

「……まあいいけど。疲れてるのは事実だし、飲む」

体が覚えているままに淹れたので、味に關しての自信は曖昧だ。以前に紅茶を淹れた

のも、気が遠くなるほど昔のことなのだ。

そういう理由で、味の具合はどうかと、聞こうかとも思ったが喉を潤した彼女の表情を見て、私は言葉を飲み込んだ。どんなひねくれ者でも、美味しい物を口にすれば自然と頬が緩むものだ。

「……ちよつと、なに笑つてるのよ、アンタ」

「なに、感想が聞きたかつたが、その顔では聞くまでもないと思つただけだ」

気に障つたのか、カチャンとカップをテーブルに置く。カップの縁で茶は波立ち、少量の香りが死んだ。

「勿体ない。熱いうちに味わつた方がいいぞ。私が気に障るなら消えているが」

「ごちそうさま、結構よ。わたしは茶坊主がほしくてマスターになつた訳じゃないわ。貴方もね、頼みもしない事をする必要はないわよ」

「そうか。確かに、私も茶坊主になつたり後片づけをする為に契約した訳ではない。君がそう言うのなら、これからは気をつけよう」

「ええ。わたしが求めているのは戦力としての使い魔よ。家事をこなすサーヴァントなんて聞いた事がないし、する必要も特にないわ」

よく言う、と思うが内心にとどめる。片づけを命じたのはどこの誰かかな、と指摘しようと思つたが、寝起きの彼女に楯突くのはどうやら間違つた選択のように思えたので

伏せておいた。

「それより——貴方、自分の正体は思い出せた？」

迷うことはしなかった。首を振った。やはり、危険な橋は渡るべきではない。わかった、と答えるマスターに、消えゆく紅茶の香りほどの申し訳なさを抱いた。

それから半刻ほどを、サーヴァントに関する彼女の不鮮明な認識についての説明に費やし、偵察も兼ねてということでも外出することとなった。

「貴方の呼び出された世界を見せてあげるから」

語弊を指摘はしなかった。生きた世界だった。怨嗟の砂漠に埋没しこそすれ、在りし日の何かは残っている。いま思い出せと言われれば閉口するが、紅茶の淹れ方のそれと同じに思える。

ともあれ外出することになったのだが、いつまで経っても彼女が言おうとしないので、痺れを切らして私のほうから切り出した。支度を整える彼女に言う。しかしどうも失念するというよりは、思いつきもしないという風だった。

「え？　大切な事って、なに？」

「……まったく。君、まだ本調子ではないぞ。契約において最も重要な交換を、私たちはまだしていない」

「契約において最も重要な交換——？」

ぶつぶつとしばらく眩くが、眉間のしわがどんどん深くなつていく。

「……君な。朝は弱いんだな、本当に」

「——あ。しまった、名前」

ようやく気付いたのか、ポンと手を打つていう。

召還者と被召還者との間を繋ぐのは契約と魔力交換さえあれば十分に済む。しかしそれはあくまで形式上のものでしかない。互いが意識を保ち、共に戦うこの状況ではそれでは足りない。結局はマスターと呼ぶことになるかと、名前も知らないというのは存外に味気ない。

私の指摘に「下らない」と切つて捨てるならば、真正の使い魔のそれだが、彼女は告げてくれるだろうと、妙な期待を抱かせてくれるものがこの少女にはあった。にじみ出る人柄だろうか、ともかく、今までの失念ぶりは寝惚けのせいにしておいてもいい。

「それでマスター、君の名前は？ これからはなんと呼べばいい」

彼女は一瞬嬉しそうに微笑み、だが隙をさらすまい思つたのか、すぐに仏頂面に戻つて、面倒くさそうに言つた。

声が響く。唇の動きが、ひどく緩慢に思えた。

「わたし、遠坂凜よ。貴方の好きなように呼んでいいわ」

遠坂凜。

三つのことを耐えた。呻くことと、たたらを踏むことと、叫ぶことだった。頭の中が急速に白くなった。

痺れを覚えることは耐えれなかった。そして震えていた。動揺を、なんとか表に出すことはなかった。

遠坂。どうして俺は思い出せなかったのだろう。そんなにまで、化石となっていたのか。

思い返せ。節々に、彼女らしさが表れていたではないか。

意志の強い瞳。明晰さ。寝起きの悪さ。力強くも不器用な個性。どれもこれも、遠坂を象徴するものばかりで。

対面したときの不可思議な動揺も、妙な感慨も、すべて合点がいった。

手足にまで麻痺が及んだ。指先が、痛い。

まぶたが震えかけた。幸い、私の涙腺は遠い昔に死んでいる。表情を強引に笑わせて、誤魔化した。

芋づる式に、死んだはずの記憶たちが息を吹き返した。かつての己。かつて戦った聖杯戦争。家。家族。冬木の町。みんな。

一度のまばたきで、震えは去った。目頭の熱さだけがいまだ離れない。涙腺が死んでいて、本当に良かったと思えた。

遠坂、久しぶり。また会えるなんて思ってもみななかった。口には出さずに呟いた。

そう、お前は意外に恥ずかしがり屋で、いつもすぐに顔を赤くしてたっけ。それもまた、口に出すのは許されなかった。

はにかんだ君の顔を、私は俺だと告げれないまま、見つめていった。

「それでは凜と。……ああ、この響きは実に君に似合っている」

遠坂と呼ぶことさえ、私には許されていない。だが、彼女は目前に居る。

吐息と声。

自分の口から出たものに、自分でも驚くほどの、感慨と、万感が含まれていた。

第五話

郷愁などという何の意味もない感傷は、すでに塵となつてどこかへ消えている。ただの知識というカテゴリに、わずかに名残がこびりついていているくらいだった。

新都、深山、それを繋ぐ橋。街を案内するという彼女に従い、私は戦いに勝利する、その一片の理由に沿つて、地理を確かに記録しなおしていった。

私を過去を生きた英雄と信じて疑わない彼女は、丁寧の一つずつ説明をしてくれる。あまり口を挟まずに耳を傾けていた。町は、何の力も持たないが、彼女の言葉は少なからず私の内に、心地よいものを落とすとしていく。ただ、それを郷愁と呼べるかどうかは曖昧だった。

午前中通して歩き続け、やがてやってきたのは新都の中心で死にきれずに残っている、灰色い大地の公園だった。

寂寂と、だが確かに呪いで汚染されたこの土地を、凜は静かに説明した。十年前の火事。聖杯戦争決着の地。死と死。屍と屍。

ともすれば、感慨と呼べる感情も沸き起ころるのではないかと、私は思いを馳せてみたが、やはり甦るのは知識だけでしかなかった。考えてみればそれも当然のことだった。

衛宮士郎という人間の、最初の運命が交叉した地であれ、すでに衛宮士郎という人間は五体余すことなく死んでいる。歩く屍が、生前の痛みを呼び起こそうとはまさに短慮の至りだ。

命が燃え、命が昇っていった。土地はどこまでも不毛。怨の字で描かれた空間の構成は、少なくとも以後百年にわたって消えることはない。だがたかが百年。せいぜいそれぐらいいは消えずに残るもの。それが、不毛な死、というものだ。

「気づいたみたいね。そうよ、ここが前回の聖杯戦争決着の地」

正義の味方という願い——呪い——を残した男の、末路を決定付けた土地。私は適当に受け答えを続けながら、かつて何より変えがたかった男の面影を思い浮かべようと意識した。不精な癖。人懐こい笑顔。ただ自分の死を意味あるものにしたいと願う、儂げな目の色。

なにも、甦るものはなかった。夢想到に生きた男は、私の中でさえ、望みどおり夢想到に成り下がっていた。

「痛っ……!?!」

やりとりの最中、不意に彼女が呻いた。

「——凜?」

「……ちよつと、黙ってアーチャー——誰かに見られてる」

「む」

彼女の、紐のような意志が編まれていくのが見えた。急速に繁殖する芝生のように、魔力の網は四方を走り索敵を開始する。

しかし公園じゆうを覆うほどの広い網でも、ウオツチャーは見つけられないらしい。

「アーチャー、貴方は？」

私は授かった「鋭い鷹の目」を向けた。四方さらに四方。かなりの距離まで視線を伸ばしてみても、敵意を感じなかった。少なくとも、今彼女が察知している視線はサーヴァントのものではない。

「私には視線すら感じられん」

「つてことは、見てるのはマスターね」

ふん、と鼻であしらう。相手がすでに自分より矮小なのだと、言わんばかりだ。

「令呪は令呪に反応する。マスターであるのなら、誰がマスターであるかは出会えば感じられる、ということか。だが、それなら凜にも相手が識別できるのではないか？」

ええ、とうなずきながら彼女は口を尖らせた。

「高位の術者なら、自分の魔力ぐらい隠しとおせる。いくら令呪同士が反応するつていっても、その令呪だつて魔力で発動するものよ。大本であるマスター自身が魔術回路を閉じていれば、見つけることは難しいわ」

つまりこちらは情報を得れないが、相手には筒抜けということだ。

「厄介だな。では、こちらはいいように位置を知らせているということか」

「でしようね。ま、私だつて家捜しすれば魔力殺しぐらいは見つかるだろうけど」

凜は、すんと肩をすくめて心底どうでも良さそうにいった。

「必要ない、と?」

「そ。だつて隠さなければ向こうからやつてきてくれるでしょう? こつちから出向く手間が省けるわ」

私は思わず笑い出しそうになるのをこらえた。

まったく、相変わらずの胆力だ。思い出すまでもない。遠坂と書いて自信と読む。彼

女は、いつまで経っても相変わらずだ。

「なによ。自信過剰はいけないって言いたいの?」

「まさか、君はそのままが一番強い。ああ、小物には付きまとわせてやるがよかろう」

こらえ切れなかった笑いが、口元にやや漏れてしまった。それは、彼女の胆力もそうだが——いつかのように——私の言に顔をやや赤らめたからでもあった。そういえば彼女は、途方もなく強くせに、変なところで恥ずかしがっていた。心が揺れる。なにげない仕草でさえ、古い想いが容易く甦る。

いつかのように、遠坂凜が隣にいるという、信じられない奇蹟が、今ここに。

「ふん。そんなの、貴方にいわれなくたって百も承知よ。行くわよ。さんざばら振り回してやるんだから」

大股で歩き出すマスターに、私は考えを打ち消して背後に寄り添った。

「さんざばらもいいが、一体どこにいくんだね」

「とりあえず、地理を把握するという当初の目的を曖昧にはできないわよね。でも、覗き見に興味の変態野郎が同行者に加わったんだから、ただ回るというのも優しすぎると思わない？」

「まあ好きにするがいいさ」

ちやんとついてきなさいよ、とは私にいったのか。それとも、未だ姿を現さぬ観察者に言ったのか。

彼女と私、さらに追跡者を混ぜると合計三人で、新都の街をグルグルと歩いて回る。

靈的には西の深山の方が優れているが、こちらのほうが発達しているだけあって人は多い。その中でも最もポテンシャルの高い丘に向かった。冬木教会。いけ好かない神父がいるところだと、凜はいつて坂の途中で踵を返した。そこには一人の男がいる。記憶には残っていないが、その奥にある私の結晶部分に、深く傷をつけたまま消えない男だった。その現象はトラウマに近い。症状は、私が壊れるのを少し促進したという程度だった。

オフィス街に戻った。立ち並ぶ大きな建物の中で凜が選んだのは、その中でも特に大きなデパートだった。エレベータは使わずに、階段を上ってやってきたのは四階の婦人服売り場である。

「なんだねここは？」

「なについて、服よ。私が生きた時代には服屋なんて無駄なものではなかった、なんていわないでしようね」

「いわないが」

「じゃあ黙ってなさい」

ふんふん、と上機嫌に商品を手に取りながら、値札をみては渋々元に戻す。私は意識を周りの群衆の中にひたすら向けていた。襲撃はいつ起こるかわからない。聖杯戦争はまだ正式に口火を切っていないとはいえ、実際敵対するマスターがこちらの存在には気付いているのだ。余裕を持てる状況とはいえない。

凜はしばらくゴタゴタと買い物客にまみれていたが、特に物を買うこともなく階段のほうに足に向けた。五階の電気店。六階の家具店。どれも皆、適当に品物を手に取っては戻して、ウロウロと人ゴミを選ぶように歩いて回る。合計一時間ほど物色を繰り返して、階段の踊り場で人がいなくなったのを確認して私は物質状態に戻った。

「演技ももういいだろう」

凜は、ペロリと舌を出している。

「やっぱりバレてた?」

「演技というよりは、まあ逆に品定めをしてやったといつたところか」

「そうね。あんなどころで戦闘を仕掛けてくるやつがいたら、真つ先に死ぬタイプの馬鹿だし、下調べを強行したくて近づいてくるようならご尊顔を拝してやるところだったし」

「襲撃されてたら、どうした?」

「あ、大丈夫。ないと知ってたから。ていうか信頼かな。魔術師は闇に生きる。聖杯戦争に挑むくらいだから、その面だけは敵とはいえ信頼したかったの。もちろん、アーチャーの強さにもある程度の信頼はあるわよ」

「私はともかく、どんな類のものであれ敵に期待を抱くべきではない。妙な楽観はこれつきりにして欲しいものだな」

「わかってる。これが人間遠坂凜の最後の甘え。今からは全てを魔術師として徹しきるから、その点は心配しないで」

とはいえ、私は彼女の甘えが再発するだろうと、妙な確信があった。彼女は決定的なところで、魔術師ではなく人間を選択してしまう。強さゆえの、優しさと甘さ。それと真に決別できるのなら、彼女は遠坂凜ではなく違う人間だ。遠坂凜ほどの、人間を私は

いまだ知らない。

「ところで、一つも買い物はしないのかね」

「ええ、なんだかイマイチだったから。それに本当に買い物したつていざとなれば邪魔なもの」

「正論だな」

「さて、お腹も減ったからご飯でも食べようかしら」

「できればそれで終わりにして欲しいが」

「考えておくわ」

デパートを出て、人でごった返す繁華街の通りを縫うように進んで店を目指す。到着したのは、オープンテラスになったイタリアンだった。客もそこそこ入っていて、空いているテーブルは一つしかなかった。たつたと迷うことなく彼女は腰を下ろす。

「いい雰囲気でしょ？」

「店の奥よりはまだ守りやすいな」

「無粋なんだから」

注文を済ませると、彼女は手に顎を乗せながら、呟いた。

「サーヴァントは食べないで済むのよね？」

「ああ。霊体だからな」

「ふーん」

「どうかしたのかね？」

「ううん、別に。無駄なことを考えたわ。意味のないこと」

「意味のないことが、無駄なことだからな」

「ええ。心の贅肉、ね」

料理が運ばれてきた。なるべく早く食べる。言いたかったが口には出さずじまいだった。冬のオープンテラス。夕方の木枯らしが吹く時間に、彼女が一人パスタを食べる光景は、見ていられないと私に強く思わせた。

少しだけ、迷ったが私は結局口にした。

「喉が渴いたのだが」

「え？」

「ワインが好きだったような気がする。この時代のものとは少し違うかもしれないが、何か思い出すかもしれない」

「ちよつと、どうしたのよ」

「無駄ではないだろう？ オツズは手ごろだ」

贅肉とは言わずとも、余裕くらいは持っているべきだ。少女を庇うくらいの余裕すらなくして何が残るのだろうか。肉体を持った。周りの隙をついたので誰一人気付いた

ものはいない。ワイン。注文して、私は背もたれに深く腰を下ろした。ピッツア。凜が寄ってきたウェイターに続けて言う。ワインで記憶が戻るのなら、ピザで戻ったっておかしくはないでしょう？ 確かに、オツズは手ごろだな。二人で言って、私たちは食事をした。

夜になった。冷え切ることはない冬木の冬を、私は咀嚼しつつ歩いた。あれこれと話す凜に、適当に相槌を打ちつつも、意識の半分はまだ見ぬ追跡者の影に向け、残りは自分の能力の拡張のほどを確かめた。アーチャーのランクとして現界することによって、いくつかのステータスが付随する。単独行動能力。身体能力拡張。魔力へのサーヴィスはなかったが、それでも悪くはない。強力なバックアップが在る今の私に、少々の加算の有無など関係ない。幾たびの錬鉄に耐えうる魔力が、十二分に確保されているのだから。

風に巻き込まれそうになった。新都のビル。屋上は、山と海から吹き込んでくる風がぶつかり合い、渦巻いて騒がしい。私は、それとなく彼女の盾となるように立ち位置を選んだ。

「どう？」
「ここなら見通しがいいでしょ、アーチャー」

「……はあ。将来、君とつき合う男に同情するな。よくもまあ、ここまで好き勝手連れ回

してくれたものだ」

「え？ 何かいった、アーチャー？」

「素直な感想を少し」

これ以上踏み込むのに身の危険を感じ、私は見晴らしがいいものだとかからさまに話を逸らした。ただ、全て見て回った場所なので見晴らしがいいとしても何ら変わりはないのだが。

「なに言ってるのよ。確かに見晴らしはいいけど、ここから判るのは町の全景だけじゃない。実際にその場に行かないと、町の作りは判らないわ」

「——それでもないが」

アーチャーのクラスに因る能力補正は、正しく鷹の目と呼べた。生前も目は良かったがこれほどではなかった。

「そうなの？ それじゃあここからうちが見える、アーチャー？」

「いや、流石に隣町までは見えない。せいぜい橋あたりまでだな。そこまでならタイルの数ぐらいは見て取れる」

「うそ、タイルって橋のタイル……!？」

稀代の魔術師。以後、闇の史実に名を残す歴史が賜った一期一会の逸材。そう呼ばれる可能性を孕んだ人間も、今はただの少女だった。目がいいという、ただそれだけのこ

とで無邪気にはしゃぐ可愛い女の子なのだ。私は、その認識が今この瞬間だけのものと忘れないようにした。迂闊にすればあとでしつぺ返しを喰らうのはこちらなのだ、と内心苦笑いしつづ。

「びつくり。アーチャーって本当にアーチャーなんだ」

「……凜。まさかとは思うが、君、私を馬鹿にしているんじゃないだろうな」

「そんな訳ないでしょ。たださ、貴方ってアーチャーって言うわりには弓使いっぽくないから、つい勘違いしてただけ」

「それは問題発言だ。帰ってから追求しよう」

こういう鋭さを、才能と呼ぶのだろう。出る杭は叩かれるというが、叩かれることもないほどに高くそびえる杭もある。遥か高みからの視線は、先見的に察するセンス。

ふと、それは寂しいことなのではないかと。ぽつと浮かんだ疑問はどこにも根拠のない与太だった。正義の味方になりたいとほざき、死んで生き返って殺したり生かしたりと馬鹿げたことをしている男が、どの尺度で彼女を測るのか。仮に死後、彼女がサーヴァントになりうる権利を得たとしても、鼻で笑って蹴り飛ばして踏みにじるだろう。そんなもの、誰が望むかと。やりたいこともやるべきことも、余すことなく制覇したと、彼女は清々しく言つて朽ちるに違いない。

どうやら私は浮き足立っているようだ、と今更に感じる。今日一日、彼女のことにつ

いてしか考えていない。死んで久しい。忘れて久しい。日がな一日こんなことばかりを考へるのはとても健康的だと、笑えないジョークさえ浮かんだ。

いつの間に移動したのか。屋上ベリで下界を覗いていた凜から、ただならぬ気配を感じた。

「凜。敵を見つけたか」

「別に」

ただの一般人だと、言い切つて彼女は出口にむかつて反転した。私は特に追求せず、その背を追うように霊体に霞み、背後に寄り添つた。ビルを下り、人通りが絶えるまでお互い言葉は発しなかつた。

夜は深い。冬ならばなおさら。

人通りももはや探さねばならない、そんな時刻を私たちは橋を渡つて深山へと向かう。彼女の虫の悪さも、それほどの間を置くこともなくおさまつたようだ。明るい調子で口を開いた。

「貴方の町はどんなかしら」

「なに?」

「貴方の育つた町よ」

鈍いわね、と言いながら指を振る。

「真名を思い出せないといつても、思い出なんかはそろそろ戻ってきてもいい頃合でしょう。何かないの？ 街並みとか、郷戸料理とか」

「ふむ、そうだな。断片的ならば」

私は霊体のまま意識の目を閉じた。真先に浮かんでくるものの中で、大して問題のないものだけ選ぶのならば、支障はないだろう。甘さだが、想い出とはえてして甘いものだ、さらに自分にまで甘い。

「生まれも育ちも、ここと似たような、街だったような気がする。家族と、友達がいた」
「あら、いたんだ友達。仏頂面に皮肉が得意そうだから、てつきりチベットかどつかで年中胡坐かいてる孤独な修行僧か何かかななんて」

「さて、こんなところだ」

「あ、待つて待つてゴメンゴメン」

「いや、謝る必要などない。あいにく修行僧はこれ以上の話のネタを持ち合わせてはいない」

「拗ねたの？ もう、貴方も体は大きいのに中身は大概子供ね」

「何とでも言うがいいさマスター」

「ちよつと、冗談じゃない」

「なに、どうせまだまだ子供の君に私の深遠な人生など理解できまい。言うだけ無駄と

「いうやつだ」

「ちよ、ちよつと！ こ、子供つてなによ！」

「意味を教えてほしいのかね？ 君は精神的には大概成熟しているが、いかんせん肉体的に少々発育が滞っているようだ。その点に関して私は幼いのだと指摘しているのだが」

「ええい、大きなお世話よ！ こら、霊体じゃなくて影を出せ！ あんたふんじばつて地下に放り込んでやるんだから！」

ふざけて、笑いながら人なき道で立ち止まった。うーん、と凜が背筋を伸ばす。やはり疲れているのか。

私は聞いた。

「しかし何故だね。私の記憶違いは物理的なものなのだからこんなセラピーじみたものは意味がない。歩き回つて具合でも悪くなったのかね」

「あ、そんなわけじゃないのよ。ただちよつと嫌なやつ見ちゃつて。なーんか、そいつ目にする、変に素朴な疑問が気になつちやつたりするのよね。そいつちよつと病んでる奴だから」

「ふむ」

さて、とちよつと大きく息を吐いて、凜は歩を改めた。

「こんなところね。町の作りはだいたい判った？」

「……ん？ ああ、町のことなら判る。あとは追々掴んでいくさ」

「なら今日はここまでね。わたしもまだ本調子じゃないし、家に戻って休みましょう」

道はもう深山の中心。最後の坂さえ上れば遠坂邸が見えてくる。

と、前方に人影が見えた。途端に凜は物陰に体を隠す。

「凜。何を隠れている」

「黙ってて！ ……あ、うん、あそこにいるの知り合いなのよ。今日は学校を休んだし、

あんまり顔を合わせたくないの」

聞きつつ、私は視線を延ばす。人影は、間桐桜だった。忘れもしない、凜に続くもう

一人だった。

湧き上がるものが、ともすれば凜を凌ぐほどに膨大だったが、その横にいる人物を視

野に収めると途端に消し飛んだ。

金の髪。黒く纏わりつくような魔力。

「凜、知り合いとは外国人の方か？」

嘘は、時代を渡り歩く中で身につけたもののうちのひとつだ。凜は私の嘘に素直に首を

振る。

「いいえ、知らない。このあたりは洋館が多いから、どつかよそから遊びに来てるんじゃない

ない？」

二人は話し込んでゐる。というよりは、男が一方的に言い寄っている状態に近い。

「アーチャー。あいつ、人間？」

やはり高きに居る者だ。私はそう聞かれるのを予想し、準備していた白々しい嘘を吐いた。

「さあ。実体はあるから人間なのだろう。少なくともサーヴァントではない」

「……そうよね。マスターでもないし、ただの痴話喧嘩か」

サーヴァントではない。英雄王ギルガメッシュ。全ての始祖。始祖王。一の具現は、禍々しいもので作られたように、辺りまで侵すほどの瘴気に姿かたちが霞んでゐる。私の貯蔵されている剣のほとんどは、この男の所持するものどもの模写である。力に迷い、ギルガメッシュを紐解いた頃もあった。真贋という、まるで陰陽のように私と男は領域を明白にわけあつてゐる。不可侵。不条理。不認識。不定義。その狭間が埋まることは永遠にない。

やがて決着はついたのでか、桜は坂を上つて行き、男はこちらへと向かつてきた。

言もなく通り過ぎた。

だが聞こえた。神代に生きた半神半人の男は小さく、霊体の私にだけ聞こえる小さな声で呟いた。

フ
エ
イ
カ
ー
、
と。

第六話

二度目の朝を迎えた。

夜、寝静まったところに一度外出をしようとしたが結局思いとどまった。昨日と同じように屋根の上で朝陽をのぞんだ。

衛宮士郎を殺すということ。焦る必要はないという考えと、問答すらしという考えが私を揺さぶっていた。留まることになったのは、ひとえに凜が原因だ。彼女を危険にさらしてまで赴くりスクを負う必要はない、と考えた。いつも通りの嘘で塗り込まれた偽善だった。いざという最終局面になれば、私は迷うことなく彼女を見捨てるであろう。よつぽどのがなければ、彼女に最後まで付き従うということはない。衛宮士郎を人知れず殺害して、あわよくば聖杯さえ手に入るというのなら、そして彼女が私の邪魔さえしなければ、といういくつもの条件が重なったときだけである。そんなもの、皆無に等しい。それこそよつぽどだ。だが、自然と外套の内ポケットに滑っていた右手は、温かい鉱物を痛いほどに掴んでいた。

家の中へと戻った。

冬とはいえ、屋敷の造りが実に巧妙で寒さはそれほど感じない。熱を逃がさないよう

になつてゐるのだろう。

凜が起きてくる前に、私は湯を沸かして紅茶の用意をする。大体の時間だ、というくらいに上の階で扉の開く音がする。やってきた凜の格好を見て、私は昨日の朝より非道いと思わず顔をしかめてしまった。

「……おはよう……なによ変な顔して」

「少なくともそのセリフ、今の君には言われたくないな」

「……ああ？　なによどっか変な所でもある？」

「どちらかと言うと、まともな所を探すほうがむずかしいな。とりあえずパジャマがはだけているぞ。まずは着替えてくることを推奨するが」

「……げっ」

割かし整理の行き届いている一人暮らしでも、こういうところはやはり不精になるのだろう。どたどたと音を立てて部屋に戻っていく気配を察しながら、私は厨房に戻つて熱したフライパンに卵を落とした。だらしない彼女を見ると、何故だか無性に情けない気持ちになり、せめて朝ごはんくらいはと思つたのだ。

五分後。戻つてきた彼女の格好は、至つて正しく整つていた。

「あらためて、おはよう。ちよつと見苦しいところを見られちゃったわね」

「確かに色気も何もない見苦しいものだったが、まあ、人間悪癖の一つでもないとつまら

ないものだ。おはよう」

「……さっきのは完璧に私の失態だったから、いい。口を嚙むわ。で、何かいい匂いがするんだけど……タマゴ?」

「ああ、出しゃばりだとは思ったが、どうにも放っておけなくてね。無理にとはいわないが」

「食べるわよ。普通朝は抜くんだけけど、せつかく作ってくれたんだし」

言いながら椅子に腰を下ろす。私は皿に盛り付けたオムレツと、淹れたての紅茶をカップに注いでテーブルに置いた。質素なものだが、朝飯を抜くのだというくらいだから、この程度でいいと思えたのだが。

「多いわ」

「なに」

彼女はそんなことを言う。

「ふむ。そこまで小食だったか。だが食べねば大きくはなれないぞ。特に今は成長期のだから」

「朝から小言はいいわよ。とりあえず、多いの。オムレツが大きい。私一人で食べても残るから、アーチャー、貴方も少し食べて」

「それは、命令かね?」

「ええそうよ。貴方は目の前のオムレツを食べない限り永久に束縛を受け続ける」
「む。それは食べねばなるまいな」

向かいの椅子に腰を下ろして、二本目のフォークを手にした。カチャカチャと一口二口と味を確かめる。腕は鈍ってはいない。自分でも欠点が見出すことの出来ない、見事なオムレツだった。

食事中、二人の間に特に会話はなかったが、食べ終えるころにはすっかり本調子を取り戻したようで、饒舌さ加減も回復していた。やれどこで作り方を習ったのだと、自分より上手で悔しいのかかましい。紅茶の香りを口に含んだ所で、ようやく落ち着いてくれた。

「さて、落ち着いた所で今日の予定なんだけど。今日というか、今後の活動予定ね」
「ふむ。どうするのかね」

「この格好みてわからない？ 登校するの」
確かに朝着替えてきたのは学校の制服のように見える。が、彼女はもうすでに一般の学生とは一線を画している。私は聞き返した。

「なに、学校に行くだど？」

「ええ。何か問題あるかしら、アーチャー」

「……問題はないが、しかし、それは」

出かかった反論を、私は飲み込んだ。彼女は愚かではない。賢明であり、そして何より頑固だ。昨日一日かけて思い出したことだが、これと決めたら梃子でも動かない。この件に関しては十分に考えているだろうから、反論する意味はないだろう。だが一つだけ忠告はしておくことにした。

「凜。マスターになったからには、常に敵マスターを警戒しなくてはならない。学校という場合は、不意の襲撃に備えにくいだろう」

「そんなことはないけどね。いいアーチャー？ わたしはマスターになったからって、今までの生活を変える気はないわ。それにマスター同士の戦いは人目を避けるモノでしょう？ それなら人目につく学校にいれば、不意打ちされる事はまずないと思うけど」

「……そうか。凜が決めたのなら私は従うだけだ。だが、霊体化して君の護衛をするぐらいはいいのだろうか。まさか学校に行っている間にはここに残れ、などとは言うまい」
当たり前じゃない、と力カと笑う。要点は踏んでいるようなので心配はなさそうだった。

とはいえ、やはり見通しが甘いことに変わりはない。私は付け加えた。

「もしもの話だが、その安全な場所に敵がいたとしたらどうする」

「？ なに、学校にマスターがいるかもしれないって仮定？」

「そうだ。確かに学舎には生徒と教師以外は入りにくいだが、すでに内部の者がマスターだとしたら厄介ではないか」

それはないんじゃないかな、と紅茶を口にしながら楽観的にいう。

「この町には魔術師の家系は遠坂と、あと一つしかないの。そのあと一つっていう家系は落ちぶれているし、マスターにもなっていないし」

「マスターになつていないと、どうして判る」

あのね、と教師然と説こうとする彼女。

その後、強固に学校にマスターなどいるはずないと強固に主張を繰り返す凛と、可能性について指摘し続ける私の間で、しばし不毛な論議が続いた。

決着は、もしも学校にマスターがいたとすれば、それは魔術師遠坂凜の見通しが甘かったと認める、という具合だった。私の気持ちは半ば晴れ晴れしい。学校には少なくとも一人は、魔術に携わっている者がいるのだと断言できるのだから。

遅刻しそうな時間になったので、彼女を促して出発した。私は霊体に戻り寄り添う。

冬木の町はまだ眠っている。夜や朝という意味ではなく、じきに轟音と共に目が覚めるだろう、ということである。精々、今は幸せな夢と共に安眠を貪ればいい。

学校には時間前に間に合った。まばらに登校する生徒に混じって、学園の中に足を踏み入れようとするが、その空間の歪さ加減に愕然として、二人して開いた口が塞がらな

かった。

「驚いた。もしもの話ってホントにあるのね」

「ああ、私も驚いている。いや、何事もケチをつけておくものだな。思わぬところで役に立った」

とはいえ、勿論これを見越していたわけではない。校舎と校庭をぐるりと外界から断絶するように、吐き気を催すほどに無粋な代物が敷かれていた。ひとたび発動すれば、内に居る人間を根こそぎ食ることになるその趣味の悪さは、扱う者共々無粋以外に形容する言葉は当てはまらない。

「空気が淀んでいるどこの話じゃない。これ、もう結界が張られてない?」

「完全にはないが、既に準備は始まっているようだな。ここまで派手にやっているということはよほどの大物か……」

とんでもない素人ね、相槌が飛ぶ。

「で、君はどちらだと思う、凜」

肩をすくめて不敵にいいのけた。

「さあ。一流だろうが三流だろうが知ったことじゃないわ。わたしのテリトリーでこんな下衆なモノ仕掛けたヤツなんて、問答無用でぶつ倒すだけよ」

フンと鼻を鳴らして、戦地と変貌した土地へと足を踏み入れた。

学校内部は、至って普通の空間だった。

彼女のプライベートな所用の関係もあるので、私は霊体になりはすれど四六時中ベツタリというわけではなかった。安全を確認できる場所であれば、なるべく彼女の邪魔にはならないように場所を移し、その一方、校内で行き交う人々の顔に目を配っていた。あいつはいないかと、あいつはいないかと、私は凜に気づかれない程度に、気を配り続けた。

「アーチャー、何か気になることでもあるの」
が、すぐに気づかれた。昼食時である。

「む。何故だね」

「わかるわよ。なんかキョロキョロした雰囲気だし、そんなに学校が珍しい？」
「いや、そういうわけではないのだが」

私は慌てずに、あらかじめ用意していた答えをいった。

「結界のポイントを探っていた。君のことだ、今日にでもその正体を暴いてあわよくば解呪しようと考えているのだろう？ なるべくその手間を省こうと考えていたのだが」

「あ、なーんだ。じゃあ同じことしてたのね」

「君もか」

「まあね。無駄は嫌いだし」

「では余計なことをしてしまったな」

「何を殊勝なことを。ありがたいわよ、学業しつつですもの、目星つけたといつても大概外れてたっておかしくないわけだし、その点貴方と同じポイントを探っていたんなら確率はグンと上がるでしょう？　で、何箇所見つけたの？」

「ゼロだ」

「……なんだ、一緒か」

「如何せん人が多すぎではダメだ。結界の刻印とは思念で彫るものだ。こうまで大量に雑念が飛び交っていると、どうにも難しいものがある。人がいなくなる夕方に、一つ一つ念入りに調べねばなるまい」

「ま、その確認が取れただけでも良しとするか」

「人が来た。次は夕方だな」

小さく手を振る凜を傍目に、私は再び空気と同じ存在に戻った。もう男を捜すことはしなかった。たとえそれが些細なことでも、次は彼女に不審と思われるだろう。下らないミスにはまるわけにはいかない。

学校というものは時間が過ぎるのも早いようで、夕焼けが燃える放課後は、大して待つ間もなくやってきた。校舎内に、人はもうほとんど残っていない。

「始めるわよアーチャー。まずは結界の下調べ。どんなシロモノかを調べてから、消す

か残すか決めましょう」

気配で肯定を示した。

丹念に校舎内を探索していく。刻印は一応隠されてはいるが、その方法は大雑把なものだった。とはいえ校舎内をしらみつぶしに探していくのも時間がかかるもので、屋上に彫られた最後の起点を見つけたところには、日も完全に沈み、辺りはほとんど暗くなっていた。

起点は屋上の中心に、どうどう赤紫色に輝いていた。まるで死者の血で描いたようなどす黒いその色。その実、内部の人間を余さず貪り尽くす、結界としては最も凶悪な部類に入る代物だった。

「……まいったな。これ、わたしの手には負えない」

悔しそうに歯噛みをした。結界を形作っている技術は、現代の魔術師レヴェルにどうこうできるものではなかった。術者自らが解呪を望むか、また消滅しない限り、いつでも作動できる殺戮兵器のままここに在り続ける。

「アーチャー。貴方たちってそういうモノ？」

この結界は、ヒトの魂を食らう。

魂食い。遠坂の名を継いだ幼い少女の賢明さは、わずかばかりのヒントだけで私たちの動力源についてまで推察する。

「……ご推察の通りだ。我々は基本的に霊体だといっただろう。故に食事は第二、ないし第三要素となる。君たちが肉を栄養とするように、サーヴアントは精神と魂を栄養とする」

だから私が彼女と食事を共にしても、原理的には何の作用ももたらさない。食事というのならば、この呪文の結果をそう呼べることだろう。

「栄養を取ったところで基本的な能力は変わらないが、取り入れれば取り入れるほどタフになる——つまり魔力の貯蔵量があがっていく、というワケだ」

「——マスターから提供される魔力だけじゃ足りないってコト？」

結果をなぞる指がわなわなと震えているのが見て取れた。

私は率直に言った。直面している事態を歪曲して伝えたからなんになるのか。聖杯戦争に正面よりうってでるのなら、彼女はなおのことしつかりと受け止めなくてはならない。

「足りなくはないが、多いに越したことはない。実力が劣る場合、弱点を物資で補うのが戦争だろう。周囲の人間からエネルギーを奪うのはマスターとして基本的な戦略だ。そういつた意味で言えば、この結界は効率がいい」

なにしろ人間全部を胃酸で溶かすようなものなのだからな。その言葉は、いわないことにした。

共鳴がある。いや、共鳴などなくても明らかだった。人に、ここまで冷たい殺気と、身を凍ませるような怖気が発せるわけがない。サーヴァント。凜が、動揺を押し殺して聞いた。

「これ、貴方の仕業？」

男はまさかという風に首を振る。

「いいや。小細工を弄するのは魔術師の役割だ。オレ達はただ命じられたまま戦うのみ。だろう、その兄さんよ」

「やっぱり、サーヴァント……」

「そうとも。で、それが判るお嬢ちゃんたちは、オレの敵ってコトでいいのかな？」

凜の体が硬直する。おののいたのか、と考えたが体の硬直は一瞬だった。もうすでに現状を把握し、打開すべき方策でも考えたのだろう。

「ほう。大したもんだ、何も判らねえようで要点は押さえてやがる。あーあ、失敗したなこりやあ。面白がつて声をかけるんじゃないやなかつたぜ」

男の手に、槍が生まれた。過程はそれこそどうでもよかつた。その男の手に、その槍が握られているという現象が、この上もなく凶悪なのだ。

少女が飛ぶ。飛来する穂先は、彼女の残像を切り裂いた。スパンと小気味よい音を立ててフェンスが裂ける。

「は、いい脚してるなお嬢ちゃん……!」

男は槍を構えて突っ込んでくる。凜の決断は早かった。詠唱は聞き取れることもできないほどに早かった。その体が軽やかにフェンスを飛び越える。

「凜……!」

「わかってる、任せて……!」

背後から、青い男の影が迫る。追いつかれる、そう思ったときには凜は二度目の詠唱を唱えていた。重力因果を操る魔術は、落下速度を数倍増しにして地面へと迫らせる。

「アーチャー、着地任せた……!」

高速で地面に激突する直前に一瞬だけ現界し、同時に彼女の体を抱き上げ、一足で衝撃を殺してそのままグラウンドを駆け抜ける。再び身を隠すように幽体へ。凜の脚は予想以上に素早く、青い男に追いつかれることになると、合計二十秒もかからないうちに、決闘地は屋上からグラウンドのと真ん中へと移された。

「いや、本気でいい脚だ。ここで仕留めるのは、いささか勿体なさすぎるか」

「アーチャー……!」

現界する。同時に戦闘態勢へと移行する。

干将は容易く顕現した。出会いすらいっただったか定かではないほど、古くから手に馴染んだ剣だった。

槍使いの顔が歪んだ。

「へえ。いいねえ、そうこなくっちゃ。話が早いやつは嫌いじゃあない」

そして赤い槍を斜に生み出す。赤かった。槍は、恐らく貫いた心臓の数だけその身を赤く染めてきたのだろう。背後で凜が息を呑むのがわかった。

「ランサーの、サーヴァント」

「如何にも。そういうアンタのサーヴァントはセイバー……」

言いかけて、男の顔が牙を向いてさらに歪む。

「って感じじゃねえな。何者だ、 temeエ」

獣じみていた。吐く息が殺気で匂った。濃厚な戦闘意欲が、突風のように青く赤く振りまかれた。

やがて男は、やはり獣の洞察力で悟り、鼻を鳴らしていった。

「ふん。真つ当な一騎打ちをするタイプじゃねえな temeエは。つてことはアーチャーか。いいぜ、好みじゃねえが出会ったからにはやるだけだ。そらエモノを出せよアーチャー。これでも礼は弁えてるからな、それぐらいは待つてやる」

侮蔑と嘲りを混ぜた口調だった。敵軍に正面より突貫をはかる槍使いからすれば、影に隠れ隙を射抜く弓手の力など恐るるほどもないと思えるのだろう。甘さだった。しかし、その甘さを加味してもなお目前の男は身体に爆発力を秘めた、獣であるに違いな

い。

私は純粹には弓手ではない。劍を生み劍を振るう半端を極めた魔術使い、種族のために種族に反する英靈だ。しかして今は強大なマスターを得た一個のサーヴァント。必要なのは意志と令。それさえ下れば、何の憂いもなく目前の槍手を向こうに回して互角以上に渡り合える。

セリフは、それこそ絶妙のタイミングで私に届いた。

「アーチャー、手助けはしないわ。貴方の力、ここで見せて」

まったく、小気味良いセリフだ。ゆえに遠坂凜。君は最強なのだ。

走る。間合いの外より間断なく差し迫る赤い穂先を、私は千将にて弾いた。三つは胸、二つは腹、さらに頭と足、擬態を合わせて八と一手が襲ってきた。

「たわけ、弓兵風情が接近戦を挑んだな！」

ランサーの前進。分厚い壁のような圧力が、二人の間で急速に密度を増した。突き切るために前進を止めない槍手を、私は弾き流しつつ迎え撃つ。揺らぐ穂先。早いばかりではなく、槍の軌道は幾重にも擬態がかけられている。見事な技だった。だが、視認しきれないものではなかった。やはり男は私を侮った。長得物が間合いという武器を放棄したのだ。一度目のチェック、そう思い千将を振り、一步を踏み込んだ。

しかし瞬間、赤い槍は真に幻影のみのものとなった。

回転は速度を増した。擬態などない。この剛直こそが元の槍。明確な貫通意思をもった赤い牙は、私の手首ごと容易く干将を無力化する。

前進を踏みとどまる。死線は拡大された。ランサーはそのアビリティを一呼吸ごとにぐいぐいと剥き出しにしてくる。

円の動きの干将。守備範囲が徐々に届かなくなってきた。青い男は楽しむように攻め手を繰り出してくる。加速し続ける。最速の称号はこの男のためにこそある。美しい赤槍と相まった一撃が、私の手から最初の得物を弾き飛ばした。

「間抜け」

一拍。数歩の間合いは完殺の助走距離。急所に迫る三連撃は、一つでも防げなかったら死へと至る。まさしく一つ一つが必殺の、真にサーヴァントの攻めであった。その一拍が、私にとつても等価でなければ必殺の文字が覆ることはなかったであろう。

干将莫耶は対にて一振り。莫耶。干将。揃えば守りは団塊の如く。円と円が響きあい、軌跡は螺旋を描いて敵の接近を許さない。突き分けられた三撃ともを、私はしたたかに打ち払った。

「ハ、弓兵風情が剣士の真似事とはな！」

ランサーが笑った。刺突がさらに速度を増す。増すが、双剣揃いし反り返る干将莫耶は、弾き跳ね返し接近を許さない。私の前進を促す。ズチャリと、私はブーツを鳴らし

た。一步踏み込んだのだ。同時に、両剣諸とも槍の圧力に負けて弾けて飛んだ。間断なく、私は再び二本を錬成する。槍が鋭く迫るたびに干将が消え、重さを増して走るたびに莫耶が消える。その度に、私は錬成しなおし一步の差を埋めるのだ。

事実。接近戦での分は向こうにある。世界に覇を唱えた槍の威力は生半ではない。

私は一步を、さらに深く踏み出した。槍が不可侵を唱えながら氣勢の飛沫を上げる。死線拡大。引くか。否。さらに一步。その槍が世界を制していようが、いまが関係ない。私は私と彼女の理屈を以つてこの校庭での戦いに覇を唱えるのみ。錬成。剣戟音。さらに錬成。私の氣勢は沈黙を以つて前進への活力を漲らせる。赤い制空権を、私は一歩ずつ侵食していった。

ランサーの顔から余裕が消えたのと、豹のような瞬発で後ろへ飛びのいたのは同時だった。

「二十七。それだけ弾き飛ばしてもまだ有るとはな」

宝具。サーヴァント同士の決闘となれば、言及するまでもなくその存在がキーとなる。

極論を恐れぬならば、あらゆるステータスがツーランク以上相手に劣っていたとしても、宝具のランクが相手の存在を根本から犯してしまうほどのものならば、勝負の行方は全く変わってくる。故に宝具の出し惜しみ、英雄の出処を窺ったりと、腹の探りあい

も甘く見ることは出来ない。

「どうしたランサー、様子見とは君らしくないな。先ほどの勢いは何処にいった」

「チイ、狸が。減らず口を叩きやがるか」

ランサーはそれを懸念していた。ランサー、というからには宝具は明らかにその槍だ。私に限定するならばその真名さえ既に定かであるその槍を宝具として従えるからこそ、ランサー足る。

それに対してアーチャーの私は短刀二本で渡り合った、というところで見込みが外れたのだろう。この戦いの第一の局面の拠点は、ランサーが私の宝具を引きずり出すか否か、だったのである。

青い男は、それでも強敵と巡りあえた喜びか、口元を吊り上げながら言った。

「いいぜ、訊いてやると。テメエ、何処の英雄だ。二刀使いの弓兵なぞ聞いた事がない」
「そういう君は判りやすいな。槍兵には最速の英雄が選ばれるというが、君はその中でも選りすぐりだ。これほどの槍手は世界に三人としまい。加えて、獣の如き敏捷さといえれば恐らく一人」

それもまた、腹の探りあいだった。ケルトの朽ちぬ神話を、たかが敏捷さくらいで推せるわけがない。不遜で口が腐る。私が察したのは携える槍のためである。一目見るだけで武具の内面を見通せる、私の特性がそれを教える。その真正の槍を扱えるものな

ど史上ただ一人。

「——ほう。よく言ったアーチャー」

私がまだ肉のある頃、紐解いた武器の歴史にもその存在は刻まれていた。具現化しようと思えば出来るが、扱うとなれば話が違う。比喩ではない、必殺の呪いは、扱いが未熟であればセカンドの標的である己の心臓を狙い打つ。

「——ならば喰らうか、我が必殺の一撃を」

天地分かつ槍の構え。発散されていた殺気が、収斂する。

第二の局面。いざ、言わばこれからが殺し合い。

放たれた瞬間に死が決定付けられる魔槍の中の魔槍は、果たして七枚連ねた牛皮を破れるのか。幾百の刀剣の攻勢を打ち破つてなお特異性を保持し続けていられるか。ここでその干満を比べてみるのも、悪くはない。

先の一瞬まで、この戦場にいつ見切りをつけるかということ私は考えていた。私ばかりではない。腹の底ではお互いそれを念頭に置いていた。ランサーの宝具が牙を剥くまでは、である。魔力の凝縮具合は甚だしい。空間のmanaを根こそぎから吸い上げ、液体レヴェルにまで密度を上げていく。穂先から今にも血が滴ってくるかと錯覚してしまいそうになる。一も二もなく来るのか。ランサーがここを決戦の場と据えたのなら、私に拒むことは最早できない。剣製の段階を両手に備え、告げた。

「止めはしない。いずれ越えねばならぬ敵だ」
風が止まる。

耳鳴りが校庭を駆け回る。

死の予感、尋常を遙かに越えた。刹那の後、ランサーは真名を叫ぶであろう。千の棘が、音を破つて迫り来るであろう。

いずれ越えねばならぬのなら、今この場で朽ちるとしても越えねばならぬ。高揚した。戦いだつた。血肉も魔力も、この時とばかりに熱を上げる。けれども、ついで武器がもう一度激突することはなかった。

足音。校門の方。

「——誰だ！」

音のした方向へ、ランサーは燕のように飛んで行つた。この戦場を盗み見ていた男の顔を、私は見た。男は、怯えた表情を顔に張り付けて、背を向けて駆け出していた。ふと、急激に弛緩した空間が、止めていた呼吸を吹き返すかのように風を呼び戻した。

凜が驚きの声を上げる。

「生徒?! まだ学校に残っていたの!?!」

「そのようだな。おかげで命拾いしたが」

間違つてはいない。恐らく私が生き残る確率は三割もなかったであろう。その三割

を狙い撃つ自信はあったが、半分以上負けていたことには変わりはない。

「失敗した、ランサーに気をとられて周りの気配に気づかなかった……って、アーチャー。アンタ、何してんの」

「見て判らないか。手が空いたから休んでいる」

「んな訳ないでしょ、ランサーはどうしたのよ」

「さっきの人影を追ったよ。目撃者だからな、おそらく消しに行っただろう」

彼女の顔が、驚きと苦痛で歪んだ。

「追ってアーチャー！ 私もすぐに追いつくから！」

私は束の間戸惑ったが、反論を飲み込んで駆け出した。魔術師ならば、見逃す局面である。むしろ見逃さなければならぬのがルールだ。追うというのは失策ですらない。選択肢に入れてはならないのだ。摂理なのだから。

凜はそれを選ばず、狭窄な人の道を選んだ。鎌首をもたげる運命の予感を胸に、私は不安定な気持ちで毒づいた。こういうイレギュラーのために、さらなるイレギュラーが生じ、世界に矛盾が発生する。例えば、死ぬばいいやつが死なずに生き残ったり。

私はそんなことを考えながら、追った。

この距離ならば校舎まで五秒もかからないが、ランサーならばさらに素早く達するだろう。そして一秒でも時間があれば、ただの人間など蚊を叩き潰す程度の労力で屠って

しまえる。要するにもう手遅れなのだが、私は急いでいた。なぜか、急がねばならないのだと強迫観念が私の筋肉を縛り付ける。見なければならぬ。確認しなければならぬ。いつからかそう考えていた。確信はなかった。だが、最早、疑う余地など何処にあらう。

校舎に駆け込み、廊下を駆ける。すぐに窓の向こうへと飛び出していく青い男の残像が見えた。それよりも、私は噴出する血の匂いに意識が向いていた。近づいていく。まるで虫のように、床にうつ伏せになった学生は、静かに血を床に広げながら、臨終のときを迎えていた。傷は胸を貫通していても、流れ出る血は少ないほうだった。なぜなら、槍が一撃で、綺麗に心臓を刺し殺したからだ。血を全身に巡らせる役割を持つ心臓が潰れれば、当然血が溢れ出ることもない。体内で無為にたゆたって終わりのときを迎えるだけだ。死は存外静かにやってくる。肺はまだ生きていたので、何とか呼吸は出来るけれど苦しいことに変わりはない。確か耳もまだ聞こえているだろう。

私がそうだったように。

そしてもうすぐ、彼女が駆けて来る。その懐には赤い宝石を忍ばせて。

身震いした。私は私の重大な過去を、目撃する。

今宵。運命の夜。

第七話

月夜。死に体は懐かしい寒さで呼吸する。

心臓を破られた人間は、間をおかずに死ぬ。死ねば肉は土となり、ソウルもゴーストもまた起源の海へと立ち戻る。男はまさに終焉を迎えようとしている。

ポケットの宝石に手を伸ばした。この夜の違和感に、一体どれほど想像をめぐらせただろうか。

想像はやがて一つの道へ収縮し、しかしついぞ確信することはなく、忘れ去り思い出すこともなくなった。それは、衛宮士郎の犯した最初の罪なのかもしれない。なかった。

月明かりがさしこんできた。

衛宮士郎は愚かな男の代名詞だった。夢だったと、疲れていたのだと、死んで生き返ったという自身の肉体に起こった事実を信じる事が出来ないほどに。

命を救われたという、決して目を背けてはならない事柄ですら、認識できなかつた。

赤い宝石を取り出して、握りしめた。わずかに熱いその鉱石の内部には、埃が積もっている程度の魔力が残っている。鼻に近づけた。確かに、彼女の魔力だ。レイラインで繋がっている今、これ以上に断言できる状況はかつてなかった。

混乱があつた。もどかしさ、むず痒さ、至らなさ、まだまだ沢山ある様々な感情が混ざり合い、気持ちが悪い。殺意も黒く揺れ動き、どうにもならないほどに混沌してしまいそうになる。

静寂の校舎に不釣合いに高い足音を立てて彼女が走ってきた。脚を止めると、隠そうとしてはいるものの、顔面は蒼白だった。それでも何とか荒い呼吸を押し殺して、静かに言った。

「……追つて、アーチャー。ランサーはマスターの所に戻るはず。せめて相手の顔ぐらい把握しないと、割が合わない」

凜の声は、冷静を装いきれてはいなかった。

総身の肌が震えていた。鳥肌を抱いたまま、私は駆け出した。月光がサツシに遮られるたびに視界が明滅する。

衛宮士郎は死ぬ。いくら体内に、アーサー王が聖剣の鞘、果てども尽きぬ永久の妖精郷の力があれど、一突きにされた心臓を甦らせる力はない。

では、私は一体何なのか。この手の平の中で煌く赤い宝石は、一体なんだというのか。砕けた窓から夜の闇へと飛び出した。遠くに見えるランサーの影は、弾丸のような跳躍を繰り返し、すでに新都へ至る橋に達そうとしている。私は屋上へ昇り、ランサーの逃走を再度確認した。やがて闇に溶けてしまうまで、私はその軌跡を記憶にとどめた。

ここまで離されてしまつては、追いつくことはできない。今は道筋を覚えるだけでいい。

先ほどの廊下が見える辺りに移動した。何としても、見届けなくてはならない。あの日から不思議に手放すことの出来なかつた赤い石は、持っているだけでどうしてこんなに切ない気持ちになれるのかと、いつも不思議でならなかつた。もしやという思いはあつた。だが仮説は仮説のまま、十六夜が没し続けるたびに風化をとげ、ついに明かされることはなかつた。

物陰から、血の池のような廊下をうかがう。ゼヒという、死に際の息遣いまでもが聞こえてきそうだった。

彼女は半死にの男をただ茫と立ったまま見ていたが、何か二、三言呟いていてその場にしやがみ込んだ。光の加減で表情までは見えなかつた。何のことはない、その間は数える間もない目瞬くほど。胸からぐいっと取り出した赤いペンダントを力任せに引きちぎり、手をかざす。詠唱はただの一小節だった。膨大な魔力をまとつた赤い光が、死に際の男の体に吸い込まれていった。

事は済んだ。なんとも呆気ないものだった。

たかが一秒。されど、私の胸につかえていた全ての何がしは、去つた。思わず呟いた。「ああ、そうだ。私は君に迷惑をかけたのだとばかり」

苦笑いでいる。見下ろしながら、満足気に——しようがないなとばかりに、苦笑いでしているのだ。

それ以上、私には何もいらなかった。仮説は真実を謳った。屋上べりに力なく腰を下ろしたまま、何をする気も起きなかった。ひたすら手の平の上で脈打つ、赤い石に魅入っていた。

遠坂凜は、衛宮士郎の命を助けてくれた。だというのに、その素振りさえ見せることなく、彼女は幾度となく衛宮士郎に手を貸す。

それは、どうすれば返済できるか想像することもできない、とんでもない負債だった。衛宮士郎を屠らむ。真逆、あの月光さしこむ廊下の時間だけは、私は汚したくなかった。逃すべきではなかったのだろう。だがこればかりは見届けなくてはならなかった。原点だったからだ。この先、どんなことが起ころうとも私はこの瞬間を逃したことを後悔はすまい。長い殺戮劇の果てに、大陸に挟まれるような軋轢の果てに、一も全もなくしてしまった私の枯れた心持ちでさえ、踏み潰さずによかったと思つた。

衛宮士郎は殺すが、彼女の安堵の表情を見て時を逸してよかったと知る。凜。君が詮無い罪悪感などに囚われず、健やかに生きていけるのなら。

衛宮士郎を救うことで悲しまずに進めるのなら。
今でなくてもよいと思えた。

とうに枯れたはずの涙腺が、震えたような気がした。背中に闇。頭上に月。いつも、お前はそうして、高い所から私の弱さばかりを見る。この時代の月はまだ白く、血濡れのように赤く染まるのはまだずっと先。

どれほどそうしていたのか、彼女も男も立ち去ったのだろう、面を上げたときには校舎は在りし姿へと立ち直っていた。

外に出たときの窓から内へと入りなおす。廊下には一滴の血痕すら残っていないかった。

床に手をつける。辺りにはまだ膨大な魔力を放出した熱が残っている。これだけの量、数年やそこらでためることは出来ない。二代、三代、さらに多くの祖からの継承なのかもしれない。いわば遠坂家の歴史の結露のようなものだ。

ずっと、返す日を夢に見ていた。生前やり残したことなど、自分で思っている以上にあるものだ。己の未熟さ加減は、予想以上だった。

立ち上がり、学校の扉を越え、街灯きらめく街へと飛び出した。コントラストも鮮明に、街明かりと月光に挟まれた群青を駆ける。屋根から屋根へと跳躍する。屋根伝いに深山を駆け回った。今頃、衛宮士郎もよたつく足取りで帰路を歩いているだろう。今宵のことは全て夢と勝手に決め込んで。

青い槍手が消えた方向を、しらみつぶしに駆け回るほかはなく、それで発見することが出来るのなら何も苦勞はいらない。あいにく、ランサーのマスターを、私は覚えてはいなかった。その程度のことなのだ。記憶をとどめているということが正しくないといつても、間違いではない。

逃走経路を辿れるだけ辿りながら、私は感傷的になりそうだった精神を静めることに努めた。こうして、まるで人間のようによくうろたえるなど実にいつ以来になるのか、思い出そうとしても無理な話だった。

結局得た物はなにもなく、冷たい外気に鬱憤に似たものを吐き出しきったのち、私は遠坂邸へと戻った。

「お帰りなさい。成果はどう?」

ソファーに深く腰を下ろしたままの凛に、私は首を振りながら見つけれなかったことを告げた。

「そう」

ま、そう簡単にはいかない、と呟きながらため息を吐く。視線にもどこか力はなかった。

私は聞いた。

「覇氣がないなマスター。いつもの威勢はどうした。まさか先の一戦で怖気づいた、と

「いうのはなしだぞ。君が命じるのなら、今すぐにもランサーとの再戦に赴いてもいい」

「そんな訳ないでしょう。わたしが打って出ないのはね、単に無駄手間をしたくないだけなんだから」

「む？ 無駄手間をしたくない……？」

「だってまだマスターの数が揃ってないでしょ。今夜のは止むなしだったけど、開戦の合図があるまでは戦わないわ。それが聖杯戦争のルールだって父さんは言ってたし」

「……そうか。君の父親もマスターだったのか」

「何気なくでた父という単語が、私は腹の中で溜め込んでいた質問をぶつける動機となった。」

「一つ訊き忘れていた。凜、君は幼い頃からマスターになるべく育てられ、それに従ってきたのだろうか？ つまり、初めからマスターになることを予想していた訳だ」

「当たり前じゃない。そりやあいきなりマスターに任命される魔術師もいるそうだけど、私は別よ。遠坂の人間にとって、聖杯戦争は何代も前からの悲願なんだから」

「そうだろう。つまり初めからマスターになるべく育ててきた君ならば、目的がどうにある筈だ。私はそれを聞き忘れていた。主の望みを知らなければ私も剣を預けられない。凜。それで、君の願いは何だ」

昔から訳もなく、私は彼女の望むものに対して疑問を挟まなかった。信じていた、というわけではない。彼女の望みを聞く、という行為がどこかおこがましく、無意味なものに思えて仕方なかったからだ。

凜はきよとんと言り返す。

「願う？ そんなの、別にないけど」

彼女がさも当然に言い返したので、思わず聞き返す語気が荒くなった。返答に、理屈抜きの喜び覚えてしまったからでもあるだろう。

「そ、そんな筈はあるまい！ 聖杯とは願いを叶える万能の杯だ。マスターになるという事は聖杯を手に入れるという事。だというのに、叶える願いがないとはどういう事だ……！」

的外れだ。全くの的外れな問いを、私はしているし、続けようとしている。

「よし、よしんば明確な望みがないのであれば、漠然とした願いはどうだ。例えば、世界を手にするといった風な」

「なんで？ 世界なんてとづくにわたしの物じゃない。あのね、アーチャー。世界ってのはつまり、自分を中心とした価値観でしょ？ そんなものは生まれたときからわたしの物よ。そんな世界を支配しろっていうんなら、わたしはとづくに世界を支配しているわ」

的外れすぎて、いつそ清々しいほどだった。

「馬鹿な。聖杯とは望みを叶える力、現実の世界を手に出来る力だぞ。それを求めるというのに何も望まないというのか、君は」

「だって世界征服も面倒くさいし、そんな無駄なことを願っても仕方がないでしょう。貴方、わりと想像力が貧困ね」

「……。理解に苦しむな。それでは何の為に戦う」

「そこに戦いがあるからよ、アーチャー。ついでに貰える物は貰っておく。聖杯がなんだから知らないけど、いずれ欲しい物が出来たら使えばいいだけでしょ？　人間、生きていれば欲しい物なんて限りないんだし」

「つまり、君は」

「ええ。ただ勝つ為に戦うの、アーチャー」

無謀さがあり、未熟さもある。達観しているわけでもなく、傍観しているわけでもない。

それは、唯我のみが為に在るということ。

自己の正当性に対する視野の狭さは、もはや狂信の域だ。それは強い。強さとは、振り返らない意志の力と、後ずさりしない胆力である。

このような逸材が他にいようか。

「まいった。確かに君は、私のマスターに相応しい」

「ふん。サーヴァントにマスターを選ぶ権利はないけど、一応訊いとく。なんでわたしが貴方のマスターに相応しいのよ」

「言うまでもない。君は間違いなく最強のマスターだ。仕える相手としてこれ以上の者はない」

微妙にうつむきながら彼女はぼそぼそと言葉を返す。照れたのか——いや照れるばかりでなく、疲れもあるのだろう。生き延びたねぎらいも兼ねて、紅茶を入れようという気にでもなった。

「さて、ならば一息入れようか。七人目のマスターが現れるにせよ、それは今すぐという訳でも……と、ちよつと待て凜。君、あの飾りはどうした」

赤い宝石。胸元に吊るしてあつた輝きがなくなつてしまつている。廊下にそのまま放り投げたのだろうか。

「飾りつて、ペンダントの事？ ああ、アレなら忘れてきちやつた。もう何の力もない物だし、別に必要ないでしょう？」

「それはそうだが」

「ええ。父さんの形見だけど、別に思い出はアレだけつて訳じゃない——」

「——よくはない。そこまで強くある事はないだろう、凜」

私は、それが父の形見であることも知らなかった。

罪滅ぼしのような気持ちに後押しされて、赤いそれをポケットから取り出し、渡した。あるいは危険な行為なのかもしれない。私と彼奴が相同だと、暗示しているような代物だ。

「あ……拾いにいってくれたんだ、アーチャー」

歴史は残酷だが、時にこうして気まぐれを起こしてくれる。それに騙されながら一喜一憂し、気づいたときにはこうまで壊れてしまった。

被害者を気取るつもりはないが、加害することなど出来ないのだから、被る側であることはやっぱり間違いいではない。

全てを切り捨てた先に、切り捨てることが出来なかったものと再会するなど、やはり残酷にすぎると私は内心自嘲しつつも、少し照れくさかった。また、嬉しさがあることも否定はしない。ようやく、返すことが出来た。こうして私は、歴史に騙されていることを許容し続けてきた。

「もう忘れるな。それは凜にしか似合わない」

「——そう。じゃ、ありがとう」

いつもこうして飴を得る。鞭は、間を置かずに振り下ろされるはずだ。どこまでも、甘い飴。

「つて、待った」

表情をゆがめて、凜は立ち上がった。

衛宮士郎の危険を、私は言わずにおいたが自身でその答えに至ることは想像していた。

「そんなヤツ、生かしておかない……」

眩きながら、駆け出すまではほぼ同時だった。彼女はまた衛宮士郎の命を背負い込もうとしている。再び夜の街へ飛び出した彼女に付き従いながら、何かを思い出せないもどかしさに襲われた。

「どこに行くんだね」

「さっきの、死んでたやつの家よ！ ああもう、なんで気づかなかつたのかしら、ランサーが見逃すわけじゃないじゃない！」

「なぜそんな無駄なことをする。さっきの蘇生もそうだ。膨大な魔力を、あんなことに使うなんて合理的ではない。魔術師の口封じは常識だろう」

「なによ、見捨てればいいって？ いいのよ、わかつてる。あれは私の責任でなかったこと。だったら、私の責任においてなら、生かすも殺すも自由ということよ」

「いい、百歩譲ろう。君は一度助けた。責任を果たしたという事だ。その後には彼がどうなるうと、彼自身の運じゃないのか？」

「いいえ、生かしたのは私。じゃあある程度生きられるまで、面倒みなきや夢見も悪いわ——ああもう、間に合え！」

交差点を最短距離で横断し、衛宮邸を目指す。屋敷に近づくとつれ、妙なもどかしさが頭をよぎった。曖昧な予兆は、一向に消えずにわだかまり続ける。それはどこか、水面下の魚に目を凝らすに似た。

坂を上る途中、ランサーの気配を察知した。殺気を隠そうともしていないので、もう少し近づけば彼女も気づけるだろう。

「……まったく。余計な苦勞を背負おうとしているぞ、君は」

私の問いに、彼女は無言で走ることを答えた。

屋敷正面。塀を貫くようにランサーの気配を感じる。まだ殺気立っているということ、衛宮士郎はまだしぶとく生き残っているという事だ。

「……いる。さっきのサーヴァント……！ 飛び越えて倒すしかない。その後のことはその時に考える——！」

不意に、閃光が塀の向こうより飛来した。辺りに満ちた光は、魔力の波だった。しかも現代の魔術師が行使できる程度の代物ではない。世界の真理より、過去の英霊を現界させる産声とも呼べる、降臨の星光だった。

「うそ——」

ランサーの気配が遠のいていく。流石に、目の前で現界されては一たまりもなかったのだろう。そしてそれはランサーだけの話ではない。戸惑った。この気配を、私はいまだに覚えていた。そう、わだかまりはこれだったのか。この日この地、この夜。運命の結露は一塊となつてやつてくるのが常。

輪廻は一周する。

確かにそろそろ鞭が振り下ろされてもいい頃だ。運命論者ではないが、運命を否定できるといふほど愚かでもないつもりだ。

「……ねえアーチャー。これも、もしもの話？」

「さあな。だがこれで七人。ついに数が揃ったぞ、凜」

かくして七人揃い踏み。聖杯戦争は最後の札がオープンされることによつて開幕のベルを鳴らした。

扉を掠めるように飛び越してきたものがあつた。戦争は始まったのだから、その行為に何ら落ち度はない。

セイバー。

戸惑いは満潮に達した。

憧憬が形を持つ。あらゆる内面を磨り減らした私の中でさえ、いまだ君のその姿は褪せることなく焼き写されている。

懐古に痺れたのは臉の震えほどの隙だった。そしてそれが死線を極限まで膨らますということをお互いよく理解している。動きが遅れた。凜も動けない。呑まれたのか。痺れを解き、ようやく脚が動き出したときには猶予はすでになく、マスターの前に立ち塞がることしか出来はしなかった。

青緑の軌跡が流れた。野菜を断つかのような間拔けな音がした。脇腹より胴が裂かれる。血が零れ落ちた。さらに食い込んだ刃、風が体内をかき回す。内臓を風の刃がえぐる感覚は今までにないものだった。破損箇所が急速に壊死していく。

それで終わった。勝負は、暇という暇を否定した。

呻き声さえ上がらぬ速度の渦を纏って、絶命の一太刀がさらに追ってきた。

その濃緑の瞳に是非はない。そう、君のその圧倒的な強さと意志を、確かに私は覚えている。たとえ握った得物が竹刀であっても君はいつもその顔をしていたつけ。

首を切断せんと風王結界が流れる。束の間、諦める己がいた。この死の際ですら、彼女に斬られることを許容できるといふ、全てを麻痺させるほどの懐古がいまだに私を支配していた。

「——アーチャー、消えて……!」

唐突に世界が真っ赤になった。

世界が暗転し収束する。令呪が一つ減ったことを感じた。つまりそれは、凜が私を

救ったということ。

ああ、と心中呟いた。私はまたもや彼女に救われた。二度目だ。この死なずの身であつてさらに、私は彼女に貸しを一つ作ったという、しかも一日に通算二度という、笑い話。

私を形作る強力なものに一つのひびが走つたのを自覚した。楔は深く深く、根本に亀裂を走らせる。サーヴァントを降せるのはサーヴァントのみだ。無防備となつた凜に勝ち目は無い。それを承知の上で、我がマスターは私の救助を令呪を使用してまで行つた。

亀裂。亀裂。崩落。

鞭はしなり、私の根本に深い崖を掘る。

心中、苦笑した。

ここまでされて、いわんや彼女を裏切れるのだろうか。到底できそうもない。今度こそ、これは真正の忠誠だった。

「君を、聖杯戦争の勝利者に」

衛宮士郎を殺すのならば、その後だ。聖杯戦争を勝ち抜いたのち、消え去るその直前にでも射殺せばいい。

薄れ行く意識。三つの考え。彼女を守るという意志。彼女に会えたという感慨。奴

に對する変わらぬ憎悪。

命拾ひしたな、衛宮士郎。お前を殺すのは、しばらくあとになりそうだ。

ダメージは甚だしく、私は姿を消した上でも意識が朦朧としていった。凜は、無事なのか。それだけを祈って、痛みの先の空白に頭が襲われた。

第八話

覚醒する。気を失っていたのは、大した時間ではない。

欠損は激しいがどうか繕いは済んだ。実体化しても外見的にはなんら問題はない。供給されている魔力の大半を回復に充てているので戦闘は満足に出来はすまいが。

ただ、どうやらセイバーとの戦闘はないようである。状況は何やら温和な方へと傾いていた。凜と衛宮士郎の和解によって、セイバーも渋々剣を収め、衛宮家へと入っている。衛宮士郎への感情は、とりあえず抑えておいた。

「凜」

霊体のまま、彼女にだけ聞こえるように話しかける。玄関をくぐりつつ、表情も変えないまま彼女は答えた。

「アーチャー、無事？」

「何を基準にして決め付けるかは判断に迷うが、とりあえず消えはしない。どれほど力が出せるかは、やってみないとわからんな」

「大体でいいから」

「三割だせれば、御の字といったところか」

斬撃は胴体の三分の一に達し、付随する風の渦が内腑に届いていた。傷を修復するた
びに用いた魔力はかなりの値に達し、三割というのも正直疑わしいほどだ。

「いいわ、アーチャー。貴方は屋敷に戻つて。あそこは霊脈としてもかなり優秀だから、
居るだけでもだいぶ違うはずよ」

「離れるというのかね」

「二日に三度も戦闘はないはずよ。あのとぼけたやつ、一応知り合いだから問題ないわ。
それに、傷ついたあなたがいたつてセイバーが本気を出したら私もあなたも一太刀でや
られちゃうだろうし」

「すまないマスター。私は、遅れを取ってしまった」

「ちよつとちよつと、責めてるわけじゃないんだから。私だつて無反応だったしあなた
は私を庇つて……いい、不毛ね。この話はまた今度で、とりあえず今は遠坂の屋敷に
戻つて頂戴」

束の間迷つた。確かに彼女の言うことには一理ある。何がどうあろうとも、衛宮士郎
は絶対に他人に危害を加えない。セイバーが戦いを望もうとも、決してそれを許すこと
はないだろう。逆に危険が迫れば、己を盾にしても遠坂凛を守るに違いない。そうい
う男だということを、私は誰よりも知っている。というならば、私は遠坂邸に戻つて一
刻も早く体を元に戻すほうが無駄がない。そういうことだ。

だが、果たして三度目の戦闘はないのか。このもどかしさは、予感めいた嫌なもの何か。

私は言った。

「いや、残ろう。土地の魔力含有量というのは我らにとつては雀の涙だ。それにこの先何が起こるかわかったものではないし、三度戦わないとは誰にも言い切れない。違うな、二度在りえたのなら完全に三度目は来るのだ」

「冗談。でも、まあ万が………つていつかもこの単語いつたつけ。まあいいわ、万が一戦闘に入ったとして、勝てるの?」

「三割とはいえ、戦えないというわけではないし要はやりようだ。それに君が死んだら、元の木阿弥というやつだ。忘れてないかね?」

「……ええ、いいわ許す。その身に代えても私を守って頂戴」

「了解したマスター。そうだそれでいい、サーヴァントなど所詮使い魔だよ。君は君の思うまま、私を行使すればいい」

霊体化しているときは特に契約者とのパスが強固になる。なので、不機嫌になったのだなどすぐ知れた。この少女の恐ろしい所は、それをおくびにも出さずに相手をいなす所なのだろう。廊下を進みながら、不意にくるつと後ろを振り向いていった。

「へえ、けっこう広いのね。和風っていうのも新鮮だなあ。あ、衛宮くん、そこが居間?」

何が気に食わないのか、ふん、と鼻を鳴らしながら居間へと入る。こうなれば手をつけられぬ。私は黙って背景と同化した。

心の贅肉というが、彼女ほどそれを削ぎ落とそうとして落としきれぬ者もいるまい。凜。衛宮士郎。雨合羽を被ったセイバーの三人が夜道に行く。

衛宮士郎が聖杯戦争に正式に参戦するということになり、無知な奴のために状況説明と参加の是非を問うという、そのために丘の上の教会に向かっている。深山から新都へ、おおよそ一時間といった所である。バスもタクシーも使わずに歩いて向かうのは、私の回復も考慮しているからだ。元の供給がしっかりとしているので、予想以上に回復は早い。とはいえ十分な力量が戻るのは二日は軽くなるあたりどちらにしろ雀の涙だった。

やがて坂道にさしかかった。

「この上が教会よ。衛宮くんも一度くらいは行った事があるんじゃない？」
「いや、ない」

雑談をまじえながら坂道を登っていく。もどかしさで、もぞもぞと胸が痒い。顔にも態度にも出したことはないが、教会というのは私にとってのタブーの一つだ。同時に、神父もそうである。トラウマは、英霊となりし今でも私の奥深く根付いている。

「うわ——すごいな、これ」

チャペルは神と生を啓すると同時に死を司る。豪奢に極まった壮大な教会は、しかしその片方しか担ってはいない。死のみだ。瘴気は巧妙に隠されてはいるが、一度知ってしまった人間から見れば、どうしようもないほどに汚濁にまみれている。

「シロウ、私はここに残ります」

教会の入り口を前にし、雨合羽姿のままのセイバーがいった。

なんでだよ、と聞き返す衛宮士郎の言葉を遮り、私は凜の背後から実体化を果たした。「では私もだ。凜、なるべく早く帰ってくるんだな。他人を思いやるのも大事だが、もう聖杯戦争の幕は開いているのだ」

「うわ、お前いきなり……!」

「ええそうね、全部わかってるから心配しないで。落ち着いて衛宮くん、あれがわたしのサーヴァントよ」

「こいつが、遠坂の?」

対峙する。

衛宮士郎。衛宮士郎よ。お前に生きている価値はないのだ。怨念は、私の皮膚の内部で膨張を、やめない。

直視すれば、吐き気を催しそうになるので、目を限りなく細めていった。

「さっさと行つて、リタイアしてくるのだな。それと、凜、この男がどういふ判断を下すにしろ君が気に病む必要はどこにもないのだからな」

男の顔が、かっと赤くなつていた。気に障つたのか、直立不動のまま両の拳を震わせ。私も気を緩めればそうなるだろう。口の端に笑いを浮かべるに留めておいた。しかし私も、殴り飛ばしてやりたくなくなるとは、自制はすれど興奮しすぎだった。むしろ、我慢が利いているのが不思議なくらいだ。この時を求めて全ての時代の屍を闊歩したのだ。暗い恍惚を覚えたとしても、何ら不思議がない。

ふっと、私と奴の間にセイバーが立ち塞がった。

「双方下がれ。少なくとも今は、この建物に用件を果たしにきたのだ。戦うにしてもその後にはすばい、シロウ」

「そうよ、アーチャー退いて」

私は素直に命令に従い背を向けた。男は、それでもセイバーを押しつけて食つて掛かるのを止めない。今一度、私は振り返った。

「俺は、お前が嫌いだ」

「全く同感だ」

「ああ、もう。埒があかないんだから……！ 衛宮くん行くわよ、ホラー！」

片腕を引つ張られ、ようやく男は教会へと消えていった。私は憎悪の余韻を残したま

ま、不意に静かになった広場で立ち尽くす。私以外には滑稽な雨合羽を被ったままのセイバーしかない。彼女は、遠坂凜とは違った意味で胸に染みた。彼女はあの頃の彼女のままだが、私はあの頃の俺ではなく、向けてくる視線は敵意の眼差しでしかないのだから。

沈黙に耐えられなかったのは、彼女のほうだった。

「ここに来る間、始終シロウに殺気を向けていたようだが。再戦が望みか」

セイバーは精悍な表情を崩さぬままいう。

「どうやら貴殿のマスターとシロウは旧知の間のようなようだ。マスターの意に背いて剣を振るうことは私の望む所ではない。だが挑んでくるのであればその域ではない」

「なに、私も傷つき万全ではない。この状態で君に挑むのはいささか無謀だろうな」

「では問おう。ならなぜ霊体の上でなお感じるほどの殺気をシロウに放つ。斯様な、マスターに対しての尋常ならざる気配を感じれば、剣の柄より手が離れることはない」

「勘違いだろう。先ほども、そちらの小僧が突つかかってきたことだ」

「愚弄は許さん」

濃緑の瞳も吊り上がるほどに、きつと睨んできたが私は肩をすくめていなした。

「なに、まあ落ち着け。必要以上に案じないことだな。君がそれほど心配をしなくても、マスターを受任して戻ってくるだろうよ」

「心配などしていない」

「まあいい。いずれは再び相対することになるだろうからな。余計な馴れ合いは無意味だろう。一度は不覚を取った。二度はないぞ」

「それはこちらの台詞だ。次に剣を振るときは、そなた逃走は叶わぬと覚えておくがいい」

二人して、うつすら笑った。

私は英霊となつて、いつかの日の抉られた追憶を取り戻したいと願う瞬間もあつた。今はその気持ちすら削り取られたが、こうして彼女の顔を再び見て、言葉を交わすと全てのわだかまりが霧散した。お互いが敵同士であり、殺し殺しあう間柄となつてしまつたということについてもどうでもいい。悲しいという感情は既に私の中では滅んでいく。

私がこうして強くなつたのは、あの日の君の面影を追つたからだ。ただそれを告げたという気持ちだけが未練がましい古傷のように時折疼く。時折、だけ。

やがて衛宮士郎と凜が教会より出てきた。私は再び凜の影となり、セイバーは衛宮士郎の下へ行き、判断の是非を確かめているのだろう。わかりきっている結末を、私は確かめる気にはならなかつた。

「凜。これで妙な馴れ合いは終わりだろうな」

レイラインを通して聞く。凜は、当たり前よ、というニュアンスを含ませながらうなずいた。

「明日からは、真つ当な敵として扱おう」

今から、という答えでなかったのが半ば残念ではあった。

来た時と同じように、だが幾分違う雰囲気坂を下りゆく。原因を私は考えようとはしなかった。衛宮士郎の決断など、とうに知れていたからだ。

「遠坂、お前のサーヴァント」

「え？」

幾つめかの街灯を通り過ぎたとき、衛宮士郎が聞いた。

「ムカつく奴だけど、大丈夫なのか。セイバーにばつさりやられてたじゃないか。さつきは平気そうだったけど」

「ええと、うん。アーチャーなら」

「余計なこととは言わなくていい」

私は凜にだけ聞こえるようにいった。ムカつくといいつつも、氣遣おうとするのは虫唾が走るほどの欺瞞だ。

「……大丈夫そうね。あなたのことよっぽど嫌いみたいだわ、つてお互い様か」

「ああ。こればかりは俺にもわからないけど、嫌いだ。でも何もいきなりセイバーに

斬られて死んでしまうのも気分が悪いし、実はさつき顔出したとき少し安心した」

余計なお世話だ。

「ええ、だからもういいわ。あのときのセイバーの判断はすこぶる正しかったもの。油断したこつちが悪いだけ」

ね？ となにやら同意を求めるように私に意識を向けた。私は黙ってそっぽを向き、彼女はくすくすとにやけながら衛宮士郎と会話を続ける。言峰という男からサーヴァントの正体についてまで、話はしばらくは尽きないだろう。セイバーはひたすら寡黙に徹している。

まったく要領を得ない男の反応に、凜は一つ一つ生真面目に答えてやる。サーヴァントの由来、何処の英雄かということ、真名は戦闘においても重要な意味を持ち決して自分以外に知られてはならないということ等々、実に人がいい。私は辟易しそうになった。

「ふーん。じゃあ遠坂も、あの赤いヤツの真名を教えてもらったんだな」

「え、あ、うん。当たり前じゃないっ。すぐに教えてもらったわよモチロン」

あたふたと、誤魔化しつつも誤魔化しきれぬ辺りがどうにも救いがたい。苦笑した。

「そうか。じゃあ俺も後で」

「あ、待って……そうね、あなたの場合は逆に教えてもらわないほうがいいかも」

「なんですか」

「だってあなた、隠し事できないでしょ？」

あれこれと話しあう二人と、黙々と後に続く黄色い雨合羽のセイバーと、霊体化した私を合わせて四人で坂を下る。仄暗い街明かりを辿るように、国道から橋へと向かい一路深山へと戻る。

やがて、話が一段落ついたあたりで、凜が最後だとばかりに口を開いた。

「さて、義理は果たしたから。明日からはきっぱり、敵と敵よ」

矛盾した物言いだった。明日から争うという言葉にしる、今宵手助けしたということにしる、善意に過ぎる。そのうえ、一度は命まで救っているのだ。けれど、この矛盾こそが彼女の本質なのかもしれない。

目の前の男は自分が一度命を蘇生されているということにすら全く気付いていない。自分のことを柵にあげている感覚はあれど、はつきりといまいますく思った。

「ええと、俺、遠坂と戦う気はないんだけど」

「……………」小一時間の話、ぜんっぜんわかってないわね」

それからしばらく、あーだこーだと今日何度目かなるややずれた言い合いをし、ようやく橋にやってきた。

橋上は風が吹く。優しい冬とはいえ、深夜は気温も下がり寒いことに変わりはない。

それでも死に果てた薄ら寒さではなく、人が生きる街から街へと流れる、温かい寒さだった。

ここから深山が見える。新都に比べこちらはさらに静かだった。橋を一つ隔てているだけでも、なぜかかなり離れているように見える。

すでに日付が変わって一刻二刻。世界が最も邪悪を呼び寄せる時間となっていた。街灯の数さえ少なくなり、夜はいよいよ魔物さえおびき寄せんばかりの怪しさを呈する。

そして、邪悪は現れた。

瞬間、冬は威力を増して空間を凍結した。時さえ硬直した。あらゆるモノがあらゆる業に襲われた。断罪の瞬間だった。少女の声が、ただ一つの生きた声で——されどそれすら死に体のような——さえずるのを許されていた。

「——ねえ、わたしも混ぜてくれない？」

くすりと笑みさえナイフの刃。そして極上の邪悪は呼応する。吼え声は、暴力を乗せて月下を揺るがした。

第九話

鉄が意志を持ったかのような頑強さだった。

月の光を背負い、縁取られたそのシルエツトが禍々しく揺れている。暴力という熱が、体中から茹で上がっているのだ。

少女が小さくさえずった。背中まで流れる銀色の髪が、月明かりにさらに白く輝く。比すれば人形のように小さく見えるその子を、豪腕の中に優しく抱きかかえて、直上の鉄骨から飛び降りた。着地の重圧に耐え切れず、石畳やプレートがばりばりと砕け散った。

「もうバカ。もうちよつと静かにできないの？ このウスノロ」

無邪気なその声と相まって、どこまでも非現実的だった。だが無駄な瞬き一つ許されはしない、超常の敵である。その砲塔のような腕から少女は軽やかに地上に降り立つと、スカートの端をくいとつまんでお辞儀をした。

「こんばんは。いい夜ね皆さん。殺し合いにはびつたり」

ふふふと笑みをこぼしながら、くるりとその場で回転をしたり、下から覗き見るような仕草をしたり、少女はどこまでも無邪気だ。ただその背後。殺意で武装した悪夢との

落差が、まるで地獄絵図に等しい惨たらしさを見せつける。

「出て、アーチャー」

実体化する。同時に、固まっていた衛宮士郎を押し退けてセイバーが前へ出た。凜は辛うじて吞まれてはいないようだ。

「二度目の万が一だな」

「ごめん、今は笑えないわ……やばっ。アレ、無茶苦茶だ」

くつと歯を食いしばりながら、凜はポケットに手を忍ばせつつ言う。

「バーサーカーのマスターね」

「ええ。はじめて、リン。お兄ちゃんは二度目だけど、名乗るのは初めてね。わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えばわかるでしょ？」

「アインツベルン——」

私に覚えはない。ないのなら、それまでだ。私は過去の検索の一切を断ち切って、数少ない魔力を体内で練り上げることに意識を統一する。セイバーの手が柄を掴むのが見えた。

「じゃあ、はじめましょ？ やっっちゃえ、バーサーカー」

いざ殲滅戦。

ただ走る。それで橋が揺れた。一步踏み出すたびに、巨大な建造物が衝撃にたわむ。

巨人は大地を踏み荒らす。立ちほだかる存在全てを力任せに蹂躪する。狂戦士は、傷さえ付かない鋼の具現。鈍色の破滅が暴風をまとって肉迫する様は、どこか世の終わりを思わせる。それを断ち切るように、銀緑の剣が敢然と飛び出したのは、どこか示し合わした劇のようだった。

私はその激突を見届けようとは思わなかった。

「凜」

有無を言わず抱きかかえると、そのまま私は踵を返して路面を蹴った。新都側まで、五十メートルほど。爆発音と剣戟音に追われるように、私は橋上から退避し終えた。

この傷ついた身に残された魔力で、到底勝てる相手ではない。セイバーが打ち合う剣戟音がまだ聞こえる。同じく負傷している彼女と共に戦ったとしてもなお分は悪く、さらに足場はこれ以上ないというほどに味方してくれていない。

「ちよつとつ！ アーチャー誰が逃げろつて——！」

「このまま逃げる。新都に隠れ家のようなものはないかね」

「見捨てろつていうの！」

「正しくその通りだ。反対かね。ではあの魔物と打ち合えというのかね。いや、いいタイミングだった。セイバーが飛び出したあの瞬間にしか逃走は叶わなかっただろうよ」

口論の最中にも、橋の上では激突が続いている。魔力と暴力が荒れ狂い、一撃毎に真

下の水面が爆ぜる。鉄骨で編まれた巨大な橋も、悲鳴と共に崩れていく。

抱えられたまま凜はいった。

「戻って」

「正気か。あれはただの英雄などではない、神性の魔物だ。あれを御するには万全の力が」

「御託は聞きたくないわ。私は、戻れと、命令したの」

赤い、糸のように私を包んでいた令呪の力が、太さを増した。縄は、拒めば綱にも鉄鎖にもなつてこの身を拘束する。今はまだそうしろと体に食い込む程度だった。されに凜は腕を振り回して暴れ、私はやむなく彼女を下ろした。

「逃げるなら、あの二人も連れてよ」

「愚昧か、君は。あの立ち位置は絞首台のそれだぞ」

「わかっている」

「わかっている。力だけ見れば、あのサーヴァントは紛うことなく最強だ。あの道は逃げ場がなさすぎる。一度攻めを受ければ横にいなすことも飛び越えることもできない」

「わかっている」

「……どうしてもか。どちらにしろ、二人とも敵であることを忘れていないか」

「言つたはずよ。敵として扱うのは、明日からだ。今日は、まだ敵じゃない」

拳を握り締め、そのまま凜を昏倒させて退避しても良かった。してやろうか、と半ば本気で考えたがその躊躇わない瞳に魅入られて、どうでもよくなった。私はため息と共にその考えを消し去つた。

「……マスター。いつか、君のいうところのその心の贅肉が、君自身を押しつぶすことになるぞ」

「ごめん、それもわかつてるわ」

「……もういい、謝るな。言つたはずだ。君は君の思うまま、私を行使しろと——つかまれ」

反転してもう一度橋を——橋だったものを目指した。

幅は三步、脇に逃げ場はない。一直線に続くだけのその舞台は、戦闘を綱引きに似た単純な力任せに変えてしまう。剣——セイバーの位階を冠していても微細な要素でしかない。身にまとつた技量は死に至る時間をわずかに延長させる程度のメリツトしか持たない。

だが彼女は生きていた。

「生きてる！」

「しかし、無事というわけではなさそうだな」

私の目にははつきりと血濡れの背中が見えていた。橋のほぼ中央、驚くことに一合目を打ち合つた地点よりほとんど移動はしていない。なぜだ。この状況での戦う術は、じりじりと後退する他はないはず。私は地を蹴りながら考えた。憤懣が溢れ出るまで、大した時間はかからなかつた。

彼女は、倒れ伏した衛宮士郎の、盾なのだった。

「——アーチャー」

「……案ずるな。肩が揺れている。まだ死んではないない」

火花を飛び散らせながらセイバーは持ちこたえているが、打ち砕かれるのは時間の問題だった。ジリ貧などではない。決死だった。文字通り死が決まっている。バーサーカーの攻撃は避けなければならない。その正答に反し、踏みとどまる代償は直死だった。引き分けているわけでも、持ちこたえているわけでもない。まだ、死んでいない。それだけのこと。

橋。届くまで残り地を二蹴り。

そこで、咆哮と共に振り下ろされた斧剣を受け止めたセイバーが、とうとう打ち払えずに硬直した。直後に、まるでボールみたく吹き飛んだ。カンとそれこそ物のような音を立てて鉄骨に埋まる。振りぬかれたバーサーカーの左拳が、血に濡れていた。

怒りは、足にこめた。

最後の一蹴り。身を縮め加速は弾丸のように。

「アーチャー離して——Vier Still Erschiesung……!」

腕を解いて凜が跳んだ。空中。ポケットから取り出した寶石が、呪文が風に乗るのを皮切りに、セイバーにトドメを刺そうと腕を振り上げるバーサーカーに殺到した。

ダメージは皆無だった。魔力の風はバーサーカーの肉体に負け、霧散した。

けれど、確かにそれで狂戦士の動きは束の間止まった。かすかな隙。弓。矢。イメー
ジは、直進し弧を描きたゆたいながら波状する三つの白銀。

「アロウ」

放たれた矢の目的は、凜の魔石と同じようにダメージではなく足止めでしかないが、十分だった。一の矢は宝石の蒸気に紛れてバーサーカーに直撃し、二本目の矢は石畳を貫き通し、彼我の間に亀裂という少しばかりの猶予を作りあげる。

ぼちゃんぼちゃんと、水に砕けた石が落ちる音に混じって、少女が嬉しそうにささやいた。

「あら、リン。尻尾を巻いて逃げちゃったから、まだ犬並みには賢いのかと思っただけ——うふふ、あなたのその出来損ないのアーチャーで挑むの？」

凜も私も答えはしなかった。無駄な言動は死ぬ。無駄な呼吸も死ぬ。気を抜けば死

ぬ。死は目前。主のセリフを遮らないために、ひととき殺意を押し留めていただけなのだから。

「くっ、あ」

めり込んでいたセイバーが、背後で落ちた。声を出せるということは、消えずにまだ残っているということ。凜が一步二歩と下がりセイバーの元に。そのさらに五歩後方に衛宮士郎。逆に前方、ワルツのステップを踏む少女までは三十歩。バーサーカーは、穿たれた亀裂を一つ挟んでいるだけだった。

道は狭く、逃げ場がない。

この一方通行の隘路はどこまでもバーサーカーに味方していた。スペースの狭さで逃げ場が失われているのが致命的過ぎた。左右に活路なく、後に退く他ない。しかし鋼鉄の突進の前では、セイバーほどの剣捌きがあつたとしても精々数分持ちこたえることしかできない。衰弱している私に、あの斧剣の威力を和らげることなどはや出来ない。ならば私は、私の仕事をするしかなかった。

イメージする。怒号。振り下ろす斧剣がタイルを舞い散らせる。突進は弩級。こちらの魔力は不足。投影は間に合わず直撃を受ける――

まともにもやり合うことは、自害とそう変わらない。ならば答えは一つしかない。ふと笑いたくなる。それを押さえ込んで、私は糸を引きつつ言った。

「ふむ。まあ、こんなざまでは出来損ない呼ばわりも仕方がないが」

「アーチャー」

凜がレイラインを通してきく。私はただ肯定を伝えた。

「うん。どうしようもない出来損ないよね。その上わたしのバーサーカーは最強だもの」

「ほう。確かに強力だが、最強とはよくいう」

「間違はなく最強よ。そこにいるのは普通の英雄なんかとはわけが違う。神界を揺るがしたギリシヤの大英雄なんだから」

凜が息を飲み、一歩さらに後ずさりした。糸。

「——ヘラクレス」

「そう、あなたがどこの何かなんてどうでもいいの。純粹に格が違うのよ」

赤い瞳は、当然のことだと、勝ちも真理も全て握っているという自信に輝いていた。

ヘラクレスは神意を授かったギリシヤの伝説。否、世界の伝説。

彼女の言うとおり、そこに転がっている無様な男の成れの果てが、挑んで勝てると思ふなど、私自身不遜であると思えてしまう。今度は、はつきりと笑いが出た。

「なにが、おかしいのよ」

「そうだな——なんでもないことだ」

「余裕ね。それとも、バーサーカーの力に毒されて頭が触れちゃった？」

「いや、そちらが毒されることはあっても私が毒されることなどありえない。笑えたのは、本当に私的なことだ」

「かわいそうに、リン。あれ、本当に頭がおかしくなっちゃったようよ」

「そうかしら？ 何もわかってないのはあなたの方じゃないの？ イリヤスフィール」

中々いいハツタリだった。心地よいまでに度胸が据わっている。そのせいで私の笑いもさらに興が乗った。笑いつつも、糸にだけは、神経を張り詰めさせておく。

「ふーん。わからないけど、まあいいわ。もうすぐ死ぬんだから」

「死ぬ？ いやいや、されど私も英霊の端くれだ。ただの人に殺されることなどありえないよ」

糸。切れるまで残り一呼吸。

「……なにをいつてるの？ さつきから」

「確かに私は傷つき、そののヘラクレスに比べたら出来損ないだ。しかしこの場での論点は違う。そう、誰がサーヴァント同士で戦うと約束したのかね？ 私は勝てる相手と戦うのだ。つまり——」

さきほど放たれた矢は三本。

炸裂したのは二本。

数式は、見落とすほどに簡単だった。

「君だ」

遅延信管糸切断——流星弾解放。

初弾の爆煙に紛れ、真下に放たれたのちに糸で停止を強制された三つ目の白銀は、己の使命に回帰した。流星のように。橋の下をくぐりぬけ、矢は少女に向かって殺到する。サーヴァントにとっては牽制程度の技でも、とかく人間に対処できるシロモノではない。バーサーカーでは無傷でも、あの少女では跡形もなく吹き飛ばさるだろう。

バーサーカーが吼え声と共に後ろに跳んだ。巨体を無視した速さだった。身体のキャパシティは、それだけで一つの神秘を思わせた。怒涛のような脚力の末、巨人は主人の危機に間に合うが回避は叶わない。少女を抱え、自前の背中をそのまま盾として矢を受け止めた。

隙としては、申し分ない。

「凜！」

私の叫びに呪縛を取り外した凜は、セイバーと衛宮士郎を抱え上げて駆け出した。

勝機など、おこがましくて言えはしない。この機会はあくまで逃走を許された類だ。

つがえる。アロウ三連。イメージはそのまま現実世界に投影され、三つは三つとも岩盤のような背中に吸い込まれる。これもまた、時間稼ぎでしかない。

「まだか」

「くっ、もうちよつとー!」

二人を担いでの逃走は遅々たる駆け足だ。凜は懸命に走ってはいるが、出口まで未だ半分も達していない。

さらなる時間を。私は魔力を振り絞った。手の平に掴みきれないほどの矢の束を生み出す。その数三十。丸太のように束ね上げたそれを、打ち起こし引き分ける。

「この意が覆ることはなし——八連八章八朔六韓輪」

八は左右に挟み撃ち。

八は上下に噛み砕き。

八は真つ直ぐ砲撃し。

六は光輪合わさり捻れ飛ぶ。

私のイメージがそぐわぬなど天地が揺るごとくありえない。離れはそのまま必中の意味だ。

矢の駆動は風を巻き込んで、笛の音を鳴らして私のイメージをそのままぞらえる。ことごとくがバーサーカーの背中に直撃し、覆いかぶさるような閃光が橋の一角を埋め尽くした。

城壁さえ根こそぎ砂埃に変えてしまう矢の嵐。されど狂戦士にどれほど効き目があ

るのか。恐らく、傷一つすらつけることは敵わなかっただろう。

煙が晴れる、その前。最大の咆哮が夜に木霊した。主を襲った敵を断罪せしめんとする、バーサーカーの迸った殺意の声だ。

魔力はこのあとの剣製を考えればもう余剰はない。そんな最後のタイミングで、凜の声が届いた。

「いま——抜けた！」

「よし」

とはいえ残存魔力が剣製に間に合うか。素材構成を一部簡略化し、精製工程を二段階飛び越えた。

骨子は振れる。骨子は狂う。矛盾を包括したカラドボルグはワンランク、グレードを落とすつもこの手に重みを覚えさせた。

鉄柵を踏み台に、上空へ高々と跳躍した。橋の構造は中央上に車道があり、左右一階下に歩道がある。つがえて、狙うは橋中央の鉄骨が弧を描いている頂点。繋がりを断絶させた後に鉄板を貫き、爆風にて柱をへし折る。

「偽・螺旋剣」

貫通力最大。鉄筋も石畳も紙細工のように蹴散らしながら渦巻く矢は着弾した。崩壊は火柱と水柱をうち立て、爆風は絶え間なく鉄と鉄と石と石を壊し尽くし、橋は赤く

燃えさかり瓦解していく。コンクリートで組み合わされた、未遠川の巨大な渡しは、二度と戻らぬ屑鉄と石くれになって川の底へと消え去っていく。

着弾直後の橋上に、バーサーカーとイリヤスフィールの姿はなかった。崩落に巻き込まれた、と考えるのは樂觀に過ぎる。あくまで、橋は逃走するためだけに落としたのである。

兎も角、命は果たした。私は赤い外套を翻し、凜の元へと走った。

新都中心部を少し南に下がった辺りのショッピングモール。そこからワンブロック入り込んだ路地裏。

二人を抱えているにも関わらず、私が彼女の元へと戻った距離は相当なものだった。そこに到着して最初に目にしたのは、顔を真っ赤にして、息を上げている凜の変な顔だった。額の汗はだらだらと首筋にまで垂れているその格好に、私は顔をしかめた。

「バーサーカーからは逃れたとはいえ、なんとも、見苦しいぞ凜」

「ああ、もう……今は、話せない」

アスファルトの上に座り込んだまま、口を開くのも億劫のようで、深呼吸を繰り返してまともに戻るまで、結構待ったような気がする。

「ああ……ほんつと疲れたんだから……風の属性を付与したからって、人間二人抱えて全力疾走だなんて、金輪際ゴメンだわ」

「落ち着いたかね」

「ええ——さて、傷の手当て手伝って頂戴。わたしがセイバー、あなたは衛宮くん。結構血を流しているから急がないと」

「む」

「あら、もしかしてセイバーの方がいいの？ 変わってあげましょうか？ うふふ」

「マスター、楽には死ねんぞ」

いいながら、鎧と衣服を剥がされていくセイバーから顔を背け、私は衛宮士郎の手当てに入った。

服を裂いた。傷口は深く胴体の奥まで届いていて、まともな治療が必要に思われたが、それにしても出血が少ない。手をかざすと、はつきりと異物の感触があった。鞘は、ここに脈動していた。

聖骸布の一部を千切って傷口に当てた。破いたシャツをそのままぐるりと包帯代わりに巻いて、止血のためにかなり力を入れて縛った。それで一応の治療は終わった。聖者の骸を包んだ布は、あるだけで死を遠ざけさらに魔力の透りを清純にする。同じく聖なる属性を持つ鞘の活動も、さらに強まるはずだった。

私が、衛宮士郎の命を助けているという事実にも、湧いて出てくる感慨は後を絶たなかった。

過去、殺し尽くした時代に思いを馳せてみる。命を取捨選択する権利など誰にもないはずなのに、どちらかを選ばねばならない袋小路に立った私は、歴史にそぐわなかったマイノリティというそれだけで、男も女も老いも子供も目が見えぬ耳が聞こえぬ隔たりなく、斬つた。

その元凶への憎悪だけで存在をつないでいた私が、一度見逃しただけでなく今また傷ついた身を治療までしている。一突きすればそれで終わるというのに、私は、なぜ。

「アーチャー、終わった？ 包帯が足りないならこつちに布が残ってるけど」

「……いや、終わっている。水を汲んでこよう」

考えるまでもない。この、少女のためだ。

路地裏から街の中へ。夜の静寂はどこへ行ったのか、あたりはパトカーと救急車のサイレンと、燃え上がる大橋の断末魔に色めき立つ人々の気配で、まるで戦争のように騒がしい。テロだの、過激派だのと周りから聞こえてくる的外れな声。犠牲を問う声。愚痴。さらには上空を飛び交うヘリコプターのプロペラ音。それらを拾いながら、私は雑踏の合間を縫ってバケツ一杯の水をどうにか手に入れた。

「深夜だつていうのに、かなりの騒ぎになつてるようね」

バケツを手渡すと、凜は布を浸してぐいとねじり上げながら言う。

「ああ、こうなればイリヤスフィールも迂闊には動けまい」

「どうあれ、今日はここでホームレスね。万が一が二度も起こったんだもの、油断はならないし。重傷者二人背負って川を飛び越える真似もこの騒ぎじゃ出来そうもない。ほとぼりが冷めるまで、少なくとも明朝までは路地裏生活者を気取りましょう」

「ところで凜、私の状態だが」

「ストップ。この場でそんな話をする気？」

服を剥いで、少女の身体についた血糊を丁寧に拭き落としとしていく。そこでようやく、私はセイバーが気を取り戻していることに気付いた。

「気がついたか」

「つい先ほど」

躊躇いなく衣服を纏わないままのセイバーから目を逸らした。腕の白さが、少し目に付いてしまった。傷口はなさそうだが、中身のほうは想像以上に損傷を受けているだろう。

「助力を頂いたようだ。シロウも私もそのお陰で生きている。かたじけない」

「マスターの意向だ。私にとっては何ほどのことでもない」

「恩に着ます。この借りはいずれ返すと、我が剣と真名に誓いましょう」

「覚えておこう」

「ほらほら、もうそんな武者っぽい話は終わって、今は身体を休めなさい」

寝ろという凜。シロウが気になるというセイバー。

しばらくあーだこーだと言ひ合ひ、明日までは敵ではない、衛宮士郎は助ける、危害を加えるようなら助けない等々が聞こえた。その上で、霊体に戻れないというのなら睡眠を取るのがベストの方法だとダメ押しをすると、渋々とはいえ観念したのか、セイバーは再び眠りに落ちた。

そこでようやく、静けさが戻った。外の喧騒はまだ消えはしないが、路地裏までくとそれも大分殺されている。

凜ははあとため息を吐きながら言った。

「どうした、何か気になることでもあるのか」

「うーん、あんだだけ派手にやらかしたから、多分他のサーヴァントなりマスターなりに捕捉されただろう、って。まあ手間が三つか四つは省けたんだからそんなに落ち込むこともないんだけど」

「ああ、それに収穫がなかったわけではない」

「ふん、例えば？」

「学校というのは、戦争並みに橋が陥落させられても問題なく運行される場所ではないだろう」

「ああ、そっか。明日は学校休みね、ってそのどこが収穫なのよ」

「……本気で言ってるのか？ 張り巡らされた結果」

「あ」

「まあいい。君も疲れているのだろう、セイバーへ向けた言葉は自分にも当てはまるのだぞ」

「……うん、衛宮くんの身体を拭き終わったら、私も寝るわ」

セイバーのはだけた服をつくろうと、体をずらして次は衛宮士郎の腕に布をあてがった。

凜が衛宮士郎の身体を手当てする。それだけのことで、妙な違和感がまた顔を出す。どうにも居づらい気持ちになり、そのまま霊体化しようと考えたときに、躊躇いがちに凜が口を開いた。

「感謝してるわ。命令は、確かに無謀で理不尽だったけど、あなたは何とかしてくれた」
こちらを見ずに、没頭するように衛宮士郎の腕の血を拭う。それは献身というより、どこか悔しくて八つ当たりをするような仕草に見えた。

「礼を言われるほどのことではない。万全でなくても何とかなる片手間の用事だったよ、あれは。結果はどうあれ、戦闘自体にはメリットはなかったが」

「違う。メリットはあった」

手が止まった。振り向いて、彼女にしては不自然なほどに自然な笑みを浮かべて、言

う。

「わたしが、貴方の力を信頼できるようになったってこと——わたしたち、いいタッグだと思つた」

だからありがとう。そういつて、また笑う。

私は、妙に気恥ずかしい心持ちに襲われて、あきつてのほうを向いた。

「……言つたはずだ、私たちは最強だと。それを証明するのに何の問題がある」

「あれ？ 顔が赤いわよ。あれれれ、もしかして照れてるー？」
「む」

手を口に当て、何がそんなに嬉しいのか、くししーとやけに癩に障る笑い。

ふんと、私は鼻で笑つて言い返した。

「ああ、そういえば凜。今日君を抱えてみてわかつたんだが、君は心の贅肉とやらは十分蓄えているのに、如何せん身体の肉付きは少々不足気味だと思う。特に胸」

「——へ？」

「どう見ても平均を下回つていたぞ、あのさわり心地は。せめて人並みにはなつてほしいものだ。凶星か、なるほど自覚はあるようだ」

「あ、ちや、ちよつ」

「ふむ。なんだ気にしていたのか。それはすまないマスター。だが事実なのでどうしよ

うもないな。まあいい、そろそろ私は霊体に戻る。どうにも魔力が枯渇気味でね、しばらく実体化は控えるよ」

「ちよつと、待ちなさいっ！ あんたっ！ ぶっ飛ばすっ！」

中々小気味がよい。思う存分笑って、彼女の振り上げた拳を避ける意味も含めて、私は霊体へと戻った。

第二章 第一話

とある国に人ならざる力を使う老翁がいた。老翁は心優しく世を憂い、山で一人暮らしていた。

ある日ふもとの村から大勢の村人が山を登ってきた。老翁は途中で死なないようにと石と獣から人々を守った。穴蔵までやって来た人々のうち、乳飲み子を抱いた女が前にでて言った。女は痩せこけ乳も出ないようで、抱いている赤子はぐったりとしていた。

「あなたは神ですか」

老翁は首を振った。

「神ではない」

「では神様に雨を降らせて下さいとお告げ下さい。里で教えを広める者たちは供物が雨を降らせると言います。神が怒っているのだと言います。雨が降らないと食物は手に入りません」

「教えを広める者は嘘を言っているのか」

「嘘かどうかはわかりませんが、腹は肥えています」

山に住む老翁は言った。

「祈りなさい。私の住む岩窟は穴蔵だが、広く千人も二千人も入れる場所がある。そこで皆、車座になりなさい」

「祈つてどうなるのですか。雨が降るのですか」

「熱心に祈りなさい。今宵一晚祈れば、明日の朝には雨は降るでしょう」

村人たちは、教えられた通りに車座に座り、一晚かけて熱心に祈りを捧げた。すると夜明けには雨雲が空を覆い尽くして、大粒の雨が降り注いだ。力のある男たちは喜び勇んで村へと戻り、鍬を手にして畑を耕し始めた。けれど病持ちと老人と乳飲み子を抱いた女が山を下りずにいた。不思議に思った老翁が尋ねた。

「どうして下りないのか、約束通り雨は降った」

昨日と同じ女が答えた。

「雨は降つて作物は育ちますが、作物が育つた頃にはもうこの子は死んでいるでしょう。どうすれば良いのかわかりません」

「なぜ今食べる物もないのか」

「役人が全て持つていってしまふからです」

「役人は正しい量だけを取り上げているのか」

「正しいかどうかはわかりませんが、腹は肥えています」

「何があればよいのか」

「山羊が十頭はいないと、ここに居る者どもは冬を越せません。どうか山羊十頭をお願いします」

すると老翁は言った。

「祈りなさい。二人同士で向かい合い、一列となつて祈りなさい。乳飲み子は母と合わせて一人と数えなさい。今宵一晚祈れば、明日の朝には山羊十頭が与えられるでしょう」

重い病のものも盲しいた老人も熱心に祈った。乳飲み子も母のする通りに祈りを捧げた。すると夜明けには山羊十頭を老翁が連れてきて、皆喜び勇んで乳を飲んだ。

「今日食わねば死ぬものから与えなさい。明日死ぬものは明日受け取りなさい」

老翁がそうだったので、すぐに死にそうなる者から乳は与えられた。明日死ぬものは次の日に飲んだ。すると皆活力を取り戻し、病は山羊の乳一杯で治り、曇つた目は乳二杯で治り、痩せこけた乳飲み子は乳三杯で夜鳴きをするまでになった。とうとう山には老翁だけが残つた。

しかし三日たつとまた村人が山を登つてきた。老翁は聞いた。「どうしてまた山を登つてきたのか」

また乳飲み子を抱いた女が言った。

「とうとう税が重くなりました。払えない者はその日に首を打たれてしまいました。今日払えた者も明日払うことは出来ません。雨も山羊ももう手遅れです。どうしたらいいのでしょうか」

「税はいくらになったのか」

「銀三枚になりました」

「祈りなさい。右の手の平に銀三枚と書いて左手で封じなさい。立ったまま一晚祈り続ければ、明日の朝には銀三枚が与えられるでしょう」

十頭与えられた山羊のうちの一頭を殺して、その血で銀三枚と書いた村人たちは一晚立ったまま祈り続けた。すると朝になれば手の平に書かれた血文字は消え、そのかわりに銀三枚があった。

老翁が言った。

「その銀三枚を払うのは容易い。だがいつかまた税は上がるだろう。雨は降らなくなり人は飢えるだろう。その手に入れた銀三枚を一箇所に積み上げなさい。そして車座になって祈りなさい。すると銀は全て鋭い矢となるだろう」

女が聞いた。

「矢を作ったらどうすればよいのですか」

老翁は答えた。

「男はその弓と矢を持って腹の肥えた者どもに三本ずつの矢を当てて殺しなさい。女は人々を集めなさい。国中の人々をこの山に集めなさい。穴蔵に入れるだけの人は入り、あぶれた者は山の道に連なり裾野に座りなさい」

一晚祈ると、銀は同じ数だけの矢と弓となった。男たちはその矢で村の役所と教会を襲い、税を取り立てる役人と教え広める者に三本ずつの矢を当てて殺した。女たちは国中に散って同じように苦しんでいる人を集めた。山から溢れた人々は裾野に広がり老翁の言葉を待った。乳飲み子を抱いた女だけが、子が途中で熱を出したのでその場にはいなかった。

老翁は言った。

「国は荒れた。人々の心も荒れたのなら国を変えなければならぬ。祈りなさい。地に膝をつけて頭を地につけなさい。一晚祈れば古い国は滅び、新しく住み良い国が生まれるでしょう」

人々はいわれたとおりに地に膝をつけ頭を地につけ祈った。とうとう東の空は白み始めたとき、天より一陣の赤い嵐が吹き、風に乗って空から一人の男が下りてきた。赤い男は右手に剣を持って老翁に尋ねた。

「お前たちは何をしているのか」

老翁は答えた。

「国は荒れた。人々は雨を待ち、山羊を欲し、銀に困った。国が古くなつたので新しくならなくてはならない。裾野に広がつた人々の祈りがあと半刻も続けば国は滅ぶだろう」

男はそれは許されぬことだといって、手にした剣で老翁を一突きにして殺した。皆頭を地につけていたのでそれには気付かなかつた。男はさらに天空に向かつて手をかざすと、万の剣が雲の割れ目から降つてきた。皆膝を地につけていたので避けることはできなかつた。剣は一人の頭に一本ずつ突き刺さり、祈りを捧げていた人は声を上げることなく殺された。山が血で真っ赤に染まつたころ、乳飲み子を抱いた女が山にようやくたどり着いた。そこには老翁と村の人々の屍が転がっており、一人赤く染まつた男が剣を持っていたので、女はその男が皆を殺したのだとおもつて聞いた。

「あなたは神ですか」

男は答えずに女を一突きにして殺した。乳飲み子は女の手を離れ、山から谷へ落ちて岩にぶつかつて死んだ。赤い男は一人残さず死んだことを確かめると、万の剣と共に空へと戻つていった。

これは天罰についての話である。

第二話

崩壊した橋が、平和な街に相容れるはずもなかった。

騒ぎはいずれ終息を迎えるだろうが、今はまだその時まで遠い。

時刻の不都合も関係なく、見物目当ての人間も避難を促す人間も呆然とした表情のまま、しばらくその場を離れることはなかった。誰も彼も無言で、混乱が無駄に拡大されなかったことだけが救いといえそうだった。爆心地を臨むような表情を顔にはり付け、市民は直立している。公安や報道のあわただしい足音だけが、夜明けを迎えてもいつまでも消えなかった。

その夜明けを境に、どこかしら冬木の町に、もやのような非日常感がたゆたうこととなる。平和はもはや終わってしまった。戦争の火蓋は、未遠大橋の崩落と共に落とされた。

それでも今はまだ、朝もやに没した人の街。虎口も歯牙も、なりを潜めている。相変わらず生ぬるい冬の寒さは、どこか人の矮小さを揶揄しているようにも思えた。

私はビルの屋上を蹴って、路地裏へ戻った。暗く湿ったビルの隙間には、まだ日の光は差していない。わずかに群青色の四角い空から着地した。

全員がまだ体を横たえていると思ったが、セイバーは一人目を覚ましていた。全快したようにも思えるが、内面はかなりの損傷を負っているはずだった。外見だけは血糊と鎧を除いて、無傷に戻っていた。

「異変はありませんか」

「サーヴァントの気配は感じないな」

路地の外に向かって、セイバーは目を細めて言った。

「場所を変えなくてはならない。昨夜は気が回りませんでした。無関係な人間が近づいてきたら困る」

「問題ない。マスターが上手く細工をして一般人には気がつかないようにしている――外からもここには気が回らん、ということだ」

「なるほど、あなたのマスターはやはり優れた魔術師のようだ」

言うのと、怪我も何もなかったかのようにその場に立ち上がった。瞑想するように目を閉じると、やがて光のもやがその体を覆い、バーサーカーに破碎された鎧が、傷一つない頃の光沢を取り戻していく。

魔力で練り上げられた武装は、特に意にすることもなくこうして元に戻せるのだろう。傷ついた部分も含めて、一度ほどいて編みなおしたのだ。私の聖骸布とは似て非なるものだが、その強靭さも生半ではないと一目でわかる。

「確かに素養は十二分を越えている。とはいえ少々、じやじや馬だがな。なに私はアーチャーだ。乗りこなす必要はあるまい。まさか羨ましいなど言うのではあるまいな」

「私は私のマスターに満足している」

「己の分水嶺すらわきまえられぬ未熟者、生身の人間の分際で君を庇おうとしたあの男がマスターとして満足、か」

「確かにそのことについて私はシロウに叱責するでしょうが、あなたの関知する所ではない。私もシロウも死ななかつた。彼の判断は最良ではないが、最善だつた——見ていたのですか」

「そんなところだろう、と思つただけだ。どうせそんなところだろう、と。それに君が無事だつたのはただの偶然だ。バーサーカーの踏み込みが十全ではなかつたので威力が半減している。そのおかげだ。橋が粗雑な造りで助かつたな」

「重畳です。生きている限りは次があるのだから」

セイバーの物言いが丁寧になっていた。それは私を敵とは見なさない、彼女の考えの表れなのだろうか。

「朝から、なんだか楽しそうね」

凜が割つて入る。いつから気が付いていたのか、不機嫌そうに頭をかきながら起き上がった。

いつにも増して表情は険悪だった。寝心地が悪かったからに違いない。

「凜、珍しいな。君がこんな早く目を覚ますなんて。いつもそうしてコンクリートの上で寝たら低血圧も気にならなくなるのではないのか」

「別に」

髪を手櫛で整えると、苛立ったように立ち上がる。

「どうした、どこか具合でも悪いのか」

「ちよつと、嫌な夢を見ただけよ。放っておいて——散歩してくる」

ゴミ箱か何だか知らないが、盛大に蹴り飛ばして路地の外へとその吊った瞳を向けて歩いていく。

不機嫌というより、もはやあれは怒りの段階であった。

「追わないのですか」

セイバーの言葉に、私は首を振った。

「放っておけと言うのだから、放っておくさ。霊体に戻って、主の不機嫌が回復するのをのんびり待つ」

散歩とはいえ、凜は異常があれば私が即座に駆けつけられる程度の距離までしか歩かない。

彼女の意識を追いながら、不機嫌の悪さの理由を考えた。どこまで考えても見当がつか

なかつたので、本当に夢見が悪かつただけかもしれない。そうでないとしても、私には関係がないことだと割り切ることにした。必要があれば、いつてくれるだろう。

私は霊体に戻り、損傷の具合を調べた。

快復はそれなりのスピードで進み、戦力としては可も不可もない程度でしかない。平均値——最も役立たずで不安定な状態だった。戦うのなら、今が最悪だった。快復前の昨夜の方が、まだ戦えた。万全の虎ではなく、窮した鼠でもない。ある程度戦えこそすれ、結局は持久力で遅れを取る、時間稼ぎにしかならないのだ。なまじ選択肢が残されている方が、戦うには迷いを生んでしまう。

しばらく私は、そのまま戦力分析に没頭した。

結局、凜が帰ってきたのは半刻ほど経つてからである。不機嫌が表立つことはなくなっていたが、平常時よりどこか苛立つているように見えるのは勘違いではない。私は特に話しかけずに、捨て置くのが一番だと判断した。

衛宮士郎が気が付いたのはそれからさらに半刻後だった。

「あれ？　なんで遠坂がここに？　ぐ、あ？」

「あーもう、無理して起きようとしな。大怪我なんだから、あんた」

私は実体を消したまま、痛みに悶える男を見ていた。暗い、どこか自虐に似た感情が生まれていた。死ねば楽になるぞという、忠告さえしてやりたくなくなるような、真摯な痛

みを衛宮士郎は訴えていた。だがお前は死なずに残り、夢と呪いの狭間に惑い、永遠に自傷し続けるのだ。この感情が凜に伝わらないように、私はかなりの力を傾けた。

「どう？　落ち着いた？」

「ああ……なんとか、そうか。そうだ、あれは、夢なんかじゃ」

「うん。現実として、認識できるわね。よし、オツムは大丈夫そうね。なんか、思ったより傷口も塞がってるし」

それでもまだ混乱の見られた衛宮士郎に、細々としたことから大まかなことまで状況を説明し終えると、順当にこれからのことについての話になる。その頃になると、凜の不機嫌も大分回復の兆しを見せていた。

ある程度、基礎の現状把握が終わると、全員で意見の交換をするということになった。衛宮士郎はセイバーに手助けしてもらいながら、一度立ち上がり打ち捨てられていた木箱に座り込んだ。セイバーはそのまま自分のマスターを守るように隣に立ち、凜は真ん中の狭いスペースで腕を組む。

私も実体化し、彼女の傍らに寄り添った。

四人が路地裏の一角を囲み、作戦会議を行うという、妙な事態になった。

「さて、じゃあ話を続けるけど」

凜が会議を主導するのに、誰も口を挟みはしなかった。

誰でも、牙の鋭い犬の口には手をつ突つ込もうとは思わない。

「実は、未遠の橋を落としたのつてスゴイ巧手なのかもしれないって思うのよ」

曰く、川を中心に戦力が二分化され、深山と新都でそれぞれ弱者の淘汰が行われる、ということだった。

「あちらは十中八九バーサーカーの一人勝ち。で、こちらはこちらでセイバーとアーチャーがいればほとんど敵なし。ああ、なんで早くこういう手を思いつかなかったのかしら。戦略拠点の移動及び変更の有用性なんて、とつくの昔に証明されてたつてのに」腕を組んでうなる。途中から独り言に入ってしまったが、言いたいことは伝わっていた。

私は黙って趨勢を見守ることにした。

「衛宮くんは、どう思うの?」

自力で包帯を巻きなおしながら、衛宮士郎は曖昧に首を振った。

「なに、反対なの」

「うん。というより」

「なによ、他に考えでもあるつていうの」

えーと、と付け足して衛宮士郎は言う。凜の不興を買いたくないという、白々しさが

滲んでいた。気持ちは、わからないでもなかった。

「いや、俺たちっていつから仲間になったのかな、って」

ピキリ。

音が聞こえたのは私だけではあるまい。

凜が浮かべる上品な笑いは、何よりわかりやすい怒りのポーズ。

「へー、敵同士がいいんだ。衛宮くんは」

衛宮士郎が一步二歩とたじろいだ。地雷は、踏んだ瞬間に踏んだと気付くが、気付いたときには炸裂している。

往々にして手遅れ、ということだ。

「違う、断じて違うぞ。今の、なったのかな、つてのは否定を前提にした問いかけでは決してない、断じて」

「あらそうなの。じゃあ同盟、結ぶのね」

「俺にとつては、願ってもないことだけど。遠坂がずっと敵だ敵だといってたから」

言い訳は一定の成果を上げた様子。凜は誤魔化すように手を振りながら答えた。

「まー、いいじゃない。確かに、結ぶつもりはなかったけれど、アーチャーに無理させすぎたし、その上イリヤスファイルとあのバーサーカーをぶつ倒したくても戦力が足りないのよ。まさか断らないわよね、あら貴方たち二人を橋から助け出したのは誰かしら。」

セイバー、貴方はどう思うの？ 受けた恩をかなぐり捨てていうなら、騎士の名誉と矜持も共にどうぞ。宣戦布告と一緒にただちに受け取ってあげるわ」

「……ああ、わかった。セイバー、そんなに悩まなくなつていい。共闘関係を受けるよ。だから騎士の名誉も矜持も大事に取つといてくれ」

眉根を寄せて、困つた風に凜と衛宮士郎を交互に見つけていたセイバーが、安堵と共のために息を吐いた。それを見て笑う衛宮士郎、つられる凜。私は、そんな様子をただ憮然と見下ろしていた。

「よし。じゃあこれからは私たち、戦友ね」

「よろしく遠坂。言つとくけどな、昨日助けてもらったからじゃないからな。俺は純粹に、お前と敵になりたくないし、ましてや殺しあうことなんて考えられない。遠坂と、一緒に生き延びたいからだ」

「そうね、甘いし油断もあるけど、それは正解」

「ああ、甘さも油断もひつくるめて衛宮士郎だから。こんなんでよけりやよろしく頼むよ」

「うん、わかった。士郎」

共闘関係。

これで、正面からセイバーを破り、衛宮士郎を倒すという選択肢はなくなつた。

一度築かれた仲間意識を断ち切れる程度の冷徹さを、凜が持つっていると期待するほど私はお人よしではない。ただ内心はどうあれ、口に出して反論もしなかった。私が十分に戦闘能力を発揮できるのなら、共闘関係など結ぶ必要はなかったのだから。

放棄したわけではない。今は、目的を忘れてさえいなければそれでいい。

「さ。関係がはつきりしたところで話を戻すけど、これからのこと。どう？ このまま新都で活動を続けるっていう案」

「戦略とか難しいことは正直わからないけど、遠坂の案は賛成できない」

衛宮士郎は断固として言った。

「理由は、もちろん聞かせてくれるんでしょうね」

「遠坂の作戦は攻撃的過ぎる。俺は、昨日も教会で言ったけど、聖杯戦争に参加する。聖杯戦争の結末を最後まで見届ける。だから死ぬ気はない、けど同じくらいに敵のマスターを殺す気もないんだ」

「話し合いが通じると思ってるの？」

「違う。俺は、俺の身を守るってことだ。もし相手が殺しに来たなら、やり合う。でもこつちからは攻め込まない」

正義の味方。

私は、かつての自分だったものが目前でそう語ることを、許容できなかった。耐え切

れたのは、ひとえに凜と繋がるレイラインがあったからだ。それがなければ、この手に刀剣を握り締めそつ首切り落としてしまっていただろう。去来する数多の憎悪と羞恥を押し殺すのを手伝うために、私は齒を食いしばって目を閉じた。

正義論。凜は何を思ったのか、しばし目をつむった後に言った。

「それが正しいと思ってるの？」

「ああ、正しい」

諦めたように、彼女はため息を二度三度と繰り返した。

「はいはい、わかった。この件については、また今度話し合いますよ。じゃあキリキリ答えて欲しいんだけど、これからどうするっていうの？ 反対票を入れるってことは、当然、何か一個は意見があるんでしょう」

「俺としては、一度家に帰りたい」

「さも当然のように衛宮士郎は言う。」

「士郎……橋が落ちてること、忘れてないかしら？ 川を渡れず、家に帰れないからこの話し合いですよ。セイバーとアーチャーに担いでもらって飛ぶだなんて言ったら、傷口殴っちゃうわよ」

「あー、それなら多分、電話すれば藤村組が舟でも出してくれるだろ」

「へ」

間拔けた凜の声。展開は意外な方向に向いていく。

「藤村組。地元の極道くらい知ってるだろう？ ついでにいうと藤ねえの実家。極道つてさ、ある意味保険企業っぽい所もあるし、藤村組は特にそうなんだ。多分未遠川の渡しくらいしてると思う。昔この街に橋がない頃も、川の渡しを仕切ってたつて本当かでもなく今もう舟でてるんじゃないか？」

「……アーチャー、川に舟は？」

橋とその周辺の様子を見に行った時、やや上流で何やら人だかりが出来ていた。

人だかりの中心には、確かに小舟が見て取れた。

「確かに何艘か浮いてたな。人を乗せて行き交っていたが」

「乗ってた衆、全員ガタイ良かっただろ」

「ああ」

「セイバーはどう思う？」

金髪の少女は、己のマスターと同じく迷うまでもないように言った。

「私には士郎の意見が魅力的に思えます。過剰な攻めは身を滅ぼす。物資のために基地へと戻るのは決して敗走というわけではない。拠点を移すという戦略は高度であり有効ですが、それは正式に宣戦布告を交換し合う、人間の行う真つ当な戦争でのこと。此

度のような、いわゆる隠密戦での効果はあまり期待できない」

「……そうね、一度帰るっていうのアリか……わかったわ、わたし一人が頑固に主張するなんて往生際悪いし、チームじゃない。撤退しましょう。お風呂も入りたかったところだし」

先陣切つて路地裏の外へと歩いていく。その後慌てて衛宮士郎、セイバーが続く。私はまた霊体へと戻り、外界とのリンクを一部遮断した。考えることが多すぎた。

このまま新都にねぐらを移して戦闘を続ける、ということ。私もその可能性を考えていたが、まさか凜から口に出すとは思わなかった。彼女が最も考えそうもないことだからだ。学校が休みになった、というのも一つの要因かもしれない。もしくは昨夜のバーサーカーの威力か。

違った。己の愚かさ加減を、己に問いかけた。私の弱体化を懸念しての打開策に違いない。焦ってる原因は他にあったとしても、それに拍車をかけているのは間違はなく私の状態を考えてだった。

戦略から戦術に至り、衛宮士郎の処遇について、他に些細なことまで含むと考えなければならぬことは甚だ多い。

外に出ると朝陽が鋭く刺さった。人通りは慌しく、非常の車は後を絶えない。

ふと、凜が私にだけこつそりと訊いた。

「焦つてるとか思つてる?」

拗ねたような言い草に、私はなんとか笑つた。さらに拗ねが進んでしまつたが、なに、可愛いものだった。

「方法論の一つが食い違ふなど、よくあることだがね。安心してよ、今回しかしたうっかりは、君にしては小さくて助かつたと思う」

「……いいわ、焦つてた。ちよつと嫌なことがあつたのよ」

「夢かね?」

「そうよ」

「魔術師は夢を重要視する。家に戻れば、落ち着いた思考がまた元に戻ろう。そのときもう一度、慌てずに考えればいい」

「ふん。なに、慰めてるつもり?」

「まさか。だが私のマスターは、人を見下すくらいでちよいどいいと思うよ。しおれた表情を見るとどうにも、落ちつかんね」

「あなたも、衛宮くんと同盟組んだの不愉快なんだろうけど」

「闘争において、万全を尽くすのは常に正答だ。気兼ねするな」

「わかつた。じゃあ命令よ、今あなたに出来ること、さつさと力を戻しなさい」

「ああ、任された。マスター」

あとは黙って姿を消していた。私の沈黙を、同盟に関する不満だけで捉えてくれたのはありがたかった。

人波を縫うように、川岸へと歩いていく。甲冑が目立つセイバーはやや離れながら死角を選んで付いてきていた。私は周囲に気を配りながら、彼女を焦らせた夢。幾分かそれが気になっていた。

サーヴァントは夢を見ない。普通は眠るということさえしない。だから気になって考えたとしても、彼女の見た夢の世界など、想像すらつかないだろう。夢という事象を、私は忘れてしまっていた。昏い夢を歩き続ける私に、さらに夢を見ることなどありえない。

だがきつと、彼女が見たのも悪夢だろう、という知識と推測だけはできた。人は、悪夢をより鮮明に覚えて生きる。きつと、私が歩んできた道程に似た、悪夢だったのだから。

何も感じはしない。悲しいという感情はとうの昔に死んだのだから。

清冽な空気。透る太陽光は眩しい。

まだ流れを取り戻しきれないのか、それでも川は朝の日差しを照り返していた。

第三話

橋を見ていた。

運が良ければ、バーサーカーのマスターが来るのではないかという淡い期待があった。

期待は淡いまま、泡沫に戻った。

人々。何かが去来した。束の間、現れては消えたその思いを形にすることなく、私は街を見据え続けた。

舟で川を渡つてから、私たちは凜の提案に従つて衛宮の屋敷に向かうことになった。戦線を共にするという理由で、凜もこの屋敷に寝泊りすると言い出したことに、私は特に反対はしなかった。

衛宮の屋敷に居座ることになり、私の役目は屋根の上で眼となることだった。鷹の目を間断なく配りながら、平行して自己の戦力を整えていく。

サーヴァントの戦力とは、等しく魔力を指す。レイラインの供給だけではなく、土地から流れ出るマナ、空気を漂う微細なものに至るまで、たとえ雀の涙以下であろうとも、私はそれを拾い続けることにした。生前会得した、流動の魔術の応用だった。応用とは

いつても、英霊の器に収まってさえこの程度の技量しか發揮することが出来ない。己の狭窄さを嘆くのは、肉のある頃にすでにし終えている。

朝からそうして、今はもう昼を大きく過ぎた。回復状況は六割強。悪くはなかった。凜も今日一日は屋敷の中から動こうとはしなかった。事故のために学校が休み、というわけではなく、単に日曜なのだった。回復に専念したい私としては、彼女がじつとしているのはそれだけでありがたいといえた。屋根の下、彼女らの会話に興味はなく、私は私の作業に終始した。

やるべきことは実に多い。思い出すということも、私が行うべき作業の一つであった。

生前、私もこの聖杯戦争を戦ったはずなのだ。私はまだ衛宮士郎として生きていた時代、この冬木の街を暴力で争った聖杯の覇権。

実際に、セイバーのことを私は克明に覚えている。

私の時代とこの時代が、一つの齟齬もないループなのだと思えば、何も考えずにただあるがままに戦えばいい。が、なぜか確信があった。石のような確信だった。決定的に、どこかが違う。衛宮士郎があのとときとずれているのか、アーチャーの私がずれているのか。どちらにしろ、どこが違うのか、という一点は闇のままわからずじまいなのは自明だった。全ては、成った果実をもって判明する。

失った記憶の指紋を取り戻すのは、並大抵の労力ではない。それなりの時間をかければある程度の歴史の回復も可能だが、此度の現界している際にはいくつかの事項を取り戻すことでさえ、かなりの運と偶然があつたところで難しい。なにより、英霊に記憶はなく、ただ記録があるのみという、アカシック・レコードの弾圧は相当なのだ。そんな世界が私の逸脱を許すとは到底思えないが、たとえ取り戻したものが断片だけだったとしても、戦況は大きくこちらに味方するだろう。

冬はことさらに日が短い。

夕方が過ぎた。考えごとは、冬の短さをさらに助長する。それでも街の監視に手を抜いているわけではない。時が経つのが早いということ、それが不意に罪悪のよう感じ、恨めしく思える。英霊とサーヴァントは違う。ただ呼吸することに意識を向けるなんてことを、最後に行つたのはいつだろうか、見当すらつかない。抑止力として不必要なこと一つ罷り通らなかつた私だった。それが今は、人間のように冬の寒さを実感している。

私は一日かけて手練り寄せたわずかな要素を繋げて形作ろうとした。ぼやけた輪郭の向こうに、なんとか既視感だけでも感じるものが出来たのは、イリヤスフィールという少女についてだけだった。惜しい所までは、来ているような気がする。

あの白い少女との繋がりを、はつきりとさせることができないまま、沈んでいく夕陽

を背中に感じていた。

夜は過ぎていくのが遅い。時が減速する。

夜。星の歩み。凜。私はこの時代に戻ってきたのだ。線を引く星を見ると、下らない感傷に襲われかけた。感傷は、死んだはずの記録も引きずっていた。イリヤスフィール。イリヤ。現代に戻ってきたという感傷に、涙を流すほどに揺さぶられていたのなら、私は白い少女についての思い出を甦らせることが出来たのだろうか。時間が足りない。あの少女が気になる理由さえ、私は思い出せずにいる。星は線を引いたまま薄まってゆき、日の光に消されて没した。

朝だった。想像と感傷を打ち消して、魔力の回復状況を事務的に考察した。

八割弱。おおよその目安が算出されたちようどその頃合を見計らったようにレイラインを介して凜から意識が流れてきた。

「アーチャー、異常は？」

朝を迎えた街を見下ろしたまま答える。

「ないな」

「じゃ、ちよつと話あるから下りてきて頂戴」

立ち上がり部屋に向かう途中、いつもの調子で朝の不機嫌が顔に出ているのではないかと想像した。あの顔は正直なところ精神に支障をきたす。口に出しはしないが、それ

だけが少し気になった。

別棟の一角。凜の部屋は、他とはだいぶ違う様相となっていた。他人の家を好き勝手にいじくり回すという行為も、この域まで達すると一つの才能のように思えてくるから不思議である。

部屋の主は従者の入室を認めると、腰を下ろしていたベッドから立ち上がり唐突に告げた。表情は平静だった。杞憂に安堵する。

「なにか、思い出せた？」

準備は出来ていた。彼女の質問に、私は肩をすくめた。

「いや、それが存外手こずっている」

「ふうん。それでも二日も三日も経ったんだから、些細な事柄くらいは思い出せて当然だと思うんだけど」

「存外というのは、セイバーに受けた傷も勘定している。魔力をそこに充てているのが影響しているようだな、どうにも不具合がまだ濃い」

「ふん、まあ何とでもいえるけどね。わたしを騙そうと思うのなら、容赦なく令呪を使うわよ」

「私が君を騙す？ その理由があるなら、逆に私が君に問いたいな。この英霊は聖杯を掴むために来臨したのだ。己の主を陥れるのがその近道ならば是非ともやるが、私には

そうは思えない」

視線が交叉した。凜が笑うまで、私は気を抜こうとはしなかった。

「ん、いいわ。とりあえず信じておいて上げる。瑣末なことでもいいから、気づいたことがあつたり思いついたことがあつたら逐一報告するように」

「君は為政者としても適性があるな。人を試して人を使うことに長けている」

他人の尻拭いなんか、と言いつけて彼女は鼻で笑う。

罪悪感がないといえれば嘘になる。それ以上に、彼女を騙し通すためにはまだ手が必要だと考える自分が先に立っているだけだ。

余計な考えを振り払った。

「それで、用件は何かね。陣を出すというのなら今すぐにも構わんが」

「うん。用件というほどじゃないんだけど、ちよつと落ち着いたから状況整理をしたいと思つて。作戦も立てとかなきゃいけないし」

「ふむ。この話が誰まで伝わるのかによつて、私の口ぶりもだいぶ変わってくるのだが」
「私とあなただけ。どう取つてもらつても構わないわ」

衛宮士郎にも言わない。同盟を結んだ相手にも内密にする、最も内輪の作戦会議というわけだった。凜の口の端が嗤うように吊り上つた。

「忘れてない？ 勝利者とは孤高に立つものよ」

「ああいいだろう」

頷いて、私も嗤った。私たちは聖杯という孤高に手を伸ばす。それが憎悪と汚濁のダムだったとしても。

まずは、未だ正体不明のサーヴアントについてだった。

キャスター、ライダー、アサシン。

「厄介ね」

セイバー、アーチャー、ランサー。この三つは能力的に優れているとされる。自然正面より激突するのが第一の戦術となるので、戦うときは純粹に力比べとなる。

ただ最も厄介な相手というのは、えてして正攻法で来ない相手だ。そして恐らく、その厄介な相手に、私と彼女の姿見は露見してしまっている。バーサーカーと演じた橋上での大立ち回りはどう考えても目立ちすぎた。

「そんなに容易くことが運ぶとは思ってないから、良しね。結果論だけれど、バーサーカーを見れたのはよかった。ヘラクレスだなんて化け物、いざという時に初対面だったらどうしようもないし。ついでにマスターも引っ付いてたのはめっけもん。あと、情報があるとしたらランサーかな」

「ほう」

あの短い一戦で、ランサーの正体を見抜いたというのなら、大したものだった。が、もちろんそんなはずがない。

「セイバーが立ち会った時、宝具を使ったらしいのよ。確かにゲイボルクと」「ふん、ゲイボルクなどという魔槍、一人しか使えるはずがない」

ケルトに轟いた槍の名手。ゲイボルクの遣い手はクー・フリーンしか存在しない——いや、と即座に打ち消した。八番目のサーヴァント。今この段階で彼女に告げるのはそれほど効果がないと思い、話すことをやめた。

凜はそのまま、セイバーから聞き取ったゲイボルク的能力について語る。曰く、因果逆転の槍。放たれた瞬間に心臓を穿つ、呪いの棘。私はそれら全ての事柄を知ってはいたが、やはり黙っていた。

「しかし大御所がぞろぞろきてるわね。ランサーについては手の内も判明したし対処もできるけど」

「問題はバーサーカーだな。あれは知っていたからといってどうにかなる概念ではない。宝具もまだはつきりとはしていない」

「どう主観を混ぜても目下最右翼ね。マスターも自滅するような生ぬるい相手じゃないし。アインツベルンの刺客、か。送り込んでくるのは知ってたけどまさかあんな子供だなんて。けど狂化したヘラクレスなんて動く核みたいなものをしつかり御してるのを

みると」

ぶつぶつと持病の独り言を続ける凜を放っておき、私は私で考えをめぐらしていた。アインツベルンのイリヤスフィール。衝動が甦りかけ、すぐまた消えた。人らしい諭えを使えば、喉まででかかった、というやつだった。そういうものは結局、吐き出されることはなく、腹の奥に消えていくのが常。

ほどなく凜も我に返り、再び会話に戻った。

「イリヤスフィールの他に気になる動きがあつたの。未遠大橋の爆発であまり目立っていないけど、新都で原因不明の集団昏睡事件が起きているのよ。明らかに魔術師の仕業」
「キャスターだな」

十中八九間違いないな、と付け足した。事件の規模を聞いてみるとなおさらだった。現代の魔術師の段階に当てはめることの出来ない高みにいると見て、間違いはなさそうだった。

「それに賢い。巧妙に経路が細工されているし、多分デコイもあるわ。案外、一番のダークホースかもしれない」

「となると、学校の派手な結界はライダーかアサシンに絞られるな。まああれほど目立つシロモノをアサシンが設置するとは思えんが」

そこまでは考えている、と凜はうなずく。

「ランサーは？」

「ないとは言い切れんが、違うだろうとは言える。ランサーの戦闘方法は魔力を大量に必要としない」

速戦速決。膨大な魔力は逆に彼にとっては枷としかならないだろう。なにより豹の素早さとして名を広めた英雄のこと、手間のかかる結果は意に反する。

それからしばらく、学校の結界についての話となった。そも学校はしばらく休校になるといふ。橋が落ちたためだった。生徒は主に住宅街である深山に集中しているが、新都に住んでいる学生がいなくてもない。橋が陥落した原因を政府も企業も特定できずにおり、マスメディアの放つ不確定な憶測が混乱を呼んだためでもあった。中でもテロ説が反響を呼んでおり、安全がはつきりするまで——先だつてはこの一週間を休校にすると決まった。いって、休みが短くなるわね、と凜は冗談交じりに付け足した。

「ありがたいといっちゃありがたいかな。聖杯戦争に集中できる。僥倖つてやつね」
「私としてもな。学校に行くな、とわざわざ忠告する労力が減つたよ」

会話はそのまま学校に設置された結界と、仕掛けたマスターについてに及んだ。

マスターの質を上中下と区別して予想する。上ならば即座に消す。中ならば学校が正常通りに運行されるのを待つて解き放つ。下は今使う。

二人とも、上か中だろうということで大筋は合意した。

「流石に今日明日に発動するってことはないでしょう。たかが教員数名の生命力を食って意味があるとは思えないし、大体あの出来なら完成まであと一週間はかかるわよ」

「私も同感だが、君のいった方が一が狙いすましたように何度か続いたからな」

「じゃあ断言するけど、ないわ。万が一で不十分なら億でも兆でも持つてきなさい」

「皮肉にならないことを祈るがね」

ライダーのマスターについての考察は、情報が不十分で長くは続かなかつた。学校内部の人間だと主張する私と、外部犯と譲らない我がマスター。平行線のまま結論は出ず、相手の出方を待つしかないということになった。

「あとは、セイバーについてね」

その話題が自分にとって影響のある、鋭い剣であることを思い出した。昨夜から、セイバーについて考えなかつたわけではない。ある意味、遠坂凜という少女以上に、セイバーに関しての知識は甦っている。

「セイバーか……」

「どう？ 何か気づいたことはある？」

考える素振りだけを見せた。元から知っていることについて気付くも何も無い。私にはなるだけ当たり障りのない受け答えをした。

「女性、ということでかなり絞られるとは思うが」

「そうね、思いつくだけでも」

あれこれと凧が上げていく候補に、私は適当に相槌を打つに留まった。どれも断言はせず、可能性についてしか語らない。不審に思われないように細心の注意を払った。もとより、あっさりと言われすぎたという不信感を、私は彼女に与えてしまっているのだ。「わからないことだらけね。ま、士郎のサーヴァントで良かったってことだけははつきりしてるけど」

こんなところかな、と呟いて凧はとすとベッドに腰を下ろした。セイバーの話題がピリオドを打ち、内心安堵している自分がいた。

うーん、とベッドの上で背を伸ばす凧。ここが遠坂邸ならば紅茶の一つでも淹れていただろうが、あいにくここは茶葉といえば緑のものしかない家だった。同じことを考えているのか、凧も物足りなさそうな顔をしつつも仕方なく我慢している風だった。不意に目が合うと、凧はおかしそうに笑った。

「同じこと考えてるわね多分」

「私は茶夫ではないぞ」

「はいはい。暇見て、道具一式と葉を持ってくるから、そのときはよろしくね」

「人の話の都合のいい部分だけを取捨選択するのはやめないか。いい加減、呪われるぞ」「自分の狭量を訴えられてもねー。くしし」

「呪われろマスター」

なんとももいっただら、と言いつつ彼女は口をつぐんだ。冗談の類ではなく深刻さを帯びていた。私はいくつか予想を立てつつ訊いた。

「何か気になるのか」

曖昧に返答しつつもやがて、どうしても気になる、と前置きしている。

「学校に偵察に行つてきて頂戴。あの間抜けが張つた結界がどうなってるか、少し気になるわ。解呪したら、あつちにとつてもこつちにとつても一番いいんだけど」

教員たちの臨時会議がある、とのことだった。今日を逃せば少なくとも今週中は発動されはしないだろう。逆を言えば、発動されるのならば今日、ということだった。

「結界の状態を確かめてくればよいのだな」

「ええ、確かめるだけがいい。戦闘は避けなさい。確認が取れたら、すぐに戻ってきて」

「上か中か」

「これで下だったら笑え……ないわね」

「いつてくる」

霊体になり、屋敷を出ると再び実体に戻った。

街道を縫うように進んで、学校の敷地へ向かつて走る。学校への地理は完璧に把握している。それほど遠くはなく、五分の力で地を蹴ついても一分もかかりはしなかつ

た。

丘の上、高台に造られた建物が見えてくる。私の鷹の目は校舎の微細な造りまでも見て取った。

しかし、すぐに必要なくなった。

赤さが弾けて世界を包んだ。巨大な果実を握りつぶしたかのようなようだった。果汁は血、果肉は人を食む。

結界が、発動していた。

「凜。笑い話ではないと先に断るが、下だったぞ」

「本当に笑えない」

赤い閃光が昼の世界を切り裂いていた。血で爪を立てたような赤い傷口が、校舎を丸ごと包み込んでいる。その赤さは事態を正確に直喩している。生命力が猛烈な勢いで吸い上げられている。嗚咽のような空気の振動が、汚濁に満ちた赤さと共に波打っていた。

「二つ再確認したことがある。遠坂凜は優秀な魔術師だが迂闊さがある。まずは二度と数字を喩えに使わないでくれ。何かの因果か呪いなのかと思えるよ」

うるさい、と伝わってきた。

「もう一つ。さつきは言い間違いだった、相手のマスターは下などではないな」

「それについては同意よ、まったく」

下の下どころか、虫にも劣る下衆に違いない。怒りを押し殺して、彼女は指示を続けた。

「中に人がいるか確認して」

「人がいるから、発動しているのだろう」

「サーヴァントの気配は？」

「結界の瘴気ではつきりしない。が、間違いなくいるな。私も中に取り込まれれば正確な場所もわかるだろう」

「わかった。あなたはそのまま突入。索敵後、捕捉次第攻撃。あたしも士郎とセイバーつれてすぐに向かう」

彼女の言を最後に、レイラインの会話を切断した。木の枝を蹴り上昇。重力に従って、そのまま結界の中へと私は押し入った。

ぬるい粘膜のような結界の壁を通り抜けると、辺りは濃い瘴気の世界に様変わりした。ここは人の住めない世界。火星の過酷を持ってきたような世界の中を、私は活動できる無二の存在として駆け抜ける。サーヴァントの気配は感じない。相当能力の低い者なのか、反応はどこまでも微弱だった。

西棟の一階に人の気配があつた。結界の威力は人を根こそぎ乾物にする程で、生存者

がいるかどうか、かなり際どいところだったが迷っているいとまはない。発動した瞬間に私が居合わせたのは、どの程度のラックとなるか。

窓を蹴破つて室内に突っ込むと——計算違いだった。そこに人はいなかった。

倒れ臥したものの。皆、人の原型を留めてはいなかった。

はつきりとした怒りを、私は彷彿した。

第四話

怒りはやがて眠るように消えていった。

収まってみれば、本当に怒りなど湧いたのかと思ってしまうほどに跡形もなかった。所詮、私の感情などその程度だった。感情を認識するのではない。状況を認識してから感情を思い出す。怒るだろうという場面で怒る。もし剣を振るうこともない英霊となつたのなら、その怒りさえ発露することはなくなるのだろう。

倒れている一人に注意をむけた。手を放り出すようにして倒れこんでいる。もがいた様子はあまり見えず、もがく暇もない程に一瞬で気を失つたのだろう。結界の力がそれほど急速で、猛烈だったということだ。

顔の造形は崩れたとはいえ、死んではいない。だが虫の息なことには変わりない。動してすぐでここまで衰弱できるものなのか、いまも息を絶え絶えに命を吸われ続けている。三十人の命を根こそぎ枯らすほど搾取された力の量は、けして侮ってはならないものだった。

凜に指示を仰いだ。

「何人？」

「広い部屋だ。三十人はいるな」

「そう……いいわ。放っておいていい。サーヴァントの気配は追えるわね。行つて」
倒れている男に一瞥をくれた。

「見捨てるのだな？」

「二度も言わせないで。追うの」

「いい判断だ」

ならばもう用はない。凜はマスターとして正しく命を告げた。

呻き声もあがらぬ惨状を後にして、私はかすかに感じていたサーヴァントの気配を頼つて駆け出した。サーヴァント同士の共鳴は耳鳴りに似ている。音源を間違ふことなく、上を目指す。蹴破つた窓から壁づたいに駆け抜けた。

窓の外。世界は結界に汚染され赤みを増していた。

屋上には、身を隠すこともなくサーヴァントとそのマスターがいた。

矢をつがえる。立ちちはだかる敵のサーヴァントが、鎖を引きずる短剣を抜いた。狙いを定めながら、その鎖剣の内部をみる。剣は、全て私の属性なのだから。

「まあ待てよ」

背後のマスターが言った。着ている学生服はこの学校のものだ。凜のいうことも当てにならない、と内心苦笑する。まさにここは魔術師の巣窟ではないか。

少し考えて、私はつがえた矢を下ろした。同時に敵のサーヴァントも構えを解く。無理をせずとも、すぐにこちらの戦力は増強されるのだ。

サーヴァントは女だった。髪が長く背の高い女。相對するだけで伝わってくる、セイバーやバーサーカーのような圧力は感じない。結界の発動に力をさいているからか、と氣になった。二つ目に氣になったことは、少年の手に広げられている本だった。

「へー、お前が衛宮のサーヴァント……じゃないか、遠坂のやつだな。こんなに早く駆けつけてくるなんて感心じゃん。藤村を人質に取られたのがそんなに痛いのかい？ いや、いいんだけどさ」

口元だけではなく、心底おかしそうに声を上げだした。手で太ももを叩いた。傑作だ、最高だよ。眩きながら少年は笑い続ける。

逆に横で控える黒いサーヴァントの涼しげな沈黙が、己のマスターを蔑視をもつて扱っているのかもしれないと思ったのは、禍々しい眼帯で己の目を緊縛しているからだろうか。一人、人間を抱えている。女だった。

私は視線をサーヴァントに向けたまま言った。

「お前がこの結界の主か？」

「ああそうだ。僕のサーヴァントが作って今使った——バン、て」

心地よさげに笑う。誰であろうと、力の発露は歓喜を呼ぶ。その水準をどこに持って

くるかに、個人の観念が混じるだけだ。

他人を度外視した殺戮。よかろう。だが、あくまでサーヴァントの呪術が発揮されたに過ぎないそれを、自分の功績のように手を叩くさまは、人のもてる最低の品位だった。おそらくこの顔は、誰が見ても嫌悪を催すだろう。

「凜、結界の作製者とサーヴァントに接触した。屋上だ」

「待つて、そろそろ——見えた。セイバー!」

凜の気配が近づいてくる。さらに、横にセイバーがいる。衛宮士郎もいるだろう。およそ三百メートル。セイバーが動いた。気配が弾丸のように移動し、急速にその距離を縮める。

「新手です」

髪の毛長いサーヴァントが、笑い続ける己のマスターを庇うように立ちはだかった。猛烈な挙動で飛来したセイバーは、足元の石畳を粉に変えて慣性を殺した。土埃が風にさらわれた。両脇に抱えられていた凜と衛宮士郎が、足を地に着けながら呆然とした。

「慎二、おまえ」

主を庇ったサーヴァントを疎ましく押し退けながら、男は嬉しげに笑う。

「やあ仲いいなお前たち。マスター同士手組んで僕を殺そうっていうの?」

「……知ってたのか」

「未遠の橋であんだけの大騒ぎしといて。はっ」

「あなた、マスターだったのね」

「意外かよ」

「ええ。ごめんなさい、正直心底眼中になかったもの」

「お前」

三人が話し合うのを私は聞き流しながら、拳を開閉した。ライダーの半身がこちらをのぞいている。彼女のもう半身は、セイバーへ挑んでいるのだろう。二対一挟撃の状況で、腕に女を抱えたまま眉一つ動かさず、同時に攻められても対処できるように淡々と体をずらしたただけだった。

「さて、でも二対一よ?」

「節穴もいとこだよ。人質が見えないのか?」

敵が完全にこちらに背を向けていた。勝機だった。それをむぎむぎ見逃したのは、察した凜が視線で私を押し留めたからだだった。

人質がある限り戦う気はない。眉をひそめて、私は白々しく鼻を鳴らした。戦闘はない、と踏んで静観を決め込むことにする。勝手にするがいい、と凜に伝えた。答えは返ってこなかった。

「藤、ねえ」

「ぐだぐだとき、映画みたいな言い合いするのも時間の無駄だ。藤村は生きてるし、今のところ殺す気もない。用件が済んだら、ちゃんと自力で歩いて帰れる」

「用件、だと」

「ああ。簡単だろ？　すごく、簡単な話だ。馬鹿でもわかる」

「待て、まだ聞きたいことがある。他の教員は、死んだのか？」

「他のやつ？　どうでもいいだろう」

「教えろ」

「ああ？　なに凄んでんの？」

「慎二」

「……ふん。おいライダー」

ライダー。これでセイバー、ランサー、バーサーカー数えて四体目の戦力が明らかになった。内、ランサーのマスターはいまだその姿を現さず、完全に姿かたちが分からないのはキャスターとアサシンのみとなった。

ライダーは、どうでもよさげに答えた。

「死んではいけない。放っておけば死にますが、あと十分はかかるでしょう。その間に適切な処置を施せば助かる」

「聞いた通りさ。でもさ、どうでもいいだろう？　——ああ、そういえば衛宮。お前つて

そういうヤツだったよな。ははっ、偽善者」

「……今すぐ、結界を解除しろ」

「……耳、大丈夫か？」

「十分で死ぬっていうのは、重体ってことだ。今すぐ、止めるんだ」

「ははっ、なんだ。大丈夫じゃないのは頭か」

「慎二、今すぐ結界を」

「だから！ だからさ、言い方ってものがあるだろう？ 本当に頭が悪いな、お前。育ち

の悪いやつは何やらしたって不味い」

「——頼む」

「そうそう。そうだよ。ライダー、結界解いてやれ」

ライダーが気だるげに頷いた。さらりと流れる髪の毛は、彼女の意思を端的に表しているようだった。口元で小さく呟くと、赤い血で引つかいたような結界が、境界を混ぜ込む音を立てて霧散した。どろどろとした瘴気も、吸い上げ続けられていた魔力も消えた。同時に、目の前のライダーからの、圧力が増した。

衛宮士郎がそうやって罵倒されるのを、凜は腕を組んで涼しげに聞いていた。

内心はどうあれ、人質の有無が彼女の行動を大きく制限するのなら、はつきりいって、弱点であった。今ここで、人質ごとライダーを刺し殺せば、その逡巡も、ともに殺すこ

とになるだろうか。赤から青へと戻っていく空に目を移して、人の心がこうして綺麗に反転するわけがないと、知識としてのそれを思い出して踏みとどまった。

「この種類の結界は付けたり外したり出来ないんだってな。ほら、外してやったぜ。僕はお前のことが嫌いじゃないからな。言うとおりにしてあげるよ。優しいだろ？」

「今すぐ病院に」

「結界が解けたのなら、放っておいても、一時間経ったって死にはしない」

「本当だな」

「嘘ついて何になるのさ。いい加減頭使うの覚えろよな。僕が、死なないって、いったんだぞ？」

「わかった。信じる。次だ。藤ねえを放せ」

「でもさ、いくらなんでも自分の要求ばかり通そうっていうのは虫がいいと思うんだ」
おい、と慎二という名の男がいうと、ライダーは人質の服の襟に手をかけ高々と掴みあげた。セイバーの重心が獅子の襲撃のように落ちる。飛び出そうとする彼女を、マスターの右腕が制止した。

「慎二、条件をいえ」

「なんの？」

「藤ねえを、解放する、条件だ」

「知ってるって。冗談だよ。あはは、笑えって」

衛宮士郎の拳が固く震えていた。飛び掛るのを我慢出来る、最後の握り程度の理性は残っていたようだ。

「ちつ、詰まんないやつ。条件は、そうだな。結界を張つたのは僕が望んでやったわけじゃないっていうことが前提なんだよ」

「そのサーヴァントにそそのかされたつてのかわ？」

「お前つてよくよく馬鹿だよな。この奴隷がどうやって僕をそそのかすつてのさ。はっ、冗談でももうちよつとまともなこと言えよ。望んでないつてのは、やむにやまれず、つてやつだよ。ほら、そこにいるだろう？ 共通の敵じゃないか、遠坂つていう」

一息置いて、芝居じみた仕草を交えていった。

「遠坂を殺せ」

干将莫耶を待たせた。そうと決まれば、いつでも出せるということではやはり重宝される。飛びかかり敵マスターに切りかかるまで半秒、呼応したセイバーがライダーを切り伏せるのにさらに半秒。余裕だった。ただ、人質の首は最初のタイミングで胴から離れる。

だがそれもいざとなれば、だった。二人ともこれ以上ないほどに甘いマスター。私の突進を止めるために、令呪を使わないとどこの誰であろうと保証できるものではなかつ

た。

「僕は衛宮、君と戦う気なんかこれっぽっちもないぜ？　君もないだろう？　お前が僕を殺す気になれるわけがない」

誰一人、その場では肯定しなかった。気付かないまま、ライダーのマスターは話し続ける。

「そいつは生粋の魔術師つてやつさ。まあ僕もだけど、それほど聖杯を望んでいるわけでもないし。そいつとは違うよ。理由があれば親だつてやつちやいそうだしな」

「遠坂は、殺せない」

簡単な言葉だったが、明確な決別だった。凜が小さく安堵の息を吐いていた。殺されなかった、という安堵ではなく。衛宮士郎を殺さずに済んだ、という意味であろう。やつが条件を飲んだのなら、拳の中の寶石は等価交換の原理に従い、衛宮士郎という男の頭部を消し去ることになっていた。同じように示しはしなかったが、セイバーも安堵を感じているのだろうと想像がついた。私は悩みさえしなかった。

ライダーのマスターは苛立たしげに問い直す。

「……勘違いしてるのか？　藤村は死なないっていう楽観？」

「いや、お前はきつと藤ねえを殺す。やるっていったら、やるやつだ」

「わかってるじゃん」

「慎二。聖杯が欲しいか？」

「そういうわけじゃない。自衛。遠坂が死んだら、僕はもう手出ししない」

「どうして、遠坂が死ななきゃならないんだ」

「凶暴だから。十分だろ、理由なんて。すぐ隣に殺人鬼がいるなんて、僕は耐えられないんだ。そう。言ったら、これは皆の願いだ。ていうか衛宮さ、お前がそういうの一番許せないんじゃないの？」

苦虫を噛み潰したような表情の凛を、私は冷ややかに見やつていた。

覚悟はしていたはずだ。それを承知で黙っていたのだから、これは払うべき負債。

たとえこの後、同盟と呼ばれるものが瓦解したとしても摂理なのだった。この場で唯一人なにも知らない衛宮士郎が、聞きなおす。

「遠坂は、人殺しなんて」

「はあ？ はっは。あはは。おめでたいなお前。そうか、ワイてるくらいおめでたいから遠坂にいいように使われてるのか」

「な、に？」

「横にいたじゃん。近くで見てただろ。そのの——ほら赤いやつが、自分たちが逃げるために、歩いたり車で渡っている、人ごと、橋をぶつ壊したところをさ！」

急所というのは、人体にばかりあるものではない。

戦争時の布陣にして、数学の定理にて、世界の運命にて、時の流れにて、あまねく全てに急所というものがある。ならばそれらに包括される全てに急所があるという必然。

ライダーのマスターの指摘は、こと衛宮士郎という男に対しての急所を、抉るように突いた。

その男にとって、人命の代価によって己が生きるといふことは、死の宣告に相似している。

「知ってるだろ？ まさか知らないとは言わせない。四人か、五人か？ 見るも無残な姿で発見。お前たちが逃げるためにそいつらを人身御供にしたわけさ。冷静に考えても等価交換とは思えないけど、自分が一番大事だつていうことまでは否定しないよ。でもさあ」

セイバーの姿勢が今度こそ臨戦した。ライダーが人質を盾のようにかざし、挟み撃たれる両方向から並行するように立ち位置を変えていく。背後に回りながら、ライダーのマスターはとどめを刺すように言った。

「もう一度言う。そういうこと、お前が、一番、許せないんじゃない？ ——死んで償えよ、偽善者」

他人の死の上に立つ。原風景と同時にトラウマであり、生き延びた理由と同時に死へ

と走る原因。赤々と燃え上がる街を背に、砕かれた家屋に押しつぶされる人々を脇に、自分一人が、運という理由一つで生きる権利を得た不合理を、呪つたはず。

ならばそれは、これ以上ないというほどの、急所と呼べた。

「……遠坂、知つてたのか」

凜は答えなかつた。二人の間に、間違ひなく亀裂が走つた。自然な流れで二人が敵対し、殺し合い、私が殺す。妙な所で、迂遠だが、展開は私の理想に徐々に近づいていた。

「土郎、ここに倒します」

主の迷いでさえ己の剣で断つ、と言わんばかりにセイバーの気迫が増した。瞬時にライダーの手が女の首にかかった。凜がレイラインで、衛宮士郎が体で従僕を律した。吊り上げられた女の呻きだけが、膠着した屋上で流れた。

間桐慎二が、既に勝利者のような面持ちで宣言した。

「今夜、墮ちた橋のところに来いよ。遠坂の命と引き換えに、藤村は返してやる。来なくても返してやるけどな、ちよつと、形は変わつちゃうけどさ」

ライダーが自分のマスターを抱きしめた。片腕に人質、片腕にマスター。それだけで、サーヴァントの力は計れなかつた。

長らく黙っていた凜が、極上と極悪が同居した笑みで告げた。

「一つだけ忠告してあげるわ間桐くん。あなたが人質に取つてると勘違いしている藤村

先生。大事にしなさい。傷一つ付けたりしないこと、もし間違つて——それこそ致命的な命題を間違つて、殺しちやったりしたら……百に千切つて穢土に撒いてあげるから」

呪詛。主にそれが汚染しないうちにと、彼女は地を蹴った。

「それではまた夜に。ごきげんよう」

ライダーはにたりと笑った。

残ったのは、紫の軌跡。

第五話

夜を待つていた。どこか湿った夜を。

冷え切らない夜、隠れた月が反射を届けきれていない。

それらの事柄が、どこかが緩んでいる、弛緩している、そう思わせた。全ての感覚が曖昧なのだ。月に被る雲が光を拡散させる。夜は、目も冴えるばかりに月が明るいか、一寸さえ定かではない暗闇がよい。曖昧は、感覚さえも鈍らせる。

私は屋根の上で、その時を待つていた。

視線は、遠く川岸に焦点を合わしている。間にある遮蔽物のせいで全てを見渡すことはできないが、恐らくライダーも遠距離からの監視を警戒しているだろう、姿は見えなかった。実際にある程度の距離まで近づき、令呪かサーヴァント同士が共鳴するまで人質の居所はわからない。逆に言えば、橋に向かいさえすれば自動的に待ち合わせの場所がわかるというわけだ。

衛宮士郎と遠坂凜が、何を話したのか私は知らない。

ただ同盟が決裂したとしても、何も不思議はない状態だった。決裂したらしたで、正面切つて衛宮士郎と対峙すればよし、このぬるい状態が続くのなら話をしても特に何も

変わらなかつたというだけのことである。

「瓊末」

今は戦いのことだけを考えていればいい。あとしばらく、マスターの一声がかかれば私は彼女に追従し、河原で待ち構えているライダーをセイバーと共に討ち果たす。二対一ならば、それなりに罠が仕掛けられていたとしても勝率は十分にこちらにある。凜はそう言つて合図を待てと残した。

しかし、どこか樂觀的過ぎはしないかと、首筋の辺りで警鐘が鳴つていた。

私に、生まれ授かつたときから働くような、先天的な直感はない。だからこそ、私の勘とは、長年培つて育つた経験則だった。こんな眠たい月が出る夜ほど、当てずっぽうの矢が頭蓋を貫く。

油断をしているわけではかつた。敵を見下しているわけでもない。

恐らく、凜も気付いているだろう。知つていて、どうすることも出来ない。実体のない、それは雰囲気としか呼べないものなのだから。

ゆるゆると、一段階ごとに力を強めるように私は拳を握つた。傷は癒え、全快へと順調に回復を見せている。セイバーがいなくとも、対等な状況ならばライダー相手でも負けはしない自信があつた。使用不能だった類の刀剣もほとんどが錬成できるだろうし、突き刺さる刀剣の荒丘も、この世に具現させることが出来るだろう。

力と同じくして、霧がかかっていた記録の欠落も相当数が戻った。

藤村大河。間桐桜。

私はそれらの事項を、溝の形を指先でなぞって知るように、ふと、知った。さっきのことだ。あまりの呆気なさと同様さで、自分に呆れてしまった。

戻ったのは決して多くはなく、名前や姿かたちや彼女たちの生涯の顛末などだけだった。

それだけである。笑顔すら、声すら、わからない。ましてやこれ以上、戻ることもない。

多分、思い出したとは言わないだろう。記録が残っているという、だけだろう。

気持ちまで、取り戻してこそ思い出なのだから。

だから、私は殺せる。

殺せるのだ、殺さなければならぬのだと、私は己に言い聞かせるように二度三度口に出した。

藤村大河さえ。

セイバーさえ。

間桐桜でさえ。

つい二日前、バーサーカーの追撃を避けるために放った螺旋剣が、無関係の人間を殺

したのと、何も変わらない。今まで何度もそういうことをしてきた。一度は竜の卵が生まれた村を村民ごと一つ残さず焼き払った。歴史的に重要だということであつた一人のために数千人を生贄にしたことも、逆に歴史に干渉しすぎるほどに突出した才を持つてしまった人間を、赤子のうちに何人も何人も殺した。

英霊と崇められ、一番初めに手に入れたものは、人を殺す感覚を麻痺させることだつた。

だから、今回も同じことだ。

見も知らぬ何万を葬り続けた私が、今さら身勝手な私情を挟み彼女たちだけを助ける？ 断罪する罪人に、そのような権利があると考えること自体、馬鹿馬鹿しい傲慢だ。

私は、目的のためになら、彼女たちでさえ自嘲気味の笑みを浮かべて殺せるだろう。いつかのように。いつものように。

「アーチャー」

凜、ではなかった。私は少なからず驚いて、腰を上げた。

同じ屋根の上でこちらを見下ろしながら、暗闇の中でも銀色を失わないまま言った。

「聞きたいことがある」

考えに没頭しすぎていたことを、少し反省した。彼女はあくまで共闘しているに過ぎない、背後に立たれても気付かないとは気を許しすぎだった。

「なんだ。下に居たのではないのか」

「話し合いは終わった」

凜と衛宮士郎、そしてセイバー。人質について、そして敵の処遇についてを三人して下で話していたのだ。お互いの事情を押し通す、感情論が飛び交うのは目に見えていゝ。あまりに容易に想像がつくので、私は元からその作戦会議もどきの参加を辞した。

終わったのだろうか。我がマスターからの報告は入っていない。

「これからの行動については、貴方のマスターに直接聞く方がいいでしょう。それより訊きたいことがあるのです。貴方の持つ、弓のことだ」

そのことか、とすぐに合点がいった。

弓を私の中から取り出した。座ったまま、左手で握り右手で弦をつまむ。

「それだ……その弓の名を、もしやフェイルノートと」

「いかにも、これはフェイルノート。そして私は円卓を戴いた騎士、トリスタンだ」

「私を謀るか、アーチャー。ブリテンの騎士がアイルランドの英雄の剣を撃ち出すというのか」

「なに？ ……ああ、橋の時か。そうか、凜に担がれながらも、私の一撃を見逃しはしなかったか」

螺旋剣・カラドボルグは確かにアイルランドのフェルグスⅡマクローイが所持してい

たとされる刀剣である。

「答えよ」

握った弓の胴を寝かせて、狙いを定めるために肩に顔を添えた。

いつもは、その左手の甲に矢を乗せる。確実に当てるための、堅実な技術だった。そこに何かが乗っていると仮定して、つまんだ弦を少しづつ引いていく。

「場合によっては、いつか、力づくでも聞くことになる」

長い付き合いの弓だった。投影された伝説の刀剣の数々を、矢として扱うには並大抵の器では荷が勝ってしまう。初めは牛骨だった。鯨の髭を弦に当てた。回り道の果てに、この一本に辿り着いたのは、笑ってしまうほどに必然だった。

それを彼女は、一目で見破る。考えてみれば、当たり前のことだった。弦を離した。

常人では持つことさえできない剛弓。弦音だけは大きくて変わらない。糸の振動が出す音を、やはり指先でつまんで消した。

「貴方は双剣を使うという。さらにはアイルランドの出典の剣を矢とする。それを放つのは、ブリテンの弓だ……アーチャー、貴方の存在は、不穏だ」

不穏という単語が、自分でも呆れるくらいに似合っている気がした。

世界の不穏を始末する守護者が、その不穏の元凶なのだとすれば、私の結末は己に止

めを刺す凄絶なものに違いない。不穩を暴力と定義して、やはり不穩を消すには不穩を当てるしかないのだとすれば、私こそが暴力の具現となるのか。自己の存在さえ否定する輪廻の蛇。ヒーローの結末は、いつだって死への疾走である。

さりとて、私は反論せねばならない。

「ふむ。そこまで断定するというのが、見たことがあるとでも、いうのかな。生前にでも？ かの無駄無しの弓を見たことがあるなど、出自をさらしているようなものだ。もう一度問うぞ。この弓を、円卓の先陣をきつた男が握った弓を、君は、見たことがあるのだな？」

私はまっすぐ彼女の目を見て続けた。予想してたのか、セイバーは顔色一つ変えることはない。

「さあ、どうだろう」

「セイバー、それを君が言うのか。この弓をフェイルノートだと見破った君が言うのか。それを握る私を、トリスタンではないと一目で見破った君が、それを言うのか」

「勿論だ。それは元々、私の物だから。私こそが円卓の騎士、トリスタンだ」

とほけたように口元に笑みをつくり、セイバーは白を切る。

その不敵さ加減が胸をくすぐり、笑みが浮かんだ。

「当てずっぽうで話す貴方の目は、節穴だな」

当てずっぽうと言われたことさえ、存外におかしく感じられた。

だから、こんなことを言おうと思つたのかもしれない。

「そうか。私の目は節穴か。では、君がアーサー王ではないか、という見立てもやはり外れなのだろう」

今度こそ、セイバーの息が止まった。

私はそれに目もくれず、さも冗談だというように夜空に向かつて口の端をゆがめた。当てずっぽうだよ、と眩きながら。いまだぬるい風を頬に感じた。

そろそろ降りてこい、と凜の声が聞こえた。返答のないセイバーに私は言った。

「行くらしいぞ。どうしたセイバー。まさか真実だったか」

どこか茫とした表情で、騎士王だと指摘された少女は立ち尽くしていた。予想とは違い、あまりに露骨な動揺だった。

様子がおかしいまま、彼女は苦しげに眉を寄せて言う。

「いや、違う……妙な既視感が」

「既視感だど？」

「おーいセイバー」

衛宮士郎の声に、はっとセイバーは我を取り戻して飛び降りていった。

既視感、の言葉が私の中で幾度か繰り返される。答えを得ぬまま、凜の叱責に追われ

るように私も彼女の後を追って屋根から飛び降りた。

大したことない高さ。同じくして、坂の下から風が吹き上がってきた。合わさった空気の流れが、驚くほどの強さで私の顔を叩いた。

吹きかかった顔にしばらく残る、生ぬるい風だった。

作戦を選べる余裕はなかったようだ。

橋上でバーサーカーのマスター相手に放った遅延効果の矢を配置し、頃合を見計らって間桐慎二に向けて撃つ。ライダーが己の主を庇った一瞬の隙に、セイバーが飛び出し人質を救出するか、ライダーを斬り伏せる。相手を油断させるために、二人と二体は隠れもせず河原に姿を現す。

大雑把な作戦だが、時間もない中でそれ以上の案はでなかったらしい。後手に回りすぎて以上、最大限の連携と言ってよかった。そして、最低限の連携でもある。

人質を取られた二対一。そういう状況で、一瞬の隙を突いての力押しというのは決して間違いではない。

「いくら考えてもきりがない」

歩きながら、沈黙に耐えかねるといふ感じで凜が言った。相槌はどこからも出ない。

私の矢を使うということに、異論はそれほどなかったようだ。

無事に人質救出が成ろうとも失敗しようとも、その後はセイバーが前衛で押し、私は後衛で援護に廻る。藤村大河の生命に関わらず、どちらにしろ、ライダーも間桐慎二もここで倒すということだけが明確だった。

一度私の手を離れた矢は、初速度のまま突き進むだけになる。放出したのなら、その先に目標がいがいまいが、人質が盾になろうが関係はない。私が描いた想像を忠実になぞり、銀色の矢は突き進む。

私は、藤村大河ごとライダーを射殺せるだろう。魂さえ自嘲しながら。

人気がない路地を曲がり、橋までの道を迂回しながら歩く。くだんの崩落で、大橋近辺には夜通し人が絶えることはない。二つの町を繋ぐたった一つの中継点は、急ピッチで再建設されているとのことだ。

わざわざ、そんなところで戦いあう馬鹿もいない。

上流の方に道を逸れると、背筋を這う怖気のような気配を感じた。

「ライダーの気配を察知した」

「どっちっ？」

「この道を真っ直ぐだ……橋の三百メートル上流、いやそれほど離れてはいないか」

「士郎、私も捉えました。間違いなく、ライダーです」

「そうか……よし」

衛宮士郎の持つ、鉄パイプにふと目を落とした。

素材に魔力を通し、強度価値その他を上昇させる、強化の魔術。衛宮士郎はいそいとそれを自分の背中に隠した。

その様子に悲観はなく、一種の達観がある。地響きのするような火の海で、いくつかの感傷が焼け焦げてしまっているからだ。

この戦力外の男が、剣を握る日はそう遠くはないだろう。

一度、目の付く辺りで一番高い民家に上り、その屋根に矢を据えつけた。糸が伸びるのを許す距離はそれほど長くはない。ライダーまでの距離を考えるとこの辺りが限界だった。

最後の十字路を抜ける。

視界がぐっと開けたところ——土手に出た。公園のようなところだった。この前の時のように、禍々しい模様が目隠しをつけたライダーと、そのマスターは、わかりやすいように街灯の下に居た。人質は、その街灯に縛り付けられている。

間桐慎二の手に、一冊の本が開けられているのが見えた。

「アーチャー、藤村先生は？」

「この距離ならば目を凝らすまでもない。

「生きているな。呼吸は正常だ、外傷も特に見えない」

「そうか……良かった、藤ねえ」

「シロウ、安心するのはまだ早い。安堵はライダーとそのマスターを倒すまで取っておくべきだ」

「わかつてる。慎二は、敵に回ったんだからな」

歩を進める。間桐慎二は初めからこちらに気付いていた。嬉しそうに手を挙げ、声を上げる。

「ああ、衛宮。ありがとう。言ったとおり、ノコノコと間抜け面を晒してくれたってわけだ。面倒がなくて助かるよ」

横にはピツタリとライダーが張り付いている。隙などあるはずもない。

「慎二」

「ほら、藤村だ。安心しなよ、殴っちゃいないし、手も出してない。ライダーが後生大事に抱えていたよ」

私は、間桐慎二の本から目を離さなかった。

投影が本質を知ることより発するならば、私の眼は物の質をことごとく見分けることができる。とはいえ本というカテゴリーは得意ではなかったが、衛宮士郎と上機嫌に話しているので、中身を判明させるまでの時間は十分に取れた。

その名を、偽臣の書。従僕を委譲する禁忌の誓約書だった。甲より乙へと——甲の同

意さえ得られたのなら、たとえ乙に魔力がなくなるともマスターとしてサーヴァントを使役できる。そのような効果を、私はその本の中から盗み見した。

私がそれを知ったちようどそのとき、一際甲高い声で間桐慎二が叫んだ。

「よし、じゃあ交換条件だ。遠坂の首を刎ねろ」

とうに予想できていた要求を、だが既知の友だった者から言われた為か喉が詰まってる。

凜は動じずに、鼻を鳴らしている。人としての弱さのいくつかは彼女に適應されな

い。
こぼすように言った、衛宮士郎の返答は、出来ない、だった。

「ライダー、その女の首切れ」

クン、と小さくライダーの手首が動いた。それだけで鎖は動きを伝え、釘の剣が弧を描き、十分な速度を持って突き刺さる。

「やめろ！」

ガキン、という硬い音。剣は文字通り首の皮一枚だけ傷つけただけだった。その代わり、鉄で出来ている街灯を、容易く貫き通していた。その穴が何を連想させるか、考えるまでもなかった。

「焦るなよ。脅してやつ？ イライラしてるんだ、だって約束破られたんだからな、あ

の衛宮に」

アーチャー、準備。レイラインから伝わる凜の声には、十二分に怒りが乗っていた。

私は放っておいている矢に意識を通した。ライダーが気付くかどうかは賭けだったが。男はまだ何か言っている。律儀に、衛宮士郎は相手をしていた。凜。合図を待った。

「ほら、遠坂か藤村。簡単だろ？ どっちか選ぶんだよ。高校で初めて顔を合わせた遠坂、ずっと一緒に藤村。そら、手伝ってやるよ。どっちが長いこと一緒にんだよ？ ん？」

「……藤ねえだ」

「よし！ いいぞ！ 調子出てきたな！ じゃあ次だ。どっちがお前を沢山助けてくれたんだ？ ちよつと前に知り合った遠坂か、お前の親がくたばってから世話し続けてきてくれた藤村、どっちだよ」

「……」

「言え！」

「藤、ねえだ」

「決まりだ！ そら、決まったぞ！ せっかくセイバーがサーヴァントなんだ。その剣でズバンとやっちゃってよ」

「……慎二、最後にもう一度だけ言うぞ。このまま、黙って藤ねえを返してくれ。そうしたら」

「さっさと殺せ！」

「——わかった。セイバー」

セイバーが剣の柄に手をかけ、抜いた。

衛宮士郎の言葉が最後通牒だとはついぞ気付かなかったのか、男は偽りの本を片手に高笑いをやめない。

不可視の剣が振り上がる。観念したとばかりに目を閉じたまま、凜は小さく呟いた。

「残念ね、命だけは助けてあげようと思ったのに……アーチャー」

遅延信管発動。飛来する矢は銀色の軌跡を描いて、間桐慎二の頭蓋に直進する。

キン、キンと音の壁を破りつつ、銀光の飛礫は殺意で走る。

「慎二」

ライダーが矢に呼応し立ち塞がったのと、振り上げた剣をそのままライダーに向けてセイバーが駆け出したのは全く同時だった。

ライダーもそれに気付いている。かなりの距離を離して撃った矢にそれほど力はない。容易く払いのけ、鎖で繋がれた二本の釘剣の内、一本をセイバーに向かって放ち、もう片方を藤村大河に向けた。

致命的な距離だった。到底間に合いはしない。

しかしそれはあくまで人間に換算してのこと。獅子のように低い大勢から駆けるセイバーの俊敏さは、尋常を凌駕した。蹴り上げた地面が暴発した。膨大な魔力を上乗せし、力任せに袈裟に振り下ろす。ライダーが短剣を盾として防御しても、何の意味もなかった。力も魔力も圧倒的な差があった。そのまま勢いを殺せず、ライダーは自分のマスターごと公園の草むらに吹っ飛んだ。

「セイバー、藤ねえを！」

「承知」

追撃ではなく、己のマスターの意に従って、人質を縛っていた縄を切り柔らかに受け止めた。すぐさま衛宮士郎が駆け寄り、藤村大河を愛しそうに抱きしめる。

その光景に在りし日をフラッシュバックさせ、安堵の息を漏らすのはこの状況と、我が骨子が許さなかった。セイバーはそのまま腕を放すと、剣を手にライダーへと向いた。私も干将莫耶を。衛宮士郎でさえ、藤村大河を再び横に寝かせると背中から鉄パイプを取り出して構える。一步踏み出した凜が嘲笑を隠そうともせず顔に張り付けたまま言った。

「あらら、形成逆転ね」

かくして状況は一変した。立てた作戦は、見事に成功ということになった。

草むらから身を起こしたライダーが、マスターに肩を貸しながら立ち上がった。

「謀りましたね」

「卑怯だとも?」

つまみ出したのは、赤と黄色の宝石だった。

すんなりと戦況はこちらに与した。ライダーも力弱く、圧倒的戦力差を持つて勝敗は決した。

だが、果たしてそうなのか。

「はは」

間桐慎二が、本を片手に笑いだす。その様はどこか狂人じみていた。

「はっ、はは。ひはあっはは。ははははははは」

「狂ったの?」

「最高だよお前たち! 本当にさ!」

誰も途切れることのない哄笑の真意を読めなかった。セイバーと衛宮士郎が構えなおし、凜が宝石を握りしめ、私が投影を待機させる。微動だに出来ず、つまりそれくらいしか出来なかった。

「本当おめでたいよ。出し抜いたつもりかよ」

何かがある。セイバーが直感で、私と凜が洞察で、衛宮士郎が不気味さでそれに気付

き、一歩しりぞいた。

「二対一？　いつから？　この川原でか？　それとも学校の屋上でか？　お前たちの橋での戦いを見て僕たちが結託した日から？」

危険がさしせまっている。それはひどく近い。

致命的な罠に嵌ったのではないのか。敵の必殺の領域に立っているのか。

まさしくその通りだった。

「本当に。ねえ？　慎二」

セイバーも、衛宮士郎も、凜でさえ、本能に従ってとつさに上空を見上げた。

蝙蝠の羽根を広げたような格好で、女は被ったローブの奥で笑っている。

その回りをじゃれ合うように浮かぶ光球は、一つ一つが大魔術の元素だ。単純にぶつけるだけで根こそぎ破壊行為を尽くす、数は八。問答などなく、キャスター以外にありえない。

「……キャスター、お前遅刻なんて許されると思ってるのかよ」

「ふふふ、その怒り、向ける相手を間違えてはいけませんよ」

「くっ……あーあ、そうだな。よくもやってくれたよ、衛宮あー！」

その結託は、いつから組まれていたのか。橋で私がセイバーを助けた所を目撃された

のが原因なのか、対バーサーカーに備えてなのか。だというのなら、道化のように嵌められたのはこちらの方だった。戦況は完全に、五分にまで押し戻されていた。

マスターの怒号に反し、ライダーはあくまで冷ややかな顔で一步間合いを詰めてくる。

ぬるい空気の正体が、発露した。

「遠坂にセイバー……撤退しよう」

衛宮士郎が、さらに一步退いて藤村大河の体を抱き上げながら言う。人質は取り返して、もう十分だと。

が、セイバーは首を振った。

「シロウ、それは得策ではない。二対二とはいえ固体保持戦力の比はこちらの方が良い。むしろキャスターまで現れたのは好都合だ。打倒すべきです。一合も交えぬ内に撤退する選択肢は持ち得ない」

「私もセイバーに賛成」

凜が続く。

「なんてったって、嵌められたってのが気に食わないし——ほんっと、気に食わないわね」

「当たり前だ、こんなことされて、黙って帰れると思うなよお前ら！」

「あんたに言つてんじやないわよ、自意識過剰」

ここでキャスターの登場を、一気に二騎を挫く好機とみるというのは悪くはない。

私も、さつきあの妙な夜の気配を感じさえしなければ、それを支持したはずだ。鈍い月明かり、川から流れてくるやけに冷たくない風。浮き足立ったような雰囲気。

戦っているのではない、戦う状況に追い込まれているのではないか。それに気付いた時には、ライダーが釘剣を巻き躍らせながら間合いを詰めてきていた。

「慎二、後退を。これよりセイバーとアーチャーを止めます」

「止めるつて、この役立たず。無様に吹っ飛ばされといて！ キャスターに任せとけば」
「あれはあくまで最後の一を刺すためだけにいる。この戦況をさらうのは私の力です。

元より問題はない」

「ああ？」

「要害を開放します——慎二、後退を」

邪魔だからどけ、と言つてると何も違わない。間桐慎二が怯えた犬のように後ろに下がったのを見届けると、こちらまで十歩ほどの距離を、ライダーは地にまで垂れる長い髪を揺らしながら、無造作に詰めてきた。

それが真実——投降するときのように無造作だったからか、彼奴が戒めのように巻きつけた眼帯を取り外す時も、ただ見ていることしか——杜撰。それが致命的な隙だつ

た。

「まずい、凜！ 見るな！」

「無駄です。キュベレイは既に捕捉を終えた」

遅すぎる危険察知に叫んだときには、決着はついていた。眼帯の下の薄紫色の眼球。脳髄までもが石化する。

喉を万力で締め付けられるように息が詰まった。身動きが、取れない。息が。

私の対魔力など薄紙のように破り捨てられた。ランクはそれほど高くはないとはいえ、シングルアクションの魔術ならば問題なく弾き返す耐性が。洪水のような呪詛の流れが、アーチャーという定義のスイッチを切っていく。

石。

凍結。

鋳型式。

凝固目録。

反転禁送受。

強制停止。

乱入色。

傀儡。

呪。

「魔眼……!!? アーチャー!」

レイラインを通して、凜が悲鳴を上げる。構っている暇はない、私は外から塗り替えられていく定義を内部より構築しなおしていく。身に纏った聖骸布を総動員して外界の壁とした、侵食された部分に強引に魔力を押し流して戻していく。

が、絶望的に間に合わない。

「ありえん……!」

それが魔眼などと、誰が信じられる。

このような急速な定義の書き換えなど、魔眼などという矮小な範疇には収まらない。城レベルの術式でさえ難しい。拘束を超えた固定の石化など。一人、史上類を見ない石化の魔眼を保持した女に思考が辿り着いた。

『『宝石』』クラスの魔眼はやっぱ伊達ではないわね。音に聞くゴルゴーンの秘宝。それでこそ、魔力を貸し与えた意味もあるというもの」

「御託は耳障りでしかありません。早く用を済ませなさい」

「ふん、言われるまでもない」

月を背負ったままのキャスターが、指を鳴らした。

するとそれまで無秩序にたゆたっていた光玉たちが、キャスターの前面に集結しだ

す。形のない、ただの魔力元素。溶けた宝石のようなものだ。毒々しい光を放ちながら浮かぶ、無数の珠玉たち。一つ一つが長い間凜が溜め込んだ宝石一つを凌駕する程の威力を秘めている。

さらに全身に魔力を流し続ける。それを上半身に限定した。剣製さえなるのなら、キャスターなど一撃で屠れる。リミットを越えてオドの奔流を腕に流し続ける。動け。足りない、時間が。

終わるのか、ここで、凜に誓った思いすら遂げれずに、終わるのか。

「させは、しない」

背後でセイバーが動いた。動けるのか。セイバーに備わった対魔力が魔眼に抵抗を示しているのか。だがそれは十の内の二を相殺したという程度で、歩くことすら遅々たるものだった。

「あの魔眼にも対抗できるなんて、セイバー……なおさら」

ローブの奥でキャスターが微笑む。子供が虫という獲物を手にしたときに浮かべると全く同じ、哀れな抵抗を慈しむ、勝利を確信した制圧者の笑みだった。

口元がわずかに動いた。呟いたのは死への手向けだろう。魔球が空気の粘膜を破いて突っ込んできた。一つ残らず、矛先はセイバーへと向いていた。

状況を嘆いている暇はない。上書きされた私の魔力回路を、さらに上書きをし直す。

強引さに氾濫した魔力が神経を焼いたが、だからどうした。動かねば終わる、そのための代償など。私の回避は後回しでいい。順序はまずは右腕、さらに左腕。

「Aερρ」

星が落ちてきた。

振り返ることさえ出来ないすぐ後ろに、キャスターの放った光弾が炸裂した。

「ぐうっ」

地が四方に裂けていく。法則なく解き放たれる魔力が、竜巻のような突風を巻き起こした。ただでさえ視野が確保できない暗闇の中で、さらに砂塵が光を遮る。

「凜、無事か！」

返事はないが、死んではいない。それだけはわかる。

砂埃が晴れていく。私は、何とか首だけを回して状況を確かめようとした。

倒れている衛宮士郎に、凜。外傷は見えない、直撃を受けたわけではなく、突風に飛ばされただけのようだ。

晴れていく土ぼこりの中で、セイバーは不動で立っていた。無傷のまま、叫ぶ。

「この程度か、キャスター！ こんなもので私を殺せると！」

尋常ではない防壁は、キャスターの魔術といえど打ち破ることは叶わない。

「傷一つない!? なんとという対魔力……! 素晴らしいわ……けれど、そっちで這い

蹲っている無様な貴方のマスターは、どうかしらね？」

「くっ、シロウ……まだ、魔眼が……！」

走れず、遅い足取りで衛宮士郎まで歩いていくセイバー、ひどく遅い歩み。あまりに無防備な背中。

かばねのように倒れている凛。

セイバーに向かって、千切れそうな腕を伸ばす衛宮士郎。

私はただ立っている。そんな馬鹿な話が、あるわけがない。

「そうそう、庇わないとね。貴方なら無傷でも、生身の人間ならば髪の毛一本すら残らないものね」

何かの遊戯に享樂するように、笑いながら地に降り立った。ゆっくりと歩きながら、必死に駆けるセイバーの後を追う。隙だ。隙だらけの背中だった。干将が握られている右腕は、もうかなりの自由が戻ってきている。キャスター程度ならば、一撃で。

押し流した魔力によってズタズタになった神経をかき集め、干将を振りかぶった。ざくり。

痛み。手首に釘が突き刺さっていた。ライダーの剣。抜けない。右腕は、動かない。なんだ、これは。

「貴方の出番はない。じっとしておくのですね」

「ツライダアツ！ 貴様あつ！」

もうキャスターを阻むものは何もいない。何の障害もない道を、あえてゆつくりと歩いていく。

セイバーまで、残り三步。

剣の英霊は、持ちえた素早さが幻だったのではないかと思わせるほどに、遅い。呼吸すらままならいほど止まっている衛宮士郎に一步ずつにじり寄る。すでに石化は全身に回っているように見えた。私と同じように不吉を感じたのか、衛宮士郎は走ってくるセイバーをみて、虫の息で叫んだ。

残り二歩。

「くるな……セイ、バ」

「シロウ！」

「まだ、キャスターはなにか……」

「なかなかいい洞察だけれど、でも、手遅れね」

一歩。

理不尽な鬼ごっこは終わった。キャスターの腕が無造作に振り上げられ、落ちた。

とん、という音がした。

画鋲を誤って刺してしまったかのような間抜けさで、オーロラを引っ張ってきたよう

な歪な短剣は、セイバーの背中に突き刺さっていた。

何の殺傷力もないその短剣を、私は知っている。

破戒すべき全ての符——「ルールブレイカー」——

「れ、令呪が消えていく……」

衛宮士郎の、呟き。

「そんな、シロウ!? 契約が途切れて! ぐっ、キヤスター……! 貴様なにを」

あははは。

キヤスターの高笑いはこれ以上ない喜びを謳歌していた。

勝利を手にした勝ち鬨の声であり、また同時に私たちの敗北の鐘だった。

「ふふ。そう、これは契約破り。ルールブレイカー。響くとおり、あらゆる契約を、破戒する忌まわしき断絆の刃。これに斬られたからには、たとえ聖杯のよるべであろうと『ルールは変わる』の。そしてもう、この子の次の契約は済んだ……はあつ! なんて沢山の魔力を食べるのあなた! これが最強のカード、セイバー!」

哄笑が、夜の公園というそぐわなない場所で響き続ける。

「キヤ、スター……貴様の、思うとおりにいくと、思うな」

精根さえ果てた姿での強がりには、何の力も持たない。キヤスターはそれさえ私の楽しみだと言わんばかりに、抑揚を上げた。

「ええ、当然。貴方がすぐさま従順になるなんて、考えてもいないわ。でもね、貴方のそれは抵抗とは言わないの。躰けがいがあ、つていうの。知らなくて？——とりあえず、眠ってもらいましょうか」

キャスターの唇が小さく動き、何事かを呟くとセイバーが感電したように悶え、すぐに糸の切れた人形のようになってしまった。断末魔さええないのは、すでにマスターとして大概の実権を手に入れたからなのか。

ローブの女は口元の笑みもそのままに、哀れな道化に慰めをかける。

「ごめんなさいねお二方。でも大丈夫。いつだって物語の結末は、悲恋だなんていうセオリー、私の時代からまだ変わってはいないでしょう？」

「くつ、セイ、バー……お前、セイバーを、どうする気だ」

「どうする？　セイバーという最強のカードを手に入れて、どうするですって？　あはは、あはは。手駒にするに決まってるじゃない。この子を飼い慣らしたのなら、もう勝ちが決まったも同然、あの汚らしいバーサーカーも眼じやないわ——とびっきりの陵辱で、身も心も従順に仕立てて上げる。さあ、慎二。我らが皆へと戻りましょう。のんびりしていると、ほら、その無様なサーヴァントはもう動けるようですし。でも放つておいていいわね、殺す価値すらない——ふふ、もがく様が虫みたいね」

言うのと、耳障りな笑いを止めることもなく、キャスターはセイバーと共に上空に舞い

上がり、ライダーと間桐慎二もそれに続いた。

何も聞こえない。釘剣がいつ私の手から抜けたのかすら、知らない。

セイバーの呻きと、衛宮士郎の苦悶と、間桐慎二の罵詈の隙間を縫うように、キャスターの眩きが私に届いた。

「形勢逆転ね——まさか、卑怯だとても？」

屈辱にまみれた、皮肉だった。

宙に浮いたまま、キャスターの短い詠唱の後には幻のように消え去った。

鈍い月光の下、沈黙だけが残った。

ああ。しかし、私には一つだけ生まれたものがあつた。

この、身を焦がすほどの——

第六話

午前五時。凜が眼を覚ました時刻だ。

キヤスターが去つた後、そのまま衛宮の屋敷に担ぎ込んで都合八時間が経つたことになる。

私は何も言わずに水を一杯。彼女も、無言でそれを受け取つた。

どこか間の抜けた鳩の気配。衛宮家で即席に整えられた彼女の部屋の窓、カーテンの向こうから朝が這い寄ってくる。

コップに注いだ分を飲み干した彼女に、二杯目を注いでやる。

肌寒い朝の部屋に、静かに嚙下する音が漂う。

凜の頭には包帯が巻かれていた。後頭部に受けた、キヤスターの攻撃で吹き飛んだ礫の傷は、かすり傷といつて良かった。血も包帯を巻いただけですぐに止まつた。

後ろを向かせてその包帯を取り替えてやる。やはり血は完全に止まつていた。丁寧に包帯を巻きなおそうとするのを、凜が掴んだ。

「いらぬ。シャワー浴びるから」

「そうか」

「……わたしたち、負けたのね」

眩きを私は沈黙で受け取った。

敗者には何もかけない言葉はない。自分も同じく泥を飲んだ側ならなおさらだった。

私は彼女を置いて外へと出ると、昨日の夜と同じように屋根に上がった。

朝を控えた冬の未明。

凧の意気が削がれているのを、責める気にはならなかった。キャスターにライダー、さらにセイバーの令呪まで奪われ、彼女がまだキャスターの力に抗っていると考えても二対一であり、それすらかなりの楽観だった。

方法がないわけではなかった。

キャスターの要塞に突入し、投影できるだけの剣を投影し、私もろとも全ての敵を貫き殺す。また陣地が郊外にあるのなら、その土地ごと消し去る手段もないことはない。

そのどれもが自滅を避けられるものではなく、現実味に欠けている。私の消滅と代償に凧が最後の勝者となるのなら、考える余地はあるが、今の段階で私が消えるということは、遠坂凧が聖杯戦争を脱落するのと全く同じ意味だ。

反吐が出るような楽観をすれば、セイバーに迫る刀剣が彼女の対魔力に運よく弾かれて即死を免れ、瀕死の内に凧と再契約をさせる。

「難しい話だ」

そもそも、そこまで際どいさじ加減を調整できるのなら、私自身が決死を覚悟することすらない。多分に運に頼む考えだった。

しかしゼロではない。必要なのは、限りなくゼロに近い数字をいかにして引き上げるかなのかもしれない。

聖杯は誰にも渡してはならない。彼女に誓った使命も感じてはいるが、それ以上に『守護者』としての使命も認識している。単なる争いごとで、私が呼ばれることなどありえない。そこには確実に世界の歴史の維持と、忌避すべき破滅が迫っているからだ。聖杯戦争とは、つまり私の考える通りなのだとすれば、陰惨な儀式だった。生前の記憶はほとんど残っていないので、思い出すというのは少し違うが、かなりの部分を理解した。

「なんとという、不毛なことだ」

聖杯が、ではない。

そんなものに夢を抱いたことが、不毛なのだった。

セイバー、君はそれを知らずに、それを求めて、戦い続けている。今も、これからも。フェイルノートと呼び出した。相当な部分を誤魔化しているので、真実これをフェイルノートと呼べはしない。けれど他に名前を付けることもしなかったの、そうとしか呼びようがなかった。

立ち上がり、昨夜のような戯れではなく、本気で弦を引いた。

軋みあがる何か。何が、こうしてキリキリと音を立てるのだろうか。わからないまま、しかし確かに糸に何かを乗せ、解き放った。

ヒン、と未明を裂いた。

弦音だけは、いつもと変わらない。

飛んでいったものが何なのか、忘れてしまった。二度と思い出すことはない。いつもこうして、私は忘れてきた。同じことを何度繰り返してきただろうか、その度に私は、何かを取り戻せないほど遠くに飛ばし、拾おうとも思わずに歩き続けた。

昨日の夜、問い続けるセイバーを横に、私はこうして弓を引いていた。彼女を取り戻そう。糸の振動を指で殺しながら思った。立ちほだかる者は、余さず蹴散らす。

遠坂凜の入浴が終わった頃合を見計らって、私は部屋を訪ねた。

いつものように赤い服に袖を通し、左右で髪を結わえた彼女が立っていた。私は出来るだけ簡潔にいった。

「凜、君はもう屋敷に籠っている。あとは私が一人でやる」

トパーズを摘み上げる、彼女の手が止まった。

「……えっ？」

遠坂凜は間違いなく稀代の魔術師として名を馳せる素養を持っている。素養を、であ

る。

即戦力として、彼女の力は可もなく不可もなくといったところだった。相手によっては十分通用する可能性はあっても、サーヴァントに拮抗できるほどでもない。

キャスターは、単独で魔法さえ行使しうるポテンシャルを見せ付けた。長々とした詠唱を口ずさむこともなく、強烈な魔術行使をする力。ライターの火を熾す程度の労力で、奴は街一つを消せるのだ。

歴史に刻まれるほどの力を誇示した、神すら生きた時代の魔術師の力。現代の人間には理解も出来ない工程で力を生んでいるのだろう。

魔術の叩きあいで、この少女に勝ち目があるとはどう鼻屑目にみてもありえない。

そういう思いを隠さずに告げた私の言葉に、少女はあっけらかんと肩をすくめた。

「あ、そういう考え。ん、キャスターは、手強いわ。本当にあれは驚いたし、けど、全く対処の方策がないってわけでもないのよ」

クルクルと指を回す。

「マスターをぶっ殺せばいいんだし」

「キャスターと共に行動していると断言できるのか」

「それくらい優しい予想も許されない、か」

「無理をすることはない」

私は、声を少しだけ抑えるのを意識して言った。

彼女は初めはキョトンとした顔で、やがてじわじわと顔全体に嫌な笑みを広げていった。

む。

まずいと思った。思った時には、完璧に嵌っていた。

悪魔は、見るだけで楽しめる玩具を手に入れたように、私を見て笑う。

「ふふーん、心配してくれてたんだ」

「心配など」

「してないとも?」

「……む」

「へー、やつぱりしてたんだ」

「してない!」

「ムキになってるあたりが、告白してるのよねー」

案外可愛いところあるじゃない、なんて言いながら見下す視線。

反論を口にしようと——彼女は本当に一瞬だけ、年相応の儂い顔を見せて、そして消した。

「ふ——っ」

「凜」

「大丈夫よ……前向きだし、自暴自棄でもない」

大きなため息は、気持ちの入れ替えの作業なのだ。下らない後悔を吐き捨てて、新たな現実を吸い込む。

吐き出して、存分にいらぬものを吐き捨てて、パン。頬を張った。

「反撃よ、アーチャー。あそこでわたしの息の根を止めなかつたあの女を、後悔のどん底に突き落としてやる」

この意志が、彼女の最も根幹の武器なのだろう。それだけでも、やはり信頼に足る剣だ。

私は立ち上がり、扉に手をかけた。

「どっへ？」

「決まってるだろう」

魔女の城を訪ねる前に、住所を知らねばならないという、間抜けな話。

士郎とあとで行く、という声を聞き終わる前に、私は霊体に身を戻して朝陽が出たばかりの街の中へと、魔力の痕跡を探し始めた。

キャスターは柳洞寺にいる。

半日かけて捜し求めた結論は、意外な所から飛び出してきた。

レイラインを通して、妙に苛立たしい感情の混じった報告を受けると、私はきびすを返して衛宮の屋敷へ戻った。

部屋では静かな怒号が舞っていた。

「ほら、もう一回いってみなさい衛宮くん。」

「えーと、イリヤっていう女の子から……ほら、バーサーカーのマスターの」

それを聞いた凜は、頭に血を上らせて卒倒しかけて気を取り直して指を振りかざし魔術の弾丸を連発して——ともかく彼女の逆鱗に触れたようだ。あわや蜂の巣といったところの惨事である。ともかく、それで気持ちは収まったらしい。

「こ、殺す気か、遠坂」

「だったらとつくに死んでるっての。本気で狙って、仕留め損なうわけないでしょ」

「……」

「まあともかく、軽率すぎるわよ、士郎。ほんと馬鹿。あんた、バーサーカーのマスター舐めてるでしょ」

「舐めてなんかないって。殺されると思ったよ」

「じゃあ、なんでいまだにピンシヤンしてるのよ」

「いや、それがよく俺にもわからない。商店街で偶然出くわして、ドラ焼き食べながら公

園でちょっと話ただけで、帰ったし」

「……あなたはもういいとして、あの小娘もなに考えてんだか……ちよつと、まさか変な『虫』付けられてんじゃないでしょうね」

「付けられたとして、お前が見逃すのか？」

「そんなわけないでしょ」

「だから安心してる」

「……笑うな。あーもういい。とりあえず、今回はこの程度で許して上げるけど、今度軽率な真似をしたら」

「軽率って、そのおかげでセイバーの居所がわかったんだしいえなんでもアリマセン」

満面の笑みで衛宮士郎を黙らすと、凜は続けて柳洞寺への質問を始めた。その寺については衛宮士郎の方がよく知っているようで、二人が受け答えをするうちに私にも大体のイメージが掴むことが出来た。

「山の上の寺、か。要塞としては、磐石ってことね」

山は守るところなり。山は拒むところなり。

特に東洋において、山という場はそれだけで力を持つ。その上に地脈が流れて、寺という蓋がなされているのだから、キャスターにとつて塞を築くことはそれほど難しくはないだろう。

「やっぱり最近流行った昏睡事件は、あの女の仕業で間違いなかったわけか。地脈の力に、大勢の人間の精神力に、ライダーに、セイバーか」

ぶつぶつと呟きだすのは、彼女の持病の一つだ。その発作を止めることは無駄な努力だと知っているので、私は霊体のまま静観を決め込む。衛宮士郎は戸惑う。

「あの、遠坂？」

「完全封鎖されてたら勝ち目なんかないんだけど、どっかの穴倉なみに力を溜め込んで蓋なんか出来るわけもないし、力の流れの逃げ道はやっぱり入り口だけと見た方が」

「遠坂ー」

「あーくそ、あの狭い山門を通れつての？ 馬鹿馬鹿しい。それにセイバーって切り札もあるんだし、くっそ、鉄壁じゃない。イリヤスフィールっ。場所は教えてやったからあとはよろしくつてわけ？ ヘラクレスなんか使役してるんだからちよつとは手伝えつての」

「おーいとおさかー」

「……え？ 呼んだ？」

「いや、ごゆつくり。俺、一回お茶いれてくるから。あと藤ねえの様子も見てくるし」

ふらふらとした足取りで、凜の部屋を出て行く。私は足音が遠くなつたのを確かめて、霊体から実体へと移行した。

足音が遠ざかるのをまって、凜は一段と深くベッドに腰を落ち着けた。

「あいつね、セイバーと毎日訓練してたんですって」

ふう、と。ため息を一つこぼしながらいう。厳しくない程度に目を細めて言うのは、お茶が欲しいからではないだろう。彼女の優しさは、魔術師を生業にするにはひどく邪魔なもので、捨てるにはあまりに綺麗なものだった。

「無駄な努力だな」

サーヴァントという存在は、人間とは違う次元に属している。サーヴァントを倒せるのはサーヴァントのみ、またはその次元を超えた守りを打ち破れる魔術がいる。だがそんなものが易々と存在するはずもなく、常識で考えてマスターの出番などない。あるとすれば、よほど修練を積んだ魔術師以外にないのである。

この世に、例外という事例がないのであれば。

「アレも一応魔術師に分類できるけど、使える魔術が強化ただ一つだなんて、役立たずっぷりだし」

素材に魔力を通し、その特性を高める術を強化という。

まるで怠れば朽ちてしまう儀式のように、毎日のように素材に魔力を流していた。そうやって仕向けたのは、衛宮士郎の本質を押し隠す、死にいく衛宮切嗣の精一杯の予見だったのかもしれない。

「通じないっていうのは知ってるみたい。それでもしなきゃならないんですって。覚悟の問題とか、コンマ一はゼロじゃないって言った。でも強化しか使えないんじゃないやっぱり話にならない」

その誤りに気付ける者はいないだろう。

この少女ですらそうなのだから、切嗣の残したものはやはり本物だったのだ。

「君の目も、案外に曇っているな」

「へ」

「衛宮士郎の保持魔術は強化だけではない。いや、強化以上に適正の魔術を保持している」

「ちよつと、アーチャー。あんた何か知ってるの？」

「何となくだ——それより、今はキャスターだろう」

話の矛先を強引に変える。嘘ではなく、時間がなかった。彼女も承知しているので食い下がってはこなかった。

勝機について話し合う。セイバーはまだ完全にキャスターの支配下に落ちていない、というのは合意した。仮に令呪をかぎして、セイバーを完全に手足としたのなら、今頃この屋敷は戦場と化しているはずだった。手に入れた強力な兵器の力を、黙って懐に収めておける女ではない。実験も兼ねて、間違いなくここへセイバーを寄越すはずだっ

た。

「つまり、まだ彼女は抵抗している」

「油断だな。確かに戦力差は圧倒的だが、致命的だ」

「……まあ、あんたの大口にももう慣れたけどね。でもやつぱりそこよ、つけこむべきところは」

「そう、何も問題はない」

「ライダーさえいなければね。メドゥーサ、か」

言わずとも知れた、有史以来、最悪の石化の魔眼を持つ女。

ライダー。

知らず知らず、右手を握り締めていた。突き刺さる釘剣。あるとき干将を投擲できたのなら、セイバーを奪われることもなかった。

なにかしら胸の内から湧いてくるものを、私は抑え込んでいった。

「やつは、大丈夫だ」

「大丈夫って、何が。あんたの抗魔力なら一回食らった魔眼は利かないのかもしれないけどわたしは」

「違う。やつを数に入れる必要はないといったのだ。あれは今のところ直接的な相手ではない」

ちよつと待てといわれる前に、私は手を振つて思い出せといった。

「ライダーのマスターが何を持っていたか、君は気付いたか」

「え、慎二？ 藤村先生を抱えてたのはライダーだし、ちよつと待って——あ、なにこれ

——本？」

「偽臣の書という」

曰く、臣の使役を他者に委ねる。

従えられる臣にまことの忠誠はあらず、あるは記された一筆の契約のみ。ゆえに偽臣。

「やつは正式なライダーのマスターではない」

「——そういうわけね。おかしいと思つたのよ、間桐の家の魔術回路は何代も前に途切れてしまつて今はもうない。絶えた素養には、令呪を宿す力はない——ああもう！ 千切つて穢土に撒いてやるなんて、いよいよこつちも本気でやりたくなつてきたわまつたく！」

手に掴んだ枕に拳を叩き込む姿を見ながら、私はいうかいうまいかを、東の間迷つた。

ガラガラと玄関の扉が閉まる音、去つていく足音。彼女には聞こえない、数分前に来客が来たことすら知らないだろう。

来訪者は、衛宮士郎と二言三言話して、いま帰途についたのだ。

迷いというほどでもない、私は長めのまばたきをしてから告げた。

「偽臣の書は、真の主の意志が不可欠だ。どういうことか、わかるな」

ライダーを真に使役するものが、積極的に間桐慎二に加担したということ。

間桐慎二に限りなく近い人間。子供。恋人。あるいはその親族。凜の目に、うろたえがよぎるのを見逃さなかった。

近づいてくる衛宮士郎の足音を察して、私は霊体に戻った。

「悪い、ちよつと桜が来てさ、遅れた。藤ねえが倒れてるのが心配で来たつてさ。こういう状況だし、上がれていうのもなんだったから元気だつていつたらすぐ帰ったけど」

「——桜？」

「ああ。知らないか？ 弓道部だった頃の後輩で、うちと結構仲良くしてしょつちゅう」
「知ってるわよ——間桐、桜」

私もその名を知っている。いや、思い出した。さきほど、衛宮士郎と話している声をちらりと聞いて。

間桐桜。

消えるわけがない、私にとって、最も手痛い悪夢を見せてくれた人。

吹き荒ぶ黒い影、貪り尽くされていく命。

黒い、もう一つの聖杯の素。

戦い尽くした聖杯戦争の数年後、冬木の町を沈黙の廃墟に変えた、昔ながらの普通の少女。

間桐桜。今は、影で参戦しているマスターの一人なのか。

何も知らない間抜けな話し声に、彼女の合いの手が途切れない。

第三章 第一話

衛宮士郎はこの夜に死ぬ。そして、一本の剣となる。

予感と、現実逃避と、最後通牒が合わさったような、イメージ。

「士郎、行って！」

空間の許容量を超えた魔術のぶつかり合いの中で、遠坂は叫んだ。

四方をそれぞれ異なる魔方陣で囲い、手にした宝石のポテンシャルを増幅し、紡ぎだす詠唱の合間の一言だった。

俺は、その声で、のろすぎる足取りで、目を腐らすような黒く燃える地面を蹴る。

行かなければ、死ぬのだと、強迫観念に襲われているように。

事実死ぬ。吸い上げ続けた魔力は、もう人の手に扱える代物ではなくなった。黒く黒く、平原を焼いて、空に舞い上がって、太陽さえ燃やしてしまわんと、盛る、滾る、焔。

俺の原風景を再現したようなその図式を、フラフラとした足取りで駆ける。

剣の投影は済んでいる。選定の巖に突き刺さっていた、王の剣、カリバーン。

ああ、もう永遠に俺は、この剣を手にしないだらう。二度と、この剣を思い浮かべる

ことすらしないだろう。そんな予感めいたことを、もしかしたら呟いていたのかもしれない。

障害は何もなかった。彼女を守るように聳える巨人の腕は、全て遠坂に向かつていて、俺はおぼつかない足取りで、呆気ないほど簡単に彼女の前に立った。

「先輩。私」

桜が何かをいっている。悪いけど、何も聞こえない。

藤色がかかった綺麗な髪が真つ白に脱色して、真つ白だった肌には悪い冗談のようなすす黒い紋様が走っている。

確かに桜だ、声も、笑顔も。それでも、一昨日とはあまりにかけ離れたその姿と、地獄の門に吸い込まれるように消えてしまった人々と、吸収した魔力の余波で燃えさかる街が、目の前の人間が家族のように過ごした愛しい後輩であることを、丸ごと否定する。

「もう先輩、ちゃんと聞いてます?」

桜に似た彼女は、まるつきり桜の仕草で笑う。

「士郎、殺しなさい!」

凜の声。そうだ、俺は彼女を殺さなきゃならない。でも、お前は桜の姉で……

涙。そうか、遠坂。だからこそ君がいうのか。

もう、彼女は桜ではない。完全に、黒い聖杯——“アンリ・マユ”——と同化してい

る。助ける手立てはない。

桜が俺の腕を掴んで叫ぶ。

「先輩、私、何もいらななんです。何も。先輩さえいれば、だから、私と一緒に」

「さ、くら」

「領いて……領いて！ でなきや私、姉さんだけじゃなくて先輩まで殺さなきやならない！ 先輩を殺したら、この世界で私は一人ぼっちになるの！」

こんなに悲しいことはない、桜は泣く。

泣いて——笑う。

「でもね、こうも考えられるんです」

こんなに嬉しいことはない、

「——世界を滅ぼしても貴方さえいれば、二人つきりになれるっていうこと」

桜は笑う。

——終わってしまった。

言葉にさええならぬ想いが脳髓をこれでもかと責めた。

初めて出会ったときの、どこか遠慮しがちな少女。

次第に仲良くなって、料理を教え始めた以上素質があったこと。

高校の頃にはすでに抜かれていたこと。

縁側でのんびりと、一緒に彼女の好物のまんじゅうを食べたこと。

彼女の料理の味。繊細で、どこかあったかくて、甘い。

「ね？ 先輩、素敵ですよ。世界で生きるのは私と先輩だけなんです。邪魔な姉さんもない」

俺だ。

俺が桜をこんな風にした。

もつと早く桜の異変に気付けていたら。

彼女はどこかで助けると、信号を送ってたのではないか。

間桐家の、聖杯に対する妄執。

昔、朝餉に夕餉に見せてくれていた笑顔も、家に帰れば責め苦に感う泣き顔に変わっていたのか。

俺以外の誰が責任を取る。

「桜」

「ん、なんですか先輩？ 質問ですか？ なんだって答えてあげますよ」

「俺は、お前を殺さなきゃならない」

俺以外の誰にも、桜を殺させてなんてやらない。

あは、なんて普通の笑顔を、真つ黒な顔で浮かべて、桜は笑う。

「多分、そういうんじゃないかって思ってた。予想、当たりました。悲しいけど、やっぱり私が先輩のこと、一番よく知ってるんだと気付けたし——はい、許してあげちゃいます」

彼女の意志を経ることなく、アンリ・マユの拳が今度こそ俺を捻り潰そうと迫る。でも、どうしてそんなに遠いのだろう。そんなに遅いのだろう。

もつと速く振り下ろせ、黒い聖杯。でないと、俺の剣が先に桜に届いてしまう。

頼むから、もつと、速く——

そして、何の希望も楽観もなく、カリバーンは桜を貫いた。

ああ、また、罪を。

原風景で背負った罪を、原風景に酷似したこの原野で、積み重ねた。

これは、死んでも払い続けなければならぬ、負債だなど、思った。家族殺しは、馬鹿みたいに重い罪なんだ。生きている間に返済するなんて、できるわけがない。

それでも立とう。悪いことをしたなら、一つ残らず背中に背負って、間違っても膝は屈しない。走って、折れるまで走って、死んでも走って、誰かのために。

それしか俺は償い方を知らない。

嘘のように軽くなった桜の亡骸を抱きしめて、消えていく黒い炎を見上げた。

滂沱のように涙が出ると思った。悲しさで、涙が出ると思った。

本当に悲しいと、涙は出ないと知った。

第二話

桜。ライダー。間桐慎二。

ほぼ完璧に、記録は復活した。桜の声を聞いたことが、最後の堤防を叩き潰したようだ。セイバーに斬られた損傷で予想より遅れてしまったが、今現在取り戻した記録は十割に限りなく近い。イリヤスフィールのことも、思い出している。だが、深いことはあまり考えるのは今の段階ではやめておくことにした。

間桐兄妹とライダーのマスターについての関係を悟った凜は、私を部屋に待たせたまま出て行った。ショックを受けている様子はなかったが、彼女もまた仮面をつけたまま生きる魔術師なのだ。ともすれば、気を使うことも無粋だった。

結局、凜が席を外したのは五分ほどだった。部屋に戻つてくると、一枚のメモ用紙をヒラヒラとさせながら、あの性格の悪い笑みを浮かべる。

「バツチリ。キャスターのマスターが割れたわ」

メモ紙をヒラヒラとさせながら、うっすらと笑う。どんな方法を使ったのか、少なからず驚いた。

「ふむ。聞かせてもらおうか」

「いいこと？——なんて、格好つけていうほど推理したわけじゃないけど」
勘ね、とあっさり。

「勘か。君の場合、それ以上アテにならないものもないと思うが」

「やかましい。でも、わたしもそう思うけど……まあドンピシャだったからよし。この紙は、ライダーの結界で病院に搬送された教員の名前が書かれてるの」

「ふむ」

「で。意識を取り戻した藤村先生に、この中から、会議に参加したのに搬送されていない人間はいませんか？」と訊いたわけ。そして一人だけいたのよ」

男の名を、葛木宗一郎。

聞き覚えはない。

「推測の域をでないけど、キャスターも多分学校にいたのよ、あのとき。慎二とわたしたちの交渉が上手くいかないときは、丸ごと襲うつもりだったんじゃないかしら」

「それとマスターと、どう関係がある」

「慎二は馬鹿だけど、頭が悪いわけじゃない。生徒がいない中で魔方陣を呼び出すのは下の下っていつてたけど、ある程度の損得勘定は働くだらうし無駄なことはないと思う。だから、あれは十中八九キャスターの入れ知恵なんだと思うの。そこに、一人だけ結界の被害を免れた人間がいる、なんてとてもじゃないけど偶然には思えない。アイツ

があんな大掛かりな魔方陣呼び出して獲物を逃すような性格してないし、そもそも何であの日に教員会議があったのか、慎二が知ってるわけない」

年増ブスめ、と毒づきながら早口でまくし立てる。

「ふん、大口は君の方だろう。自分の前で教鞭をとっている教師を、魔術師だと君は見抜けなかった。それでこの地を統括すると、笑えない冗談にしか聞こえないな」

「断言できるけど、この男は魔術師じゃないわ。だから後悔しないし、ええ、もう驚かない。ありえないことがありえ、ありえることがありえない。ふん、面白いじゃない。一筋縄じゃいかないなんで、そっちの方が歯応えがあるつものよ——それに、正体もわかった」

私はその意気に笑って、もう一つ皮肉を言おうとしたとき、彼女がバツと指差して先手を取った。

「皮肉も小言も、あとでじっくり聞いてやるから黙ってなさい。キャスターを討つ。作戦をいうわよ」

戦いの前に高揚しているのか、実に楽しそうだ。どこか不自然なまでに。間桐桜について現実逃避をしていないかね？　と言いかけてやめた。

ポケットからサファイア、エメラルド、トパーズ、アメジストを取り出して並べる。さらにその向かいにルビーと、ガーネット。二つの赤がどうやら私たちのようだ。

「葛木宗一郎に戦闘能力はないと思うけど、あの年増のことだもの。洗脳して体の自由を奪って人間爆弾にしてるとしてもおかしくない。あ、このトパーズが葛木ね。で、サファイアがキャスター。こいつらはわたしが止める。その隙にアーチャー、ライダーにダッシュ——アメジスト？ エメラルドって感じじゃないから、どっちでもいいか。とりあえず、止めて。問題ないはずよ」

「問題ないが」

「で、隙を見て慎二の偽臣の書とやらを焼き払う。これで多分、ライダーはその場を去るでしょうね」

以上、作戦終了。

私はあからさまに、嘆息をこぼした。

「ちよつと待て。それはいくらなんでも無茶だろう」

「何が？」

「ライダーがその場を去るといふ、確率は？」

「五分。十分に賭けれるレベル。あんたが言ったのよ？」

「少し後悔している……セイバーはまだ抵抗している、というのも樂觀だな」

「セイバーの対魔力はAクラス。それに令呪であろうと、どんな契約も相互認定の原理を外れることはない、はずよ多分。セイバーが抗っている可能性は相当高いわ」

「最大の問題は、君がキャスターを止めることが出来るか、ということだな」
「信じて」

畳に散らばった宝石を、一つにまとめて握り締める。

個々に封印された魔力を全て合わせると、大幅な概念形成すら成し得る量の魔力たち。彼女が日々研鑽して積み上げてきたものだった。

「今、このときのために溜めてきた。発散できるんだから、結構楽しみなのよ」
疑念を抱くまでもなかった。

私は湧き上がる気持ちのままに笑って、頷いた。
負けるわけがない。

「賭けよう。あいにく、私のマスターは君しかないからな」

「これ以上ない、マスターでしょ？」

「柳洞寺から無事戻ったら、認めてやってもいいな」

キャスターに挑戦する。

冬の短い一日が、もう終わろうとしている。障子の向こうの窓からは、朱色の光が差し迫っている。逢魔ヶ刻。鬼が跋扈する、魔術師が跳梁する。夜の闇、散らせる火花と宝石は、より明瞭に光るだろう。

最後に、私は確認しなければならないことを訊いた。

「衛宮士郎は連れて行かないのだな」

凜は、迷う素振りもなく答える。

「当然でしょ？ セイバーのいないあいつは、単なる一般人と変わらない。強化以外の魔術が使えない——あんたが言うには他にも使えるんでしょうけど、それでも戦闘に加える技量なんかない。というより、今から教会に行けって言うつもり」

「安心したよ」

「安心って、あんた」

「しかし、君に出来るのか？ 足手まといは来るな、と」

「いえるに決まってるじゃない。何よ、その目」

「いや、なに。大したことではないが、君は衛宮士郎に好意を抱いているのだろうか？ だから私が代わりにいつてきてやろうと思ったのだよ」

「——ッ！ はあ？ つ!？」

「ふむ。間違ってたか？ そこまで狼狽するからには、もしや自分自身気付いてなかったとか言うのではないだろうな」

「ちつ、違うわよなに勝手なこと言ってるのよアンタばかこらー!」

「……凜、仮にも魔術師なのだからもう少し平静を装ってくれ。うろたえすぎだ。私としては面白い限りでありがたいが。まあ任せておけ。なに、心配しなくても君の気持ち

を告げ口などはせんよ」

飛んでくる置時計を避けて、私は部屋を出た。

屋敷を囲っている庭の、隅に蔵がある。自分を磨き上げる狭い空間は、ささやかで貧相なものだったが、間違いなく工房だった。

はつきりと覚えていたわけではないが、懐かしさが無いといえれば嘘になる。窓の格子からの朝陽が、浮かぶ埃を突き刺している風景。無造作に散らばっているようで、どれもこれも思い入れのあるガラクタ達。セイバーとの邂逅も、確かこの場所だった。

衛宮士郎は、そこにいた。座り込んで、鉄パイプを握っている。私が来たことに気付いてはいないだろう。

魔術回路を毎回一から通していく、自殺行為のような修行風景。一般的な魔術師は、魔術回路をいちいち開けたり閉じたりはしない。回路の開閉はそれほど危険が伴い、そもそもそんなことをしなくてもただ開けつぱなしにしとけばよいからだ。無知であり、危険な行為でもある。心臓を動かすために、いちいち胸を切開して自分の手で直接揉みしだくようなものだった。

額に汗の玉を浮かべながら、やがて魔術師見習いは大きく息を吐いた。強化の魔術は、成功している。

「貴様、毎回毎回そんなことをしているのか？」

思わず口から出た。

「なんでお前がいるんだよ」

衛宮士郎は驚く様子もなく、フンと鼻を鳴らしてもう一度鉄パイプに手をかざして魔力のとおり具合を確かめる。私が来ていることには気付いていたようで、あえて無視を決め込んでいたらしい。

「そんなことつてなにさ、未熟者が鍛錬するのは普通だろ」

「方法のことをいつている……しかしこれはまったく、ひどいものだ。凛に一度、教えを乞うんだな」

「なんだよ、間違ってるってのか」

「さあな、そこから聞いてみたらいい。彼女の怒りを買ってせいぜい殺されないように気をつけながら」

なぜこんな場違いな助言をしているのか。さつきと貴様はリタイアだ、といえっただけであるというのに。

恐らく、間桐桜の声を聞いたからだろう、と漠然と思った。

誰かを助けたい、という思いは何かの代替行為ですべきではない。誰かを助けることで自分を満たすということ自体はありうるが、自分の全ての欲求が他人を救うことに集

約されていることは、一つも噛み合わないピースだけでパズルを完成させるようなものだ。

隙間だらけで、押せばすぐに壊れる。目の前の男も、今からこの先、間違いだらけのパズルを完成させていくのだろうか。私がいま感じているこの気持ちは、憐憫にとても近いものだ。

「なあ、アーチャー」

握った鉄パイプを足元に置いて、衛宮士郎をこちらを向いた。

「バーサーカーから逃げるとき、橋の上に他に人間がいたのを、お前知ってたのか？」
今にも泣きそうな目で、そんなことをいう。

「なぜそんなことを聞く」

「三人、死んだ」

「そうだ、だからどうした？」

「三人、死んだんだぞ？」

突如フラッシュバック。

ぐらぐらと、煮えたぎる空が黒く。

ぐらぐらと、地面が揺れている。立っているのもようやく、だった。

ぐらぐら。どこで手違いが起きたのか、何もわからない。

ぐらぐらが、止まらない。

ぐらぐらと、わからなすぎて、私はあるとき、何も出来なかった。

その悪夢は忘れない。目を覆うような黒い炎。その中心に桜がいて、倒れ臥した多くの人。

こんな悲劇、ありえないと、俺は、手にした剣をこぼしそうになって、握りなおした。まるで馬鹿だ。

それでも私は、理想を捨てられなかった。悪夢に苛まれても、前に進むことが正しいのだと、信じて疑わず。

あるとき私は、恨みもし、後悔もし、怒った。

けれど信じることはやめなかった。正しいのだと、決して間違えてはいないと。レールから脱線した音に気付くこともなく。

駆け抜けた。桜を失っても、折れることはなかった。命の限り命を助けて、死んだ後も空っぽの欲望と贖罪を続けることを迷うこともなく、英霊に身を貶めた。

救えなかった人間を、彼女だけに留めておきたい。

それは綺麗な願いだったのかもしれない。

至った結末は、雑草をつまみあげるように、命の取捨選択をすることだった。

あるとき気付けていれば、ここまで愚かな醜態を晒し、苦渋の道も歩むことはなかつ

たのではないかと。

束の間の回想を終える。

「今回の聖杯戦争、負けるわけにはいかない。何かあろうと」

「聖杯のためなら、関係ない人は死んだっていいのかよ……そんな、自分勝手な都合で……！」

「聖杯とは何だ？」

激昂して立ち上がる衛宮士郎に、逆に私は問いかけた。

「それは、願いを叶える」

「そんなものが本当にあるとでも思っているのか、貴様は。いや、お前だけではない。凜も、最たる者はセイバーだ。聖杯を、何か素晴らしい奇跡の賜物とでも思っている」

はき違えているのも甚だしい。

「あれは決して夢をかなえる万能の器ではない。あれは悪夢の釜だ。ぶちまけられた願いは、想像も絶する地獄を実現する」

聖杯に関する正しい知識も戻ってきていた。二度もこの目で見て、体感した。

黒くて、黒くて、眼を覆いたくなる惨劇の朝と夜。

どの願いも、阿鼻叫喚という形でしか具現化できない、出来損ないの魔法のランプ。この世の全ての悪と怨念の集大成は、どうしてこうも綺麗な物だと思われるのか。人間

の欲とは、どうしてこうも盲目なのか。

「今のところ、下らんことに聖杯を使わないと断言できるのは、お前と凜だけだ」

サーヴァントして召還されても、私がすることはそう変わらない。

多くを救うために剣を振るう。その最中に、少数の命を見捨てるということも今までどおりである。

あの三人にしてもそうだ、それ以外に何の方法があつた。私と私のマスター、さらにセイバーにこの男、それらがあの鉄の鬼の攻めから逃げ延びるためには、アレ以外の方法などありえなかつた。より多くを助けるためには、小さな犠牲には目をつむらなければならぬ。

「俺には出来ない……」

「出来ない、だと」

「セイバーは助けなきやならない。何があつても。あいつは俺なんかを必死に守ってくれたし、戦ってくれた。今度は俺の番だ。でも、次はない。三人も死んで、俺は、もう戦えない……セイバーを助けたら、終わる」

もう戦えない。

聖杯戦争を、放棄する、という。

この体、英霊となつてしまった私を消し去ろうという、私の思惑は徒労だったと知っ

た。

目の前の男は、決して守護者にならない。これは、私ではない。

桜の黒い聖杯の前に立ち、何も決断できないまま、この男は眼を背けて殺されるだろう。

戦わない者は、何も失わない代わりに、何一つ得ることが出来ない。

「無様だな。ああ、その姿がお前には相応しい」

「お前にはわからない！ お前は、平気で人を殺す！ 生活に苦しんで国を変えようと思った人たちは、お前は平気で殺したんだ！ 赤ん坊だっていた、その人たちは、苦しんで痛くて」

「なんだと？」

「……あなたの夢を見た。バーサーカーと戦った夜、多分、あの赤い布キレのせいだと思う。大陸風の国だった。あなたは、守護者として」

それ以上いわなくてもわかった。確かに、それは私の所業だ。

バーサーカーに腹を裂かれた衛宮士郎を手当てしたとき、聖骸布の一部を使ったために、私の精神と一部リンクしたのかもしれない。それで、男はあの地獄を見たのか。

「みんな、一人ひとりに夢があったんだ。喜びもあった、悲しみだって、あった。そんなことさえ知る前の、赤ちゃんだったっていったんだ。お前は、それを平気で殺した」

いわれなくても知っている。

身に染みて知っている。だから、そんな青臭い理想論を鼻で笑うことが出来る。

「そうだな。で、それがどうかしたのか」

「な、に？」

「どうかしたのか、と聞いている。いまさら、何を貴様はいつている。命に貴賤はないが、より多くを救うためには少数の命を見捨てなければならぬなどということ、目の前でして見せてやっただろう。橋の上で」

「——ッ、テメエ！」

掴みかかってくる衛宮士郎を、私は片手で払いのけた。勢いあまって、ガラクタの山の中に転がっていく。転がりながらもこの男は、認めない、と暗示のように言うのをやめない。

「人の命の重さを、お前はわからないんだ」

「誰よりも知っているからこそ、だ。守護者として剣を振るう俺が、平気だったように見えたか——貴様如きが……私の正気を、戦いもしない貴様如きが推し量るな。私が嬉しがってやっていると思うのか。人を殺す感触を貴様は知っているのか。赤ん坊の断末魔を聞いたことがあって、貴様は言うのか」

そんな反論が来るとは思っても見なかったのか、座り込んだ衛宮士郎は、半ば呆然と

していた。

「じゃあ、どうして」

じゃあ、どうして——

その答えを私は知らない。答えを求めて走り続けて、どうすれば良かったのかいまだにわからずじまいで、こうとしかいえない。

「私には、それしか方法がないからだ」

その先には笑顔があると信じて、一念に、剣を振るうことしか。

それすらも嘘で、いつだって怨嗟と裏切りと醜悪な呪いだけを背負わされたが。

「ふん。ともかくだ、あれが人の手に渡れば、とんでもない災厄が招かれる。そう、貴様が体験した十年前の火災など、ただのボヤに見えるくらいいな」

「お前、何で」

「死ぬわけにはいかない。敗れるわけにはいかん。あの三人は気の毒だと思うが、運が悪かった。そしてこれからも、勝つためなら誰であろうと殺す。万のためなら十や百の犠牲は仕方がないのだ。それを嫌えば、万のさらに数倍が死んでしまう。理解できないとは、いうまい」

「違う、それは、絶対に違う！」

「何が違うというのだ？」

「誰かが犠牲にならなきゃ築かれない未来なんて」

「では皆で心中をするのか。まさかとは思うが、本気でこの世の全ての人間を幸せに出来る、思っているのか？」

何か、頭の奥に引つかかるものがあつた。一つの単語。この世の全ての人間さえ救える、そんな存在の言葉を、確かなんといったか。思い出せないくらいなのだから、どうでもよいものなのだろう。

「それこそ魔法——違う、決して叶わぬ夢だ。いいことを教えてやろう。聖杯に、この世から殺人をなくしてくれと祈れば、どうなると思う？」

「それは」

「まず悪人が全て死ぬ。将来殺人をおかしそうな可能性を持つものも死ぬ。萌芽であるだけで、人は皆死ななければならぬ。つまり、平和など、どこにもありはしないのだ」

「本当に、ないのか？ アーチャー、本当にないのか？」

ない。

しかし、忘れられない誓い。

この誓いだけは、どうしても消えない。

「それでも、平和を願わずにはいられない——だから、夢に過ぎないという」

衛宮士郎が立ち上がってきた、認められないと、暗示を呟き続けながら。あるんだと、

全ての人が笑って暮らせる世界があるのだと、切嗣の残した言葉に、囚われて、だからそれに縋るしかない歪んだ生き様。

「貴様は結局、責任逃れをしているだけだ。あの三人も、幼少の頃の火事の被害者も、全て自分のせいだと思っているのだろう？——そうだ、そのとおりだ。衛宮士郎という男がいなければ、他の者たちが助かっていた。事実だ、避けようのない事実を、貴様は他の誰かを助けることで、なかったことにしようとしている！」

「違う！」

「人の命を、他人の命で帳尻を合わせようなどというのは、傲慢以外の何物でもない」
「違う違う！」

「眼を背けるのも大概にしろ、そして言い訳をやめろ！ 貴様が何人助けたところで、死んだ人間は生き返りはしない！ 戻ってきやしない！ 貴様はそうして逃げていて、死助けたら助けられなかった分の後悔に充てて、忘れようとしている！ いや、忘れてはいないか。覚えていてということできえ、貴様は免罪符にして生きている。それは生きている人間も死んでいる人間も、果ては自分自身さえまともに見ようとしないう逃げだ——持つべきは、語らず、逃げず。ただ受け止めて見つめ続ける覚悟だというのに」

「違う、違う！——ぐ、え」

感情の激に体がおかしくなったのか、うずくまり、衛宮士郎は口から胃の中のものを

盛大に吐き出した。鼻水と、涙も一緒だ。それらを吐き出しながら、衛宮士郎は叫ぶのをやめない。

「それ、でも……間違っちゃいないんだ……だって、こんなにも綺麗だ……あんなに……人が笑っている姿は、あんなにも、綺麗なんだから！」

過去の自分。

私は、本心で自分が変われるとは思っていない。

矛盾が果たしてどれほど重なろうと世界の監視、調停の握力は私の逸脱を許すとは思えない。

これは怨嗟などではない。

わかりやすい欲望だった。とても単純な、八つ当たりという理由。

たまらなかつた。想像するだけで、暗いものが蠢いた。そして今、想像だけではなく、肉をもってここに。

衝動。それは、どこか性欲に似た。

「正義の味方になりたいっていう——夢！」

殺そう。今ここで衛宮士郎を殺そう。

令呪の縛りなどどうでもいい、ランクが一つ繰り下がるからどうした。瞬間、ぐらぐらと沸騰した脳が、考えること全てをやめてしまった。

あの苦しみを、あの殺戮を、正義の味方などといってこの男は夢見ている。
真つ白だった。

私の手にはすでに干将。

背筋から頭頂へと、刺激が肌を灼いた。今ようやく殺せる。いや、いつでも殺せた、それでも私は耐えたのだ。なんのためにか、忘れた。忘れたが、私は歯噛みをして耐え続けた。赤い令呪の糸が、太い綱となつて拘束を始める。振り下ろそうとする私の腕を、ギチギチと定義が締め上げる。

それで思い出した。凜が聖杯戦争で勝つために、彼女との約束を守るために、私は耐える。

——だから、どうした。

そんな誓いさえ吹き飛んだ。目の前の男は、私の、逆鱗に触れたのだ。

「もう死ぬ」

人一人殺すのに片手で足る刀を、逆手にもつて、殴りつけるように振り下ろした。

衛宮士郎が青い顔をして振り向く。私の放った殺気に、一瞬早く反応していた。のろまな仕草で逃げようとする男。

「——チツ」

令呪の強制力は予想以上だった。こんなときだけ、マスターのキャパシティが恨めし

い。転がっていく衛宮士郎を追う。踏み込んで、さらに二撃目を振り下ろした。とつきに掴んだ鉄パイプが奴を守った。真つ二つになった、鉄パイプ。干将はかすかにやつ胸をえぐっていたが、致命傷ではない。その鉄棒にとつきに強化をかけていなければ、心臓にまで達していたというのに。もどかしすぎるこの怒り。ちよこまかと、貴様は、なんと、生き汚い。

三撃目。それを、衛宮士郎は寸前で防ぎきった。半端な強化をかけた鉄パイプなど真つ二つにする干将を、完全に受け止めていた。

私の干将を受けたのは、瓜二つの同じ剣——干将。

「あ、がああああつー！」

火花を散らす、鏡あわせのような陽剣と陽剣。

「投影魔術だど!? 早過ぎる、貴様——そうか聖骸布の祝福か……!!」

「……ない」

押し合う、衛宮士郎は人間以上の力を出している。筋肉に魔力を流して、強化している。感情の昂りが、そこまでの応用を許したか。もはやスイッチも完全に入ってしまったている。

「死ぬわけには……っかない!」

生きなければならぬ、生きなければならぬ、この男は暗示を呟くことでしか立

つことが出来ない。

「あの火事で、死んだ人のためにも、俺は生きなきゃならないんだ！」

「だからそれが言い訳だという。ならばさつきと教会へ行け、ひざまずいて大人しく祈りでも捧げている！」

「違う！ それじゃ何の償いにもならない！俺が勝つて、争いを止めればいいんだろう！」

「何を言う。お前はもう終わっているのだ。どういう形であれリタイアを考えた。考えたという時点で、貴様は運命に屈したのだ」

「運命に、屈した——？」

この男は、一度背を向けた。セイバーを助けた後に、リタイアすると。

敗北を拭い去ることは、誰にも出来ない。

「そうだ、お前は屈した。抱いた夢も、掲げた理想も、お前は己の非力さの前に曲げるしかない。お前は、セイバーを助けてから、それで勝手に責任を放棄することを選んだ。自分に負けたのだ」

ついさっきの、無様な敗北宣言を忘れたとはいわせない。

無意識だからこそ、そこには何の飾りもない本心がある。

「貴様には何も出来ない。衛宮士郎は、ただ自分が不幸になるためだけに生きている。

そんな男に、出来ることなど何も無い。自分さえ救うことが出来ない人間に、誰かを救うことが出来ると思うのが、そもそもの傲慢なのだ」

「……あ」

それが、至った私の結論。

人を救えるのは人だけだ。幸せになりたいという、大事な部分を欠落させたまま生きただ俺が、元から人を救い続けることなど、どだい無理な話だったのだ。

「俺の、幸せ」

紛い物の干将を、今度は間違ひなく貫き通した。折られた剣は幻想へと戻り、私は何の守りもない衛宮士郎に、右腕を振り下ろした。

刃先は、衛宮士郎を傷つけることなく、石畳に突き刺さった。

目の前にいる男は、すでに根元から折れていた。

殺す気が失せたのではない。

私が耐えることが出来たのは、聖杯の氾濫などで死なせてはならない、より大勢の人の笑顔。その、どうしようもないほどの想いが、私を。

ここで殺せば私のランクが下がる。それでは、聖杯戦争を勝ち抜くことが難しくなる。

「さっさと教会へ行け。セイバーを失った貴様はもはやマスターではない。令呪の染み

た腕を切り落とされることもなく、保護はしてもらえらるだろう。そして哀れに生きていけ。生きなければならぬのなら、空っぽのまま生きればいい。その間違いに気づくこともなく、空っぽで」

本当の人間なら、生きたい、と叫ぶはずなのに。

この男は、生きなきゃならない、としかいえない。

半端に残った理性でそういう残し、私は蔵を後にした。

私の復讐は終わった。この男はかつての私ではない。私が私を殺してこそ、細い細い蜘蛛の糸にすぎずる権利を得ることが出来た。けれどそんなものはどこにもなかった。何一つ言葉をこぼさぬまま、正義を目指した少年は、その果てがただの幻想だったと知り、膝をついた。

凜が待っている。私は思考を切り替えて、骸を背に、歩き出した。

庭から門へ。柱にもたれて待っていた凜が、怪訝そうな顔でこちらを見ている。

「アーチャー、あなた」

「行くぞ。余計なことを考えている余裕はないだろう」

それでも何かを言いたそうな表情のまま、凜は私の後ろについてきた。

道は朱色。影が長い。逢魔ヶ刻。山につく頃には、月も見えるだろう。

第三話

「三人を殺したのは、わたしよ」

民家の屋根の上、柳洞寺への最短距離を駆け抜けながら、凜は吐露した。

「アーチャー、あなたはあの時逃げようといった。それを押し切って、セイバーと士郎を助けに向かわせたのは、わたしの意志よ。だから、関係のない三人の犠牲者は、わたしが」

「やめろ、不毛ない争いだ」

私と衛宮士郎の口論が聞こえたのだろう。殺そうと、干将を振り上げた所も見たのかもしれない。いざとなれば、彼女は衛宮士郎の命のために、最後の令呪を使ったのだろうか。下らない、感傷的な仮定だった。

「士郎は」

「あいつが、なんだ」

奴は運命に屈した。立ちほだかる運命の前に、己が非力さを痛感した。

正義の味方など、なることはない。あの男は、命の尊さに怯えた。失うことはただ失うことだと、何も得るものがないのだと認めてしまった。橋上で失われた三つの命。そ

の代価を支払い続けることの意味。そして、その重さ。

不意に浮かんだ、さっきの衛宮士郎の姿。胃の中のを全て吐き出しながら、涙に濡れながら、それでも誓った願いは尊いものだと呼んでやまない、無様で愚かな姿。折れたのだ。

衛宮士郎は幸せを知らないと認めてしまった。この未来に幸せはなく、目指してきた過去にも幸せはなく、そんなもの全て子供の頃の火事で燃やしてしまったのだと。

正義の味方などという幻想を求め続ける道程。人を助けるのは人。自分すら救えない人間に他人を救う術はない。これほどの自虐もあるまい、と思いつつ。

しかし。

ひざまずき、倒れ臥し、背骨を叩き折られ、なおそこから立ち上がれるなら――

「あいつはリタイアした。敗退した者の話などするな」

下らんと、言い捨てて私は先を急ぐ。馬鹿馬鹿しい考えも捨てた。今は戦いだけ考えてればいい。

凜はなお続けた。

「士郎だけじゃないあなただって」

「私が、なんだと?」

「そんなに、辛そうにしてるじゃない」

喉に詰まりかけたものを、無視して答えた。

「ふん。とんでもない言いがかりだ。後でじっくりと問いただすことにする」

「バカ——こつちだつて、訊きたいことは山ほどあるんだから」

だから絶対生きて帰る。

いつの間にか辿り着いたその山の入り口で、漏らした言葉はさんざめく林にさらわれた。

禍々しいまでに瘴気が濃い。頂上に仏を据えた山というのは、清浄な空気を纏うはずである。それをここまで、血生臭い魔力の匂いで満たす、相当な力を溜め込んでいるとわかる。

くつと歯噛みして、凜が頂上へと至る長い長い階段を駆け出した。私は無言でその後続いた。

階段を登っていく、遠くに小さな山門が見え出す。彼女には見えなくとも、私の目にははつきりと見えた。

「凜、止まれ」

前へ出た。男は、楽しみに目を細めて、こちらを見下ろしている。

不思議な光景だった。障害は、自身を障害だと主張するか、そうではないと否定するかのとちらかに分類される。前者はその姿形で重圧を与え、後者は陰に潜みひたすら必

殺を待つ。

山にかかった階の頂上に、一人の男が立っている。その男はどちらでもなかった。山門の前、月を浴びて居る。そこに居るために居るのだ、とでも言うようだった。どうも敵らしいと、すらりと伸びた、身の丈より長い日本刀がそう思わせる。

しなやかな風の中、皆無の隙を背負って侍は立っている。

だが六騎の英霊は既に知られた。この男はアサシン以外にありえない。立ちほだかるならば、打ち倒すのみだった。

「アサシンまでいるなんて……！ 今回のマスターは腑抜けばかりってわけ!？」

「下がっている」

告げて、階に足をかけた。一歩ずつ、登っていく。

「アサシンか」

さもどうでもよさそうに、男は答えた。

「見よ、よい月だ。いくらか落胆し通しの二度目の身だが、こればかりはあの頃と何も変わらぬ——いかに。アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎」

驚きはしなかった。英霊として呼ばれるにはあまりに不適なその男にとって、真名を隠すという行為はどうでもよいのだ。

佐々木小次郎。天下一の技量を誇った、極東の侍。

「あいにく誇りなどドブに捨ててしまつてな。答えようとは思わぬよ」

「かまわぬ。さりとて些末なことよ。のう？ 劍使い」

「——貴様」

「バーサーカーという出で立ちでもない——アーチャーか。されど気配は劍のそれ。豪奢よな、此度の聖杯戦争は私を含め刀劍が三本。セイバーとの戦は叶わなかったが、代わりの相手を見つけて良しとするのも悪くはない」

「セイバーをどうした」

「無粋なこと。最強の劍技を誇るといふあの少女も、その誇りすら今宵限り。刃を交えてみたかったがそれも叶わぬ。小憎たらしい女狐に、油揚げをひよいとさらわれた気分だ」

「そこをどけ」

「生憎、そういうわけにもいかぬ」

「ならば朽ち果てろ」

「参れ」

番えた弓から、銀の矢を放つ。

その数四。左右の林を縫って行く二本。石段スレスレを飛び込んでいく一本。それから三本は陽動であり、本命は上空に打ち上げられ刀の隙を狙う最後の一本。

「弓手の真似事は出来るようだな」

佐々木小次郎と名乗った男は動かなかった。右に半歩、石段を一つ降り、構えもないまま無為に長刀を払った。

それで陽動の三本は全て死んだ。林より飛び出した二本は狙いを穿つこともなく交差し、反対の林を蹴散らしながら外れた。下段を狙った三射目は胴を断ち割られ、背後の山門に届くこともなく霧散する。最後の上空の一本。

アサシンの頭蓋に突き刺さる直前、狙いも重力も逆らったそれは、グルンと光を翻すと射手である私に向かって反転した。

莫耶で切り捨てる。

「燕に劣る」

背中を冷たい汗が伝った。悪夢のような技量に、私は畏怖を覚えた。

どうすればそのような見切りが可能となる。ありえない尺の長刀の動きは精密を極め、細い銀の矢を撫でて巧妙に軌道をずらされた。

が、それだけだ。

「それがどうした」

「確かに。こんなものは小手先の遊びに過ぎん。お互いにな」

打ち合え、と。

私は自分が放った矢のように、階段を駆け上がっていく。

位置は不利だった。私の握る双剣の、数倍にもなる間合いを誇る長刀は、ゆらゆらと流れてはいる。しかし一たびその時が来れば月光さえも切り裂くだろう。

だが、言った。それがどうした、と。

干将莫耶。突っ込んだ。臆することはない、足下の不利など力技で撥ね退ける。ランサーのように、相手を威圧するようなものはない。手にしている長刀も、見事な業物だが宝剣や魔剣の類ではない。

数歩の間合いを詰めようとして、
首。

刃が、閃光のように。

「な、に」

ついさつき駆け抜けるために蹴り出した足を、今は後方に逃げる為に蹴る。

その一撃を防げたのは、長刀が月の光を照り返したからでしかない。双剣を繰り出そうと右手を握り締めた瞬間、風のような切っ先が私の首先を舐めたのだ。

「惜しいな。もう半寸見切るのが遅かったのなら、その衣がさらに濃い朱に染まっていたものを」

月下。流麗の文字を体現したような男は、言葉を風に乗せた。

圧力のなさは、決して威力のなさを証明しているわけではない。誘われ、不用意に進んだのなら、首は胴体から容易く離れる。

私が振るう双剣の隙間を縫うように、歪曲する焔めきがただ必殺だけを狙ってくる。水のように、押せばいなし気を抜けば間隙を縫って溢れてくる。圧力がないからこそ、純粹なまでの殺意が、何の隔たりもなく迫る。返す刀が速い。長刀は、まるで生き物のように空間をうねる。主より、まずはその得物を叩き折ろうと莫耶を振っても、どんな軌跡を描いて回避するのか、次の瞬間にはこの首筋に迫っている。

見切れ、この眼は猛禽のそれだ。鍛え続けてきた自身の力だからこそ、上のない信頼がある。

「田舎侍が、よくも吼える——」

剣筋は一度見れば十分だ。柳洞寺に至る、二度目の登攀。駆け上がり、疾風のように迫る一撃を干将で受ける。翻る物干し竿を、追って、脳天を襲う二の太刀を莫耶が。三つ目の太刀を、回転を上げた干将。しかしそれ以上に、侍の刀は素早さを増して迫る。一つ余さず、全て急所。一步も踏み込めない。五尺の距離が、ここまで至る石段の長さより遠く感じる。

余計なことを考えるな。

目を凝らせ。しくじれば、その瞬間にまるで鶏のように首が飛ぶ。

佐々木小次郎と名乗る男に、宝具はない。魔力すらない。

手に一刀。磨いた技量は、世界を変えた英雄の域にまで達する。

構えすらない、流れるような自然体に、磨き上げた技の果てに、辿り着いた境地を見た。

打ち合い、いなしいなし合い、どれほどの合を重ねたのか。

干将莫耶、身を灰にした夫婦の守りは鉄壁だ。ただそれだけで、この首がまだ残っている、滴り落ちる血液が胸に伝った。避わしきれなかった刃が、首筋を何度も掠めているのだ。

だといって、ただ無為に受けただけではない。打ち合いながら、アサシンの繰り出す剣技の軌道を私は読みだしていた。どんな使い手であろうと、必ず癖は存在するのだから。

迫り来る刃を、右剣で払った。アサシンの次の攻撃はそこから滑るように速度を増して、一撃は首筋を狙ってくるはずだ。進む細身の銀色。そこに、渾身の一撃を叩き込む。

そもそも日本刀は刀剣同士の斬りあいを目指さない。平面を舞い、一撃に賭ける切断の武器。西洋の剣のような肉厚はなく、細身の、しかもこの尺の長刀のことだ。真つ向からぶつかり合えば、叩き折ることが出来る。

アサシンも承知の上で、あえてそういう風に戦っている。真つ向から斬り合はず、私の剣をいなし、間合いの外から急所を目がけて的確に刃を滑らせる。

だから頼るべくは、観察眼による読みだった。

「しっ！」

読みどおり、切つ先は真つ直ぐに私の首筋へと迫り来る。迎え撃つように黒く染まつた陰剣。叩き折れると、確信した。軌道が交差する。砕いたあとは、五尺の距離も一歩で踏み越え、陽剣でアサシンの胸を貫く。この、一撃で刀を砕ければ。夜の闇に透き通る剣閃。私の左剣とかち合う瞬間。

そして軌跡が歪んだ。

あるはずの手応えが、どこにもなかった。

決定的だと繰り出した一撃を、完全に回避された。私はいま無防備だ。莫耶は死んだ。干将も間に合わない。アサシンの殺気。空気が断たれる音が聞こえる。

馬鹿な。考えている暇があったら飛べ。

「ぐうっ、かつ」

後先など毛頭ない。今という窮地を脱するだけだ。石段を蹴り、背後の闇へと身を投げた。

追い迫ってくる長刀が、私の背中を切りつけた。その焼けるような痛みが、逆に私の

冷静を維持させた。石段を無様に転がり落ちる。アサシンの制空圏から逃れることだけを考えて。

真一文字に斬られた背中に、手を当てた。ジクジクとした痛みがある。私が輪切りにされなかったのは、何のことはない。石段一つ分の高さの差だ。傷は浅く戦闘に支障はないが、アサシンの壁の前に、私は完全に止められた。

「アーチャー！」

「まだ手はある」

まだ、敗北を喫したわけではない。この身が消え去るその時だけが、敗北なのだ。フエイルノート。

剣技の差は、雲泥の間より大きい。わざわざ、相手の土俵で勝負する理由もない。

干将莫耶を消す。弓と矢をもう一度構えた。

バーサーカーに撃ちこんだ時のように、ありったけの矢をつがえて解き放った。

二十二発の銀色の流星は、石段の上を、林の中を、あるいは上空を。アサシンの体に突きたてようと疾走する。ただ斬るだけで防げる量ではない。私は着弾を見る前に駆け出した。体勢さえ崩せればいい。そのまま一撃を加えればよし、そうでなくても山門の中に駆け込むことが出来る。

殺到する矢を前にして、佐々木小次郎が初めて構えを取った。だらりと下げられてい

た、物干し竿と呼ばれる五尺の刀が、初めて獲物を切り殺す姿勢を整えた。

そして言う。

「——見逃すな、これが唯一にして最も秘する、技」

正面から三本、右から二本、左から六本。

当たった。そう思った時には霧散していた。三方向からの攻撃は、全て同時に攻め立てるように放っている。その全てが、全く同時に消えた。時間差で迫る、上空からの三本、再び正面から五本、さらに地を這うように迫る二本。もはや当たるとは思えなかった。私は駆け抜けていた足を、おしとどめ、目を凝らしてその剣の軌跡を追った。

竹のように割られ、霧散する矢達。切り裂いた刀の軌跡は三つだった。

完全に『三つ同時』だった。

一本しかない刀が、一振りで三つの軌跡を描く。それは一体、どんな魔法か。

「燕がな」

一つ余さず切り捨てて、佐々木小次郎はひどく遠い昔のことを思い出すような顔をしていった。

「この刃を逃れるのだ。するりと。あやつらは見て避けるのではない、その体で感じているのだと、気付くまでも長かったが、これを身につけるために費やした歳月の比ではないな」

「一度に、三度だと……」

「こう斬つてはこう避ける。ああ斬つてはああ避ける。ならば、逃げ場を無くしてやればよい。ただひたすら刀を振るって幾星霜、かくして私が身につけた唯一の技だ。秘剣の名を、燕返しとつけた」

「いうほど、それは簡単なことではない。いや、違う、不可能なのだ。」

「壺と忒と参。三方向からの太刀は、全て同じ刀のものだ。一度振る刀に、空間と時間を捻じ曲げてさらに二つ。悪夢のドツペルゲンガさえ子供だましに貶める、事象を捻じ曲げる、多重屈折現象。」

「寶石老の名を冠する、それは壮絶な奇跡の領分だ。」

「刀の檻だともいうのか」

「檻か、言いて妙よな——檻に飛び道具は利かんぞ」

「あれで終わ리と思われては困るな」

「あの程度の矢、夜すがら続けた所で眠気覚ましを越しはせん。だとして、お前の精根が尽きるか娘の命が尽きるか、どちらが早いかな」

「私と、斬り合いを望むのか」

「然もあらん。見たところ、明国の夫婦剣だけ、というほど芸が小さいわけでもあるまい。楽しみを奪ってくれるな、アーチャー。お前の繰り出す刃と火花を散らすのは存外

に心地よい。愚直な太刀筋だが、それは一念に鍛えた見事な絵だ」

侍は、嬉しそうに笑った。

この男に、目的や望みがないことを、私は理解した。望みというのなら、今この瞬間を指すのだろうか。求める理由すらなく、純粹なまでの、刀を交え敵を打ち破る喜びだけがあるのか。

「続いだ。存分にさらけ出せ。それでも私の秘剣をかくぐるのは容易くは——愚図愚図しすぎたか」

言葉を途中で切ると、アサシンは詰まらなさそうに山門まで足を引いた。

そして山門の奥、ふつと沸くように、二つの人影が浮かび上がっている。

どこかで見たような影は、口元にどうしようもない笑みを浮かべながら、言う。

「どこかで見た虫と思ったら、いつかの公園のアーチャー。うふふ、来たのね」

キャスター。では、その横のもう一人は誰なのか。白いドレスに身を纏い、両手首を赤い糸のようなものでくくられ、吊るされている。

それはどこか、耽美的な終末絵画のようだった。

「セイバー！ キャスター、あんたセイバーを！」

「ええ、抗う姿はとても可愛かったわ。でもまだ安心していいわ。この子、どんな痛みを与えても、絶対にうんとは言わないのだから、困っているくらい。それでも今宵限り、そ

ろそろ飽きてきたし、この令呪を使えば全て私の思うまま」

キャスターの背後で、赤い鎖のようなものに掴まったセイバーの姿。鎧ではなく、白いドレス。剣を取って戦う彼女にとって、それこそが最大の冒険だろう。懸命に、歯を食いしばって耐えている。赤い手錠から、時折電気のようなものが走るたびに、セイバーの苦悶が山の中で空しく響いた。

「その男を突破して、ここまで辿り着いたのなら返してあげる。ふふ、ふふふ。嘘だと思う？ 本当かもしれないわよ？ ふふ。確かめるためにも、ここにやって来なくてはね。小娘、あなたは来れるでしょう、邪魔者はアサシンが止めているのだから気兼ねなくおいでなさい。約束するわ、セイバーを返してあげる。嘘はつかないわ、確かめにおいでなさい。ふふ、ふふふ。本当よ？ ふふ、あはは」

「凜、相手をするな。この男を倒しさえすれば済むことだ」

「あら、あなた倒せるの？ じゃあ今すぐセイバーを虜にしないとね」

「……キャスター、楽に死ぬると思うな」

「馬鹿な子は嫌いよ。この身は一度死んでいるなんて、貴方にだってわかるでしょう。今さらそんな脅しがきくと思つて？ 浅はかさも大概にしないと不愉快に至るわ」

「アーチャー、もういいわ」

「駄目だ、相手にするな」

凜が、一步踏み出してきた。

このマスターの考えなど、聞かなくてもわかる。私は自然と声を荒げていた。

「待て、凜！」

「三つ数えたらダツシユする。アーチャーはアサシンを止めて。その隙に私は柳洞寺に入るから」

「下らん罫に乗ることはない！ ライダーとキャスターを同時に相手できると思っているのか！」

「それでも、しなきやならないでしょ！ 大丈夫、打ち合わせどおり、慎二に不意打ちかませばライダーは消える。そうなれば、ほら。キャスター対わたし。何の問題もないわ」

「馬鹿な！ 君はそんな甘い考えが！」

「セイバーが完全に落ちたら終わりなのは知ってるでしょ？ ——待ってるから、早く来なさいよ。でないといわたし、死んじゃうんだから。三」

二。

止める暇はない。彼女の意識を奪おうと首筋に肘を叩き込もうとして、それを知っているように凜は一を数える前にもう駆け出していた。不愉快そうなアサシンから、繰り出される刃。私も地を蹴った。もどかしさ、怒りが渦巻いていた。凜の首に迫った白銀

を、寸前で干将が受け止めた。そのまま翻り、私の眼球に迫る切っ先を莫耶で受け止める。二撃目を防ぐ。反撃を叩き込もうとしたときには、遠坂凜の姿は山門の中に溶け込んでしまっていた。

消えていく後姿は、忘れることの出来ない、遠い理想に似ていると、思った。

「セイバーがあの子の手に落ちるのは愉快ではないが、何人たりともこの門を通すことは罷りならん——セイバーを取り返したくば、押し通る他ないぞ」

レイラインが切れている。境内の内は、キャスターが練り上げた要塞だ。外部からの干渉を遮断する程度の施しは当たり前だった。

息を吸って、腹に溜め込んだ。遠坂凜は頭のいい魔術師だ。すぐさま敵の虚をつける。と判断したのなら即座に行動し、そうでないときは私の到着を待たために、時間を稼ごう。

矢は通じない。

干将莫耶は守りの剣。頭上の不利、リーチの差、技量の差。突破は難しい。

こみ上げてくる焦りを押し殺した。対処法はいくらでもある。が、魔力量の消費が半端ではない。この先にキャスターと、下手を打てばライダーとの連戦が続く。セイバーの契約の鎖も絶たねばならない。だといって、この場で凜を失うなど言語道断だ。

元より、考える時間が一番惜しい。

「I am the bone of my sword——カラドボルグ、デユランダール！」

新たな二本を作り出し、三度アサシンに向かった。尺も伸び、切れ味も上がっている。それゆえに、夫婦剣の堅固さを捨てた。守りを考えて、打ち破れる敵ではない。他の概念武装を呼び出すにも、詠唱が必要なものは——詠唱、だと。

騎士剣を扱いながら、ふと私の内に一つの疑問が起こった。その疑問が明確な形となる前に、衝撃が空気を伝ってきた。

地面が揺れ、怒号が鳴り響く。震源も音源も、境内の中だ。戦いが、始まった。偽臣の書を燃やすことは出来なかつたか。

このままでは凜が死ぬ。為す術もなく、私はここで足止めを食らっているしかないのか。再びこの世に戻り、彼女への恩返しも誓いも守ることが出来ずに、私は何をしている。何たる無様だ。しかし、私には、手がない。

日本刀の切っ先が、私の喉を浅く切り裂く。

「考え事をしていると、マスターより先に消えることになるぞ」

「アサ、シンツ——！」

カラドボルグで突き、デユランダールで斬りつける。得物を変えたところで、展開は何も変わらない。アサシンの刃を交わし続け、距離を埋める隙を探すだけ。つまりはただ

ひたすら、膠着することと変わらないのだ。

それでも打ち続ける。五尺の差を消し去ろうとする。その行為が、何か暗示的なものに思えて仕方ない。だったら、凜はこのまま死ぬのか。馬鹿な。

頭上の有利が、アサシンの技量をさらに助けていた。空しいまでの打ち合いの中、境内の爆発音が未だ消えないことだけが、せめてもの救いだったが、それこそいつ消えるやも知れない。

腕一本を犠牲にして、敵を打ち破る方法はある。今の私なら、腕一本なら喜んで差し出そう。けれど、目の前の男は腕など見てはいない。首と、心臓。これほど端的に、純粹なまでに殺すことしか考えていない刃もない。例えばアサシンに一撃を加えられたとしても、私の首が刎ね飛ばされているのなら、何の意味もない。

不意に、境内から聞こえ続けていた、魔力の炸裂音が途絶えた。

剣を振るう。これしか知らないとばかりに、今までしてきたように。

音よ、戻れ。

音。どんな音でもいい。首を狙う物干し竿が、肩を抉った。

音よ。

戻れ、凜。

そして、何か聞こえた。

ガラスが破砕するような剣戟音の中で、ただ一つ違う音が聞こえる。それは何の音か。段々と大きくなる。何の音だ。背中から聞こえる。双剣を振り回しながら、私はその音に耳を奪われた。

その音の真実を、にわかには信じがたかった。
ひざまずいたはずだ。

倒れたはずだ。

もがき苦しんで全て吐き出したはずだ。

生きてきた理由を否定され、論破され、存在そのものが間違いだと気付いた。
戦えない。戦うことを放棄した心。

では、何故この男はここにやって来たのか。

打ち合う私とアサシンの隣を、駆け抜けていく赤い髪の男。衛宮士郎。

人は、信じていた理念が崩れても、生きることが出来るのか。

背骨を叩き折られたとしても、再び立ち上がることが出来るのか。

刹那、交差する瞳と瞳。

私は自分でも不思議なほど自然に、その男に凜の命運を託した。

駆け上がっていく小さな背中、私が切りつけた傷もそのままに。

ただ一途に、山門へと消えていく。

第四話

小さな背中が山門に消えて、山を揺らすような爆音が、再び鳴り響きだした。どこかで聞いたような剣戟音も、途切れることなく届く。

偽臣の書はまだ焼けてはいない。ライダーの姿が飛び出して来るのを期待するのはいささか安直過ぎる。衛宮士郎が投影を使いこなすのは、まだまだ後の段階だ。脳髓を焼ききりそうな痛みにも耐えながら、干将莫耶を振っているのが精一杯だろう。力を十全に發揮できていないとはいえ、ライダーがサーヴァントであることに変わりはない。拮抗していることだけでも、十分すぎた。

衛宮士郎が、まさか来るとは思わなかった。その是非を、今は考えまい。考えるべきことは他にある。

我がマスターは生きている。衛宮士郎も戦いの場へと再び足を踏み入れた。

その二人を目の前にして、私一人がこんなところで足止めを食っている。そんな事象は存在しない。

「考えごとはやめておけ」

つまらなそうな呟き。迫る不可解な太刀筋の袈裟斬り。弧を描いたのちに反転する、

今まで見たこともない太刀筋。それを弾く。この邪剣使いに、まともな一刀など期待する方が愚かだ。

さらに追い討ちをかけてくる銀色の刃を、しやがみ込んでかわし、デュランダルを突き出す。物干し竿目掛けた突きを、焦る風もなく簡単に流される。

剣技で勝機はない。さらに振り下ろされる一撃を、左剣の腹で受け流して、私は跳躍した。

空っぽの空へ。月を背負って、私はデュランダルを口に啞えて空いた手に弓を持った。

「来い、先の竹とんぼのような遊戯で失望させるな」

アサシンの声。その通り、しがない模倣には違いない。だがこの玩具は人を殺せるぞ。

骨子を捻じって狂わせる。歪ませた私だけの剣の矢。目一杯に引き分けて、解き放つた。

「偽・螺旋剣——カラドボルグ——」

錐揉みながら空気の断層を切り裂く、穿孔の矢。

赤熱化して、門番の侍に断罪の鉄槌が落ちていく。

巨大な鉄橋さえ砕く一撃だが、それもまた、奴のいった竹とんぼの焼き直しでしかない。

かった。

威力も慣性も技で殺し、侍の一振りでも直角に曲がった螺旋剣は、見当違いの林の中で持てる熱を撒き散らして爆発した。橋を粉微塵に吹き飛ばした剣は、アサシン一人突き破れずに、林の木々をやけくそのように燃え散らかしていく。

カラドボルググラスの打撃力でさえ、容易くいなししてしまうのか。着地をしながら思った。

「流石に、アーチャーか。だがこの身、この刀を扶るにはあと百は撃たねばならんぞ。それほどの時も魔力もあるまい」

山門の奥では、魔術の衝突が作り出すオーロラが光り続けている。かすかに、剣戟音も混じっている。だが、いつまで保つかわかったものではない。どこか楽しそうな、アサシンの顔。

時が惜しい。

考えろ。凡人の私が、考えることをやめたのなら活路がどこにある。隙を探せ、目は物を見るだけのものではない。一挙手一投足を、洞察しぬく心眼。それこそが、私の鷹の目の本質だ。

何かを見落としている。私は、重大な何かを見落としている。

思い出せ、何か不自然なことはなかったか。アサシンになくてもいい、林でもいい、こ

の石段でもいい。私自身、何か不自然はなかったか。

思い当たる節が、一つだけあった。私は手に持つ武器を選ぶとき、詠唱の長さを気にしていた。それは、いい。詠唱の文節はシングルに近づけば近づくほど良いなど、誰にでもわかる。重大なのは、その理由だ。詠唱が必要な武器をどうして使えないと思うのか。詠っている間に、切り捨てられるからだ。どうしてそう考えるのか。どうして、詠唱が長いと不利に立つのか。隙があるから。隙があるとどうなる。攻め込まれる。攻め込まれるから、隙を作ることとは絶対にしてはいけない。

だが、今まで一度でも、アサシンから踏み込んできたことはあったのか。

食い込んだ杭が外れ、思考の歯車が回転を取り戻した。

アサシンは、ほとんどあの山門を動かこうとしない。頭上の有利は確かに重要だが、奴ほどの力量があるのなら私を仕留める為に駆け下つてきても問題はないだろう。高きより低きを見るは勢いこれ破竹、を知らぬわけがない。何より、あの男には燕返しという秘剣がある。

そしてもう一つ、決定的なもの。一度目に放った私の矢。下段から突き進んだ三本目を、回避したというのにアサシンはわざわざ切り捨てた。山門へと向かうだけの矢を、なぜ切り捨てたのか。

それを、守らなければいけない理由とは。

「貴様——正規のサーヴァントではないな」

悟られた不利を、おくびにも出さずにアサシンは答える。

「隠すことでもないな。左様、この身はこの場に縛り付けられたただの門番。主もなく、怨霊と大差ない粗末なものだ」

忘れていた事実。佐々木小次郎がどうして「アサシン」などという不適過ぎる配役を演じているのか。佐々木小次郎というその剣客も、英雄としては不足すぎる上に、アサシン。どこかに歪なものがあつたとしか考えられない。

例えば、マスターが正規の存在ではない。

全てに合点がいった。

「なるほど、貴様を呼び出したのは人間の魔術師ではなく、キャスター。呼び出したはいが契約できないという理屈を、その山門にくくつたことで誤魔化したわけか。あの女めが、やってくれる」

「どうでもよいだろう」

頭上で、流麗に髪をなびかせながら、幻想に生きる侍は答えた。

「そう、そんなことはどうでもよい。あの女の思惑も、この身の不遇も、満足に刀を振るうことも出来なかつたことも、佐々木小次郎の虚実も、もはやどうでもよい——話はそれも明瞭。貴様がこの門を抜くか、我が刃に破れるか、それだけだ。それだけだろう」

来いと。この私を楽しませろと。磨いた剣を披露せよ。鍛えた技を出し尽くせ。その全てを見た後に、我が秘剣の露と消えろ。アサシンの周りに揺れる、竹を割ったような殺気が、何よりはつきりとそう告げていた。存分に、死合おう。

その言葉に、かすかに惹かれるものを感じつつ、私は振り切った。

「いや、斬り合う気はない」

振り返り、私は石畳を降りていく。登るのではなく、下りていく。長い長い石畳を、登ってきたときと同じように一歩ずつ下りて行き、第一段目にまで戻ってきた。

アサシンは追うことが出来ない。土地に縛り付けられた、門番なのだから。

柳洞寺へと繋がる、まるで地獄へと落ちていくような階段。

佐々木小次郎と呼ばれた男は、遠きその地獄の底で、紫銀の光に揺れている。

「未だ大道芸を続けるか、アーチャー」

「なに、今までののは単なる余興だ。楽しんでもらうのは——これからだ」

組み上げる記憶の欠片。

キヤスターがルールを破ったように、私も破ろう。

投影魔術に特化したこの魔術回路。その中でも、私は剣とそれに連なる武具しか練り上げることが出来ない。せいぜい鎧か、盾。そんな私にとって銃火器は全くの分野外であるし、イメージで作り上げることなど不可能だった。

だがこの一丁だけは、例外に当てはまる。

拳銃の骨子を把握できず、基本理念さえ習得出来ない私が、なぜこの黒い銃身を持っているのか、簡単なことだった。一つ、これは銃の形をしているだけだ。過去、これは槍であった。剣であったかもしれない。それがたまたま、この形をしているだけのこと。

二つ。聖骸布以外に、これが、私が持っている数少ない贋作ではなく、実物だということ。

グリップを、握りこんだ。

「種子島か」

遠く地獄の釜の底、それでもアサシンの声は朗々と響く。

「この銃は不良品でな——いや、それは私の方か。どうしても上手く扱うことが出来ない。威力だけなら一級とはいえ、放つまでに十秒もかかるのだから話にならない」

「フン、この刃が届く所にいたのなら十を五回は切り捨てられるが、この距離だ。しかも長旅も出来ない身と来ている」

「手段を選んでいられる場合ではないのでな」

「無用な気遣いだ。生前、そいつを斬ることは叶わなんだ、意趣返しと思えば興も乗る——斬り捨てればよいだけのこと」

構えた。刀と銃、お互いに。

この間に、もはや何のしがらみもない。私はただ撃つ。小次郎はただ斬る。あるのはそれだけ、純粹で、わかりやすい。まるで今宵の月が尖っているように。

魔力を注ぎ込む。

十秒も待たなければならぬ武器に意味はない。身動きの取れない相手にのみ、通用する間の抜けた武器だった。それでも聞き及んだところによると、これは遠い未来、星の分身さえ撃ち殺すシロモノに昇華する。

接続。

荒唐の果てに、地球という『世界』が死んだあとに生成されるといふ終末の筐体。星を殺すとされる銃身は、純然たる終焉を呼ぶために過去の全てを凌駕しなければならぬ。搾り出されるような一滴の破滅は、貪欲な意志さえ持った。破壊という可能性の終着に立つために、過去に向かつていくつもの子を産んだのだ。あらゆる時代に産み落とされた可能性は、殺し合い研磨され、未来の最終形態をより高みに昇らせる。

生前、ソカリスという女から譲り受けた、その百番めの子のレプリカ。

どの仔も暗黒色を持ち、二つ名はブラック・バレル。

風が木々を揺らした。さんざめいて、恐ろしさに震えているのか。

魔力をつぎ込んでいく。まだ三割を超えてもいない。掌に収まるようなピストルは、

貪り尽くすように魔力を飲んでいく。

アサシンは動けない。土地に縛り付けられた靈魂は、それ以上離れることを許されない。それに恐らく、動いてはならぬと令呪で縛られている。木々のざわめきが消えた。境内の炸裂も消えた。胸の奥、あるはずのない鼓動の音だけが、嫌に五月蠅い。

佐々木小次郎が構えを取った。神仏の理に挑んだ、執念の構えを。
満ちる。

十秒など、誰が長いといった。まばたき一つや二つではないか。

最初で最後の引き金に手をかけた。

「——『ロンギヌス』——」

ノートオン。

閃光が山の闇を叩き潰した。

力が、溢れた。膨大な増幅に、私は反動で飛びそうになる体を懸命に押さえ込んだ。

小指ほどの銃口から飛び出した、定義さえされない純白のエネルギー。石畳を消し去りながら、疾走する破滅の仔。それは真実、何者をも殺すだろう。猛烈な反動に痺れながら、私は弾丸の軌跡を追った。立ちほだかれるものなど居るはずがない。石畳の幅を超える容量の前に、元より逃げ場などない。

圧倒的な奔走、白は真紅へ変わり、濃紺となり、紫の尾を引いて灰色と化し、最後は黒に染まる。とぐろを巻いて目標へ肉薄する。轟音は世界の断末魔を聞くためにある。これは星を殺すための予行である。弾頭は、極東の島国でわずかに名を馳せた侍など、消し炭さえさらに燃やして無へと投げ込むだろう。

圧倒的。

しかしその圧倒を、静かに見つめる二つのまなこ。

絶対の消滅を前にして、侍は、煌く刃を翻し、詠った。

「燕返し」

侍は、ただすべきことをした。最強を信じる、己の全力の一刀。

振り下ろされる細身の刀。怒濤のような爆発の前で、その姿は馬鹿馬鹿しくさえあった。走った罅は三つだった。

滑稽に見えた一刀の前で、駆け抜ける三本の亀裂。触れれば溶けてしまうはずのエネルギーの塊に、糸でも通したかと思うような切れ目が三本駆け抜けた。

それはどんな魔技か。音を置き去りにする速度に対して、三度も刀を振る時間などあるはずがない。しかし通った軌跡は三つ。同時に参撃したとしか思えない、一振りです度斬る。天上天下、その男のためだけの、キシユアゼルレッチ。秘剣、燕返し。

切断。

星を殺すことになるありえないはずの銃撃は、空間を凌駕するありえない斬撃に断たれた。

六色の竜に似た銃弾は、交差する三本の亀裂に六匹の蛇に変えられ、のた打ち回り雑木林と地面と山門を根こそぎ抉り飛ばした。咆哮は断末魔に似て、六つに分かれた星条の筋は、生まれた場所に帰っていくように、真つ黒な夜空に遡っていった。

私は、思わず呟いた。

「佐々木、小次郎」

もはや人の技ではない。

一刀神力を超える。技量の極みの前に、神殺しの銃槍は敗北した。

分断された六本の弾丸が巻き上げた土煙が、ゆるゆると風に流れて晴れていく。視界がはつきりとする前に、力を一つ残さず吐き出した拳銃は、砂塵になって崩れ落ちた。世界すら干渉できない荒漠な未来へと、還っていったのだ。

私は階段を登っていく。やはり、一歩ずつ。土煙が晴れるのが、無性に遅く感じられた。その侍の姿。アサシンに抱いた、敬意に似た感情のせいかもしれない。

地獄の底へと登る階。放たれたブラックパレルの銃創をなぞるように歩き続け、私は再び山門の前に立った。

佐々木小次郎は、変わらない月を見上げていた。

この男は勝つたのだ。ブラツクバレルの熱に侵され、釘のように小さくなるまで溶け尽くされた日本刀。神々しきささえを感じる、小指ほどの玉鋼の結晶だ。アサシンのサーヴァントは邂逅の時と寸分の違いもなく、立ち尽くしていた。

「見事、侍」

私の言葉に、アサシンは満足気に微笑む。

「なに、斬ろうと思えば斬れるものだな——意趣返しなる、か」

穴があき、向こう側が見える腹をおかしそうに撫でながら、血一滴口からこぼすことはなく、侍は声を上げて笑った。

握る刀が銃弾の熱に耐えられる物だったのなら、もしかすればアサシンは無傷でここに立っていたのかもしれない。ロンギヌスを切り裂き、なおかつ軌道さえ逸らしきり、無傷だったのならば、私に為す術はなく、この階で朽ちていたのは逆だったろう。

笑い疲れたと言って、アサシンは石段だったものに腰を下ろして言った。

「あの少女の剣気は清らかで好ましい。王道こそが似合うな、外連に染まるのは忍びない」

願わくば彼女と剣を交えてみたかったと、もはや叶わぬ思いを清々しげに含んで。

私は何も言わず、石段の最後の一步を登りきり、真紅の川を腹から流すアサシンの横

を通り抜けた。

歩き出し、速度を上げて走り出す前、口を突いて出た言葉。

「さくらば巖流」

木霊す、侍の声。

「ゆけ、賈流」

山門をくぐった。

第五話

山門の中に踏み込むと、魔力の濃度にむせ返りそうになった。

蒐集され続けた莫大な魔力が、ここを一つの世界から切り離していた。

キャスターの視線がこちらに注ぐ前に、私は駆け出した。干将莫耶を手に、凜の背中を追い越して東側で打ち合い続けるライダーと衛宮士郎に向かって。致命的な釘剣の軌道を、私はその男を突き飛ばしてから干将で弾いた。ライダーの追い討ちを二度防いで、まるで荷物のように男を抱え上げて凜のところまで駆け戻る。

復活したレイラインを確認するように、私は彼女の意識に声を投げた。

「生きてるか」

「遅刻よ」

上空で羽根を広げているキャスター、その女が空けたいくつもの穴に囲まれて、凜は肩を揺らしていた。セイバーはキャスターの下で、赤い鎖の糸に縛られたまま、今から火炙りされるように吊るし上げられている。

「すまない。が、手遅れというわけではなさそうだな」

「当たり前よ——士郎は無事？」

衛宮士郎もまた、荒い息を繰り返しながら干将莫耶もどきを握り締めたまま、立ち上がった。

まだ生きている。転がってくるのが首だったとしてもおかしくない實力差を、何が埋めているのか。私はその男を一瞥しただけだった。衛宮士郎は一瞥すらしなかった。直視できない弱さを、どこか感じずにはいられない。

「ちよつと士郎、大丈夫？」

凜の声にも、衛宮士郎は答えない。もう一度問いかけそうになった彼女の声を、キャスターの忌々しげな声がかき消した。

「アーチャー……そう、アサシンを破ったのね」

私は肩をすくめる。

「意外かね？」

「その程度で図に乗るなんていただけないわね」

「ほう」

「ふん。あんな分不相応な英霊もどき、元から期待なんてなくてよ」

佐々木小次郎という男は、英霊として不適なのは間違いない。名ばかりが知られているが、実は歴史書にその存在が明記されているわけではなく、もう一人の剣豪を際立たせるために捏造されたと言われている、あやふやな存在なのだった。

だとしても、あの男は紛うことなく待だつた。

あの戦いを、キャスターごときが愚弄している。不愉快な思いを抑えこみながら、私は策を練る。状況は依然不利なことに変わりはない。この会話の間にも、凜と衛宮士郎の体力と魔力は少しずつ回復しているだろうが、果たしてそれもどこまで期待が持てることが。

キャスター、ライダー、そしてセイバーの三面の敵。最悪なのは各個撃破されることであり、私たちがするべきことこそが各個撃破である。地力で劣っているこちらは、敵戦力の温存を何としても阻止しなくてはならない。解はいくつもないが、逆に迷わなくて済むのだから、考えようによつては楽だともいえる。

「凜、作戦を変更するぞ」

「言つて」

「キャスターとセイバーの相手は私がする」

他に手はないと知っているのか、凜はすぐに肯定を示した。

「君は衛宮士郎と一緒に、ライダーの本を焼け」

「セイバーと、キャスターの二人を？」

「我らの目的はセイバーの奪還だ。ここはキャスターの胃の中のようなものだ。セイバーを引きずり出せなければ、ジリ貧のまま終わる」

「勝算はあるの」

「無ければただ死を待つのか？」

「まさか。ところで、さっきアサシンを倒した一撃は凄かった。宝具？」

「というわけでもないのだがな。もう二度と使えない代物だ」

「魔力が空っぽだから、なんて言わないでよね」

「そんな間抜けに見えるかね？」

「ならよし」

ロンギヌスで解き放った魔力はそれほど多くはない。自己の意思さえ保有する、と受け取るときにいわれた。私は黒い銃身自体の解放を、わずかに手伝ったに過ぎない。

私の残存魔力は十二分に残っている。キャスターだけを打倒するには余剰ですらあるだろう。

「ちっ。おいキャスター！ 話が違うじゃないか！ 遠坂のサーヴァントは通つてこれないはずなんじゃなかったのかよ。もうちよつとで衛宮の馬鹿を殺せたつていうのに」
ライダーの背後で、間桐慎二がつまらなげに吐き捨てる。

場に不釣合いすぎるその台詞を、キャスターは聞きもしなかつたように言葉を続けた。

「あんな男に手間取るなんて、今回の聖杯戦争の三騎士の一角は、穴ね。ふふふ」

「耳が痛いな。だが、キャスターよ。お前がそんなことをいうのは、それこそ期待はずれというものだ。アサシンを呼び、ライダーを誑かし、セイバーを取ろうと策を練る。つまりは、単独では向かって来れない出来損ないだろう。その程度の、下位のサーヴァントを倒した所で何の自慢にもならん」

「……なんですつて?」

「それでも長い時間をかけ、この街の精神力の大半を溜め込んだ。たいしたものだ、バーサーカーの戦力を削ぐ、当て馬程度には使えそうだと思つたが。いやはや、見当違いだったよ。ここまで愚かだともはや何もいうことはない。凶に乗りすぎたな」

「……戯言を。貴方程度の存在が、この」

「笑わすな、お前が、私を、どうすると? いくら魔力を溜め込んだところで所詮は出来損ないのサーヴァント。宝の持ち腐れも甚だしい」

「……よくもそこまで吼えたわね。笑わすのは貴方よ——出なさい、セイバー」

ローブの奥の歯軋りが聞こえるほどの怒りを乗せて、キャスターは叫んだ。途端、セイバーを拘束していた赤い糸が千切れ飛び、無造作なまでに地面に叩きつけられる。

飛び出そうとする衛宮士郎を、凜が押しとどめている。そして小さく、二人がかりでライダーのマスターが持つ偽臣の書を焼く、と告げている。私は双剣をもう一度強く握り直した。後ろを振り返る余裕などどこにもなかった。

木枯らしが吹いた。巨大な力が起こす、予兆のさざなみだった。

緩やかに舞い上がり、銀緑に染まりながら、一つ処に集束する。

「立ち上がりなさい、セイバー！ この紋章は偽りではなくってよ、魔力のつながりも滞りなく、意が覆る計算式は何処にもない——欠ける標の代償は、あの者たちの命！」

赤い令呪の輝きが完全に消え去る前に、セイバーは己の聖剣を握り立ち上がった。憤怒に焼かれる仁王のように。

「行くわよ士郎！」

凜が背を向け走り出す。彼女たちの戦況をのんびりと眺める余裕は、私にはないようだった。

目前、純白のドレスから頑強な鎧姿へと纏いを変え、ズチャリと土を擦りながら迫ってくる、少女。

セイバーは、風王結界を固く携えて、口を開いた。

「アーチャーよ」

発散される魔の風が、飛び出そうとする私の全身を押し返す。

セイバーの瞳がこちらを向いた。決して、理性を失ってはいなかった。金の前髪の間隙の奥、エメラルドの輝きは、騎士としての誇りを断固として失ってはいないことを主張していた。

「逃げろっ——！」

失わぬ誇りを瞳に宿したまま、セイバーは豪剣を振り上げた。

上段から世界が死んでいく。

振り下ろされる不可視の剣を、双剣諸とも叩きつけるように弾く。力の流れを生かしたまま、後ろに跳んだ。両手でたたきつけた渾身が、痺れている。圧力は、今までのあらゆるものを超えている。ランサーでさえ、この者の前では霞むだろう。アサシンの一撃は確かに脅威であつたし、翻る燕の太刀筋を捉えることはできなかった。だが急所を突かれなければ、その場に踏みとどまれないほどの威力ではなかつた。

「アーチャー——！」

これは違う。違いすぎる。アサシンの刀と違う次元で、セイバーの剣は必殺だと知つた。

胴の薙ぎ払い、そのまま体を反転しての頭上への一撃。

「くっ」

魔力の桁が違う。十全に力を内に秘めたセイバーに、隙などない。振り下ろす一刀ごとに、膨大な魔力を上乗せして目標を力任せに叩き潰す。これこそが、騎士王の騎士王たる所以なのかと、考えながら私はただ退路を求めて後ろへ跳んだ。こらえきれなかつた。距離が欲しい。後ろに跳ぶしかなかったのだ。

痺れているのは一方的に私だけだった。間断なく追つて来る銀緑の劍把。右に一步ずれた。それだけで劍の軌道が多少わかりやすくなる。敵はすかさず反応した。低い体勢から急転する。左半身に異常な熱を感じる。その塊に向け、陽劍を突きだした。

頭蓋を貫いた。

貫いたと、思っただけだった。

塊はそこからさらに急転する。速度がある。私の反応を凌駕している。捕捉の暇はない。陰劍を盲で振った。劍戟音が触覚より早く当たりを知らせる。体勢が悪い。ここぞとばかりに押ししてくる。

胸薙ぎを両劍で受け止め、そのまま手から弾き飛ばされた。召還が、間に合うか。二度目の上段を、私は彼女の胸を蹴り飛ばした反動で何とか回避を間に合わせた。

セイバーが何の苦悶もなく一步後ずさる。

弓を持ち、ある程度上位ランクの刀劍を打ち放つ必要があった。彼女の劍技に対抗するには、純粹な力押ししか考えられなかった。

しかしその考えが、私の中で育つことは無かった。

干将莫耶よ。

何かの感情が沸き起こる。感情は死んだ。なら、それに似たものが沸き起こる。

「逃げる！ このままでは貴方を斬ってしまう！ 私を撃ちなさい、弓を持って、私を撃

て！」

彼女が何かを言っている。キャスターが冷静に睥睨している。私は、何をする。

「行くぞセイバー……」

感情に似た、何か。それに任せて、境内の地を蹴った。

私は私の力を誇示する。英霊にさえ昇つたのだと、彼女に誇示する。

セイバー、私はこんなにも強くなった。いつかの朝、いつかの夕、君と打ち合わせた竹刀から走り出して、辿り着いた境地がこの赤い靈魂なのだ。永劫、届かないと諦めていた、この想い。届くことはないと今でも知りつつも、届ける望みはここにある。

詮無い感傷でしかない。戦況を無視した、馬鹿馬鹿しい戦術だった。

しかしその感傷も、彼女を前にしたときだけは仕方ないと、どこから聞こえる気がする。

「何を、笑っている」

「さあな」

打ちあいひしげあい、斬り結び撥ね飛ばし、振り下ろしては避かし、睨めば殴り合い、左右からの擬態を混ぜての突きを単純な力で押し返され、そのまま体の勢いを殺さずに放たれた大上段からの一撃を、交差した干将莫耶で受け止める。

猛烈な圧力の前に、表裏一体の双剣が悲鳴を上げた。足が、地に埋まっていく。頭上

の剣が私を砕こうとしているからだ。その剣を握っているのは、セイバーだ。何枚かの鋼の向こうに、セイバーがいる。私の感情は死んでいる。感情に似た何かが、ときおり蠢くだけだ。だとしたら、その感情に似た何かは、今、懐かしさというものを吐き出しているのだと、全身にまで及ぶ衝撃の中で、私は思った。

だが、この愚かな戯れもすぐに終わりを迎えるだろう。

「A」

詠唱を聞き逃すことはしなかった。私は干将莫耶に魔力を流して頭上の剣を逸らすと、上空に跳躍した。

「λ α σ」

キャスターの放った魔術は、何者をも害さず境内の地面の一角を別次元へと隔離した。回避が間に合わなければ、数秒とはいえ動きを止められ、迫る二撃目に朽ちていただろう。双剣をセイバーに向けて投擲した。手に握る武器を、弓へと移行する。半円を描く二本一对の剣はセイバーにあしらわれるだろうが、追撃を防げさえすればそれでいい。

キャスターの顔、胸、右大腿、左腕に腹へと向かう五つの矢は、食らえばキャスターの体を容易く引き裂くだろう。ローブの女の動きは鈍い。蝙蝠のような羽根は微動だにせず、小さく呟くキャスターの声を聞いた。

「無駄なことを」

矢は、位置を見失って森に消えた。声の方向は、今まで浮いていた場所より遠く離れていた。キャスターが移動した瞬間は全く確認できなかった。

「瞬間移動。それとも、固有時制御」

「どちらかしらね、ふふ。忘れてなくて？　ここは私の工房であり子宮よ」

空爆が始まった。

河原で撃ち出した時と同じ、純粹な魔の塊を無数に。この身を撃ち滅ぼそうと一斉に射出される。その狭間を縫いながら、セイバーが間合いを詰めてくる。セイバーのクラスに備わる彼女の対魔力は、キャスターのこの魔弾を無かったことにまで相殺する。比べて、大魔術レヴェルをかき消すほど、私の対魔力の性能はよくない。

空白地点を探しては回避し続ける私と、意にも介さず一直線に突っ込んでくるセイバーがぶつかり合うのは、幾ばくもない。私はさらに五本の矢を二度撃ち出した。一度はキャスターへ、二度目はセイバーへ向けてだ。前者はさつきと全く同じ、焼き直し。後者も容易く打ち払われた。

爆撃は続く。火柱を撒き散らす炎の魔術、氷塊で標的を扶る水の魔術、時の流れを断ち切る時空干渉の魔術。一つでも当たれば致命的な隙を生み、それを逃すほど追撃者は鈍くない。

顔を歪める。火炎の迸りがわずかに私の腕を舐めた。哄笑を乗せて密度を増す溶けた寶石の落下、繰り出される銀色の剣技の末に、フェイルノートは真つ二つに断たれて虚空へ消えた。

絶体絶命だった。

絶体絶命だと、思わせなければならなかった。

表情をゆがめたまま、私は小さく呟いた。

こじ開ける、頭蓋の扉。取り出したるは、山のような設計図の塞。

「終わりよ、虫けら！ 塵へと還りなさい！」

スコールを模したような魔弾の奔流を、からがら逃げ延びる。セイバーの一振りが二の腕を浅く斬りつける。上乘せされた力に弾き飛ばされ、私は地面を転がった。大地を穿つ見えない大剣と石化の魔術。それでも私は、呟くのをやめない。

立ち上がり、干将を投擲してセイバーを押し返し、頭上を見た。

キャスターが、血さえ出しそうな笑いを吐く。

「なに、その目は。何なの？ もしや命乞い？ いいわよ、さあ！ 轉つてみなさい。けど残念ね、貴方は私を怒らせたの。額を地面に擦りつけても貴方は消える——！」

私はもうそこを見なかった。一度見れば、十分だった。山積していた設計図は全て消化した——昇華した。

残ったのは一工程だった。単純な、詠唱だった。

私は先ほど見た、キャスターの背後に向けて、最後の鍵を差し込んだ。明るい、鍵穴へ。

告げる。

「ブローケン・ファンタズム」

幻想は、月の下でこそよく壊れる。

第六話

爆撃はやみ、劍戟音も去った。

背後からの斬撃を、誰も予想することなどできない。空間転移や固有時制御といった魔法に近い技を使えたとしても、間に合わなければ意味がない。キャスターは、私が解き放った出来損ないの魔術——何十本もの刀劍に貫き通され、爆風に焼かれ、息も絶え絶えに地に落ちた。

セイバーが静かに一步引き、キャスターの元へと歩いていく。我が身を守れと、指示でも出したのだろう。やけに静かになった境内の中で、重い脚甲の音だけが聞こえた。

ふと、ライダーの気配が消えていることに気付いた。

「やったのか」

答える力も倒すのに使ったようで、凜から答えは返ってこない。巻き上がった砂埃の向こうから、肩を貸し合った二人の影が見えるに過ぎない。探ってみても、ライダーの気配は、もうどこにも感じなかった。境内の隅で、呆然と腰を抜かしている男が一人、いるだけだろう。

凜も衛宮士郎もどこかしら傷を負ってはいるが、それほどの深手ではないとわかる。

ただ、衛宮士郎の呼吸がどこかおかしいのを除けば、だった。

顔面の血色は青く後退し、浅く切り裂かれた腕からは血が垂れ、痙攣までしているのは魔術の反動に耐えられなかったからだ。それでも罅だらけの干将を握り締めて、酷使を堪えて衛宮士郎はライダーの本を焼いた。

「そつちも、やってくれたようね」

凜は、笑わずに言った。

「気を抜いてもらつては困るな。最後の詰めでいつもしくじる。それが遠坂凜の持つ唯一の悪癖だと、自分が一番よくわかつているだろう？」

「そうね、しつかりとケリをつけないとね——キャスター」

私は飛び出すタイミングを計った。弓を持つ。再び、ブロークン・ファンタズムを打ち出すにしても、セイバーがキャスターに近すぎる。いざとなれば、主を守るために身を投げ出すのがサーヴァントだ。セイバーを倒してキャスターを仕損じるのは全く意味がない。それにあれば魔力消費も激しく、完全に仕留めなければ次に手詰まりになるのはこちらの番だ。

考えは目まぐるしく回転を続ける。

段階を、戦いの場から交渉の場へと移行してもよかった。セイバーを解放するならばこの場を見逃す、という選択もなくはない。キャスターを肯んじることが出来ないとい

う思いは残っていても、バーサーカーの戦力を殺ぐには使える、という判断が有効なことに変わりはない。

セイバーを縛る令呪も、厄介だった。

キャスターのルール・ブレイカーを、私自身が投影することには大きな抵抗がある。衛宮士郎はすでに凜の目の前で干将莫耶を振るい、闘っている。彼女がそれを投影魔術だと見抜けないだろうと樂觀視することは、危険極まりない。私がここでキャスターの宝具を投影すれば、おろかな事実を悟られてしまう可能性は今までの比ではないくらいに跳ね上がる。それは何としても避けねばならなかった。

キャスターを倒せば全ては済むが、それがいかに難しいかは既に知っている。最初の不意打ちで仕留め切れなかったのは、全くの片手落ちとしか言いようがない。不意打ちの機会は二度とない。

私の投影で受けたダメージも、徐々に消えていく。傷の深さは相当なものだが、魔力の大半を回復に充てれば、それほど時をかけずに回復してしまう。

ここで迷えば間抜けなことになりかねない。空間転移に、固有時制御。その気になれば大抵の現象は顕現できる。ここが不利な土地であるという事実は、一つも変わっていないのだから。

凜はどう考えているのか、質そうとする前に、彼女は一步前に進み出て言った。

「相当な深手のようね、キャスター。ライダーも去ったわ。今はもう、セイバーだけが守りの盾、といったところかしら」

「……小娘」

「私たちは勝つわ。セイバーは令呪に従っているとはいえ、抵抗しているし私のアーチャーなら倒せる。そうしたら今度こそ、貴方を守る者はいなくなる」

「……なら、おやりなさい。セイバーを倒して、私に」

「けど、そんなことはやらなくていいのよ。考えたら、当然よね。マスターを倒す方が、何より早い」

「はっ、あははは。何をいうかと思えば、貴方が私のマスターを」

「葛木宗一郎」

スウィッチを切ったように、キャスターの哄笑は止まった。

「情報の出し惜しみはしないわ。あいつがマスターだなんて気付くはずがない、なにせ、真正正銘の人間なんだから、気付けるはずがない。本当に今回の聖杯戦争はイレギュラーばかり……まあいいわ。ともかく、葛木をいのように使っているのは貴方の方ね。自分の言うことに逆らわない木偶に仕立てて、情報操作に使う。魔術師らしいといえばらしいけど、バレたらそれまでよね」

血と、ローブのせいでキャスターの表情はわからない。しかしそれでもなお、明確な

動揺がこちらまで伝わってきた。

不意に、それは狼狽に変わった。

「いけない！」

キャスターが声高に叫ぶ。叫びは、私たちの誰に発したものではなかった。

「いけません！　今は、絶対に許可できません！　あつ、ああ」

「なにを……」

「凜、下がれ」

キャスターは続けて叫ぶ。

「やめて、やめて下さい！　今の内に、貴方は逃げなければ——宗一郎！」

マスターを下げて、一步進む。それは、悪寒というほどでもなかった。

その男が現れるのを見て、感じたものはただ一つ。血の、匂いだった。

「よう」

この私でさえ、何一つ気配を感じなかった。キャスターのそれよりよほど空間転移かと思わせる男の出現。一度だけ周囲を見回して、簡潔にいった。

「説明しろ、キャスター」

まるで要領を得ない。ありふれたスーツに身を包んでいる男は、浮かんだ疑問を解消するために二度三度とキャスターに質問を繰り返し、答えを得るたびに小さく頷く。

「なぜ音と光を遮断した」

「そ、それは」

「私に知らせまいとしたからか」

「……ええ、そうです。けれど、宗一郎！ 私は、私はただ」

「わかった」

キャスターの偽証も、穿たれたいくつもの穴も、興味なくただ理解を示したと頷く。その男に、生氣などというものは一つも感じない。凜も動けなかった。

「これは味方なのか」

男は続けてセイバーに目を向けていう。

「え、ええ。令呪の縛りがある限りセイバーは我らの駒です」

「では何も問題はないな」

「宗一郎、何を」

「敵を前にして打倒以外なにある」

唾然と息を呑んだのは、私たちがばかりではなくキャスターもそうであろう。愚者の無謀にでも、蛮勇にでもなく、ただ為すべきことを為すという意志。その場にいる全ての者が男の存在を疑った。

「宗一郎、様」

「キャスター、立てるのなら飛び道具の相手をしろ……魔術師の家系というものは難儀なものだな遠坂。それがお前のサーヴァントか」

葛木宗一郎という男は、ゆらめくような殺気を纏わせながら、音もなくこちらへ歩いて来る。凜が、戸惑いを胸に抱いたまま、宝石を取り出した。

ただの人間だった。

男は魔術の理すら、何一つわかっていないだろう。何一つ武器も持たずに歩いてくるのは、この私を殴り殺す気だからか。何一つ、付け込む隙がないのは想像を越える強さを保持しているからか。

葛木という男が、常軌を逸して、冷静な状況判断が出来ていない、と私は考えなかった。拳法使いと戦った記憶はある。たとえ徒手が迂遠な戦闘方法のように見えても、極めれば必殺の手段を持つ術であることに、何ら変わりはない。

私は、干将莫耶ではなく、弓を取り出した。

「アーチャー」

「いったはずだ。悪癖を、意識しろと。私も油断などせん」

「……ええ、そうだったわね」

とはいえ、男は止まらない。距離は十歩を越えない。一発目の射を避わしきれば、こちら側の懐へ肉薄できると考えているのだろう。跳躍して、矢を撃ち放てば間違はなく

勝てるが、凜がいる。男の目に、慈悲や躊躇の類の感情は生きていない。冷静な一撃で凜を殺すだろう。

一撃で仕留めればいい。相手もそう考えている。凜も、そうだろう。キャスターですら、同じ思考をしているに違いない。私が矢を放とうと、暗殺者が拳を叩き込もうとする、空前の間合い。

その中心に、異物が混ざった。

衛宮、士郎。

「待てよお前ら」

干将を交差して、構える衛宮士郎は避けた額から流れる血で、赤く染まった目と口でいった。

「なに、勝手に、始めようと……してんだ……」

「し、士郎」

様子がおかしかった。葛木宗一郎が止まった。隙と見て、突っ込んでくれば衛宮士郎は一撃で死んでいるだろう。追撃を阻むために私も矢を放たざるを得ない。背後の死を認識しないまま、この男はいまだ馬鹿な妄想に囚われているのか。

「好き勝手に、殺し合いなんか……お前ら……」

凜が叫んだ。

「士郎！ 敵なのよ！」

「敵も殺さない」

「何を、馬鹿な」

「退けよ、葛木。見逃してやるから、退け。令呪を奪つて、それで終わりにする」

「どきなさい士郎！ 敵を前にして、そんな道理はないわ！」

「だったら俺を殺せよ、遠坂。俺は絶対にここをどかないぞ」

「衛宮」

幽鬼のように気配のなかつた男、葛木宗一郎がいった。

「何の変化があつた。私知つてるお前とは、違うな。以前にも甘さはあつたが、人並みに感情もあつた。今のお前には、それすらない。何があつた」

「わからない」

「なに？」

その顔は、苛まれる割れるような頭痛を、噛み締めているようだった。

「なにも、わからなくなつた。人が死んで、傷ついて、戦つて。セイバーがいなくなつて、自分の無力が……この剣、気付いたら握つてた。これは、剣なんだ。俺は正義の味方を目指して、剣を。あの神父は言つてた。ようやく、願いが叶う、つて。俺は、望んでたんだ。戦いを、望んでた」

衛宮士郎は、不安定だった。

正義の味方という根幹を壊され、男は立ち尽くした。新しい答えを見つけたわけではない。不安定は揺らいでいるということだ。その場に居るだけで、崩れていくような歪さは、走り続けている間はまだ崩壊はしない。無意識で、衛宮士郎は走っている。

不安定だった。叩かれた理想は妄想だと知った。それでも走ることの矛盾を、目の犠牲に突きつけられた。ドロドロとたゆたっている。押せば溶けてしまうような在り様は、あまりに終わりに近い。

しかし終わりと始まりは同義であり、不意に、私はあらゆる全ての誕生とは、こういうものではないかと、思った。

「告げるー」

キヤスターの叫びに、硬直していた場は再び戦場に引き戻った。

葛木宗一郎が動いた。柳のようにしなる足捌きで、急速に間を詰め寄せる。衛宮士郎を弾き飛ばし、私は莫耶を握って受ける。

拳の軌道は蛇腹の如く、うねる。急所という急所を、狙い済ます人体破壊の真髄は、対象がサーヴァントであろうと何も変わらない。食らえば卒倒し、悶絶の憂き目に遭うだろう。

この双剣は、直角する侍の太刀筋すら弾ききる代物である。鋼の陰陽は蛇の牙も毒も、漏らすことなく接触を許さなはずだった。魔力で補強されている拳を、捌き切る拳動に油断は微塵もない。それでも、拳はその合間を縫って走る。

キヤスターに対して、凜の動きも早かった。トパーズの輝きを、詠唱で増幅し解放する。いくつにも分裂した光は、キヤスターの影に疾く走る。空間転移の技さえなければ、ローブを残して跡形もなく消し去っただろう。

キヤスターが高々と手の痣を掲げた。未だ二つを残す、赤い令呪の光だった。

「第二の令呪は貴方に宝具の使用を求める——焼き払いなさい、セイバー！」

その脅威の度合いを、推し量っている暇さえない。セイバーの宝剣が輝きを放つ前に、ルール・ブレイカーを投影する。それを阻む、葛木という男の暗殺拳。一つでも貰えば、立て続けに打ち込まれ動きを止められる。

セイバーの、宝具の気配がする。

機を計ったように、蛇の拳が後退する。私は、この男が攻めていないことに気付いていたが、手がなかった。

「あ、くつ、ああー！ 凜……シロウ！ 逃げ……て！」

セイバー。抑えこもうと——しかし抑えきれない魔力の波濤が、膨れ上がっていく。出し惜しみする是非もない。隙間をかいくぐって来る拳を、急所を避けて二発三発と受

けながら、ありつただけの幻想を砕いて壊して、こじ開けた空間の端からキャスターに向け刀剣を吐き出した。

流石に不意打ちとはいかなかった。

「M a s t e r s — !」

矛先が走る進路上、精製されたガラスの盾が、光を放つ。

神代の魔術師の底力は、私の幻想に耐え切れるのか。幾本もの刀剣が、キャスターの唱えた防壁に妨げられては砕けていく。オリジナルの力なら、一刀目で貫き通せるとしても、私の投影を経たものはランクが一つ落ちる。砕くか耐えるか、紙一重の境界面で、キャスターの魔術は生き残った。

「ちいっ。仕方がない！」

もはや手はない、セイバーに向けて、ブローケン・ファンタズムの照準を合わせた。紡ぎ出す剣の設計図。そのわずかな隙に、関節を無視したような足刀蹴りが、延髄に叩き込まれた。ぐらつく意識を、歯を食いしばって手放さない。レイラインで、凜に逃げろと伝える。答えを聞く暇はなかった、私は途切れない連打を何発も、何とか急所以外に受けながら、出来損ないの幻想を射出した。飛び出した幻想は、ひどく間拔けな音を立ててセイバーの胸に突き刺ささり、爆ぜた。

「あ」

「アーチャー、貴方!」

糸が切れた人形のように、金色の髪をした少女が崩れ落ちる。ちつ、と舌打ちしたキャスターが、またいくつもの魔弾の塊を。有無もなく凜は詠唱を始める。

有無がないのは彼女ばかりではなく、私もそうだった。が、私は拳の軌道を、徐々に理解しだした。二つ三つとタイミングを読み、四つ目で反撃に移ろうとする。それすら読んだように、葛木は私の斬撃を受け流し、足の向きを凜に向けて体を流した。

「え? あつ——くつ」

詠唱を断ち切らせる胸部への殴打。それで、詠唱はストツプした。キャスターの魔術を相殺するための防壁が、完全に遅れる。

蛇蠍の敏捷性で、次の瞬間葛木はもうそこにはいない。キャスターの爆撃が投下されるのを見越しているからだ。ふりそそぐ、灼熱の力。間一髪、私は凜を抱えて駆け出す。数瞬後、着弾。呼吸を取り戻した凜が、途中下車するように私から飛び降りて詠唱を再開するまで四秒。

私はすぐに蛇を探した。暗殺者は、穴だらけの地面を我が大地とばかりに、自在に駆け回って衛宮士郎に迫っていた。

迎え撃とうとする出来損ないの干将莫耶を、容易くいなして二発三発。それだけで衛宮士郎の体は崩れ落ちた。衛宮士郎は死ぬだろう。延髄まで叩き潰す、喉輪が繰り出さ

れた。

なぜか、その未来が納得いかなかった。

追った。しかし、頭の芯に響くようなダメージが、私の追撃を遅々たるものにした。

夜の闇に生きた拳法の拳を止めるものは何もない。戦いを拒んだ男は、戦いの摂理に従って潰える。

その、葛木の胸を貫いた剣さえなかったのなら。

「う、あ」

誰の眩きだったのか。血が、静かに滴った。人間の体には不釣り合いすぎる大剣が、胴から生えている様は、誰もが息を飲む。歪すぎる寸法の違いが、どこかおかしいと、思わせる。

蛇蠍は黙って見下ろす。

「ふむ、ここまでか」

男は最後、つまらなげにそう言って、口からスチームのような血煙を吐き出した。

壮絶で、疑いようのない断末魔だった。

血の沼の中で衛宮士郎はへたり込む。阿修羅のように甲冑を赤く染めたセイバーが、剣を引き抜いて眉根を寄せていた。

「え、なぜ？」

いつの間にか、背後の魔術のぶつかり合いも終わっていた。キャスターが、葛木宗一郎の体を抱いていた。

「宗一郎さま。どうしてこの人が血を流しているの?」

空間転移。寺の上へ。

「変ね、どうして。マスター、早く敵を倒さないと。あの者たちを倒さないと」

間桐慎二の脇。

「私と貴方で聖杯を取って、二人で」

林の奥。

「いったのに。宗一郎、だから危ないから出さないと……」

沼の中。

繰り返される消滅と出現。それを、さらに何度も何度も繰り返す。ランダムに、消えては現れる亡骸を抱いたキャスター。どれほど転移を繰り返したのか、月の下、二つは一つの影に合わさった。

「あれ? これなにかしら。血?」

空に、血だらけの魔術師と男がいる。

「あ、死んだ?」

瞼も閉じず、胸に大きな穴の開いた男を抱きしめて、女は叫んだ。

「ああ——あああ——」

木霊した叫びの中で、あああ、という叫びの中で、溜めに貯めた魔力が無秩序に増幅されていく。私は残った最後の魔力で三度目のブローケン・ファンタズムを。何の障壁もなく、刀剣の群は二人の四肢を切り裂いて爆ぜる。それでも、あああ、という叫びは止まらない。膨らんでいく魔力の波も止まらない。凜が、逃げるといったが、間に合わない。何千人、何万人の生命力を、さらに燃え上がらせた力の波は、最終段階まで来ている。解放されればこの山だけではなく、街まで焼き払うだろう。そしてこの地には、以後三千年は草木一つ生えはしない。魔女の悲しみは、いつの時代も世界を焼く。血の涙を流して、女は、数多の道連れを求めて、叫びをやめない。

その前に、一人立つ。

慄然と、一人の少女がその前に立った。

鎧われていた風の鞆、編みをほどかれて、あらわになる伝説と矜持の剣。
振り下ろした刀剣の名は、エクスカリバーという。

その剣の前には、常に勝利があるという、星が鍛えた聖剣だった。

夜の闇。

月まで届く光のきざしはしが、戦いの終わりを告げていた。

第七話

誰も彼もが動くことを許されない。

夜の闇を抜いた光の橋はもう、どこまでも遠い。荒涼とした沈黙と風が戻るまで、どれほどの時間が要るのか。

妖精が鍛えた王者の剣。エクスカリバー。

その剣を佩くことを許された者が、他にいるはずがない。かつて、いくつもの戦場の丘を、勝ち鬨で埋め尽くした竜の王以外に。時の彼方で伝説を灯す、イングランドの尽きない伝承は、それを初めてみる者の目を釘づけにした。

少女は燐粉の中で揺れる。

いつまでも光を失わないその余韻の中で、アーサーという名の少女は、ゆつくりと崩れ落ちた。

「……………あ……………せ、セイ、バー」

衛宮士郎が、覚束ない足取りで歩いていく。その手にはもう干将莫耶は握られてはいなかった。葛木に砕かれたのか、投影が不完全だったのか。それでも剣を生み出した事実が曲がるわけではない。限界を超えた魔術行使に、歩くのもままならない様子がな

よりの証だった。

凜の後を追う。セイバーは今にも消えてしまうような息遣いをして、額に汗を浮かべていた。

「まずいわね……魔力が空っぽで、消えかけてるんだわ……」

宝具が必要とする魔力は、莫大なものだ。星史において、かつてない輝きを放つ聖剣ならば言うまでもない。万全の状態であるならいざ知らず、ルールブレイカーによって令呪の縛りを断たれ、魔力の供給の一切がなくなつたスタンドアロンで使用したのならば、そのまま肉体の消滅を招きかねない。キャスターがセイバーに宝具の使用を求め、十分な魔力供給を施していたことがせめてもの救いだった。

「どうするつもりだ？」

先決すべきは魔力を、つまりはそれを供給するマスターをあてがうことだった。魔術師と呼ぶには未熟すぎる衛宮士郎に、パスを通す力などあるわけない。凜にしても、いくらなんでも二人分のサーヴァントを使役できるほどのキャパシティは保持してはいない。

「……考えは、あるわ。いいから運んで。士郎も、早くここを立ち去るわよ。さっきの宝具でキャスターの結界も潰れただろうし、すぐに騒ぎになる」

少年は、がくがくと限界を訴える膝で、立ち上がる。

「つらいの？　ちよつと、顔色真つ青じやない！」

「……大丈夫。それより、遠坂、ちよつと待つてくれ。まだ、一つやることが残つてる」
セイバーの額に浮かんだ汗を、服の袖で一度拭つて、衛宮士郎は震える足を押さえ込んで歩きだした。

歩いていく方向に目をやった。傷だらけの体は、境内の隅、呆然と腰を下ろしたままの間桐慎二に向かつていく。凜も黙つて、その後が続いた。間桐慎二はこちらを見ると、悲鳴も忘れたように、首を振つて後ずさる。自分の心臓を抉りとる、悪魔にでも見えているに違いない。

ずるずると後ずさつて、衛宮士郎がその肩に手をかけるのと、壁に背中を掴まれるのとは同時だった。

「慎二」

「……あ、あ」

衛宮士郎は殺すだろうか。

どう考えても、殺すとは思えない。衛宮士郎に人を殺せる意志はない。立ち上る火炎の原風景が心の中から消えない限り、自分の命が他人の命より劣るといふ考えを捨てない限り、衛宮士郎は人を殺せない。

ではなぜ、衛宮士郎はここに居るのか。

あの時、胃の中のを吐き出して、ひざまずいていたのではなかったのか。

「吐き出したのは、胃の中のものだけでは、なかった——？」

「え？」

吐き出したのは、胃の中のものだけではなかった。抱いた理想の愚かさも、共に吐き出してしまったのなら、衛宮士郎は、正義という夢想から現実へと目を移し、障害という名の、しかしかつては友人と呼んだ男の命であろうと奪える。真実、変わったのなら。だが最早、そうなった男を、私は衛宮士郎とは呼ばないだろう。

間桐慎二の前に立った男の、その体がフラリと揺れた。

揺れて、力もこめずに倒れこむ体に任せて、衛宮士郎は肘を突き出して、間桐慎二の顔を殴りつけた。鈍い音を立てて吹っ飛び、血と、砕けた歯がパラパラと落ちる。

悲鳴。

「い、ああ、つぐ、いたつ、いたい、ああ、うわあお前」

「慎二」

そのまま馬乗りになった。迷いのない動きで、衛宮士郎は拳を振り上げ、振り下ろす。間桐慎二の顔面に叩きつけられる拳。硬い音から、血液の散る粘質な音へと変わる。右と左を交互に、狙いも定めずに振り回して、殴った。

「慎二」

「や、やめっ」

「慎二！」

顔を庇う腕を気にすることなく、その上から握りこぶしを叩き下ろし続ける。

名を連呼しながら、殴った。衛宮士郎は本気で殴っていた。

叩きつける、拳は、途中で鈍い音を立てた。だがやめる気配はない。容赦なく振り下ろす拳は、叩きのめして泣かせるのが目的だ。

規則的な、手で頬骨を殴る音。穴だらけの地面の一角で、馬乗りになって相手を叩く子供のケンカは、月の光と相まって儀式めいていた。これは、子供のケンカなのだ。決して殺し合いなどではなかった。

私はその光景を、妙な感覚が混じるのを自覚しながら見ていた。羨望に近いのかもしれない。

打撃が止んだ。朦朧とした視線を漂わせる男に、男は襟首を掴んで引き起こした。

「慎、二っ」

「ひ、い」

「お前は！ 藤ねえを傷つけたっ」

「う、ぐふ」

「関係ない人も傷つけた」

「う、うう……」

「桜にも何かしたな」

沈黙が答えだった。

鼻血と、拳が裂けた時の返り血で、赤ペンキをぶちまけられたような顔面に、さらに背中を仰げ反らせてからの、頭突きを叩き込んだ。ぐちやりという音が、鈍く境内に響いた。

「うつつうわああ」

悲鳴を上げる男の襟首を、揺さぶって、同じように返り血で顔を真っ赤に染めて、それを涙でかき消しながら、衛宮士郎は叫ぶ。

「殺さないぞー」

膝で立っていることすらままならないのか、覆いかぶさるように崩れ落ちた。

二人の体が重なって、元よりみつももないケンカは、それ以上に見苦しくなる。殺意のない拳に、それでも殺意を感じたのか、終わりが無いと思ったのか、一方的に殴られているだけだった間桐慎二も拳を突き出した。揉みくちやで、適当に出したパンチが当たらずがない。それでも抵抗した。引っ張って、叩いて、髪の毛を引っ張って、わめいた。噛みつきもした。赤ん坊のようなみつももない泣き声で、慎二が泣いた。その中で、士郎も叫び続ける。殺さない。殺さないという絶叫は、己に向けてのものだ。

殺さない。

誰も殺さない。

誰にも、殺させない。

「金輪際、誰一人、俺の前で死ぬんじやねえ——！」

私は聞いた。

聞き間違いなど、しなかった。

自衛の為に殺すという選択すら、この決意にとつては不純物であると。

氣を失つた衛宮士郎と、間桐慎二、セイバー、さらに凜を担いで林から街を駆け抜けるのは、中々骨が折れた。

「労えとはいわんが、遠慮する気持ちはないのかね？ 私は乗り物ではないぞ」

「仕方がないでしょ、サイレンだって聞こえてたんだから」

「まあいいがね。しかしこの」

間桐慎二、といいかけてやめた。

「ライダーのマスターだった男を、何故連れてくる」

「放つたらかしにするわけにも行かないでしょう。また面倒ごとになるのも嫌だし、聞きたいこともあるし——って、無駄話してる場合じゃないのわかってる？」

下らない話だつて、したくなるというものだ。

セイバーの消滅を防ぐ手立てとして、凜が提案したのは至極自然で、また馬鹿馬鹿しく、同時に頭痛が限度を越えてしまうような、そんなことだった。

衛宮士郎を再びセイバーのマスターとする。

そこまでは、いい。

「だがな、もう少しマシな方法ないのか」

あつたらいいなさいよ。いいながら、凜は気絶している間桐慎二の顔をタオルで拭つて、立ち上がった。衛宮邸の部屋の一室だった。この二つ隣の部屋には、セイバーと衛宮士郎が寝ている。

廊下を歩きながら、凜は何度もため息を吐いた。

月明かりが差し込む家の中は、不思議なほどに静かだった。先ほど、ここから何キロも離れない山の上で、人間の理解を凌駕する死闘を繰り広げたことなど、まるで嘘のようだった。

何も音はない。零時を越えた。寝静まる時間に、生きて戻つてこれた実感を、目の前の少女はかみ締める暇もない。

多分、それは悲しいことなのだろう。幸福と戦うことが結びつくことは難しい。それを知つていて、正面から受け止めて、乗り越える遠坂凜の強さは周囲を切なくさせるこ

とすらない。

「よく、キャスターを止めたな」

台所で洗面器の水を取り替える彼女の背中に、私は言った。

「へ、ああ、まあね。結構辛かったけど」

しかし、無傷というわけではない。衛宮士郎の分の包帯から、私はいくらかを千切り取った。

凜の腕には、無数の傷がある。服もところどころ裂けている。それをおくびにも出さない強さは、時として、自分自身さえ置いてきぼりにしてしまう。

腕を取って、包帯を巻きつけた。

「ちよっ、なに」

「じつとしたまえ。赤い服で目立たないとはいえ、血は出ている」

「そんなの、別に」

「マスターの体を気遣うことは、サーヴァントとして当然だと思うがね」

「と、当然って」

「いいマスターなら、なおさらだ」

劳いの言葉など、私にはそれくらいしか思い浮かばなかった。

それきり黙りこんだのをよしとして、包帯を巻ききって結んだ。傷は深くはないが、

放つたらかしにしていいほど浅いわけでもない。

「よ、余計なことよ。こんなの、唾つけとけば、治るんだから」

ふん、と鼻を鳴らして衛宮士郎の分の包帯と水を持って、いそいそと廊下へ戻る。素直に感謝もいえない態度に苦笑して、私も続いた。音のない廊下を渡り、二人が寝ている部屋へと。

ぼろぼろの姿で、衛宮士郎は呻いている。反面、セイバーはもう呻きすらない。一刻を争う状況で、凜はまだ躊躇っている様子だった。私にはそれを責める気はないし、むしろどうすればいいのかすら見当がつかない。

「はあー……ふー」

大きく深呼吸をして、凜は、傷を拭うために持ってきた洗面器の水を、おもむろに衛宮士郎にぶちまけた。

ばしゃんと水しぶき。ぶちまけられた男は目を見開いて飛び起きた。

「ふうっ、うわー！ なにごとー！」

「起きた？」

「起きないでかー!? ……つて、え、あ、れ。と、遠坂……？」

「混乱してるのもわかるけど、落ち着いて聞きなさい」

まずは現状把握、というわけで、凜は一つずつ説明をする。何割かは、自分に言い聞

かせるためのものでもあるだろう。

セイバーがさらわれて、柳洞寺に向かい、アサシンを倒し、ライダーを追い出し、キャスターと葛木宗一郎を打倒したことを説明する。葛木が死んだ、というところで、衛宮士郎は一度目を細めた。

「……までわかるわね？」

「ああ、わかるよ。それでセイバーの宝具で……つて、ちよつと待った——セイバー、エクスカリバーつて」

「それは、ちよつと待ちなさい。気持ちはわかるけど待ちなさいね」

一息溜めて、セイバーが消える、と凜は静かに告げた。

「魔力が枯渇している。今は主を持たないはぐれで供給が真正銘のゼロ。その上、あんな大出力の宝具を使ったもんだから、肉体維持も厳しいといったところね」

「——セイバーが死ぬってことか？」

「このまま行けば、朝日を待たずにね」

その推察は非常に正しい。サーヴァントは魔力という燃料を引き換えにこの世に存在を保っていられる。それが枯渇すれば、消えるのみだ。体の維持が精一杯の状況で、このままマスターとの契約を為すことが出来なければ、消え去る他ない。

「セイバーが消えてもいい？」

「い、いいわけないだろう！ セイバーは俺を守ってくれて、一緒に戦う、仲間だ！」

「そう。セイバーを助けたいのね？ でもそれは、聖杯戦争に再び参加するってことなのよ。殺し合いに戻るということ。セイバーを見殺しにすれば、貴方はまたあの平穏な世界に戻ることが出来る。平和な世界を、貴方は捨てる事が出来るの」

「捨てないよ」

迷わずに言った。

「それに殺しもしない。これは前も言ったけど、今はあるとき以上に思う。俺は誰も殺さない。誰にも殺させないために、もう一度、聖杯戦争に参加する。だからセイバーを見殺しになんか出来るわけないし、言いたいこともある」

「セイバーにパスをもう一度通すのは、魔術工程をしつかり理解していない士郎にとつては、簡単なことじゃないわ。どんな方法かも聞かないうちに、断言して、覚悟はあるの？ 中途半端なら、逆に迷惑だわ」

「中途半端なわけあるか。どんな方法だよ。正直言って、自信があるわけじゃないけど、やるしかないってんならなんだってやってやる——俺は、セイバーのマスターだ」

こういうとき、凜は優しく笑う。気付かないくらい小さな瞬間に、安堵の笑みを浮かべるのだ。そしてすぐにまた厳しい顔に戻って、彼女は体を横たえているセイバーの肩に手をやって、ゆすった。金色の前髪の間で、うつすらとその目が開く。血色の悪さと、

額に浮かんだ汗が限界が予想より近いことを示唆していた。

「……凜……シロウは無事ですか？」

「セイバー」

「シロウ……よかった」

お互いの無事に安堵する二人を、凜は冷静な視線で見つめた。

冷静に、冷静にと、胸の内を繰り返しているのかもしれない。二人を交互に見やって、下を向いて、ため息を吐いて、はたから見ても落ち着かなさを最高に発揮しながら、彼女は意を決して告げる。

「悪いけど、そんなことしてる場合じゃないの。落ち着いて聞いてね、一回しか言わないから」

セイバーを抱きなさい。

しんとする。

さつきの廊下以上に静かになる。

もう少し言い方はないのかと、私は頭を抱えた。

口ごもるセイバーと衛宮士郎をさし置いて、凜はさらに大きな声で叫んだ。

「ええい！ なんでもするっていったでしょう！ セイバー、あんたもこのまま消えるなんて、アーサー王のくせして覚悟が足りないわよ！ 文句があるなら抜け抜けとさら

われた自分にいえー！ 士郎も！ あんたが普通の手順でパスを通せることが出来たらこんな面倒くさいことにもならなかったわよ！ そのボロボロの手と体でナニが出来るつてのよー！ この情操出来損ないー！ 私も手伝うんだから文句いうなー！」

まくし立てる凜に気圧され、二人とも啞然と口を開ける。

私はもう、何を言う気もなく、色々思うことはあるが、どうも間抜けな事態にしか思えず、頭がどうにも痛い。いつものように屋根の上に登ることにして、私は姿を消すことにした。

私が何をせずとも、マスター側からレイラインを一部カットしてきた。私が口を出すことではないし、聞きたいこともない。何も考えまいと、意図的に考えることさえどこか不自然だったが、私は先ほどの戦闘を思い返すことで誤魔化した。

アサシンに、キヤスター。葛木宗一郎という男。駆け去っていったライダー。

まだ、勝利を手にするまでは遠い。体の軋みを、一刻も早く消さなければならぬ。セイバーが戻ったとはいっても、私以上に状態の危うい彼女はすぐに戦闘を行うことなど出来るはずがない。

上空には、そのセイバーに寸断された雲が未だ消えずに残っている。あの頃と何も変わらない太刀筋だった。圧倒される輝きを、私は覚えていた。忘れてはいなかった。そして、その雲の狭間には、いつかのような月が覗いている。

いつの月に、似ているのだろう。隣に誰かいたような気がして、私は思いを馳せてみた。

思い出せるはずなどなかった。

第四章

第一話

色は匂へど、散りぬるを。

我が世誰そ、常ならむ。

有為の奥山、今日越えて。

浅き夢見じ、酔ひもせず。

脈絡なく、詠うようなその声に、少年は年相応の好奇心を發揮して、聞いた。

「爺さん、今のなんだ？」

聞いてから、ゆっくりと興奮のようなものがすりよってきた。まさか、何かの呪文ではあるまいか。自分には見えないだけで、何かの神秘が発生したのではあるまいか。周囲をぐるりと見渡した。特に変化はないように見える。しかし油断はならない。この男は魔法使いなのだから、意味のない言葉など吐くはずがない。一挙手一投足に意味があつて、一言一句に奇跡が隠れている。今の言葉にも、何かの秘密があるに違いない。

そんな少年の様子に、男は静かに微笑んだ。

「いろいろなに？ 爺さんもう一回」

「色は、匂えど」

「なんだそれ、魔法の呪文かなんかか？」

男は、肌着の上から胸に手を当てて、呼吸を整えた。飛び出そうになった赤い咳を、そうやって一旦下がらせる。

こんな無邪気な笑顔を、曇らせることなんて、もつたいなくて出来るわけがない。

「色が綺麗で、匂いもいいけど。それもやがて散ってしまう、って意味さ」

「花？」

「そう、花」

「花かあ」

で、それが何の呪文だよ、と少年は食い下がる。

「呪文って言うわけじゃないなあ」

「なんだ、違うのか」

「でも、意味がないわけでもないし」

「なんだよ、もつたいつけるなよ」

湧き出る笑いに任せて、笑った。団扇で自分と士郎を交互に扇ぎながら、切嗣は虫の鳴き声に耳を澄ました。

虫のよく鳴く夏だった。縁側で、こうして二人でそんな無為なものに身を任せるのが好きだった。風も好きだった。土郎の淹れた熱くてちよつと苦いお茶、足元を這う蟻の列、塀の向こうで車が走る音ですら好きになった。その中に身を置くだけで、生きていると思えた。

その中でも、月が一番だった。

生きている。

「生きているよ」

「当たり前だろ。死んでないんだから」

間髪いれずに返ってくる答えが愉快だった。子供の感性は時に目を見張るほど鋭敏だ。大人になると、もう思い出すことも出来ない感性を、少年はいつまで持っていられるのだろうか。

「月がね」

「月がどうしたんだよ」

「僕は、月が好きなんだ」

虫よりも、風よりも、月が一番だった。

この縁側で、少年と二人で見上げる月が何より好きだった。

その月を見上げながら、切嗣は思う。不意に、自分の罪深さに驚く瞬間がある。この

手で奪った命の数を数えてみることにがある。数え切れなくなって、また驚く。けれど一番驚くのは、あまり深刻に考えなくなったことだ。

安らぎとは、あの月に向かうようなものだと思っていた。真実は、右手の届く温かいところにあつた。

少年は、月もいけど魔法を教えろ、と切嗣の服を掴んで揺さぶる。

こんな些細な幸せ、今まで知らなかった。

恨みも憎しみも、いつまでも残るものではない。どんなに深い傷も、いつかは消え去っていく。

「爺さん、眠いのか？」

いつだって、疲れた者の心を癒すのは、無垢なものだ。

聖杯からこぼれた黒々としたものを浴びて、切嗣も、己の命がそう長くないことを自覚していた。しかし平静でいられる。穏やかな心持ちは、痛みさえ不思議な柔らかさで包んでしまう。

「士郎」

なんだよ、という少年に、告げた。

「人はね、幸せになるために生きてるんだ」

有為の奥山を、切嗣はまた一步越えていく。

目の前の少年にも、いつか疲れて、どうしようもなくなつた瞬間が訪れたとき、願わくば、無垢な心を持つものが現れることを、祈る。

眠りに落ちていく。見るのはいつもの浅い夢。

幸せな、我が子の笑顔の夢だった。

第二話

朝の訪れも、もう六度を数える。

冬の冷気に、霜が張る。空気中の水分が冷えて結露するということは、その分空気は乾いていくということだ。

同じように、思考も乾いていけばいい、と私は思った。

考えるべきことは山ほどある。問題は、いくら考えても答えが出ない類の疑問だという事だ。

昔から、人の考えを汲み取るのを得意と買ったことはない。むしろ不得手だった。ひどい時には朴念仁とまで言われたことがあるが、それでも今ほど自覚したことはない。なにしろ、昔の自分の心境を理解しきれないからだ。

衛宮士郎に、一体何があつたのか。

あの男の変化を、正確に見抜かなければならない。絶対に見落としてはならないと、心のどこかで焦りに似た思いがあつた。妙なのは、その思いが、足元から地響きを起こすような怒りに囚われた類のものではない、ということだった。

見落としては許されない。だが、同時に自分の心境の変化についても自覚している。

正義を求めて、剣を振るってきた。自分の正義を信じて、戦い続けた。血にまみれて刃を毀し、己の主観の正義を貫き通した。正義など、客観的で、誰もが己の正義を持っているなどと、私は気づくことが出来なかった。私が刀剣の墓標の丘で生きながらえたのは、単純に力があつただけ、という理由でしかない。

ただ、力があつたから。

この生き方は、自分の影に、憎んだ紅蓮の炎の影を見る。

だから私は清算を目論み、この時代に到達することだけを願って歩いてきた。前を進んで歩き続けた命在りし日を全て否定して、この日に舞い戻って無に帰すことだけを、胸に秘めていた。

この生き方は人を救う。とはいえ、全ての人間を幸せにすることは出来ない。人を殺して、選んだものだけを救うのだ。まるで神のごとき驕慢である。気付くのに、長い時間と犠牲を必要とした。

墨をなす屍の上。そこに希望はない。光もない。滾々と溢れる、血と憎悪の流れがあるだけだ。

「そんな生き方を、目指す。愚者」

衛宮士郎がそこから脱却できたとは思わない。やつはそれでも、戦うためにこの夜に戻ってきた。事実、剣を振るい、私が生きた頃より早く投影を身につけた。

男は殺人を否定した。

しかし、殺さないと叫んでも、覚悟が固まっていない今のうちだけだろうと私は見ている。いつかは言い訳できなくなり、誰かを殺す。そうやって辻褃を合わせなければ、生きていけない、理想を持ち続けることが出来ないのがこの鉄火の戦場なのだ。親の仇を前にして、収められる矛なら初めから誰も持ちはしない。

立ち上がる。分析を続けながら。そろそろ、誰かが目を覚ましてもいい頃だろうと思つた。今夜の衛宮士郎とセイバーの行為について、心の揺さぶりは少なかつた。私のセイバーは、たった一人しかない。あの時の、あの日の彼女だけが、俺のセイバーだ。そう思える自分に、かすかな安堵があつた。磨耗せずに残つていた自分の原石を、見つけたような気がした。ただ、その考えに言い訳してみた色があるということも自覚していった。

思考から、脱却した。

凜も、衛宮士郎も起きてこない。昨夜の疲れがたまつているのだ。むしろ後者は、今頃強烈な痛みで苦しんでいるのかもしれない。なにせ、何かの拍子で開いてしまった、安定していない魔術回路を無理矢理こじ開けて、投影などという術式を扱つたのだ。全身の苦痛に苛まれて、呻いているのは容易に想像がつく。

それもいい、とどこかで思つた。暗い感情だつた。お前がそのまま死んでしまえば、

私のこの不愉快な葛藤もあっさりと消滅してしまう。

扉の開く音がした。セイバーだった。

金色の髪は、朝の冷氣の中では、少し濡れているように光った。

「目が覚めたか」

「アーチャー……」

かすかな頭痛を覚えた。身体のないこの存在に、そのような事象は起こりえないというのに。

セイバーは凜が持ってきたという私服に袖を通している。サーヴァントの外見に意味はない。全ては魔力の有無が物をいい、魔力が全てを代弁する。

だからああして、今でも消えそうだというのに平然としていられる。

私は言葉をかけようとして、それを失っていることに気付いた。なにをどう話すというのか。あの日の彼女だけが、という思いが毀れ始める。何があっても顔には出さない。それでも、じとりと、出るはずのない汗だけが、出てくる。逡巡を患っている間に、セイバーと見つめあう時間だけが積み重なっていく。

「なぜ」

こちらを見上げる視線を変えないまま、セイバーは訊いた。

「なぜ、あのと私を討たなかった」

柳洞寺の境内でのことをいつていることは察しがついた。

「彼我の戦力差は開いていた。ライダーが去り、キャスターを討ち果たす策があつたといえ、アーチャー。あのとき貴方は、私を討つべきだった」

「手を抜いたとでも」

「弓ではなく、あえて剣で向かってきただろう。セイバーである私にむかつて」

「下らない、計略に引っかけり、敵に寝返つた女。力を出すまいと向かってくる敵如きに、私の全力など必要ないと思つたのだ。事実、そうだった」

「なに？」

「はつきりいわねばわからんか？ 剣で討ち取れると思つた。それだけだ」

セイバーの顔が紅潮した。そして踵を返した。こうやって、嫌われるのもいいだろう、と思つた。彼女と話すだけで、神経を使いすぎる。あまりにも当たり前だが、面影がありすぎるし、距離を縮めたところで、彼女は衛宮士郎のサーヴァントであることに代わりはない。

主役は、自分ではないのだ。

「もう一度、シロウと戦える。そのことについては、礼をいう」

最後に素晴らしい残して、再び屋敷の中へと戻っていった。

シロウを守り、シロウと戦う。

皆、そういう。凜も、セイバーも。

何事もなく、一日が過ぎ去っていく。

昼を迎える頃に、凜に命じられ、新都まで足を運んで偵察をしたが、目ぼしいものは何もなかった。それ以外は、いつもの通り屋根の上だった。

凜にそれほど疲労はないようだった。毎日の日課をこなし、午後になると衛宮士郎に乞われて魔術の指南などをしていた。投影に適正があるとすでに知っているのも、その方面で伸ばしていくようだ。スウィッチについては、もう完全に開いているらしい。

私が衛宮士郎が扱う魔術の本質が、強化ではなく投影にあるということを見透かしていたことについては、追求されたが白を切りとおした。何となく気付いたといい続け、彼女も少々納得していたが、腑に落ちてはいないだろう。どこまで隠しとおせるか知れたものではないが、知らせるつもりも毛頭ない。

衛宮士郎はそのあと、セイバーと道場で稽古を積んでいた。屋根の向こうでも、集中すれば何がどうなってるか見透かす眼は持っているが、気にもしなかった。ただ竹刀で叩く音は聞こえてこなかった。何らかの話をしているらしいが知りたいと思うこともない。一度、セイバーと眼があつたが、それも無視した。

総じて、穏やかな一日だった。気を緩めはしなかったが、思慮をめぐらすにはちよう

どいい弛緩だった。

そのまま夜を迎えたとき、ふと、妙な気配を感じた。

私は腰を落とした。妙だと思っただのは、それがまるで私に向けてぶつつけてきたように感じたからだ。

屋根を蹴る。方向は、直上。干将を握り、振り向きざまに払った。

「ライダー」

暗躍する紫の色。夜から急降下してきたライダーの蹴りを、すんでのところではない。

まるで嘲笑うように、女は屋根から屋根へと飛び移る。追った。スピードに開きがある、私が屋根を二つ蹴る間にライダーは三つである。狭い間隔を俊敏に跳ね回り、鎖につながれた釘剣をうねらせる。間断なく襲ってくる刃を弾きながら、私は追尾を続けた。

斬撃を伴う鬼ごっこの終着点は、凜たちの通う学校の屋上だった。

壁を駆け抜け、間桐慎二の張った罠にはまり、ここに立った。それはつい先日のことだ。戦いに没頭すると、一日は驚くほどに長くなる。屋上からさらにもう一段高い給水塔の上で、ライダーはこちらを見ていた。夜の風に長い髪をなびかせている。

「また罠か？」

「まさか」

シルエットを映したまま、ライダーは平然と言う。

「武器をしまつてはどうです」

「敵を前にして、無防備になれとはまた何の冗談だ」

「けれど、しまうのでしよう?」

肩をすくめて、私は干将を収めた。元より、ライダーに敵意は感じなかった。放たれる攻撃も、特に殺気を伝えることもなく、俗に言うあいさつがわりというやつだろう。禍々しい眼帯と闇に隠れて判然としなかったが、彼女の口元に笑みが浮かんだように見えた。

上から見下ろしていることに気を使ったのか、ライダーがそこから軽やかに下りてきた。私も正面から向き直る。背の高い女だった。長い髪。どこか、剣呑な印象を受けるが、案外そうでもないのかもしれない。声に淀みが混じっていないからだろう。

「さて、一体何の用だ。下らないと思つたらすぐに切り捨てるぞ」

「我がマスターの命令で、衛宮士郎を守護することになりました」

その声は、いささか予想外だった。

「……間桐桜が、衛宮士郎を守る、だと?」

「流石に気付いていましたか」

ライダーは表情を変えずに言った。

「桜は令呪をかざして『衛宮士郎の命を守れ』と命じ、聖杯戦争を放棄した。この令呪の効力は、衛宮士郎の命が消えるか、桜との契約が切れるまで有効と認める。とはいえ、桜が私のマスターであることに何ら変わりはない」

「で、私に話を通すわけか」

「その方が効率がいいと思っただけです。セイバーは傷ついている。マスターにコンタクトを取ろうにも、結局はサーヴァントと激突する。それに貴方ならば、上手に私を使うでしょう」

「利用されるのも覚悟の上というわけか？」

「戦闘が決定的な局面を迎えるまで、姿を見せずに影に潜んで待ちます。知つての通り私は打撃力に欠ける。宝具はまだありますが、あれは使いどころが難しい」

まだ奥の手があるという。同盟を申し込まれるよりも、それは私を驚かせた。

「……全く、どこまで信用したらいいかわからんな」

「これもまた、貴方を信用させるための策。言っただけですよ？ 貴方ならば、私を上手に使う、だろうと。この力、捨てるには惜しいでしょう」

少しだけ、思案を巡らせた。言うとおり、ライダーの力は扱いには難しいが、捨てるには惜しすぎる。

仮に、周囲に居座ることを黙認したとして、戦闘中に離反されれば背中から撃たれることになる。逆に認めなければ、それはすなわち今ここで雌雄を決するということだ。

拒絶するには危うく、計略だと疑えばキリがない。記憶があるというアドヴァンテージもない。私は、桜がマスターであったことを生前は一つも知らなかったのだから。

「衛宮士郎の命を守るということは、敵対するサーヴァントは討ち滅ぼす、と考えていいのだな」

「ええ」

どちらをとつてもメリットデメリットが存在するならば、対バーサーカー用の切り札を一枚増やすと考えればメリットがより大きいだろう。

私は頷くことで肯定を示し、ライダーもまた視線を下げてそれを認めた。凜には、まだ黙っておいた方がいいだろう。折をみて切り出そうとは思うが、今はまだ彼女を休ませてやりたい。優れた魔術師とはいえ、二十にもなっていない少女だということに変わりはない。

「それでは、最後に確かめておかなければならないことが一つ」

この場を辞去する前に、ライダーは訊いた。

「貴方は、なぜ衛宮士郎を憎んでいる」

頭脳が揺れた。

いつかの呪詛が、息を吹き返す。

——幾年月、それを写し、熱で打ち、鋼に鍛え、血で振るい、欠片を毀したのか。悠久の時を彷徨う行為を終局へと導く。数多の骸をこの身は踏んできた。それは罪悪という単語ですら御しかねる行為。正義を履き違えた愚行は、この手で終焉へと切り換える。その機が、今私の手の平の中にスルリと滑り込んできたかもしれないのだ——
「なぜ殺そうと思っっているのですか」

——どう殺してくれようか。背中に背負った全ての死体をぶちまけて呪ってやるのもいい。貴様の全ては無駄と無力を培うことなのだと絶望させてもいい。聖杯など用いずとも、この手であればどうにでもできる——

「アーチャー」

ライダーの一言は、わずかに眠りかけていた私の根底を揺さぶった。

「答える気はないな」

それだけを、どうにか口に出すことが出来た。

「……下らない問いでしたか。ともかく、伝えるべきことは伝えました。もし貴方が衛宮士郎を害そうと動くのなら、そのときは私が阻止する、最後に言いたかったのは、それだけです」

「待て。こっちにも聞きたいことがある、ライダー。なぜ、間桐桜は衛宮士郎を」

どうでもいいことだった。それでも、聞かなければならないという気持ちに駆り立てられていた。

「愛しているからでしょう」

ライダーは、それだけをいった。言葉の衝撃は、ぶつかるといふような激しいものではなく、抗い難い力がじわりと浸透するような感じだった。

愛。それで、皆が皆、衛宮士郎を生かそうとしているのか。いや、口に出せばそんな言葉になるだけで、本当のところは理由などないのだろう。あまりにどうでもいいことだった。人の感情に理由があるのなら、争いごとなど全て絶えている。

多くの人間が、衛宮士郎に、生きて欲しいと願う。

本人だけが、知らない。それを罪と呼ぶかは微妙なところだった。逆に、衛宮士郎は己の身にかけてでも周りの人間を、と思いきんでいる。

自分を幸せに出来ないものに、周りを幸せに出来ないということも知らないで。いつの間にかライダーの姿は消えていた。私も帰還しようと屋上の床を蹴った。

衛宮士郎と自分を置き換えることはしなかった。この身はもう人間ではない。記録され使役される媒体であり、退行も発展もない。

だが、変化しない存在であっても、他の存在に影響を与えることは出来る。

月明かりに濡れる、曖昧な思考だった。冗談に似た思ひは、形さえ持たずに、また混

沌に戻っていく。

愛しているから。

ライダーの一言が、唐突に思い起こされて、束の間戸惑った。

第三話

幼稚さゆえに、切実さが伝わる怒鳴り声だった。はじめは一方的な響きだったが、やがて応酬になり、また単一な流れへと戻る。

私は、街ばかりを見ていた。衛宮士郎の声が、寄せては遠ざかり、震える。間桐慎二の声は、耳を澄ませば届くだろうが、聞こうという気にはならなかった。風景に視線を注ぐことだけに腐心した。

凜と呼ばれたのは、昼をいくらか回ってからだった。

「今から、士郎に付き合ってあげて」

彼女は何かの書物に目を通していた。分厚い背表紙を爪で叩きながら、閉口したような表情を隠しもしなかった。こちらを見もせずという。

「それはマスターとしての命令かね？」

私は何を、とは聞かなかった。凜は眉根の皺を一層深くして答えた。

「任す。士郎、多分道場にいるから。内容聞いて、貴方が決めて。用事済ませたら帰ってきなさいよ。いかないなら、また見張り」

用は終わったと、凜はやはり本に目を落としたままだった。私もそのまま背を向けよ

うとしたが、一つだけ問うた。

「ゆうべは寝なかつたのか？」

「寝なかつた」

衛宮士郎は今朝まで凜の部屋にいた。明かりは消えなかつた。話し声を、耳にしようとは思わなかつた。崇高で生ぬるい理想論と、つまらないが堅実な現実論が、一晚語つたくらいで止揚されるわけもない。

少なくとも、凜はこうして本の中の文字を追うこともままならなくなり、衛宮士郎は旧友との決着をつけようとする。今はセイバーと語っている。昼前に二人が道場へ入っていくのを屋根の上から見た。昨日ではなく、あえて一日置いたということに、私は何となく納得する気持ちを抱いた。何事も、直視するには時間がある。

今度こそ、私は部屋を後にしようと思つて背を向けた。

「アーチャー」

私を押し留める彼女の口調は、どこか迷いを含んでいた。

「なんだ」

「わたしは葛木を生かしておくつもりはなかつた」

「ああ」

「セイバーがやらなくても、私が殺してた」

「わかつている」

「それだけ。もういつて」

最後まで、凜は本を見ていた。私はまた屋根に戻った。

考え続けた。私に残された道はもうそれしかないとはかりに、思索を深めた。衛宮士郎は、今懸命に地団駄を踏んでいる。生と死の狭間で、理想と現実の境界で、じたばたと足掻いている。前へと進んでいるのか無駄なことをしていいのか、誰にもわからない。

この思索に、答えなど出るはずがない。自分は、あいつのように悩むことなどなかった。理想を追い続け、振り返る機能を最初に打ち捨てて、前のめりに縋った。衛宮士郎の苦悩は、誰かと語ることで前への道へとしている。一歩ずつ進むということは、そういうことなのかもしれない。その変化が私というイレギュラーがもたらした亀裂なのだとしても、その変遷の善悪を判断する基準にはならない。正しい道なのか、悪なのか。正しい道が、私にはわからない。衛宮士郎がそのまま正義の道へと至る可能性は、大きい。漠々とした未来は、しかしいつまでも不確定だ。その、不確定の道へと歩きだしたのかどうか、知りたい。

考える。わからない。お前は正しいのか、私が正しいのか、私は何をすべきなのか。思考に溺れていく。答えを見つけないことの出来ないもどかしさが、私から正常な呼吸を

奪った。街を見た。上空で鳴いた鳶に視線を移した。空は、いつまでも青いわけではない。戦場の空は、信じられないくらいに黒く赤くなる。この世で、変化の渦から逃れられるものなどないのだ。

いつまでも終わることのない思考は、もがくのに似ていた。脱却し得ない念から解き放たれるのは、道場からセイバーと二人で出てくるまで続いた。ようやく終われると、どこか救われたような気持ちにさえなつた。

「アーチャー、そこにいるんだろう。遠坂から聞いてるか？」

私は飛び降りて、目の前に立った。少年は一步後ずさりはしたが、瞳の中に臆する所はなかった。

「話を聞くだけだ。聞いたあとに、どうするかは私が決める」

「ちよつと、付き合えよ。別に難しいことじゃない」

「……なに？」

「いいから、付いて来いって」

衛宮士郎は、門に向かって歩いていく。

当然付いてくるものと思っっているその態度が、私を微かに苛立たせた。

苛立ちは、足に伝わり私の体を前へと進ませる。

道すがらに聞いた。

「どこにいく」

「教会」

私は全身の血が熱くなるのを感じた。

「リタイヤなら、一人でいい」

「……ああ、違う違う。戦いを放棄するのと違うって」

「では何しにいく。それ以外に、あそこに意味などあるか」

「あるさ」

坂に流されるように、歩調が徐々に早まっていく。私は人目を憚って、霊体に身をやつした。

「教会には、墓地があるだろ」

その一言で、私には合点がいった。今まで、思い浮かびもしない概念だった。

弔うことの意味を、少年は虚空の私に投げかけた。

「責任なんて取れないけど、でもこれくらいは、しなきゃいけないと思う。足を引つ張った俺と、直接手を下したお前だけは。それと同じで、セイバーも……違う、なんでもない」

セイバーと二人で話していることについては、察しがついていた。思うところがあつたが、考え込むのを避けるように私は質問を発した。蛇蠍は、もう死んだ。

「間桐慎二は、どうする気だ？」

「謝らす。とりあえず藤ねえに」

それしかない、とばかりに言う。

「でも、頭押さえつけて、つていうのは全然違うから。今日も、また殴りあいになったけどいつかは絶対わからせる。あいつ、根っこはそんなに悪いやつじゃないし。幸い、ライダーの結界で死者もでなかつたからよかつた」

注意してみれば、頬がわずかに腫れていた。

「今は遠坂が、部屋から出れないようになっていう暗示かけて、押し込んでるよ」

放り出すのではなく、最後まで面倒を見ようという気ではいるらしい。

深山の通りをまっすぐ東に進むと、やがて川に出る。公園から一望できる橋は、見事に瓦礫の塊となっていた。報道関係の車両と警察車が、いまだにひしめき合っている。衛宮士郎はそれらに特に興味を示すことなく、橋からさらに上流へと歩いていく。

急造の船着場がある。数日前、バーサーカー戦のあとに深山に戻ってきたときと同じ方法で、あちらに渡る。土手まで長く長蛇の列が出来上がっている。人を乗せて往復するボートには、どれにも「藤村組」と記されていた。

黙って最後尾について、順番が回ってくるのを待った。渡し場の手際はよく、二十分と待たない内に列の先頭に出た。顔なじみがいるようで、二言三言と話してようやく舟

に腰を下ろした。

河を行く。悲惨さを垣間見るには十分な時間を経て、対岸に降り立つとそのせいで衛宮士郎の足取りは一層早さを増した。早く行かなければ窒息する、とばかりに。

十字路をいくつか周り、長い坂道を歩いていく。下界を睥睨するような白亜の楼塔。坂を上りきる。建物には見向きもせず、その裏手に向かつて歩を進めた。

突き刺さっている、無数の——剣——クロス。その中でも、目指す場所は皮肉なほどにわかりやすかった。敷地から溢れんばかりの、新しい花。

他に人はいない。無人の墓地はどこまで無機質になれるのだろうか。真新しい墓石には、まだ生の匂いが残っている。その反動で、死の影もまた色濃く映る。

私は墓標に立つことを、拒まなかった。死者の憐れを悼む。頭を下げることだけは、しなかった。目に映る反省などという、偽善を行う気だけは永遠に生まれずに違いない。それは、胸の内だけですべきことだ。

真つ白な十字は、その主の完全な消滅を否定している。生きた証の一つとして、地面に突き刺さる。

「俺は、別に何も言わないからな」

手の平を合わせてから、衛宮士郎は言う。

「こういうのって、人から言われてやることでもないし。けどお前は、俺とセイバーを助

ける為に橋を崩して、その犠牲になってあの人たちは死んで。上手く言えないけど、残念だった、で済ますことは、ダメだと思つた」

「死んだものに、出来ることなどない。が、悼む意味はあるだろうな」

「……俺は忘れられない、一生」

いいながら、衛宮士郎は新しい供え物に押し込められている、奥の花瓶に手を伸ばして、離れたところの蛇口で水を替えるために立ち上がった。

「本当は、昨日行くべきだったんだらうけど」

水の音に、釣られるように口から言葉が突いてでた。

「日常を味わいたかつたのだらう？」

「へ？」

花瓶に花を戻して、十字架の前にもう一度供えなおす。

「犠牲の上で成り立つ日常のありがたみを、知つた上でここに来たかつたのだらう」

「言つたつけ、俺」

私は返答する口を閉じて、急いで姿を消した。

姿が現れる前に身を隠したつもりだったが、欺けた自信はなかつた。教会の従僕は、磔の主さえ無視する不遜を漂わせている。

衛宮士郎が、ようやく足音に気付いて身構えた。敵であると、直感は五月蠅いほどに

訴えているだろう。神父は意に介した風もなく手を広げる。

「弔問客を拒む気はないが、甚だ予想外の顔ではあるな」

「言峰綺礼……」

「聖杯戦争の最中だというのにやって来るとは、見上げた信心だ」

「……別に、信心つてわけじゃない」

「その地は未遠橋崩落に巻き込まれて召された者のそれだ……なるほどな」

「なにが、なるほどだっていうんだ」

衛宮士郎から、敵意が出すぎている。それに怯む男ではなかった。私もまた、思わず行動を起こしそうになるが、理性はまだ働いている。

「ここは惑う者を隔てなく受け入れる家だ。告解の真似事でもしてみるか……たとえそれが殺人の苦悩でも、聞き留めよう」

背を向けて、男は歩き出した。衛宮士郎が、躊躇いがちなながらもとらわれたように後続く。墓地を一周し、また広場の方へと向かいながら言峰は嗤った。

「なに、気にするな少年」

大した悩みではないと、嗤う。

「人の身で、全ての存在を救うことなど出来ない。人は優越種ではあるが動物の領域を脱出しきったわけでもない。生きることとは踏みに行き、押し退け進むことだ」

という定義が、覆るまでには至っていない」

「気に、するな——だって？ 命に良いも悪いも、ないんだぞ……！」

「人は人の死を乗り越えることが出来る」

向き合う意義すら見出せない稚拙なテーゼであると、神父は口元ゆがめて弁を続ける。

「黄金率の中の機能だ、これは。まさに、人は忘却することで生きることが出来る。少年、その罪と苦痛の味を覚えておくがいい。悲しくはあるが、それさえも、いつかは忘れることが出来る。味が出るうちに、じっくりとかみ締めておくことを勧める」

「言峰、お前」

「人は自己の有限性の中で無力を自覚する。かつてはそれを病などという輩もいたが——なに、人間など元々病んでいる。全ての壁を乗り越えて目的を果たそうなどと、そこそがむしろ病である。人は挫折の度に忘却という手段を用いて墮落する。己への絶望は実に甘美な免罪符だ。人は人の為すこと以上のことを為すことは出来ない——君は、実に貴重な経験をした」

「誰が、お前になんか」

「これは、嫌われたものだな」

何が面白いのか、男はくぐもった笑いを漏らしながら、やがて思いついたように言っ

た。

「……しかし。そうか、橋を破壊したのは君と……凜も当然関与してるか。彼女もまだ敗北したわけでもあるまい。いい、具合の混沌だ。今回はアレ程度では済まんかもしれんな」

「アレ……？」

熱死の彷徨う火の海。愉悦の思考は、それを思い描いているに違いない。

これは、毒だ。言峰という男は、衛宮という男に毒を盛ろうとしている。

私は止めようか迷ったが、奇妙な好奇心がそれを遮った。毒は少年の心に染み渡り、一体どういう変化をもたらすのか。衛宮士郎の心を読みきれない、己の浅慮から発する鬱屈した、黒い好奇心だった。

神父は、こちらの方を——偶然と考える方が自然だが、しかし——軽く一瞥してから嗤った。

「ふむ。それはまた次回とするか。背後にサーヴァントを従えずに、ただ一人来たときにでも語るとしよう。その日が来るか来ないかはまた闇の中だが、余人を交えるのも神に仕える真摯さに欠ける」

言つて、男はまた背中を向けた。

この男の全てが、毒である。その毒に刺激されて、黒い好奇心はどくどくと脈打つ。

衛宮士郎は過去を乗り越えることができるのか。真実を知って、あの男の前に再び立ったとき、殺意を抱かずにいられるのだろうか。偽善という、事実に屈するのか。それさえ踏み越えて前を見るのか。

毒は日差しを浴びて中和されていく。

第四話

舟を使つて深山へと戻つた。雲の隙間から、わずかに日が照っている。風の強い川の上でも、寒さは気にならなかつた。衛宮士郎は、気温以外の寒さに襲われて、肩を震わせている。

言峰という男について、耐え難い、悪寒がある。悪寒は、はつきりとした形をもたない。だからこそ、余計に異形へと育つていくのだろう。

なくはない記憶も、嫌悪感が全て塗りつぶしてしまっている。この聖杯戦争での立ち位置も、思い出せない。無意識の中へと抑圧してしまつてるうちに、曖昧なものとして封印されてしまつたようだ。

仇ということだけは覚えている。

「そうだ。食材、買わないと」

商店街へと入つていく。人通りは驚くほどに少なかつた。危険——いや、漠然とした不幸、そういいかえてもいい——を警戒している。人々は今、戒厳令が発令されたように怯えて外出を拒む。謎の昏睡事件。未遠大橋の崩落。柳洞寺から登る閃光。不可思議は人々を恐慌へと駆り立てる。今は、その一つ前の段階だ。ひっそりと、心の中の恐

怖を、溜め込んでいる。街は、異様に静かである。

衛宮士郎は、スーパーで食材をまとめて購入した。いくつものビニール袋を下げて、店の外へと向かう。

「あ、シロウだ」

「ん?」

子供が一人、駆け寄ってきて衛宮士郎の腕に抱きついた。

私は最初、その少女がイリヤスフィールだと見抜けなかった。普通に、近所に住んでいる子供だと思った。遊びをねだって、マスターがマスターの腕を取る。死線が縦横する戦争のただ中で、こんなことがあつていいはずがなかった。はしゃぐ声を上げながら、バーサーカーを繰る少女は嬉しそうに腕を引く。

私は本気で呆気にとられ——同時に、ああ、こういう子だったと、思い返した。

「い、イリヤ!?! なな、なんでお前ここに」

「え? 何か変かしら? この前会った時、また会えるって約束したじゃない。お兄ちゃん。忘れたの?」

「あ、え、や、忘れたわけじゃない。じゃないけど、あーなんというか」

バーサーカーを操る少女。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

敵を減らすチャンス、だと思った。人通りは少ないとはいえ、皆無ではない。だがそ

の程度のリスクを無視しても問題がないくらいに、戦果は大きいだろう。腕一振りの呆気ない挙動で、バーサーカーのリタイヤが決定する。たとえ目の前の子供が、イリヤスフィールという名の少女だとしても、私の双肩には世界という厄介な代物が積まれている。

ふと、列挙する廃墟となった商店街が思い浮かんだ。そして、花に埋もれた真っ白い十字架が。手には、鈍い感触。剣を握っている。いつかの誰かの、冷えていく死骸を、思いつく。

桜の二の舞を、私はしようとしているのかと、自問した。

私に、その罪をもう一度被る覚悟があるというのか。家族殺しは、馬鹿みたいに、重い罪だ。加えて、この場で戦うことで、周囲に及ぶ被害も——私は、一体何を考えているのか。多少の犠牲など、目をつむればよいだけだというのに。

衛宮士郎の腕を引きながら、少女は頬に小さなえくぼをこしらえた。

「ねえシロウ。今日はちゃんとお話に付き合ってくれるわよね。この前は、キャスターの居所を聞いたらさっさと戻ってしまっただから」

「ああ、うん。ええと、ごめん。あの時はほら、急いでだから」

「うん、ちゃんとキャスターも倒したようだし、アサシンも。マスターも殺したのよね。いいわ、許してあげる」

「……知ってるのか」

「ええ、知ってるわ」

少女はよくやったと、褒めるように笑顔を作る。

「ライダーのマスターはどうしたの？ 家に連れて帰っちゃったりして、ふふ、たくさん遊んだら後始末はちゃんとしなきゃダメなんだからね。わたしもいつも適当にやっちゃって、セラにお小言をいわれちゃうの」

その場でくるくる、はしやぐように回る。くるくると、言葉を操る。

イリヤスフィールは鼻歌を歌いながら、殺人と、それを凌駕する残酷な快楽を肯定する。

「後始末、って、なんだ」

「後始末は後始末よ。いつも、してること。シロウはどうしたの？ 燃やしたの？ 埋めたの？ 流したの？ まさか食べちゃったっていうのはないでしょうし、うーん」

少女は笑顔でさえざる。

衛宮士郎は、頭を殴られたようにその場にひざまずいた。痙攣するように震える腕を、少女の肩に置く。

「……なんでだ……」

眩きから、段々と声は大きくなる。痙攣も、比例する。

「みんな……みんな！ 殺すことしか考えてないのはなんでだよ！ なんて、そんな……」

「お兄ちゃん？」

「イリヤ……人を殺すな。殺すことは、ダメなことなんだ。ダメな、ことなんだよ……なんてみんなそんなことを知らないんだ！」

どこまでも陳腐な台詞が、私に届くことはない。少女にも届いていない。

ただ、私にも衛宮士郎が見えていない。

「そっか。シロウは、そういう在り方なのね」

それは苦しいことだと、わずかに少女は表情を曇らした。

「でもごめんなさい。わたしはこういうモノなの。シロウ以外のマスターは全部害虫だし、関係ない人が何人死のうと、どうでもいいの」

「どうでも、よくなんかないんだ。イリヤ、人の命は、葉っぱじゃないんだぞ」

「そういう生き方は、つらいわ」

肩に置かれた腕をほどいて、真っ白な少女は、姿に合わない大人びた足取りで、歩いていく。衛宮士郎が、いくら遅れてそれに続いた。イリヤは、度々振り返っては楽しそうに首を傾げる。そういう仕草は、とても子供らしい。公園までずっとその調子だった。

差し出された焼き芋を受け取って、嬉しそうに頬張りながら、少女はいくつかの話をした。故郷と、メイドと、聖杯戦争について。

敵は殺すものだと言った。締めくくるようにそう言った。

「お兄ちゃん、今日はアーチャーを連れてるのね」

少女の赤い瞳が、正確にこちらを射抜いた。目と目が合う。それだけで、動揺は何倍にも大きくなった。

私は、いつかは彼女を殺さなければならない。バーサーカーに勝つということとは、そういう解釈も許容している。

私は殺せる。私は、誰であろうと殺せる。多くの人を、守るためならば。一人殺して百人救えるのならば、百人殺して世界を救えるのなら。

今は、まだ機が満ちていない。ただそれだけである。

「二日、時間をあげる。だから、シロウの家に行くのは明後日。シロウのことを気に入っているから時間をあげるのよ。月が出た頃に、バーサーカーと一緒に」

宣戦布告というより、死刑宣告に近い響きがあった。

「イリヤ……どうしてもダメなのか。バーサーカーを、どうにかしてから、そうだ、家に来たっていい。いやもう、なんだっていいこの際。殺し合いなんて、ことは」

「覚えていてね、シロウ。いつかはわたしとも殺しあうし、誰かとも殺しあう。その時に

なって、手を抜くなんてことはやめてね。自分の命より敵の命が大事なんて、嘘だもの。嘘は嫌い。嘘は綺麗じゃないもの」

「嘘なんかじゃ……!」

「わたしを殺すのは、あなたがいいわ。その終わりは、きっと許せる現実だから」

言い残して、少女は雪の降り出した道の向こうへと、妖精めいた可憐さで姿を消した。死に対して、少女はどこまでも正直で、自覚的だった。

しばらく立ち尽くすことしか出来なかった衛宮士郎が、ビニール袋を持ち直して道を歩き始めるまで何分かつたのか。積もりそうもない、ちりのような雪だった。武家屋敷に向かつて坂道を登っていく。ぼんやりと虚ろな表情で、私は問われた。

「……アーチャー、お前」

「なんだ」

「俺、お前がイリヤを、襲うと思った」

「お前が邪魔をするだろう。それに、ここは人目につきすぎる」

「本当に、それだけか？」

「他に何かある」

「……いや」

我ながら、もつともらしい言い訳だと思った。嘘をつくのがえらく上手いなと、今回

の現界は自分に対してしばしば驚く。

門をくぐると、すぐに私は衛宮士郎から離れた。まっすぐに凜の部屋に向かい、わざわざ実体化してからノックをして、という面倒な手続きを経てから部屋へと入った。

「どうだった？」

「どうもせん。教会に行つて墓を見舞つてきた」

「そう」

出る前と同じように、凜は本に視線を落としたまま答える。ページの厚みは、変わつていなかった。

しばらく、会話が続いた。間桐慎二の処遇について、まだ決めかねているようだ。記憶を消して放り出すのが一番楽なようだが、衛宮士郎が許すはずもない。彼女と一晩語つたとき、責任を取らせる、と頑なに主張し続けたそうだ。

「このままだったら、いつか士郎は死ぬわ」

「迷っているのかね。僭越かもしれないが、君の考えを当ててやろうか」
「もったいぶらずに言いなさいよ」

「聖杯戦争が決着したら、衛宮士郎の記憶を抹消しよう」

「なによそれ、ひどい話ね」

「そうだな」

凜は、否定も肯定もしなかった。いつもなら、二つ三つと冗談をいって、それから沈黙がやって来て、私はこの場を辞去することになる。それを望む声が胸の内にあることを意外に思いながら、私は口にした。

「イリヤスフィールに会った」

隠し立てすることでもない。私は率直に言った。

流石に、凜はぎよつとした顔で本を取り落とした。

「明後日の夜。この屋敷に襲撃をかけると堂々と言い残して去っていった」

「……マジ？」

「嘘ついて何になる」

「知ってる。けど、聞き直したくなるのが人間の性つてものでしょう」

「逃げたくなつたかね」

「はん。逃げたくなつた時は、立ち向かえ、つてね。遠坂家の家訓よ。いま、決めたけど」
そつか、とうとうバーサーカーか。眩きながら、口に手を当てる。

朝から、遠坂凜という少女の雰囲気がおかしいことには気付いていた。気が抜けていくというほどではないが、生気をあまり感じない。衛宮士郎との会話のせいだとは思つたが、聞く気にはなれなかった。

このままではバーサーカーに殺されるだけだろう、ということだけははっきりしてい

た。そして、本調子ではないとはいえそれに気付かないほど、彼女は鈍くはないということだったらしい。

「走ってくる」

「……」

「わかってるわよ、一秒だって、もったいないってことは。でもね、走ってきたらスツキりするの。それが多分、今のわたしの最優先事項」

彼女が浮かべたぎこちない笑みに、私は皮肉に肩をすくめて返した。戻ってきたときには、いつも通りの力のある彼女に戻っているだろう、と確信を持って。

夜までこの屋敷で待つのではなく、逆にあちらに乗り込む。

作戦とは言いがたいが、それ以外に道もない。

屋敷では戦いにくいし、周りにも被害が出る。なにより、藤村大河と間桐慎二もいるのだ。戦うにはあまりに足手まといが多すぎる。

だがこれが奇襲になるなどと、樂觀に浸ることは到底出来そうもない。私たちが先んじて攻め込むことを、イリヤスフィールが予想してないはずがない。虎口に飛び込むことには変わりがなかった。

セイバーの回復は遅れている。宝具を使用するための魔力は、まだほとんど溜まって

いない。戦力は私を主として、どうか地の利を得ようというところに作戦は落ち着いた。ライダーについては、話さなかった。不確定な戦力に期待することは足元を掬われることになりかねない。

もう、今は月が昇った。私はいつものように、屋根の上。

静けさは、まるで街が海にでも没したかのように思える。

足音が近づいてくるのを、私は知っていたが見向きもしなかった。彼女と顔を合わせるの、いつも月の下だという気がする。偶然にしては、やけに綺麗だ。

「アーチャー」

いつも、見下ろすように立ったままだった彼女は、今日もそれを崩そうとしない。

それが、心地よかった。

「勝てますか」

毅然として、折れようもないほど澄明な声だった。私は、しばらく答えなかった。声の余韻が全て消え去ってしまいうまで待つてから、ようやく口を開いた。

「勝つ」

「そうですか。それならば、何の問題もない」

二人とも笑わなかった。二人に、笑顔はいらぬ。二度も殺し合ったサーヴァント同士、馴れ合いは主人に任しておけばいい。彼女なら、きつとそう考えるだろうという予

想は、崩された。

「なにか、あつたのですか？ 貴方から感じる力が、若干変わったように思えます」

「変わっただと」

「険が取れてます。少し、柔らかくなつたということですよ」

それは君もだ、と言葉を返さなかつたのは、ひとえに自分の変化を受け入れないがためだった。衛宮士郎が、私に影響を与えることなどない。殺さないという叫びが、私に届くことなどない。この身は、既に滅んでいる。

「聖杯など、求めるな」

セイバーは私の目から視線をそらして、無言のままこの場を後にした。

馬鹿なことを言つたと、後悔に似た気持ちに襲われた。

月だけが見ている。世界も、見ている。

私には、何も見えなかつた。

第五話

風がやんでいる。

川が近い分、冬木の町に風はやってくるのが当たり前のように、いつもそこにいた。吹かなければ、不自然だと感じてしまうほどに。暖流に乗ってやってくるぬるい風が、山裾から回って街を取り囲むように吹く。そういう風が、ほぼ一年中吹き続ける。それがやんだ。まるで街自体が、何かを覚悟して息を飲んでいるかのようだった。

私は、屋根の上で空を睨んだ。上空には風が残っているのか、雲は驚くほどの早さで東の街を越えていく。時間はまだ、昼をいくらか過ぎたあたりだった。

「アーチャー」

庭から顔を出して凜がいった。

「紅茶淹れて」

「なに？」

「紅茶。淹れてっていつてるの、口寂しくて。探したけどこの屋敷、どこにもポットなかった。まあ衛宮くんらしいわね。急須でっていうのもいいけど、湯呑みはナシよね」
「何がいいんだね」

「さっさと取ってくる」

袖をめくつて令呪を掲げるマスターに肩をすくめてから、私は屋根を蹴った。皮肉をたっぷり含んだやり取りが、いつもの私たちのやり方だ。戦いを前にしたからといってやり方を変えてしまうほどに、私たちは脆弱ではない。

風のない街を走つて、遠坂邸から紅茶道具一式を取ってくるのは、五分とかからなかった。それでも、凜は居間で遅いぞとばかりに口を尖らせている。反論を放り投げて私は台所に向かった。

水を火にかける。手に染み付いた動きに任せて、私は陶器を温め、茶葉をはかり、蒸らす。

この屋敷で、私と遠坂凜が二人でいるということに、違和感を覚えずにはいられなかった。在りし日に、戻ってしまったのではないかと錯覚を起こしてしまっそうになる。その錯覚は、目覚めたときにひどく惨めな思いを味あわせる類のものだ。

「この家、広い分、人がいないと寂しいわね」

畳に寝転がって、凜が呟いた。

今この屋敷に、衛宮士郎とセイバーはいない。今朝、いきなりデートするといつて出かけていったのだ。

凜ははじめは呆れて、途中から苦笑を交えて、最後は蹴りだすように送り出した。彼

女がそれを止めなかったのは、もう私たちにやることは残されていないからだ。ただ、敵地に取り込み、全力で迎撃するだけ。イリヤスフィールが残した一日は、執行猶予以外のなものでもない。

私は屋根の上で、黙って見下ろしていた。二人の姿を見送ったあとに、遠坂凜という少女が溜め息をこぼしたことを、私だけが知っている。連鎖的に、昨夜のセイバーの顔が、泡沫のように浮かんで消えた。

「紅茶まだ？」

「ああ——入った。全く。ま、いいがね。私のほうが紅茶を淹れるのが上手い。君にその正しい判断が出来ていることは評価するよ」

「全然悔しくない」

「それも、どうかと思うがね」

ソーサーごと受け取って、赤茶けた味と香りに口をつける。

「ん、おいしい。生前もやっぱりよく淹れてたから、こんなに美味しく淹れられるのかしらね」

「覚えていない」

「そっか」

しばらく、紅茶をすすする音だけが畳に吸い込まれていった。私はただ黙って立ってい

た。凜が、頑なに紅茶だけを飲んでいたからだ。紅茶以外の何かも一緒に飲み干してしまおうとしているように、私には思えた。私の勝手な思い込みかもしれない。はつきりしていることは、しばらく前から彼女が私の過去について詮索しなくなった、ということだけだ。

「ああ、そうだ。慎二にもお昼持って行ってあげないと。なんか癪だけど」

凜は紅茶を飲み干したあと、家主が作り置きしていた盆を手にとつて、間桐慎二を押し込んでいる部屋へと歩いていった。ついてこいといわれなかつたので、私は居間に残った。

衛宮士郎とセイバーが出かけていったことについて彼女がどう思っているか、気にするのはあまりにも下衆だ。下らない考えを打ち消して、昨夜からまだ結論が出ないことについて考えを馳せた。

バーサーカー。

その存在の力を感じ取るのは、一度でも相対すれば十二分だった。

臂力、速度、迫力、全てが桁違いといつて良かった。一撃でもまともに受け止めれば、そのまま為す術もなく押し込まれるだろう。近接戦の鬼であるセイバーでさえも、息も絶え絶えに碎かれたのだ。直接対峙してみると、圧力は二倍三倍にもなる。

マスターしかなかった。考えれば考えるほど、結論はそこに行き着く。イリヤス

フィールを殺せば、バーサーカーは即座に消滅する。ヘラクレスは膨大な魔力の塊を供給されて、はじめて現界出来ている。供給の根元が断たれば、数秒ともたずに霧散するはずだった。

バーサーカーの突撃を誘い、その隙にイリヤスフィール・フォン・アインツベルンを殺す。私とセイバーがいれば、出来る。凜も、おそらくそう考えているだろう。戦斧を振りかざすバーサーカーをセイバーが受け止め、私がマスターに向かう。

当然、問題はあった。セイバーが耐えられるのか。イリヤスフィールが姿を現すのか。もしものことを考え出せば、キリなどなかった。賭けは一度。私が、白い少女の心臓を射抜けるかどうか。

「飯を食わせてもらえただけ、ありがたく思えつての」

足音より先に、愚痴が聞こえてきた。障子が開くのを待つて、私は二杯目の紅茶をカップに注いだ。彼女の怒りを収める有効な手立てとして、今の所これしか思いつかない。

「あの男の処遇はどうする気だ？」

「……さあ。このまま帰すのは論外として、記憶を消すつてあたりで落ちつくんじゃないかしら」

「あの男がそれを認めるとは思わんがね」

「あの男って、士郎？ ……ん。ま、ね。任しておくにはちよつと危なつかしいけど」
凜は受け取ったカップを、勢いよく傾けた。何となくそうするだろうと思ひ、紅茶の温度はいつもよりわずかに低い。

「任すのか」

火傷をしなくても、勢いよく飲めば喉は熱くなる。むせるのを我慢しながら凜はいった。

「自分が始めたことは、自分で終わらせるべきだから」

その台詞は、今の私にとてもそぐう。

自分が始めたことは、自分で終わらせる。確かに、そのとおりだ。

「ところで話は変わるんだけど」

飲み終えたカップを流し台に戻しながら、何気ない風に彼女は私に聞いた。

「貴方はこの戦いを最後まで勝ち抜いたら、聖杯に何を願うの？」

「……どうしてそんなことを聞くんだね」

「いいじゃない、減るもんじゃなし。わたしもいったでしょ」

「……」

「本当は、気になってたのよちよつと。前から聞こう聞こうと思ってて」

「そうか、だが答えになってないぞ」

「ああもうグダグダしない。答えろ」

途端に、かすかに窮屈になり息苦しくなる。

命令に従えという、召還早々に、彼女が唱えた令呪の効果だった。

腰に手を当て、凜は目を細める。

彼女が一体なにを考えているのかよくわからない。

答えるしかないということだけは、はつきりしている。

「私の答えに、価値などないぞ？」

「それはわたしが決める」

「……わかった、いえばいいんだろう」

エミヤシロウを殺して、全てをなかつたことにすること。

当然、それを口にするわけにはいかない。だとして、他に適当なことをのたまつてこの令呪の縛りが消えるかどうか、疑わしい。私の中に願いと呼べるほど、綺麗な思いが残っているかの方がなおさら疑わしいが。

願ひ、それは忘れてしまったものだ。けれど字面は、けして消えないものをさす。愛する人たちとすべての人たちがただ笑つて暮らせること。それさえも忘れてしまった私の中に、明日に願う思いなど残っているのだろうか。

願う。何を、願うというのか。朽ちてなお、私の中で消えずにくすぶる、願ひとは。

答えは、口をついて出ていた。

「平和を」

「え？」

「この世に、消えてなくならない恒久的な平和を、私は願う」

裏切つて、裏切られて、最後は見向きもされなくなつた無様な願いである。衛宮士郎はただ平和を願つて、剣を振るつて終末をまたこうして戦いで塗りつぶしている。たとえどこまでいつてもこの願いだけは消えてなくならないことに、私はもう気付いていた。この結果だけは、祈つてならない。戦い続けた男は、何の価値もないただの阿呆なのだとしても、譲れない、見果てぬ夢。

似合わない、大口を開けて笑い飛ばす凜。私はああそうだろうなと答えて、呪縛から解き放たれた体を確かめた。手首をまわしながらいう。

「やはり、笑われたか……まあいい、他人の手による救いに意味などない。今のは、笑い話にしておこうか」

「ちよつと、笑つたからつて拗ねないでよ」

「拗ねてなどいない」

「いいけどね、悪くはないと思う、願うだけなら。ただ、似合わないと思つただけで」

「知つているさ」

誰よりも、知っている。

夕方になった。私はまた屋根の上。悶々と繰り返される思考を断ち切られたのは、やはり凜の声だったが、今度は顔を出さず、レイラインを通してだった。

「付いてきて、荷物も持って欲しいし」

「なににだ」

「夕飯の食材買いに」

私は首をかしげた。

「食材なら冷蔵庫に入っているのではないのか？」

「なんか、癪なのよ」

ふっと湧き出ようとする、彼女の気持ちについての下衆な好奇心を、私はまた叩いて割った。

半ば仕方なしに、私は彼女に付き従って街へ下りた。

商店街は、何日か前よりはまだ活気が戻ってきていた。テロだ、ガスだと騒ぎ立てても、いつかは終息に向かう。両の目は後頭部にはついていない。人は適度に忘却を繰り返して、今日と明日を生きていく。

通りの中で最も活気のある店へ凜は足を向けた。買い物かごを手にして、野菜やら肉

やらを慎重に選んで放り込んでいく。

「ねえアーチャー、あなた料理できたっけ」

あらかたの買い物物を済ませた後、屋敷への坂道を登りながら凜は言った。

「……私の料理の腕前が、今なんの関係がある」

「うん。まあ察してるところけど」

「……」

「なによ、そこまで嫌なら別に無理にとはいわないけど。不味い料理を食べるなんて、わたしもゴメンだし」

「聞き捨てならない言葉が二、三あったようだが聞き間違いかね」

「あら、気に障っちゃった？ ごめんなさいね、悪気はなかったの。忘れて頂戴」

「ああ、これが君のいつものやり方だとは重々承知だがね。知っていても黙っていられないことはある」

「ふーん、作ってくれるんだ」

「まずはそちらからだろう。どうせ大したもののは出来まいが」

「言ったわね。ほえ面かくわよ」

「君がな」

下らない戯れだった。こんなことに意味はない。お互いが嫌になるほど知っている。

私たちは、殺し殺される戦争をしているのだから。ただこの程度の戯れが、許されないことではないはずだ。

屋敷を目指して、坂道を登っていく。見下ろす景色はほとんどが夜だ。新都より西の深山はまだ明るくはあるが、そう長くは持つまい。

門をくぐっていく。くぐり終えるのを遮るように、音と共に風が吹き荒んだ。強い風だった。朝からやんでいた分、全て吐き出そうとしているかのようだった。凜が髪を押さえる。彼女を庇うように立ち位置を変えたところで、私はそれがただの風でないことに気付いた。

方向は未遠の川。河川敷の辺りから放射される暴風には、身悶えするほど濃い魔力が混ざっている。セイバーの魔力と、それを塗り潰す黒い、誰かの力。

私は凜を抱いて、河に向かって地を蹴った。ドサリと、買物袋の落ちる音がかき消える。

私の言葉など空虚だ。

忘れていた。私たちは、戦争をしているのだ。

第六話

昼と夜とがぶつかり合うのだ。ありえないことなど、何も無い。

宝具がかち合つての衝撃が、焼けるような風となつて押し寄せた。光と闇はお互いを食い合いながら肥大していく。白と黒が、余剰した力をあたりに波及させる。その現象。許されざる惨事。まるで生と死のアーマゲドンだった。

命の燈と希望が消し飛んでいく。均衡は無力なまでに刹那である。闇の波動が光を侵していき、貪るように飲み込んだ。そしてやつてくる夜。死の夜。打ち砕かれた黄金は、星の高みに昇ることも叶わずに、空の手前で霧散した。

「なに、いまの」

眩く凜を片腕でかばいながら、私は立ちくらみに耐えていた。自分の立てた予想が的中しているのを疑うこともできず、地面を蹴ることに力をこめるしかなかった。

鋼のかち合う音。その音が、まだ戦いが終わっていないことを教えてくれる。しかし、つばぜり合っているのがセイバーでないことだけは、確実だった。あれほどの宝具をぶつつけあつて、勝負がつかないはずがない。セイバーは、敗れたのだ。

飛び込む。剣舞を演じていたのは、黄金と、その周りを鋭角に挙動する、紫だった。

「誰、あれ……それになんで、ライダーが」

「躊躇うな、凜。死ぬぞ」

セイバーの元に駆け寄る。力で塗り潰され、鎧は粉々に砕け散っている。苦しい呻き。皮膚が焦げている。裂かれた服から、眩しいくらいに白い乳房がこぼれていた。頭の中でチリチリと音がした。戦いが、完全に一方的なものであったことを物語っていた。まるで、陵辱されるように。

私は立ち上がった。怒りで剣を握った。怒りで、足を踏み出した。不意に湧いた、よくもセイバーを、という言葉は、あまりにも滑稽すぎて私を少しだけ冷静にした。

「二人は死んではいけない」

「……ええ」

それだけで十分だった。私はマスターの声も待たずに、双剣を握り締めて黄金の王に正対した。蚊トンボのように跳ね回っていたライダーが、私の隣に着地した。両手に釘剣を握り——眼帯は外されていた。ゴルゴーンの秘宝、キュベレイの魔眼が鈍い光を放っている。

「よく生き延びたな」

「……相手にすらされなかっただけ」

「あれ、何者よ。サーヴァントは、もう全部で来たんじゃないの!？」

凜が叫んだ。

「躊躇うな」

「アーチャー……あんた、あいつ知ってるの……？」

「ああ」

男は、私を見てはいなかった。ライダーも見てはいない。まして、凜や衛宮士郎が視界に入っているのかどうかすら、疑わしい。傲慢が固まったできた虹彩は、己が獲物だけを見ていた。

「敵だ」

ライダーが鎖を携えて身を落とした。その全身が、速度を蓄えている。前衛に立つて戦おうとしているのだろう、それをおし留めた。

一歩、前に進んだ。そして初めて、こちらを認めた赤い瞳に、私は口を開いた。

「いにしえ、バビロニアに、半神半人の王がいたという」

「……ほう？」

「あらゆる武器をふるい、全ての財宝を蓄え、永遠を欲し、生まれて朽ちた王がいたという」

「ふん、貴様は此度のアーチャーか。よもや見抜かれるとはな。しかし、貴様如きが我が丘を口にするのは、無礼に過ぎると思わんか？」

ギルガメッシュ。

英雄王とさえ謳われた、私の対極に位置する、リアルだった。迫力は、底知れなかった。バーサーカーのように圧倒するものではなく、どこまでも深い、底さえ見えない断崖に面したような、そんな絶望を髣髴させる。

黄金と、どす黒い汚濁を纏って、ギルガメッシュは不敵に笑った。

その男の宝具を、私は知っている。

私がまだ俺だった頃——そして、それは今この時代のことでもある。私は、ギルガメッシュと相対し、その宝具の威力を目撃した。あらゆる、世界のあらゆる財を一手に握った、その男にのみ許された宝物庫の鍵は、空間を捻じ曲げて目標に殺到する。バビロンの門扉である。

全史、全時代の武器という武器は、元々その男のものだった。驕慢と不遜により亡び去った、歴史の源流に立ったメソポタミアの始祖。欲は解き放つものなり。全ては、王の懐中におさむるものなり。

「さりとて愚暗ども、王の上陸ぞ。頭が高いとは思わんか」

黄金の王が、片手を動かした。その手が上がりきる前に、私も手の平をかざした。

門扉がこじ開けられるのと、私の内面が発露するのは全くの同時だった。

五本と五本の名剣が銑鉄に帰する。ギルガメッシュの顔に、喜悦と怒りをないませに

したような表情が浮かんだ。

「……中々、面白い技を使うな。道化の物真似か」

セリフに隙を見出したのか、ライダーの体が動いた。残影だけを残して、闇の中を紫色の身体が飛び出した。無銘の釘も疾走する。蛇蠍のごとく這い進む鎖と剣は、ことごとく、鎧に傷すらいれられずに弾かれる。

それだけでギルガメツシユの鎧が、史上でも名にし負うものであるとわかる。えげつない角度の一撃も、まるで意に介することなく弾いてしまう。宝具級の力でなければ、きつと打ち破ることはかなわない。

腕が再び掲げられた。

パチンと爪弾かれる音を合図で、ライダーに向けて剣が飛び出す。それを相打つように私も投影をする。だが仮にも伝説級の名剣同士が激突するのだから、余波だけでもライダーを吹き飛ばすのに十分だった。

私の隣に軽やかに着地を果たすと——キュベレイのため——こちらを見ずに言った。

「アーチャー、援護を」

「死ぬ気か、ライダー」

「……ええ。桜は、私に言いました。衛宮士郎を守るために、死んでくれ、と。だから、死にましよう」

「出来るなら、生きて戻ってきて欲しいものだ。明日も、中々忙しくなりそうだな」
「まったく、休む暇はなさそう」

視線を私に合わせないまま、ライダーはシニカルに笑った。そのまま、腰まで流れる長い髪が地に垂れた。手も、大地につく。獰猛な肉食獣を思わせる——そして、溢れだすような色気があった。彼女の中で、魔力が膨れ上がっていく。臨界値まで膨れ上がったとき、この世の神秘が発現する。赤い不気味な色をした紋様が、ライダーの面前に描かれていく。

その敵意の矛先に立つ男は、面白そうな催しを眺めるように、腕を組んでいる。

「ほう」

「我が宝具の進路に、直立することあたわず」

「よかろう、女。精々、興のある芸を見せろ」

「——楽しんでる器量が貴方になるのなら」

騎乗兵が騎乗兵たる、その所以だった。

彗星は、大地から飛び上がるものでもある。青みがかつた白、視認を許さない速度で地面を薙ぎ払った。ギルガメッシュが、押し込まれるように後退した。光を追う。彗星となったライダーは、すでに空の住人となっていた。

馬体が輝く。翼が、星々を隠してしまうほどに明るく煌く。ペガソスの突撃は、少な

くともギルガメッシュを後退させた。

「天馬か、よいな。そいつは目玉が美味しいのだ。食後はいつも果実代わりに喰らうておった」

パチンと指を鳴らすや、数多の剣、空のライダーに向かつて殺到する。

馬は空を疾駆した。射出される武器の群を、速度をもつてかわし続ける。大きく空に半円の軌跡を描きながら、遠心力を加えて突撃する。どれほどの時速をたたき出しているのか想像もつかない。ギルガメッシュが再度後退した。

ライダーの動きのおかげで、私への注意が徐々に逸れていくのを感じた。

行動を起こすなら、今しかなかった。

「君は、私の宝具を知りたがっていたな」

「え？」

「知りたかったのだろう？」

「……アーチャー、わたしにつきり、逃げる、っていうと思つてたわ」

「倒せる敵を、倒さずにどうする。今は好機だ、ライダーもいる」

「——かましてやって」

逃げる気だった。ライダーを消耗してでも、ここは逃げるべきだと半ば思っていた。

私に誇りなど、欠片もない。だから平然と、逃走も可能だ。

だがその選択肢を、私は消した。いま戦っているライダーの姿を、惜しいと思った。惜しいと思つたのは、特別な意味ではない。この女を生かすことが出来れば、今ここで私が力を減らしても、バーサーカーと戦うときに役に立つだろうと、そう考えたただけだ。それに、さつきからこちらを一人の阿呆が見ている。逃げるということは、この目に負けを認めるような気がして、ならなかった。

「見ていろ」

背中に、視線が突き刺さっているのを感じた。熱い。熱いと思えるほどに、目は、私の背中を射抜いてくる。上等だった。見せ付けてやる、という気になった。衛宮士郎。貴様はここまで、登ってこれるか。

—— I a m t h e b o n e o f m y s w o r d .

列挙された、撃鉄が、一斉に起き上がっていく。この、壮絶な感覚。世界が広がっていく、感覚だ。広大な地平を、魔術回路が塗り潰していく感覚だ。ギルガメッシュの宝具が迫る。駆け出す。第二節を、呟いた。起き上がった撃鉄が、光り輝いていく。発光しながら、全てが刀剣へと姿を変えていく。身震いは、さらに震度を増す。

私の内面は、想像と直結してるがゆえに、無限だ。果てない褐色の大地に並んだ、永遠の刀剣の群。切っ先は一つ余さず、天を向いた。詠唱。第三節。居並ぶ刃紋は、炎と共に世界を切り裂いた。

懐かしきこの世界、飽き果てた我が内面。

私に残された、たった一つの力。

今こそ、無限と永遠を、再び世界にこめよう。

「な、に——」

「アーチャー!」

ギルガメッシュがたじろいだ。ライダーと凜が、同時に声を上げる。衛宮士郎は、ただ息を飲んでいるだろう。

錬鉄釜が猛る。その火で地平は焦げ付いた。酸化した大地に突き立つ永遠の刀剣は、墓標を模している。

「……そうだ、英雄王。この結果は、たとえ貴様であっても——いや、貴様だからこそ、焦燥に値する」

「どこの雑種が……そのようなのたまいを」

「つまり、全力でこい、ということだ」

ギアが連動する。世界装置が作動する。

無限の剣製。不滅の刀剣世界。アンリミテッドブレイドワークス。

この闘志の墓場に、いま再び、齒車を軋ませる。

第七話

劍は劍。槍は槍。矛は矛。矢は矢。

いつしよくたの歴史の中で、いつしよくたの世界を切り裂き、余すことなく名声を謳歌した刀劍の軍団が、鏡を挟んで向かいあっている。鏡像は、自身を不安に陥れる。刀劍は憤った。呪われたシンメトリーを打破すべく、突進する。正面衝突する理想と現実。かきならされた破砕音のあとには、虚実も真偽も全てが全て、銑鉄と砂塵に立ち返った。

怒りに全身を振るわせながら、ギルガメツシュは開門しては武器を放ち続ける。射出される半歩前に、私は己から踏み込んでいく。全く同じ武器を解き放って、一步の差がさらに縮まっていく。

破裂。破裂。

無限とも思える玉砕の果てに、滅びるのは一体どちらなのか。

ギルガメツシュがいくら全ての財宝を持つていたとしても、握る刀劍の力を存分に引き出せるわけではない。いくら名劍であろうと、使い手が未熟ならばなまくらなのだ。ならば、投影された劍で打ち崩すことなど、造作ない。

ここは私の世界だ。剣はすでに用意されている。タイムラグの差で、私はギルガメツシユの風上に立つ。とうとう敵の防壁を打ち破った私の幻想を、ギルガメツシユは跳んでかわそうとする。だが爆風はその標的を逃しはしなかった。

浮き上がる体躯に向けて、さらに剣を打ち出す。敵はその時、初めて攻めるためではなく、ただ身を守るためだけに剣を振った。さつきとは正反対の構図であった。再び上げた顔には、変貌した形相が張り付いていた。碎かれた握りを投げ捨てながら、男は叫んだ。

「固有結界とはな。これが貴様の切り札というわけか、アーチャー……フエイカー！」
「そうだ。私が唯一使える、業だ。この具現化された世界で、私は勝つ」

ライダーが空より、静かに降り立った。キュベレイの魔眼が取り込む呪縛は、確実に敵を蝕んでいる。それでもこちらを正面より睨みつけながら、男はいった。

「よかろう、この世界では貴様が上だ……だが、負けん。王に敗北はない」
ギルガメツシユの態勢が落ちた。腰を落とした、不遜を捨てた構えだ。

王室の鍵がこじ開けられていく。開かれていく門扉を前にして、私とライダーがまた時を待った。

空白はいくらもなかった。

声が重なった。

「トレース・オン」

「翔けなさい」

「財宝よ」

ライダーが弾け、私は直進した。ギルガメッシュも刀剣を放つ。

三者二様の戦い振りが、世界の終焉を早めていく。

鉄を打ち、それを撃ち、敵を討つ。

もはやなにゆえの闘争なのか、白濁としてしまうほどの、音と光の嵐が吹いた。

ギルガメッシュの速度が上がっている。まこと、不遜を捨てた速さだ。消し飛びあう財宝の狭間で——白馬と騎乗兵が、螺旋を描きながら肉薄する。

「グ、ああ」

ギルガメッシュは、ライダーに攻撃を向けることが出来ない。正面から私と押し合
い、さらに劣勢である。ライダーは隙を逃さなかった。低く滑空してくる馬体が、ギル
ガメッシュの体を蹴上げる。追い討ちは、だが落下してきた異なる五枚もの盾に阻まれ
る。

ライダーはそのままの勢いで、褐色の天空に滑っていく。

「婢女が……畜が我を足蹴にするだと……」

「次は顔を蹴ってあげる」

「雑種があつ！ 女ごときが！ ならばまずは」

こちらにはではなく、上空に手をかざした。空中で輝いている、ライダーとペガサスに向けてだ。そして、瞬きするほどの間で、剣がライダーの周りを、球体が縁取られたように取り囲んだ。

間に合わない。逃げ場は完全に断たれていた。

「貴様からだ！」

球体は、握り締めた拳以上の密度で、集束した。ぞぶん、という肉が千切れる音。剣山に呪われたような体になって、ペガサスとライダーは地に落ちる。

私もただ見ていたわけではなかった。攻め続けていた。五枚もの巨大ないくさ盾に、亀裂を入れて順番に砕き、最後の一枚を消し飛ばした。敵は無防備な腹を晒して、私にとってはこの上ないほどの好機がやってきた。上空に手の平を掲げているギルガメッシュに向けて、ありつたけの幻想を壊した。

伯仲していた剣製の競い合いが、途端に決着する。群をなして駆けていく名剣名槍の類が、炸裂しては金色の鎧ごと押し込んで弾き飛ばした。

気付けば、無意識に足を踏み出していた。偽者が、源とも呼べる本物を打ち砕くというごとに、とてつもない興奮を覚えていた。心の片隅で、目前の敵はただの敵ではなく、己が歩んだ人生に重ね合わせていることに気付いていた。

偽者の自覚を持って戦い続けた己は、現実という壁の前に理想をなくした。

目の前にいるのは、現実そのものだった。

「リアルよ、砕けるがいい……！」

大地に生えた剣把を、掴む所から構うことなく撃ち出した。朦々と、舞い上がった熱波はしばらく晴れることはなかった。

煙が足元から晴れていく。私は、勝ちを確信していたわけではない。が、負けを焦ったわけでもなかった。

それでも、敵の無事は想像していなかった。

「我が、身を包むことを許すほどのものだ。この鎧を飾りだと思つたか？」

ズチャリと、踏み出してくる男の肩から、焼け焦げた煙が立ち昇っている。頬に切り傷が見えた。ひたたれは燃え尽き、脚甲は一部が欠けている。

それでも、現実には砕けなかった。

「貴様の固有結界の中では、私の不利であることを認めよう。が、貴様も神になったわけではあるまい。いまだれほど魔力が残っているのだ？」

煙が完全に霧散した。視界が完全に晴れるはずが、ギルガメツシユの背後に、巨大な壁が築かれていた。見上げるほどに高く、首を廻さなければならぬほどに長い。

それが壁ではなく、剣袞槍袞だと気付いたとき、私は鳥肌を抑えることが出来なかつ

た。

上空から四百本。左から二百本。右から二百本。正面から千二百本。

切つ先で包囲される気分というのは、想像以上に最悪だ。

敵は、これほどの刀剣を引き抜くために、あえて己を盾にした。

「あ、く」

誰かのうめきを聞いた。消える前の、最後の一声なのか。

人はこれだけの肉切り包丁を作ってきた。血を血で洗い、肉は鋼で断ってきた。いま、これだけの照り返し、人を殺し続けた刃物の煌きは、そのまま死の具現と呼べるのではないか。

——人類の死因がやってきた。

「この世界と、貴様の理念は認めてやってもいい。だが——ハ、ハハハハ。悔いる間もなく死ぬ」

言うとおり、自分の不始末を悔いる暇はない。風切音で耳を覆いたくなるほどの数だ。ギリギリと精神が研磨される。魔力の枯渇が、いくつもの段階を飛び越して近づいてくる。私はありつたけの武器を、錬鉄し続ける。ギルガメッシュが取り出した同じ数だけ、私は並べて揃えられるのか。

世界は、巨大に布陣した、まさに刀剣による戦域と化している。

敗北感から目を逸らすことは、多大な労力を必要とした。

「ゆくぞ」

迷いから目をそらした。鍊成し終えた第一陣から私は突っかけた。磁石のように引き合つて、同じ銘達が崩しあう。ここまでは、先ほどの焼き直しだった。

「ず、あ」

厚みでは完全に分が悪い。私の剣をかくぐるように、ギルガメツシユは宝具を操る。形にする間もなく、素の概念だけをぶつけて何とか誤魔化した。こうやって、防ぐことが出来るのなら私の制空圏が侵されることはない。今は劣勢だったが、負けることはない——この思いの一字一句を調べて回つて、果たして油断や甘えがなかったと、言い切れるだろうか。

黄金王が、いつからか、黒々とした一本の剣を携えていた。

「ギル——ガ、メツシユ！」

「雑種に我は殺せん。たかが人の身でこの身を消し去ることは出来ん。愚か者——愚か者どもが。誰が許した、貴様らは地を這え。誰が認めた、目を開けると。虫けらに比する命の軽さよ。この名を呼ぶことさえ貴様らは百年願え。我は永劫の王よ。我の先に王はなく、我が後には紛いのみ。終わることなき我が祭壇の儀式を崇め続けることだけが貴様らの——アーチャー、この世界と貴様の理念、不愉快だが不透明ではない。ゆえ

に、我が全霊の一撃をもって葬ってやる。聞け、この大いなるウルリクルミの歌を」
 見ただけで仕組みを悟れるこの私でさえ、中身が見えない。皮肉なことに、見えないからこそその剣の正体が判然とした。

世界を切り開いた創世の鋸が、毒ガスめいた瘴気を撒きながら、駆動する。

「己が無知を痴れ。己が無力に散れ。我が名はギルガメツシュ。我は無敗のみを知る
 ……天地乖離す、開闢の星——」
 「エヌマ・エリシュ——！」

黒い波動が振り上げられる。宇宙を削ぎ取った圧力が、振り下ろされるその最後の瞬間、真つ白な閃光がほとばしったのを私は感じた。

白。滲んだ白に向け、私は手をかざして叫んだ。

「熾天覆う七つの円冠——」
 「ロー・アイアス——！」

後方から、流星は私を追い越した。駆け抜けていく彼女と、私の目が合うことはないというのに、どうしてそんな気になったのだろうか。私は、悲しさを覚えたというのか。花開いた七つの守りを頭からかぶって、蒼白い輝きに桃で水彩したような滲みが濡れる。

騎英の手綱——「ベルレフオーン——」と、ライダーは喉をからした。

固有結界は、宝具の激突に耐えられずに崩壊した。

無傷なものは誰もいなかった。ギルガメッシュは、こちらを詰まらなげに一瞥した後、声もなく立ち去った。

滲んだはずの白は、もうどこにも残っていないかった。

第八話

他に選択肢はなく、その他になすべきこともまたない。

戦うだけである、と私は二度三度と頭の中で繰り返した。まるで怯えに言い聞かすような行為に、わずかばかりの躊躇いを自覚しながら。

セイバーと衛宮士郎を家に運んでから、私は凜の部屋を訪ねた。日付は変わっていた。夜は沈殿していた。宿命だけが、渦巻いていた。彼女は明かりもつけず、椅子に座って暗闇に自分を溶かしていた。

「なにやら、元気がないな」

「……ノックくらいしなさいよ」

「したと思つたが」

私は明かりのスイッチをつけて、腕を組んだ。振り向いた彼女は、何か嬉しいことがあつたみたいに笑つた。目を細めて、白い歯が眩しかった。その表情が静かに消えてしまふまで、私は黙って見つめていた。

ふうというため息の後に、彼女は口を開いた。

「アーチャー、アンタどれだけ消耗してるの？」

「かなり、としかいえんな」

「そう、そうよね」

固有結界は発動させるだけで、私の魔力の数割を持って行ってしまふ。ギルガメツシユを打ち滅ぼそうと打ち出した刀剣とロー・アイアスも含めて、消費した魔力の総計はあまり考えたくはなかった。

バーサーカーは、ある意味ギルガメツシユより手強い。私と、全く同等に近い能力を持つ黄金王とは違い、ヘラスの大英雄は真の一のみを持つものだ。百二百の複製は、たった一つの真正に敗退する。神に招聘された灰色の大巨人に、アンリミテッドブレイドワークスは意味を成さない可能性が高い。

状況は抗い難いほどに逼迫し、逡巡する猶予さえない。

時間は一秒刻みで進むわけではない。同じリズムで、そのときに近づいていくわけでもない。加速度的に接近していく運命への目撃は、いまだかつて誰にも止めることが出来なかった運動だった。

その車輪に、遠坂凜は飲み込まれかけている。

「このままじゃ負けるわ、わたしたちは」

「誰に？」

「誰に、って。決まってるじゃない。バーサーカーよ」

「そうか。そうだな」

「……何か手があるの？　だから、そんなに落ち着いて」

ああ、と私は頷いた。

「言つて。何でもいいわ。何でも」

「克己。今まで、君がたゆまずに続けてきたこと」

揺るぎない勝利への確信だけが、針の穴をも通す。

方一つしかないのなら、その一つを死ぬ気で信じればいい。二つも三つもないのだから、逆に信じやすいというものだ。それについて一番よく理解している少女が、答えを見失つてしまつてゐるということは、何よりも悲しいことだった。そしてその原因が自分にあるということも。

電灯が二度三度点滅して、一瞬だけ全ての光と影が入り混じつた。私は言った。

「凜、私は君の強さが嫌いではない。それに守られている、やさしさも嫌いではない。ま、つまりだ。私がつてゐる遠坂凜のイメージを、壊さないでくれ、ということだ。端的だろ？」

「……どういふ意味よ」

「変わるな。君は君のまま戦つて、遠坂凜は遠坂凜として勝つのだ。他の誰になることもない。君は、ただそれだけで十分すぎる人格だ」

それは最大限の信頼の証のつもりだった。嫌いではないのだ、彼女の、立ち向かう勇氣と、優しき。それを押し殺す冷徹さまでも含めて。

視線が交差して、秒針さえ語らない沈黙の中、魔術師はさきほどの強がりとは違い、本物の笑顔を見せた。

「そうだその笑顔のためなら、と。バカみたいに陳腐な言葉が脳裏をよぎる。

「だが、本心だからな」

「え？」

「なんでもない。こっちの話だ」

彼女を勝利に導くことができたなら、あとはもう何も望まない。むしろ私のような間違った存在は、彼女の人生に染みすら残すことなく消えるべきなのだ。この世界は彼女らのものであって、決して私のものにはなりえない。もはや復讐すら放棄した私には何も無い。ただこの身は鉄に戻り、今まで通りにゆっくりと錆びていくだけ。

そのために、何度でも、闘争の炉に火をくべよう。

「さて、主の機嫌が元に戻った所で、考えようか」

「そうね、諦めでもなく、無謀を期すわけでもない。作戦を」

「作戦の背骨は同じ考えだと思いがね」

「待って」

凜の顔が固く強張った。私は待たなかった。

「今から、アーチャーはバーサーカーに決闘を挑む。君も、それを考えていたのだろうか？」

命令をくれ」

「……違う、時間はまだあるんだから。アーチャー、行けばアンタは」

「希望で事実を捻じ曲げるな。時間はどこにもない。数字はいつも人を惑わすものだ」

また、電灯が点滅した。そろそろ交換が必要なようだ。確か蔵に積み上げているはずだった。もし帰ってきて、まだ衛宮士郎が変えていなかったのなら、そのときは私が取り替えよう。

光と影が入り混じる。それに追いやられたように、少女は口走った。

「アーチャー、今の状態でバーサーカーと一騎打ちをして、勝てる見込みは？」

「やってみなくてはわからない」

「それでも、今より魔力があつたのなら、だいぶ違うんでしょう？」

「それは、そうだ」

「わたしは、マスターよ。勝つためだったら、なんだったって協力、するわ」

途端に耳鳴りに似た緊張が部屋に満ちて、秒針が復活した。カチカチというリズムが心臓の鼓動よりかすかに早いので、急かされた鼓動はいつもの律動を乱す。急に部屋が窮屈なまでに狭く感じられ、ふと、この狭い部屋の空気は、全て私たち二人で呼吸し尽

くしてしまったのだらうかと、わけのわからない理屈が飛び出した。

ちらついていた電灯が、完全に消えた。

凜はこちらを見ていなかった。視線は畳の編み目を数えているようだった。私は足を踏み出していった。一步、二歩と歩いた。彼女の目が私の足を避けて、段々と俯くようになる。

椅子に座ったままの少女は、もはや真下を見ているだけであつた。いつもは強靱な精神を宿している体軀も、押せば倒れそうなくらいに華奢で、か弱い。

彼女の頭に手をやった。それ以外どうしたらいいのか、わからなかつた。一瞬でも、抱きしめてやりたいと思つたのはとんでもない罪だろう。

指先で髪をかき乱してやった。

「寶石を、一つもらおう。いま君に出来ることといえば、精々そのくらいだな」

途端に少女は、馬鹿、といつて顔をくしゃつと歪めた。

私たちには、私たちの守るべき誇りがある。戦友は肩を並べる。戦友のためなら死ぬる。戦友同士は、ひたすら前だけを見続ける。そこに男女の情が介在する余地はない。

ルビーを手渡しで受け取つた。触れた指先が、熱くて、決心が緩みかけたが間もなくさらに固くなつた。電灯が生き返る。マスターが命令を下した。

「行きなさいアーチャー。イリヤスフィールの暗殺を命じるわ。ダメだったときは、バーサーカーに、なるべくダメージを与えるの。朝まで士郎とセイバーは動けない。貴方が時間を稼いで、二人の時を稼ぐの」

「承知した」

「ここは守りにくい場所よ、だから最悪なのは、貴方が私たちの逃げる暇を得ることなくすぐにやられてしまうこと。朝まで、何とか時間を」

「ああ、承知したといった」

「それじゃ」

背中を向けた。別れの儀式は終わったのだ。これ以上は無駄なことで、心の贅肉ではない。だが、時に無駄なことが必要な時もある。彼女と、そしてきっと私にとっても、今がその時だったのだろう。

「わたし、紅茶が飲みたい」

「紅茶か」

「飲みたい」

「わかった、また、明日の朝にでも淹れよう」

振り向いたが、凜は背中を向けたままだった。小さな背中が私に、声を。わずかに震え、わずかに憂い、そして強かった。

「楽しみに待ってるから」

「いつてくる」

静かに障子を閉めると、私は廊下を歩いて庭へと出た。月は雲に翳っている。今生の別れには相応しくない。

戻ってこようと思った。

庭に出ると、いるはずのない男が立っていた。

上半身に包帯を巻いたままの格好で、門にもたれ込んで私を待ち構えていた。

「アーチャー、俺はお前が嫌いだ。だから帰って来い」

「……わけがわからんぞ」

「嫌いだから、帰って来い」

「阿呆かお前は」

言ってから、膝をついた。私は理屈に欠けた愚かな行動に、苛立った。その未熟さで、彼女らの足を引っ張るのではないかと思うと、さらに苛立ちは増していく。だがそこに自己嫌悪の暗い陰がないとは断言できない。

「絶対に、死ぬな。負けてもいいんだからな、けど、帰って来い」

「意味をわかっていつてるのか？」

聖骸布をゆつくりとほどいて、拳に巻いた。何重にも繰り返し、分厚い塊にしてしまふ。祝福とも呪いともつかない力がとぐるを巻いていた。この力に、衛宮士郎は耐えられるのだろうか。耐えるだろう、と自然に思った。耐えられなかったのなら、死ぬだけだ。今とあまり変わらない。

結界概念で凝縮された右拳で、私は衛宮士郎の体を貫いた。

「う？ あ？」

わけがわからない、とばかりに士郎の目がこちらを向いた。痛みはあるだろう。私はそれを無視し、傷ひとつなく精神と体を切開した拳を、さらにめぐりこんだ。

硬い感触には、まだ遠い。呻きとともに、両腕が私の顔を殴りつけた。

「が、あ」

少年の意識が遠のいていくのと比例して、その体内の核に近づいてくるのがわかる。私の髪の毛を引っ張り、引っかく手。構わずに、私は男の体内に押し込んで、めぐりぬいた。

「あう、ぐ」

そしてたどり着く。確実にその存在する概念を、力をこめて握り締める。

「あ、ああ、ああああ！」

「気付け、衛宮士郎。貴様はただ、生み出すものに過ぎん。極めて見せる。最強は、常に

自分のイメージに他ならない」

「——あ」

抵抗が消えた。死んでさえいなければどうでもいい。虚ろに、二つの目が見上げてきた。

「お前は、ゆくがよい。理想の最果てを目指して走れ。理想は選ぶことを許さない。お前は、この先、もう何一つ選べない。あれかこれか、ではない。あれもこれも、だ。ただの一つの失敗も、ほんの少しの取りこぼしでさえも、お前を壊してしまうだろう。全てを救え。今のお前の覚悟はたかが知れている。しかし、誰も助けてくれない、砂漠の放浪に似た人生を歩むがいい。後ろを振り返ることなく、種を蒔け。妄信だけが、お前の牙城なのだから」

男の中から腕を引き抜いて、聖骸布を再び纏った。衛宮士郎の顔は見えない。気がついていなのかどうかも確かめずに、私は言葉を切った。聞いていなければ、それはそれでいいだろうと漠然と思った。私も気の迷いで言っているのだ。

気の迷いが長じて、私は余計な一言も口走ってしまった。

「桜から、目を離すな」

そして私は走り出した。もう言い残すことはなかったからだ。遣り残したこともない。右手にルビーを握り締めた。彼女に命をもらった時の、あの学校の廊下のそれより

は小ぶりで、こもっている力も少なかったかが、フラツシユバックは私の意志を強固に固めた。

赤い線を刻まんばかりに疾走する。夜を飛んだ。アインツベルンの森まではずぐだった。暗い、鳥の呻きも聞こえない森を、ただ駆けた。罨らしいものも何一つなかった。来い、と誘われているようなものだ。

門の前に立つと、迷うことなく扉を押した。白い扉の向こう、白い少女と黒い怪物が私を待ち構えていた。

「待つてたわ、アーチャー。ふーん、よく一人で来たわね。捨て石か、可哀想」

圧迫は異常過ぎた。受け流すために、目の前にいるのは、ただ大きい男と小さい女だと、ただそう考えた。または黒と白。わかりやすい。どちらか一方を倒せばいい。ややこしいことは何もない。それだけだ、ひどくわかりやすくなった。簡単なことだ、と笑いたくなった。黒い悪夢も白い地獄も、嫌というほど渡り歩いてきたのだ。

「捨て石などではないさ、勝つのだからな」

口に出して確固たるモノとした。耳にすれば、その覚悟はより一層固くなると、信じなかったのかも知れない。

シャンデリアが震え上がった。

鉄が意志を持ったかのような頑強さで、巨人は大地を踏み荒らすだろう。咆哮は、人

を殺せる。斬る、という言葉が当てはまらない一撃は、私を文字通り消す。当たれば、の話だ。

狂戦士ヘラクレスは、傷さえ付かない鋼の具現のようだった。

しかし我は、その鋼さえ断ち切る血潮の剣。

ならば切り捨てる。泰山によりて我は真の剣と化す。

頭の半分を殺意で埋め、残り半分に水をかけた。ふつと白くなるほどの闘志の外に、冷静に戦況を見据えている自分もいた。戦いというのはそういうものだ。全身に熱をいきわたらせるのは、最後の瞬間だけでいい。戦う前から焦つてたとしても、それには何の意味もない。

近距離。迷う必要などなかった。私はその場に踏みとどまった。バーサーカーからすればこの距離はもはや王手だが、私の矢がああ肌を傷をつけることを期待するのは浅はか過ぎる。宝具を撃ち出したところで、バーサーカーの反応を想像すれば致命傷は難しい。

イリヤを討つのも至難だった。果たして、目前の魔人がそんな隙を与えるだろうか。

凜はああ言つてはいたが、ここでバーサーカーを取り逃せば十中八九彼女たちは死ぬだろう。力の差は歴然としすぎている。止めるのではない。殺すしかない。ならば、接近戦だった。

懐に潜りこむにしろ、第一合だけは正面より打ち合わねば成らない。

それがどれほどの困難か、背筋に怖気が走る。その怖気すら消えたのなら、私は正気を逸したということなのだろう。

劍製。魔力が迸る。回路のうねりは、まるで氾濫した大河のようだった。

手に干将莫耶を呼ぶ。

弓手が、神代の最強の武芸者を向こうにして、真つ向より打ち合いを挑む。笑えるではないか。死地など散々くぐってきた。死した今、何を恐れるものがあるうか。

「離れていろ。巻き添えを食うぞ」

「優しいのね。グチャグチャにしてやろうかと思っただけれど、いいわ。バーサーカー。なるべく形を残したままにしてね。凜にプレゼントするの」

「私も、同じことを考えていたよ」

「やっっちゃえ」

怒号と共に肉迫した。

必ず帰ると約束した。不意にそれが甦った。紅茶を淹れると、約束したこと。

迫り来る斧劍の前に、しかし約束は白く遠くなった。

第九話

イリヤスフィールを狙うことは不可能だった。

バーサーカーは鉄壁だ。隙はない、巨体は物理を捻じ曲げた速度で動く。余所見をすれば弾け飛ぶ。

無論、他にも企てはあった。何も考えずに来るほど、私は愚かではない。

それが成るかどうかは、知らない。ただ、やるしかなかった。

鬼が突進を開始した。真っ白になる頭を振った。私は迎撃する。前進をもって、迎撃をする。そもそも私は稀代のフェイカー。真実の一を扱えない私が敵を破るには、斧劍の砦をかくぐり、至近距離での一撃を放つ他はないのだ。

圧迫感の中、前へ行くのはどこか傾斜を登るのに似ていた。そびえる山だ。黒い、切り崩さねばならない山。死への登山道を前進した。重い。重いと感じる心を、踏み潰すように足を叩きつけた。

吼えていた。

筋肉が吼えていた。

いや、この体が剣であるならば、すでにその個々は研ぎ澄まされし殺意の刃ではない

のか。

「受けて見せろヘラクレス」

我が真名。英霊エミヤ。愚かな、男の名だ。だとしても、私は、英霊だ。凡百の体を鍛えに鍛え、英霊にまで昇華した出来損ないの鍛冶師なら、貴様のその鉄の体を見事断つてみせん。

右足大腿四等筋より下腿三頭筋を経てアキレス腱にかけてのライン、左足付け根からつま先まで、左右上腕二頭筋、僧帽筋、三角筋、腕橈骨筋。全てをあわせて、決して齟齬のなきこと流水の如く。

強化の術こそ、最も幼い日から培ってきた私の最古の魔術である。このときのため、私はこの他に使い道のない魔術を修めたに違いない。やはり正義の味方など、妄言だ。もともと戦いを欲していた。戦いに以外にこんなもの、いつ使えるというのか。

岩石の戦斧が振り下ろされる。

私にただ一つの利があつたとすれば、この一撃目が、頭上より力任せに振り下ろされるものだ、と知っていたことだけだ。歴然とした戦力差が明確ならば、頭上よりの一撃で粉碎せしめんとするはまさに常道の中の常道だった。

そこしか、私の狙い目はない。この推理と呼ぶことさえおこがましいただの憶測を、信じるしかない私は限りなく薄つぺらかった。そして、それでいいと思つた。薄く、ど

こまでも薄く、切り裂いてしまおうほどに尖ってしまいたい。

足を狙う。バーサーカーの恐ろしきは、力もそうだが、速度だ。この巨体で私よりも早く動く。足を止めなくては戦いにすらならないだろう。全ては、ここで決まるといつてもよかった。

裂帛と共に猛撃を迎え撃った。迫り来る力任せの斧剣。一合目。息の根を止める瞬間まで、結着させるべく全力を注がねば、この神の具現を殺しきることなど出来はしない。元よりある戦力差は、文字通り天と地ほどに離れている。その隙間を埋めるのは、体から絞りだす以外にないのだ。

呼吸を止める。内臓が蠕動するわずかな誤差さえ、私を殺すだろう。心臓すら、止めたくなつた。

初合初撃。

収縮した瞬発が干将莫耶を送り出す。

磨きに磨いた無頼の剣である。逆に岩をこそぎ落としただけの無骨な斧剣が、頭上より押し迫ってくる。得物が砕け散る勢いで私は連打を叩き込んだ。

英霊の体に強化を折り重ねたスピードは、もはや私でさえ視認できない。わずかに、外してもならない。意識を打撃にのみ限定する。

渾身の繰り返し。壹と貳の撃。参と肆の激。伍と陸を逆に構えて併せて漆。捌玖拾

の隙に櫂。

秒を待たず拾度打ち込み、手の内の双剣は衝撃に耐え切れずに砕けて舞った。いくつかの筋肉も、痺れをきたして扱いにくくなる。しかし、その代価は決して高くはない。斧剣がその歩みを止めている。刹那だった、瞬きをするにも窮屈なその瞬間だけが、私に残された勝機であった。

目前に巨木のような胴体が無防備にさらされている。心臓が冷えていく。

痺れるような勝機の予感があった。同じくらいに、恐れる気持ちもあった。退路はない。もはや、前進するほかない。ならばせめて迷うまい。大腿より下、弾けるのを待っていた私の脚部は、爆発して神速を生んだ。踏み込んだ。一撃を与える時間はある。懐はもはや目前だった。しかし不意に、耳鳴りに似た危機を感じた。

巨大な斧剣は右腕一本のみに操られているのだから、つまりこの耳元に迫り来る轟音は悪夢の左拳。

鼓膜を破らんばかりの風速を、私はしゃがみこんで避わした。予感を、乗り越えた。しかしなぜか、乗り越えたという気が一つもしない。多分、殺しきるまで消えないに違いない。

最大の勝機。乾坤一擲だった。魔力を迸らせる。脳裏には、一片の狂いもなく描かれた完璧な錬成図。目の前の巨人を、止める。否、倒す。そして、戻るのだ。

出でよ、世界の悪と悪と悪を滅する其の名はインドラの雷撃。

「釋迦提婆因陀羅雷霆金剛杵——」ヴァジュラ——」

奇跡は世界を真っ白に塗り替える。まるで何百の竹をいっぺんに握り潰したような雷鳴は、鼓膜を騙し、叫び声を上げた。カンカンカンと破滅は銅鑼を鳴らして現世へ至り、黄金の棍棒を依り代に破壊の限りを尽くす。

意志を持った蛇のように、稲妻は荒れ狂い飛び散り触れる物全てを焦がす。

バーサーカーの両足に放たれたイナズマは、命令を遂行した。

巨体が跪く。神の血が絨毯に染み付いた。ヴァジュラの輝きは、バーサーカーの膝から太ももを、根こそぎ焼き尽くしデロデロとした溶岩じみた何かへ、変えていた。

並みのサーヴァントならば、もはや現世の楔を断たれるほどの致命傷だが、ヘラクレースの化身であるバーサーカー、そしてマスターであるイリヤスフィールの能力を併せれば回復することもできるのだろう。

事実、いまだバーサーカーの目には力が満ちている。電撃は内臓さえ炭化させてしまうはずだが、しかしやつがこれしきで死なないことなど、知っている。この程度で死ぬならば、なんぞ苦労があるうか。驚きなどない。その左拳があるうとなかろうと、はなから私は足を狙う気だったのだから。

横へ避ける力さえ奪っているならば、それで十分である。

かつという、痛い感覚は世界とリンクしたときのものだ。まぶたの裏に描かれる、次に扱う私の得物。重々しく、血なまぐさく、熱い。

あらゆる力、あらゆる魂。英霊エミヤはそれら全てを模倣する。現れる、ズシリとした重み。

男は、誰よりも強かった。黄土の史上、最も強いと謳われた。男には何の野望もなく、何の憂いもなく、ただ人を殺したいと、強い者と戦いと、願いつけていた。敗れ去つて血があふれ出し、死する際に願つたことすら、どこまでも戦いたいと、敵の首を取りたいということだけだった。男は、握り締めた己の武器に、その呪いを残して冥土へ逝つた。

それが今甦る。

千里を走り、刎ね続けた首の数は、その血で大地が染まるほど。刺突の槍、斬る剣、穿つ角。

何があろうと首を断つ。呪いの証の、方天画戟。

人中の鬼。武器は、今またその魂を宿す。

「その首級貰い受ける」

赤い柄に、赤い布を巻いていた。まだ足りぬ、と叫んでいるようだった。更なる真紅に染め上げよ。

熱いものが宿り始める。方天画戟だけでは、それ自体はただの強力な武器でしかない。黄泉より、その男の魂を憑依させるための媒体でしかない。

刺し斬る戟が、赤く輝いた。

柄の一部がぶくぶくと沸騰し、塊になり、心臓のように鼓動を始めた。手に痛み。柄から生えた牙が私の肉を食り、血より魔力を得る。心臓が、全体に魔力を巡らしていく。比喩ではなく、武器が吼えた。おぞましい欲望は清らかすぎる殺意に彩られている。

ずるずると、むさぼるように私の魔力を吸い上げながら、叫びながらそのときを待つ。おぞましさも、醜さも、無骨さも、反面、力強い、美しいときえ思えるほどに、純粹な殺意の固まりだった。

ならばゆけ。声に出していった。私の魔力など全て枯らして構わない。貴様があの敵を刎ねる力があるのなら。

私は死の代名詞であるその名を叫ぶ。

武人、解放。

「殺して殺す、いつかの虎牢——リョ・ハウセン——」

突進した。膝を突いたままのバーサーカーは、右手の斧剣を振り上げて迎撃を狙う。

しかしそれが及ぶはずもない。

全身。余す所なく、首を刎ねるためだけに動く武器。

槍であろうと月牙であろうと尾の穂先であろうと持つ柄であろうと、吼え声であろうと。

戟とは名ばかりのこれは、戟に擬態し、それ自体が生きているものの如く振る舞う一匹の魔物である。望むのならば剣であろうと矢であろうと鞭であろうとその身を変え、首を刎ねるまで動き続ける。かの武器に攻めて生き延びる手段など、城を築くか離れるのみである。

二千年分の血の飢えを、魔物は欲してうねって走る。

飛来する斧剣を邪魔だとばかりに、幾重にも分裂した尾で絡めとり、吼え声に対しては吼え声で破り、遅れて伸びた防御の腕を一の月牙が開いて呑み、方天画戟——奉天餓撃——は狂いに狂う。

激突。硬質の音は、月牙が弾かれた音だ。バーサーカーの皮膚を、方天画戟が突き破れないでいる。最強の武人を以ってしても、相手は神をも弑する神の子であるゆえに刻々と荷が勝つのか。

腕力は、徐々に刃を殺しだした。

一進一退となることは、すなわち負けだ。一息に突破せねば、自力で負けてるこちらが死ぬ。

魔力。ありったけだった。振り絞った。

再びの、魔物召還。人中の鬼だけで足りぬというのなら、馬中の鬼も、呼ばねばならないのは、道理である。

恐らく、真にそう呼べたのはこの主従のみ。人馬一体の称号は、鬼と鬼によつてしか、やはり叶えられなかったのだ。

招来する。並ばれることのないその伝承。千里を歩き、千里を飛ぶ。敵を踏み潰す。いななきは、万の馬の戦意を消す。

黄昏色の風の伝承。

「駆ける、嘶脚千里赤——セキト——」

もはや声もかき消される。一本の宝具に召還された二つの魂は、溶け合い、莫大な力を吐き出す。

一筋の閃光は、もはや止める術もない。刃が首筋を捉えたまま、私とバーサーカーの巨体を引き上げ、縦横無尽に駆け回る。

朱を帯びて暴れ狂う、まるで龍。階段も床も柱も、砕き、抉った。

私自身も無数の浅手を負った。バーサーカーは、喉笛に傷が生まれかけているだけだ。鉄の腕が、包み込んだ刃を千切つて片方の月牙に手を伸ばす。かすかに食い込んだ刃を、引き抜こうというのか。まだ。まだだ。

千里を行く馬が暴れ狂う。広野を、荒野を、と叫び、荒れ狂う。こんな狭い空間に閉じ込めらる。大地を返せ。天空を返せ。八万里の世界を返せ。重力を裏返し、天井に激突した。重荷が邪魔だと、落ちつつ、激突し、再び力を弱め、もう一度天井へ突撃する。まだか。

この一撃で刎ね飛ばすことが出来なければ、バーサーカーの懐で私は留まることとなる。一撃をまともに受けてしまうのだ。そもそも、この戦い自体が幾重にも重なる賭けだった。オッズは己が全てのもの。容易く消し飛ぶわずかな魂だ。

螺旋を描いて宙を飛んだ。錐揉み状に落下し、階段を挟り飛ばした。さらに飛翔。天井を再び打突した。衝撃は、今まで最重だった。

狂人の咆哮。これを待っていた。月牙が伸びる。バーサーカーの、啞内に突っ込んだ。中から、破る。即座に噛み砕かれたが、砕かれたその穂先までもが、方天画戟であった。食道より蠢き、弾けた。喉笛から鮮血がほとばしった。餌を喰らうように、穂先がその傷を押し広げ、延髄を絶つ。天地が逆転する。最高の加速が生まれる。耳鳴りのする落下。加速。魔人魔馬の腕力と脚力を加えた彗星のごとき一撃は、確かにトドメとなった。鮮血が私をさらに赤くする。穿たれたクレーター。少しの間を置いて、落ちてくるものがあつた。とうとう狂人の頭蓋は胴体より飛翔したのだ。

ずどん、と重々しくバーサーカーの頭部が床に落ちた。間を置かず、方天画戟が崩れ

落ちた。武人とその愛馬は死力を尽くした戦いに満足したのか、一時光って灰と化す。またいずこかでの戦場を夢見て発った。

勝利。しかし勝ったという喜びも、生き延びた安堵もなかった。ただ、いつまでも消えない悪寒だけが、今も膨らみ続けている。

「凜」

世界が流れた。錯覚だと思った。世界は水平を流れる。

時計の音が鳴った。カチリ、という音だ。聞いたような気がした。時計などどこにもないというのに。

熱いものが口から出てきた。遅れて、自分の体が壁に埋もれているということに気付いた。口から出たものが、血だと、気付いたのはさらに遅かった。

「あ?」

なぜ、自分は吹き飛んだのか。そう察したのは、ダメージの深刻さを訴える痛覚より少し早いくらいだった。

足が、地に着いた。私は、さらに血を吐いた。

「誰も、一回殺したら死んじゃうなんて言っただけ。うふふ、あわてんぼなんだから」
幼い少女の声は、あまりよく聞き取れなかった。目の、首のない巨人の体から伸びる腕が、地面に埋もれた自分の頭部を掴んでいるさまにただ目を奪われていた。そして

その先の、私を見据える、鋼の頭蓋の赤い瞳が。

「もうー。ほんとグズなんだからバーサーカー。こんな奴に一回でも殺されるなんて」
あと十回しか生き返れないじゃない。クスクスと笑う少女の声。今度ははつきりと聞こえた。私の骨が、碎ける音も、ともに聞こえた。

頭部を接着した巨人が、やってきた。敵は十命の神であった。

第十話

単純なことだ。

痛ければ、腹が立つ。殴られれば、殴り返したくなる。人はそうして前に進んできた。そして私も、元は人だった。消え去ったはずの感情が、怒りを契機に蘇生していく。

ゴッドハンドだの何だのと、イリヤスファイルの声を聞き流しながら、私は体の状態を調べた。一度喰らった攻撃は効かないだの、なんだのと。戦える。頭の中は、怒りで気が触れてしまいそうだったが、今はまだどうにか冷静を保つことが出来た。

干渉莫耶を構えた。狂人が迫っていた、守らなければならぬ。

生々しい切断面から、いまだ熱い血液を迸らせながら、バーサーカーは飛び掛つてきた。

無骨な斧剣を振りかざして迫ってくる。イメージしろ。足を痛めたバーサーカーは深追いできないだろう、一振り目、二振り目でいなして——斧剣が迫ってきた。投擲したのか。隕石のように風を切つて、やってきた斧剣から身を捻った時には、逃げ出すことは出来ないほどに敵の接近を許していた。己の足が、いうことを聞かなかった。

その分厚い鉄の五指に、握り締められた。

「そのまま握りつぶしてもいいけど、どうする？ 食べたい？」

本気が冗談なのか、少女の声を判別する暇はなかった。

「が——あ」

悶絶するほどの力がこめられた。ありえない音がした。胴体の圧縮が、血液と内臓に逃走を促す。口から、はらわたが飛び出そうになった。私は弓を取り出した。自動的にもいつていい動きで、カラドボルグを打ち出した。

衝撃と轟音が巻き上がって、煙のために視界が失われた。私は立て続けに何かを撃つた。いくら撃つても、握力はいささかも鈍っていかない。バーサーカーは、カラドボルグクラスを零距离でぶつけられても無傷を誇る。怖気が走り、終わる、と思った。これ以上締め付けられれば、私は上下を二つに分けられて無様をさらすことになる。それはまさに、無様以外の何物でもない。

「が——はっ、あ！ あああ！」

矢を解き放った。銀色の矢は少女に向かって疾走した。

私は放り投げられることもなく、握り締めたまま巨人は走った。埃の向こうで、少女の前で仁王立つバーサーカーは怒りでさらに巨大化したように見えた。

私は握り締められたまま、少女の前に掲げられた。

「ふん、どうしようもないくらい、惨めな抵抗ね」

イリヤスフィール。

なんと残酷なことをいう少女なのだろう。

私はこの何度目かの再会に、痛みを超えた懐古を覚えた。だから、笑うことが出来たのかもしれない。

「惨めでも、いい」

「負けても？」

「勝ったことなど、ないさ」

「無様な人生だったのね」

ただ、零れ落ちたその言葉が、ふと、人生の大半を物語っているような気がした。

惨めで、戦い続けたが、本当に得たかったものは何一つ得ることが出来なかった。

そんな人生だった。

「やっちゃいなさい」

命令が終わると、握り締めた己の腕ごと、左腕で私を殴りつけてきた。

握力もさらに強まった。私はその攻撃に甘んじていた。痛みも、損傷もとんでもないものだったが、それ以上に忸怩たる思いがこみ上げてきた。敗北ではなく、意味のない人生にでもなく、今、それを肯んじた自分にだった。

私の人生を、馬鹿にしているのは、私だけだ。たとえそれが、イリヤでも。

痛みが消えた。これは、何らかの状態に陥る、最後の段階だろう。邪魔な感覚が消えた、としか思わなかった。

魔力の割合を変更した。回復と戦闘を五対五に振り分けていたのを、三と七へ。畳み込むべきなのだ、と理屈が怒りを後追いで擁護する。脚部を損傷しているバーサーカーは、やはり衰えている。勝機が潰えたわけではないのだ。

打撃の隙を見出す。一つ、二つ目で私は魔力を迸らせた。左腕が雑草のように、完全に潰れてしまっているのに気付いたが、構わなかった。

魔力回路が緑光を放つ。設計素材は、ただ木と鉄である。

枷が、巨人の両肘にはめ込まれた。さらにそこから、木は伸びて塔を作る。バーサーカーは怯まない。その前に私を殺せばいいと、頭突きをかましてきた。脳天が揺らいで、私は、それでも痛みを覚えなかったのだ、笑うしかなかった。その名の通り、暴れるしか戦闘方法を持ち得ないバーサーカーは、ゆえに異変に気付くのに遅れた。はすにまっすぐ、枷の上に据えつけられた刃は、よだれをたらしている。

「断罪の首、革命の朝——”マリー”——」

トン、という呆気なさで両肘は落ちた。

「……tbc…」

理解に苦しむと、少女の眩きが静けさを続かせなかった。

フランス、王国貴族を刎ね続けた断頭台の中で、かの女のそれを断った一台は、悲哀と絶望を吸い上げ、宝具の域にまで上ったのだ。

「ギョティーン……なんで？　なんでアーチャーごときが……どれだけの宝具を」
「ありったけだ」

ギロチンは否定を許さない。ギロチンは切るだけだ。大人しく枷に嵌れば、そこで全ては決する。鉄の守りのバーサーカーとて、定義を覆せるわけではない。

しがらみから解放された私は、東の間膝をついて、すぐに立った。吐血は無視した。服の赤みが少しだけ濃くなるだけだからだ。左腕だけは、もうどうしようもないだろう。弓を構えることさえ、出来ない。

両手を失ったバーサーカーは、しかしその目に戦意を失わずに、突進してきた。両腕がなかったとしても、頭と牙があれば、と思っっているのか。私が勝機だと感じている以上に、相手も考えているのだ。ありがたかった、一歩進むことさえ、今は気だるい。

跳躍して、バーサーカーの頭上を取った。魔力の割合をさらに変えた。もう、攻めるだけだ。どうせ長くはない。

ブロークン・ファンズムが、色とりどりの閃光の尾を引いて空を滑った。全て着弾した。真つ赤な火炎が、闇を消し去った。

「喰らう、がつ、いい——！」

世界は、赤い色が好きだ。

真つ赤な絨毯の敷かれたこの場も、私の血、狂人の血が合わさって濃度を増していく。爆発も手伝う。この後も、さらに吸って、もつともつと鮮やかに染まるのだろうか。そんなことを考えた。私はほんの少しの冷静さを取り戻した。

ただ宝具をぶつけるだけでは致命傷にはならない。強力な一撃さえあれば、倒すことが出来る。例えば、セイバーの剣のような、大出力のシロモノだ。エクスカリバー、またはカリバーン。

立ち上がった鍊成のイメージは、すぐに打ち消すことになった。

想像して、手に甦るのは、生々しいまでの人を貫いた感触だった。そして、今際の言葉。

——多分、そういうんじゃないかって思っていました。

痛々しいまでの笑顔と。

——予想、当たりました。悲しいけど、やっぱり私が先輩のこと、一番よく知ってるんだと気付けたし。

怯えに震える手と。

——はい、許してあげちゃいます。

多すぎる想い出。

今ならば、あのとき流せなかった涙を流せるような気がした。戦っている最中に、感傷に浸っている自分は滑稽だった。

私に、あの剣を振る資格はない。

セイバーの剣である。それを、私は桜を切るために用いた。私にはもう使えないのだ。例えば、使えば勝てるとしても、これだけは使えない。家族殺しは、馬鹿みたいに重い罪だから。

また一つ、戻らなければならない理由が増えた。戻って、セイバーに謝らなければ。くるとき、彼女に別れを告げなかったのは女々しさを自覚したこともあったが、私の出る幕ではないと思ったからだ。間違っていた、私は、彼女に謝らなければならない。まだだ、まだある。

もちろんのこと、私は桜についても決着をつけなくてはならない。彼女が、彼女のまま生きられるように、私はサーヴァントという今の己の分を超えてでも、働かねば。こみ上げてくるものがあつた、私はこんなチャンスに気付いていなかった。

「戻らねば、ならない」

討ち果たそう。

思考を頭から追い出して、ただ前を見つめた。刀剣の爆撃はバーサーカーの足を止めてはいる。が、しとめるには遠い。残存魔力は、もうそれほど残ってはいない。あと何

度倒せばいいのかは、考えないことにした。

私は決定打の空想を抱えたまま、接近した。煙の向こうで、バーサーカーが腕を振り上げる。早いが、両腕を切断されたぎこちなさはなくならない。干涉莫耶を、右手と、口にくわえて私は突貫した。岩石のような拳を払いのけ、ヴァジュラを用いて焼き尽くした太ももをを薙ぎ払った。巨体が、揺らいだ。鍊成図は、狂わない。

「クルト」

弧が、全身を地面に固定した。

第一。曲剣は肉体を拘束する。

「アルマシア」

影を刺した。

第二。短剣は精神を拘束する。

「デュルムダリ——」

そして輝石の第三は、真っ黒な刀身を翻して、バーサーカーの肩口に突き刺さった。

巨漢は、吼え声を上げる。鼓膜が震え上がる。苦痛と怒りのその声は、心地よくさえあった。

切れ込んだ傷口の深さは、十センチといったところだ。切開するのは、これからである。

肩に乗りあがり、傷口に直接手を襲した。山と積み重なった設計図を、片っ端から吐き出した。

グラシーザーが傷口を押し広げた。スクレープが鎖骨を砕いた。肺にまで達したのはデュランダルドだ。爆発がバーサーカーを内部から焼いた。ベガルタとモラルタが脊髄に楔を打ち込んだ。リュシング。草薙剣。もはや、バーサーカーは割れんばかりだった。

最後の一撃、ラベリスの斧は、完全に敵を両断した。

あらわになる、壮絶な匂いと具体性。真つ二つになった肉体が、再び一つに戻っていき様はさらに壮絶なものだった。起き上がってバーサーカー、その赤い瞳で私を見つめてきた。

私は眩きながら、立ち向かった。

バーサーカーよ。神話の魔神よ。私は貴様に何の恨みもないが、貴様にも同じように恨みなどないのであろう。千億の日々の果てに我らがこうして殺しあうということ、誰が夢想しえたのだろうか。いや誰にもわかるまい。だれにもわからない力を、人は運命と呼ぶ。運命。皮肉なものだ。私が彼女に召還されたのも、彼女に再び会えたのも、あの男を見逃したのも、全てか細い糸にて巡らされた運命だったのだ。

そう。私がここで倒されるのも。

何か吹っ切れた。足が、もう動かなかった。離脱する直前に、拳で殴りつけられたのだ。やはり雑草のようにしなびてしまった。

魔力の、底がこぼれてしまわないようにしている栓を抜いた。力が、溢れ出てくる。二度とは戻らない生命の源である。

バーサーカーの接近は、ロー・アイアスで止めた。桃色の開花、春にはまだ遠いというのに。

花びらが全て潰される前に、必殺の手段をひねり出さなくてはならない。

天啓のように、一本のシルエツトが浮かんだ。思いついた瞬間に、これを作ろうと決めた。

その姿を、私はこの目で見た。美しき煌きを、幾何学に彩られた眩い赤を。

見た。打った。響きを聞いた。骨子の解明はそれで済んでいる。背骨から先端に至る美しさ。イメージして、身震いした。

魔力がわずかに足りない。もはやとうに、肉体維持に魔力はほとんど使っていない。それでも足りないということは、投影しきつた瞬間に、この身は崩壊するということだ。

あといくらもないのは知ってはいるが、私は勝たなくてはならない、戻れなくても、戻るために。

制約を越えるために思いついた打開策は、実に莫迦げたことだった。何某への冒瀆と

も思えるほどに、考えは常軌を逸している。なんとという詭弁か。だが他に道があるのなら、誰であれ示してみるがいい。鳴り止まない嘲笑を全て呑みこんで、私は鎚を振り下ろそう。

鉄のようなバーサーカーが、ロー・アイアスの包みの何枚かを、布のように裂いた。時はない。他に方法もない。成そう。それしか出来ない私だからこそ、やるしかない。遠いいつかの夜、打ち合わされた闇夜の火花を覚えている。あの、見惚れてしまうほどの輝きを。

エミヤは武器を複製する。さらに正確に言うのなら、劍製の男は、劍をよりよく製せらる。

ゲイボルグは槍である。

自嘲した。それを破ろうというのだから、命知らずにも程があつた。

マナとオドと意志の風が走る。

この場に至つてなお、自分の考えが自分で信じられない。私はバーサーカーの一撃により、思考能力を失つたのか。あの武器を曲げて、呼ぼうなどと。彼の魂を騙して戴こうなどと。弾けたヒューズを弾けたままに、私は魔力を迸らせた。

頭脳に衝動が渦巻いた。今にも決壊しそうな倫理を、意志で捻じ伏せ、さらにイビツに歪めてしまう。限界。思い起こしただけで果てを超えた。骨子を解明することと、素

体をひねり出すことは次元が違う。私のこの身を形作るほとんどの細胞が反対をした。肉も骨も頭脳も、なしてはならぬと異を唱えた。ではなぜ、私は模倣をやめはしないのか。

震える心臓よ。

断固として、心臓だけが吼えていた。

崩れろと、毀れろと。しかし断固として、決意は曲げぬ。心臓よ。そのまま燃えろ。

バーサーカーが四枚目の花卉を突き破った。残すは三枚。

英霊エミヤは刀剣の男だった。私という存在は、剣を起源に生き、あるがままにしか投影できない出来損ないである。魔力の分だけ、武器を生む。自己限界を省みず、それを破って槍を作るということは、魔術師としての地平を越えるということだ。

ここで、私の最大の詭弁が始まる。槍が難しいというのなら、それを剣として呼べばよいだけ。

「ゲイボルグ」

毀れた。激痛はしとどに濡れた。全身をあるがままに生み出せば魔力が足りないというのなら、必要最低限で戦おう。槍。その穂先、断ち折れた先端のみが転がっているとして、果たしてそれは槍と呼べるのか。

私はそれを、剣と呼ぼう。

英霊エミヤは、こうして、詭弁を弄して短剣、ゲイボルグを召還する。

難しいことは何もない。この体は、ただ鋼のみを細胞にして造られているのだから。赤くて熱い短剣を、掌が傷つくのも省みず、しっかりと握った。

数歩よろめいて、振りかぶり灰色の胸に殴りつけるように刺し込んだ。

呪いが侵入していく。千とまではいかないが、棘は、一箇所のみを目指して突き進んだ。

破裂する音が聞こえた。

刹那、心臓は確かに止まった。そこはかかない満足感に、私は声を漏らした。

「やれば、できるものだ。まったく、手際は極上に悪いが」

もはや枯れ果ててしまった声だった。

再び灰色の鼓動が甦ると、私の全てが枯渇するのは全く同時だった。ロー・アイアスは、もう残すは二枚しかない。その維持に、私のなけなしの力は涸れてしまった。終わったのだ。全て出し切った。もう、何も残ってはいない。

五回。その数、私の命をぶつけた量だ。あとは、凜たちが勝手にやるだろう。私は叩き潰されるだけだ。

もう、何も残ってはいない。

それでも、私はなぜか立ち上がることに成功した。思考は、限りなく澄んでいた。も

うひとつのことしか考えられなかった。

「なんで……」

イリヤ、君がそれを言うのか。私が、聞きたいというのに。

まだ私は遣り残したことがあるというのか。しかし立ったとして、何が残っている。凜から吸い上げる魔力も、この期に及んではもう体の維持に全て費やしている。戦う力はない。存在するだけで一杯だった。バーサーカーは、幾度目の死を乗り越え、再び立ち上がるうとしている。新たな心臓は力強く脈打っているだろう。

唐突に、光が失われた。

視力が消えたのだ。魔力で構成された肉体は、すでに欠落をきたすほどに根本がえぐられている。時間はもうない。

「終わりよ！ バーサーカー！ さっさと消して！」

馬鹿ね、と聞こえた。確かに聞こえた。せつかく渡したのに、使わないで終わる気？

この耳が、はつきりと聞いた。

「そうだったな」

私は、赤い宝石を飲み込んだ。

溶けていく、澄んだ一滴の魔力。その瞬間、誰にも、負ける気はしなかった。

飲み込んで、溶けて、熱いものがドロリと体に広がっていった。

魔力。一撃分。

宝具など、呼べない。剣を一振り、生める程度の量。十分よね？ という彼女の声が聞こえたような気がした。

「ああ、そうだな」

生きた暴風が血を吐きながら突っ込んできた。満身創痍の二人である。ならばどちらかが死ぬのは必至。だが十を越える命を携えて来臨した神と、矮小な一しか持たない私とどちらが消し飛ぶか、これほど単純明快な命題もないであろう。

消えるのは、私だ。どう足掻こうともはや私の敗北は決まっている。ともすれば、あと一度。一度だけ。そう、決めた。

体の内より吹き上がってくるものがあつた。意志の風だ。決意の、熱だ。同じように、弾けて、飛び出たのは血だ。何色なのか、もはや見えぬ目では何色なのかすらわからない。彼女に似合う、赤だったらしいと、思った。

運命なのだ。呟いたがもう聞こえない。私はただ錬成する存在となった。生み出すものとなった。この世界、思っていたより愉快であつた。だからわずかに名残惜しい。

セイバー。

下らないしがらみに囚われないで、もう少し話せばよかつた。女々しい後悔でしかないが、セイバーはセイバーのままだった。あるいは、見てだけで良かつたのかも知

れない。

凜。

彼女に何もいうことはなかった。勝つだろう。それだけだ。私たちにもう言葉はいらない。

衛宮士郎。

誰も殺さない、そう叫んだのを、私は忘れない。それが真実ならば、きつと何にでもなれる。私になれなかつた者にすら、なれるだろう。もしかすると、そのために私はこの時代へ来たのかもしれない。

感傷は終わった。

全ての世迷言と雑念と名残惜しさを振り切つて、私は前進した。

「体は」

未来永劫苦しむ体は鉄と硝子。

三千世界の地獄を歩む、理想に死んだ哀れな鍛冶師。

今ここで、役目を果たすためにその道を歩いてきたと思えるのなら、嘗め尽くした辛酸も投げられた石もあらゆる恨みも血も骨も後悔も、まるで塵芥のように消え去るのか。

「剣で出来ている」

私に敗走はなかった。私が理解されることはなかった。

私はいみじく独りであった。勝利でさえ、私を癒すことはなかった。

破壊にのみ費やされたこのような生涯に、意味を求めるのはおこがましい。

だからなのか、この身が消え去る瞬間。俺は彼女を助けたという事で、古の——それこそ、地平線のように遠い——借りを返そうと——そのことに、意味があるのだと思いたかった。

唯一無二の剣製だった。

残りわずかな魔力で生み出せるものなど、その中で目の前の暴力を殺しきるものなど——ああ、この手触り。確かにこれだ——ただ一つしか思い浮かばない。この剣で、足りぬわけがない。

かつてエミヤと呼ばれた、男の、魂の最後の一滴。もはやこれ以上どうするというまでに、命が凝縮された一振り。

遠坂。お前から貰ったものだったな。

寶石を埋め、今も君の魔力が生きているその剣の名は、アゾット。

最後の花びらが散った。バーサーカーが拳を振り上げた。

踏み込んだ。私の叫び声はどんな声なのか。衛宮士郎よ、貴様に届いたならば、腑抜けた結果は許さんぞ。

決然。刃先を、自分の腹に突き刺した。もはや痛みすら分らない。やつを殺すためには、この剣では威力が足りない。魔力が枯渇したのなら、この身を構成する血液に求める以外にない。血を吸え、肉を喰らえ。魔力を満たせ。アゾット剣。遠坂。もう、何も考えられない。

血に濡れた刃を腰だめにした。最短距離を行った。斧剣が当たったのか、当たらないのか、まだ当たってないだけなのか。わからない。ただ、この手に、わずかに食い込んだ手ごたえだけは、確かだった。

解放。魔力の奔流。血流は燃えるように熱い。バーサーカーの腹から裂けた、溶岩のような血を浴びながら、けれど止まらなかつた斧剣の直撃を受け、私の全ては潰えた。

全てが消えていく。消えぬものもある。君たちの顔。感慨に充ちた日々だった。

君たちは勝つだろう。たとえ横にいる男がどれだけ未熟で甘い奴だったとしても、それなりに使える男だ。君ならば上手に使い切るだろう。負けはしない。

さらば遠坂、セイバー、この時代。

紅茶を淹れる約束が果たせず、君は怒るだろうが、なに、幕引きにしてはそれなりであつただろうよ。許して欲しい。

ああ。この臨終の際。

私はなぜか彼女の前に立っていた。守人は倒れ臥し、少女は孤独に私の前に。どんな

手違いでこの舞台が整ったのだらう。

殺意など湧くはずがない。私はただ、気が狂ってこう残しただけだった。
「体には気をつけてな」

彼女の赤い瞳が見開かれた。綺麗だ、と思えた。

そして世界から途切れて、巨大な器に滑り落ちる夢を見た。

最終章

第一話

たくさんの思い出を見てきた。

わたしは、これが最後の回想であることを知った。正確に言えば、遡及できる記憶としては、最後、という意味。長い長い映画を見終えるときのような気持ちになっていた。

熱気の中で、命が燃えていた。

視点が少年の中にもぐっていく。ここにはない体で跪き、うずくまることしか出来なかった。わからないことだらけだった。何か、自分には理解することすら難しい、大きな力が働いたのだということしかわからなかった。大きな大きな力が働いて、みんな壊して燃やしてしまったのだ。世界は少年に絶望を突きつけているのだ。

命が燃えていく。

ただそこに建っていただけの家の並びは、軒並み燃え尽き、崩れ、終焉を迎えていた。立ち昇った熱気と煙が、地平を染める赤と混じって、空は病的に澱んだ血液のような色をしていた。平和の終焉である。頭上には、見たこともないような黒い巨塔が聳え、暴力を吐いて捨てていく。

わたしは吐き気を催した。願いという願いを余すことなく叶えてしまう神聖な器、その欺瞞と虚偽と崩れた神話を目の前にして、わたしは、もう一度少年の心を思った。絶望が少年に与える作用を直視する義務がわたしにはあった。

少年の中で、何かが終わろうとしていた。そして、壊れようとしていた。

今まで積み重ねた、なげなしのあらゆる何かが全て消えて、終わって、空っぽになってしまふ……そんな危惧さえ燃えて、灰になって、宙を舞って。

ああ、なんということだろう。少年の内に最早何が残ったというのだろうか。それはまさに苦悶を拒む死への備え以外のなんであるというのだ。

彼にとつての全ての元凶が、今この瞬間であるとわたしは知った。他の何でもない。繰り返されてきたたくさんの殺戮も、家族殺しも、この瞬間が原点であったのだ。わたしは知った。そしてわたしは悲しんだ。

貴方の中に、何も残らなかつたのね。ここにはもう何もないのね。これより以前は、消え去ってしまったのね。

命、燃えて、過去も消えて、灰になって。

救いの手が差し伸べられる頃には、しかし少年の中身はすっかり黒焦げてしまつていたのだ。

燃えた。灰になって、宙を舞って、彼方へ、彼方へ。

そこに光が射しこむ日は来るのか、命は燃えて、燃えるものすら残らない空の下——
だというのにこんなにも綺麗な青空が。人の幸福を無視して美しいままである世界の
残酷さが、絶望の断崖の高さを突きつけてくる。

これで終わり？ 全てこれで終わったとしまったというの？ 絶望は少年から立ち
上がる力さえ奪ってしまっただけなの？

結末を記した頁を残したまま、わたしは分厚いアルバムを閉じた。

第二話

目の眩むような白さの中で、私は立ち尽くしていた。

空間は、広さも、高さもどこまであるのか見当すらつかないほどに、白かった。どこまでも広大なのかもしれない。実は身の回りにまわりついているだけの、狭さなのかもしれない。それでも私は見上げて、目を落とした。どうにかして、この白さから目をそらそうと、灰色の世界しか築けなかった私には、この白色の純粹さ加減は、酷に過ぎる。

あれから、どうなったのか。私がバーサーカーの腹にアゾット剣を突き刺してから、消え去って。

完全に、どうしようもないほどの損傷だった。意地や気持ちだけでどうこう出来ないほどの、ダメージなのだ。だがなぜ私は、未だに記憶を保ったまま、意志を持ち続けているのか。体に傷もない。

いつもならば、そのまま根源へと渦巻き戻り、次の時代へと飛ばされるのだ。一刻の猶予もなく、一分の情けもなく。

一つの仮説を立てた。今この世界は聖杯の内部なのであろうか。

「正解よ、半分」

白い世界の一部が、急に縁取られた。そして初めからそこにいて、白い色で隠れんぼをしていたかのように——そして今やめた——イリヤスフィールという名の少女は現れた。

「イリヤスフィール……」

「ここは聖杯に落ちる前の一番最後の段階。あなたは縄一本でひつかかっているようなものよ」

「なぜだ?」

そのなぜという言葉が何を指しているのか、私にもよくわからなかった。彼女が聖杯であることは知っている。私がそういう状態であることも理解できた。だが、問わずにはいられなかった、ひたすら。

少女は笑みさえこぼさずにいった。

「バーサーカーは負けたわ。シロウの生み出した剣と、それを握ったセイバーに。完全に消えちゃった」

驚きはなかった。ささやかな安堵を得ただけだった。

「なぜ、私を残している。完全に消えたということは、バーサーカーもいないのだろう?」

「わたしに、バーサーカーの転落は止められない。ライダーもアサシンもよ。アーチャー、ただあなた一人だけ、わたし側に留めておくことができるの」

「なぜだ？」

「わたしがあなたを知っていて、あなたがわたしを知っているから」

すべて知られている。私が何者なのか、どういう存在なのか、誰だったのか。

初めて、イリヤは笑った。

「なんだか、ちよつと驚きね。あのシロウが英霊にまでなつちやうなんて」

「イリヤ、俺は」

「今ね、外は夜。バーサーカーが消えた後、シロウはわたしを家にまで運んでくれたわ。助けてくれるみたい」

自分も、いつかそうしたことがあるような気がした。確信はない。過去はあまりに遠すぎる。

「今ね、何を話そうかたくさん考えてるわ」

その場でくるくると回りだして、はしゃいだ。今日の前の子は、純粋に少女で、ありのままの楽しみを受け止めようとしている姿でしかない。

イリヤ。懐かしくて、心の中だけでももう一度呟きたい。イリヤ。

他愛もない会話は、会話とはいえなかった。私は聞き手にまわって、始終頷いている

だけだった。それでも満足だったし、彼女にとっても十分だったろう。どれほどの時間そうしていて、私は静かに佇んだ少女の面が、いつの間にかまったく落ち着いてしまっていることに気付いた。

重大なことを告げるときの、あの不愉快な間がしばらくたゆたった。

「これは、気づいているかどうかわからないけれど。あなたは今、一切何の守りもない存在になっている。無防備で、わたしの前に立っている。それは、あなたの全てを、あなたが気づいていないことまで含めて、全部、知ることが出来るということよ」

「じゃあ君は、私のみすぼらしい人生を、全て見たのだな」

その小さなあごがコクンとうなずいて、赤い目が細められた。

視線が、私を麻痺に陥らせる。

不意に、記憶が洪水のように流れてきた。私は白い世界から、あらゆる過去へと飛び立った。のた打ち回らずにはいられなかった。罪と悔悟がとろけあつた。

今回の、凜に召還されたときから始まる、聖杯戦争だった。またたく間に過ぎ去つていった。私の過ごした年月と比べれば、やはりまばたき程度の長さでしかないのだ。

いつかの破滅、殺戮、守護という名の排斥。私の体は、何の意味もなく赤いわけではない。とある国の、とある村。いつかの時代の、いつかの生活。山河も海も血に染めて、マジヨリテイとマイノリテイに振り分けて、世界の要求のままに私は剣を振るい、殺し

続けた長い長い日々。目を背けたくなるような時代だからこそ、一番長い間私は見続けなくてはならなかった。

記憶はさらに遡上していく。

桜とかわした最後の会話だった。呆然としそうになった。あらためて見る、己の所業は傲慢以外の何者でもない。桜を救う機会はいくらでもあつたのだ。もう殺してしまふ以外ないところまで追い込んだのは、紛れもなく、私自身だった。

切嗣との別れの間際だった。

二人とも、なんと幸せそうな顔をしているのだろう。誰にも罪はない。その男と、少年の間にかわされた会話には、純粹な情以外、何も介在していなかった。

それから後、積み重ね続けた修行は、つらいものだった。血反吐で池を作りながら、私は前へと進み続けていた。その先に、何かがあると信じていた。平和を願った心が私の足を運び続けていた。守護者になるか、という問いに対しての愚直な答えは、切嗣との思い出さえ含めて裏切った。

過去が帰ってくる。

焼け野原。思考は消えていった。原風景だった。黒い聖杯が立ち上って、人がたくさん死んだ。

それだけの、原風景。

回想はそれで終わりだった。私は水の底から浮かび上がるに似た、浮遊感を得た。思い出すだけに、みすばらしい人生だと思う。

記憶に上がるのは、悲しく辛い記憶がほとんどだった。だが違う。安らかな日々もあつたのだ。他愛のないことで笑つた生活があつた。思慮の足りなかつた私は、それがもう二度とは戻らない日々なのだということに、とうとう気付けなかつたのだ。家族がいた。暖かくて、いつも俺を包んでいた。けれど、それを壊してしまつたのもまた、私だった。

喜びと、その落差によるさらなる悲しみ。

白い世界に戻ったときには、いつの間にか椅子に座つていた。イリヤも、小さな椅子に腰掛けている。向かい合つて、私たちは見つめあつていた。どういう理屈か、私はたつたいま、今まで歩んできた全道程を振り返つたのだ。

「なにか、気付いたことがある?」

「なにか、だと?」

「あなたが見た自分自身の記憶。けれど、そこに足りないものがあるのよ」

彼女の問いに、すぐに答えられる気力が私にはなかつた。かなりの長い時間を沈黙で押し通した。少女はずつと待つていた。私は、逃げ場のないこの世界の中で、慈悲と後悔にまみれながら、答えた。

「わからない」

「本当に？」

「ああ」

「あなたの人生で、絶対的に欠けた記憶が何なのか、本当にわからない？」

私はかぶりを振った。

「そう……やっぱり最初から、壊れていたのね」

彼女が何を指して話しているのか、皆目見当がつかなかった。私が何かを忘れていてという。失ったものは数限りないが、忘れてしまった、という彼女の言葉のニュアンスとはいささか違う。もうこの段階、全ては終わっている、わからないものはどうでもいい、と私には思えた。だが、意味がわからないにも関わらず、どうしてもこんなにも罪悪感に苛まれるのか。

「わたしは今からあなたに質問をするわ」

「どうしてそんなことをする」

「……本気で聞いているの？ 馬鹿ね、もー。そんなだから迷ってしまうのよ。大きくなっても、中身は全然子供なんだから」

子供の笑顔ではない、どこか大人びた仕草で笑うと、私は妙に安心できた。

椅子から立ち上がって、イリヤは一步こちらに向かつて歩を進めた。

「ねえ、どうしてあなたは、衛宮士郎を殺さなかったの？」

「どうして、だと」

「ずっと、それを願っていたのよね。あなたはそれだけを妄信して、戦い続けてきた。長い時間、長い時間……でも、なぜ唐突に局面に立って、放棄したの？」

さらに一歩、近づいてくる。

「それは」

答えるには難しい質問だった。脳裏に、輝き鳴り響く剣閃と、それを追い越していく小さな背中が見えた。月が照っていた。背中は、果てを知らないようにどこまでも階段を登っていく。

私の心を見透かしたように、赤い目は閉じられた。

「そっか、アーチャーは、シロウに憧れちゃったんだね」

頭を、殴られたような気がした。

打撃は、重くて早かった。早すぎて、何がぶつかっただのか私には、理解が難しい。

「目の前を走っていく、無垢で愚かな背中に、まだ穢れていなかった昔の自分と、届かなかった遠い理想の、二つを重ねて見てしまったのね。アーチャーは、そこに希望を抱いた」

——私は自分でも不思議なほど自然に、その男に凜の命運を託した。

——駆け上がっていく小さな背中、私が切りつけた傷もそのままに。

——ただ一途に、山門へと消えていく。

あの思いが、間違いなはずがない。

一步。二人の世界が、加速度的に狭くなっていく。

彼女は、私のあらゆる苦悶も、思考も、葛藤も、口の端で切り捨てた。

「でもそれは勘違いだから。貴方は気付いてないけれど、中身のおおくの部分が壊れてしまっている。たくさんの要因が、立体的に重なったのね。不完全な召還、同時代への再臨、そしてセイバーに受けた一撃」

「壊れている、だと？」

一步。

「貴方が自分殺しを諦めるなんて、ありえない事象だから。昔の自分に憧れるなんて、なおさら」

「そんなことはない！」

立ち上がって、腹の底から声を出していた。否定の声だった。心の奥底から否定しているとは断言できない、上ずった声だった。

私は一体誰を弁護しているのだろう。

白い世界は無様な声を無限の鷹揚さで隠してしまった。私はまた、椅子に腰を下ろし

た。

彼女の言うとおり、私は今回の聖杯戦争、一番初めから間違っていたというのか。

あの凜の召還から。この時代に来たときから。セイバーに見惚れ、この腹を断ち割れたときから。

そしてそれら全てが合わさって。

「セイバーの一撃は、かなり大きかったようね。再構成されるときに、あなたの内面要素がいくつか書き換えられてしまっている。そのせいであなたは極度に不安定に陥ったの。己の、抱いた憤怒の炎までもが弱まってしまいうほどに」

一歩。

「違う、私は全てに納得していた」

声だけは反論していた。納得してはならないと、私の中のもっとも薄っぺらい部分が頑強に抵抗していた。

哀れな男に対して、少女は、深い慈愛の笑みを浮かべた。

「わかつてるわ。あなたは真摯だった。ずっと、考えていたもの。いいの。誰も責めない。ありえない解だったけど、でもそれが正しかった。あなたはシロウを殺しても、決して救われることはなかったんだもの」

私は気を失いそうになった。眼球が瞼の裏に張り付きそうになった。

気持ち蒼然していく中で、震えだけが止まらない。私はもう、何もわからなくなつた。

「終わらない夢を追つて、それを見果てないものにしてしまつて、終わらせたくなくて、でも終わらせられなくて、壊れてしまつて、もうどうにもならなくなつて——でも、立ち止まらなかつたのね」

最後の一步。二人の間には距離も、隔たりもなかつた。

「大変だつたね、シロウ」

その、一言。ちよつとした一言が、抗い難いほどに、食い込んできた。

私は涙を流していた。感情なんて、殺してしまつたと思つて、しかし何度も揺さぶられている。

この言葉にだけは、勝てない。

彼女の前でだけ、私は少年のままだった。

柔らかい手の平が、私の頭に。

すがりついて、嗚咽を漏らした。涙の熱さを、もはやほとんど忘れかけていた。

手の平のぬくもりで、眠りについた。

第三話

朝を迎えた。イリヤが目を覚めたのだ。白い世界で、私は椅子に腰を下ろしたまま、いつそこに出てきたのか、映写機のうつしだす外界に見入っていた。ココココ、という音が白い世界に映像を送る。外の世界。朝は、壊れずに明けた。

私は隣に座ったままの少女に聞いた。

「これは？」

「わかりやすいでしょう？ あなたに、続きを見せてあげる。見ながら、ちよつとだけ、休もうね。そしてまた頑張るの」

「ああ」

何を頑張るのか、私にも薄々わかり始めていた。

少女は床まで届かない足を揺する。私たちは二人で、椅子に背をもたれさせながら肩を並べて映写機を見る。いつの間にか手を繋いでいた。ぬくもりを感じた。はるかな昨日に失われたはずのぬくもりだった。

視点は廊下を進んで、居間の障子の前で止まった。声が聞こえる。どこから聞こえるのか、と思った途端、私たちの足元にふつと木箱のようなスピーカーが現れた。どこま

でもわかりやすくしてくれららしい。イリヤと見合つて、苦笑した。

届いてくる声は、荒れていた。

「そうそう、あんなのは綺札に預けちまえばいいのよ」

「シロウ。貴方の考えは立派ですが、イリヤスフィールに関わるのは危険です。今ならまだ間に合う。早々に教会に預けるか、その令呪を剥奪するべきだ」

凜の声もセイバーの声も、何も変わらないように思えた。それが妙に嬉しくもあつた。

私の消えた後の世界を垣間見ている。私は幸福なのだろう。私は、ただこの目で見て、耳にしているだけで満たされていた。英霊として戦っていた昂りも今はもうなく、静かに、老いたように安らかであった。私がここにいることを彼女たちは知らなくても、知ることはなくてもそれでよかった。

「な、なんだよ、だつてほっとくわけにはいかないだろう。イリヤはまだ子供なんだし、様子もおかしかった。言峰に預けるのは、なんかかわいそうだし」

「かわいそう？ アンタね、あの子にあんな目にあわされてまだそんな寝ぼけたコト言うわけ!？」

「同感です。シロウはイリヤスフィールに感情移入しすぎています。彼女は何度もシロウを殺そうとしたではないですか」

私は傍らの少女と顔を見合わせて——イリヤはむくれていた——笑った。散々な言われようだな、と滑稽に。

衛宮士郎はわずかに気圧されながらも、引かないという意志をしつかりと乗せて答えた。

「たしかにイリヤは敵だった。けどあいつに邪気はなかった。ちゃんと言いつけてやるヤツがいれば、イリヤはもうあんな事はしない。それに一番始めに言った筈だ。俺はマスターを殺す為に戦うんじゃない。戦いを終わらせる為に戦うだけだって」

男の言葉が反論を封じたのはセイバーだけだった。凜は、眼光鋭く、睨みつけながらいう。

「そう。それじゃイリヤスフィールのした事を全部許すっていうの？ 言っとくけど、あの子はわたしたち以外のマスターも襲っている。もしかしたらもう何人かマスターを殺しているかもしれない。それでも貴方は助けてやるっていうのね」

「誰か殺したのか？」

私は聞いた。

「いいえ。結局、一人も殺さなかったわ」

無表情に首を振る。それは、殺人を犯さなかったことは特にいいことでも悪いことでもない、強く自覚している表情だった。別段、イリヤスフィールは善人ではない。敵

がいて、チャンスがあつたのならば、躊躇なく殺していただろう。

それでも、殺せなかつた。そのタイミンングを奪つたのは、一体、誰なのか。

これも一つの、救いではないのか。

「……そうね、それは正しい。けど士郎、わたしはアーチャーの事を帳消しにする気はないの。わたしのアーチャーは、アイツに殺されたんだから」

ふふ、と笑い声。こちら側のイリヤだ。

「まさか本人が聞いているとは思つてないでしょうね。わたしのアーチャー、だって」

「思つていても口には出さないといいことが、大事なことだというのに。凜もまだまだ未熟だな」

「照れてるの?」

「まさか」

スクリーン。視点が動いた。障子を引いて、居間に入る。

「なによ、サーヴァントなんて最後にはみんな消えちゃうじゃない。そんなコト気にしてるなんてマスター失格ね、リン」

全員の顔色が変わつた。反論に出る二人をイリヤは相手にせず、士郎にお辞儀をしている。

私は仕返す。

「だったら、君もマスター失格だな」

イリヤは答えなかった。手の握りが束の間強くなった。

サーヴァントに情を抱くのは悲嘆を前提にしなければならぬ。いつかは必ず別れるのがすべての存在に科せられている宿命だったのだとしても、もう死んでしまった我ら、そして彼らにはさらに重くのしかかる。

私が無防備なのと同じく、目の前の少女の守りも薄い。彼女の過去が、手と手を通じて流れ込んでくる。思い出の中、バーサーカーはとても大きかった。

「いいの。バーサーカーにはもう会えないけれど、わたしのなかにいるから。ずっと一緒なのは、変わらないわ。変わらないもの」

スクリーンの向こうで、イリヤは士郎の胸に抱きついていていた。それを顔を真っ赤に染めたセイバーが阻止しようと腕を振り上げる。イリヤは楽しそうに遊んでいた。満面の笑みを浮かべていた。私はその笑顔の裏を探らずにはいられなかった。

こうして、主観を離れて眺めると、彼らのどうしようもない若さに眩暈を覚えそうになる。誰も彼もが、若い。若いということ、純粹であるということだ。砕けていく自分も知らず、それを阻止できなかつた無力も知らない。夢と希望という言葉が本当にあるものだと、皆信じて疑っていないのだ。

「でもそれは貴方が悪いわけじゃないのよ、アーチャー」

頷いた。椅子に腰を下ろしたまま、飽きもせず、映写機の映像に魅入っていた。

話し合いはどうやら済んだようだ。イリヤスフィールを匿うということに対して最後まで反対する気であったセイバーも、途中で意見を翻した凜の説得で渋々認めた。

朝食ということになり、準備にとりかかろうとした士郎は、はたと思いついたように手を止めた。

「ちよつと待つてくれ。今から、藤ねえと慎二を呼んでくるから」

即座に、ストップ、と手を挙げたのは凜である。

「なんだよ。藤ねえもそろそろ起きる頃だから。昔つからああなんだ。怪我してしばらくはああやって寝まくる。でもいつの間にか食料は減つてる。そろそろリブートする頃合」

藤村大河は、昏々と寝続けている。が、特に外傷があるわけではない。獣は、己の傷は寝て治すと聞く。おそらくその類であろう。似たようなことを、衛宮士郎もスクリーンの向こうで三人に説明していた。まったくの笑い話だが、大きな安堵が含まれていた。

「……知ってるでしょ。反対してるのは慎二の方よ」

同意を求めるように肩をすくめるが、セイバーは自分が口を出す領域ではないと割り切つて黙っている。あちらのイリヤは無関心を貫いていた。

「そつちはなおさらだ。元気なやつを、いつまでも部屋に閉じ込めておくことなんか出来るか。この家は牢屋じゃないんだ」

「でもあいつは罪人よ」

「だったら、俺も罪人だ。縛り上げて放り込めよ」

橋上の事件は、まだ男の頭から消え去ってはいない。

それ以上話すことはない、廊下に出ようとして止まった。振り返って、曖昧な表情を浮かべる。

「ごめん。ちよつと言い過ぎた。けど、あいつは連れてくる。もう決めたんだ」

「……別に、いいけど。はあ、暗示を解くんではよ？ だったらわたしもついていかないといけないじゃない」

「あ、あの」

セイバーがおずおずと手を挙げる。

「私もついていきます。その、もしものことがあるかもしれない。マスターの護衛は、当然の責務ですし」

「ああ、いや、別に危ないことなんてないぞ？ セイバー、昨日の今日で疲れてるだろ？

座ってていいよ」

「疲れはありません！ ……え、えーと、それよりシロウのことが心配です。凛一人では

心もとない」

「……じゃあ、頼むよ。ああ、でも、もしもがあつてもセイバーは黙つて見てるだけだからな。ケンカに助太刀はいらないからな」

何かを察したように凜は口元に笑みを浮かべている。セイバーは顔を赤らめている。私も、胸の奥の温かいものが束の間、甦りかけた。熱くさえあつた。思い出は遠すぎる。そのくせ、こうやって目の前で繰り広げられる舞台は、眩しいくらいに近い。

結局の所、間桐慎二は団欒を拒否した。強制はしないと衛宮士郎は引き下がったようだが、それなりに強引に引つ張り出そうとした後でなのだから、どうなんだ、と凜は苦笑していた。セイバーはしきりに間桐慎二に不平を述べていた。彼女の気持ちを考えると、微笑ましくさえある。

藤村大河のほうは目を覚ましてやつてきた。居間でちよこんと座っているイリヤについての疑問もなかった。寝惚けているに違いない。

開口一番に言った。

「あれ、士郎海に行つてきたの?」

「なんでさ」

「なんか黒くなつてる。日焼けだ。わたしも明日行こうつと。タコ食べたい。吸盤」

虚ろな瞳のまま、席に着く。鼻風船を膨らませたまま目を開けている様子はどこか異様ですらある。

凜もセイバーも、ただその様に苦笑しているだけだった。衛宮士郎も寝起き悪いな、というだけである。

私とイリヤだけは、笑うことが出来なかった。

目を凝らしてどうにか把握しきれる程度ではあるが、確かに衛宮士郎の肌は浅黒く変化している。私は現在の己の構造がどうなっているかは知らないが、あるのかないのか、心臓が一際強く鳴るのを感じた。

「二応、言っておくけどね。バーサーカーを倒したのはシロウが投影したカリバーンという宝具。セイバーの力を借りながらだけど、その一撃でバーサーカーを七回も殺したの」

剣の名は、私に桜のことしか思い出させはしなかった。

「魔力をだいぶ使ったんだな」

「土壇場でひねり出したって感じだった。あなたを吸収して、朝になった頃かな。逆に攻め込んできたときはちよつとビックリしちゃったけど。シロウ、強かったよ。セイバーと一緒にバーサーカーを攻め立ててた。あなたが持ってた双剣を振るって、バーサーカー相手に」

「強かったのか」

「到底勝てる相手じゃないはずなのに、逃げてなかった。もちろん全然相手にはなっていないかったけど。そのとき何となくわかつちやった、双剣とあわせてね。ああ、アーチャーもシロウも、同じお兄ちゃんなんだなって」

まぶたを閉じた。映像がまざまざと思い浮かんでくる。

巨大な敵を前にして、紙一重と紙一重の間をくぐり抜けるように、双剣を振るう男。セイバーの力が大きいにしても、その姿は強く雄雄しくさえあった。支えきれずに吹き飛ばされる、セイバーも後退する。そこで、満を持して飛び降りた凜が宝石を放つ。吹き飛ばすバーサーカーの腕。だが千切れた腕は、千切れたまま凜を掴み——さらに隠し持った宝石がバーサーカーの顔を砲撃した。それでも砕け散った頭部はすぐに再生し、腕は凜を握り潰そうと力がこもる。私が戦っていた時にその鋼の腕を断ち切っていないかったのなら、凜の体は瞬時に圧壊していただろう。まばたきしか出来ない程度のわずかな隙に、光が輝いた。バーサーカーの背後で煌く宝剣、それはカリバーンの閃光だった。士郎とセイバーが固く握り合っていた。

士郎は、また階段一つ上がったのだ。

再び目を開けた時、スクリーンの向こうではもう食事の準備はすっかり整っていた。他愛のない朝食のはずだった。献立もありふれたものだった。

「いただきます」

声が重なる。カチャカチャと食器が音を立てる。一口二口、皆が口を運ぶ。やがて禁忌にでも触れたように、士郎と寝惚けた藤村大河以外の全員が動きを止めた。

最初に口を開いたのは凜だった。

「……これ、誰が作ったの？」

「俺だけど」

当たり前だという風に答える男に、セイバーは眉根を寄せて、凜は箸を置いた。イリヤも口を尖らせて箸を放り投げる。

「……何だかしよっぱい。美味しくない」

「……」

「士郎、味見した？」

「したさもちろん……」

藤村大河だけは、寝惚けたまま黙々と箸を進めて、食べ終わるところそうさまと言い残してまた部屋に戻っていった。足音が完全に遠ざかると、音らしきものは一切消え去った。

「セイバー、不味いか？」

「……虚偽は口にしません。私には、これがシロウが作ったものだとは思えない」

「いや、そつちのがありがたいよ……すまん、今日は本当に調子が悪いみたいだ。なんだか、頭も痛いし……悪いけど、パンでいいかなみんな」

空気が重くなる。衛宮士郎の動作だけが耳に届く。パンが焼けた。ジャムに、コーヒー。目玉焼きを作り直す。凜の視線は射殺すようだった。セイバーは、俯いている。出来上がった二度目の朝食、イリヤだけがはしゃぐようにしてかぶりついていた。

そこで、映写機が止まりスクリーンが巻き上がった。

「さ、ま、ままで」

「あいつは」

「自分のことだから、わかるでしょ？」

「……感覚器官に影響が出るのは、末期に近いぞ」

「危険な状態よ。でもね、あなたに出来ることは何もないのよ。わたしにも、きつと止められない」

そうなのだ、と思う。私はもう負けたのだ。本来ならばこのような状況になることもなく、消え去っていくだけのただの敗者なのだ。

私に出来ること、イリヤは暗にそれを問うている。

迷い続けることこそが、私の永遠の命題なのだろう。

「続きを」

「うん」

「あなたも、薄々気付いていると思うけれど。今回が最初ではないということに」

「ああ——」

世界はあらゆる可能性に満ちている。私は私であると同時に、私だったものでもあり、私でないものでもある。抽象と具象が入り混じる鏡合わせの虚構の中で、私は、きつと何度もしくじってきたのだろう。

衛宮士郎も、この道をたどるのだろうか。

「シナリオが全部でいくつあるのか、どこでフラグが立ってどこへ分岐するのか、それはわからない。けどあなたは、多分今までのどのアーチャーよりも、壊れていた。セイバーとも戦って、バーサーカーとも戦って、シロウとも戦って、戦って、戦って。ポロポロ、傷だらけのあなたが今回、どうなるのかそれは、でもやっぱり誰にもわからない」
「どうなるうとも、変わるまい。それが守護者だ」

「それは間違ってる。この世に、変わらないものなんてないのよ」

「変わるというのなら、私はこのまま酸化していくだけだ」

「——そっか。囚われてるのね、アーチャー」

「囚われている……そうだ、永遠に解放されることのない虜囚だ」

「世界にじゃない、自分に囚われているの。だから、狂った。シロウを殺せなかった」

衛宮士郎は、言った。限界と可能性の境界で、人を殺さずに救うという、耳にしたこともない言葉。

私はそれに、憧れたのだ。

否定するただけに歩いてきたこの道を、肩透かしにすら似た感触で、男は階段を駆け登ろうとしている。私はそれに憧れた。だが彼女はそれが壊れているという。最早この期に及んで、己のすべての判別の根拠が瓦解していく。

私は、何を信じればいいのか。今までの自分か、これからの少年か、何も無いのか。虚無。

この選択の、正否を知る方法を、心から欲した。

「イリヤ、教えてくれ。壊れているのは、私なのか、それともあいつなのか」
少女はただ、悲しそうな目をしただけだった。

私は問い続けることしか出来ない。

「私はどうしたらよかったんだ。君は、正解を知っているのだろうか」

「あなたは、どうしたかったの？」

「私は」

「わからないんだね。ずっとわからなかった」

その指摘は、私に吐き気を催させるのに十分すぎた。

さつきのように混乱はすまいという覚悟がなければ、また取り乱していたかもしれない。

「私は、衛宮士郎を殺そうとしていた」

「うん」

「だが、殺せなかった」

「なぜ？」

吐き気がぶり返してくる。長い間の目的を、ただの勢いで否定することは、私にはどうしようもないほどの存在の否定なのだ。冷静さから手を放すまいと、懸命になった。なぜなのか、なぜ。なぜ。疑問から決して目を離すな。

「君がいう、壊れているというのは、私にはわからない。それは、当然だ」

「ええ、そうね」

「私は、遠坂凜を勝たせたかったのだ」

「それはサーヴァントとして？」

「そうだ。そして、かけがえのない友人として」

「つまり？」

「——彼女を悲しませたくなかった」

思えば、召還を迎えた瞬間から、私は壊れていたのかもしれない、彼女のいう通り。不

意打ちにも程がある再会に、そしてまたセイバーとの再会。混乱は一時頂点を極めたし、その中で、私の内部に変化が起きたというのか、やはり彼女のいう通り。

「……そうだ、彼女と共に過ごした、生活と闘争の過程で、衛宮士郎抹殺と、遠坂凛との聖杯奪取の二つが、並んだ」

「大事な、友達なのね。わたしにはどこがいいのか、全然わからないけどね? ——けど

それだけじゃない。頑張りなさい、シロウ。自分を見つめることは何より難しいけれど、絶対に逃げることは出来ないの。なぜならあなたは、そのために何度か、そしてようやく今、ここに——」

「セイバーが、いた」

「そうね。セイバーがあなたをたくさん壊したわ」

「セイバーの太刀で私の衝動が切り裂かれ、そして——私は、衛宮士郎に、とどめを刺されたのか」

今まで歩いてきた全てを、否定した。殺すべき相手に、希望を重ね合わせてしまった。それら全てが合わさってのことだった。イリヤの言葉が、あらためて身にしみ

た。

——貴方が自分殺しを諦めるなんて、ありえない事象だから。昔の自分に憧れるなんて、なおさら。

凜がいた。

己の一度目の死に再会した。そしてその救済。

セイバーと出会った。

現実が、私の記憶とは変調していく。

度重なる戦闘。

衛宮士郎。

その全てが、重なりあつた。やがて私を変えてしまつた。

あの背中に憧れたのも、決死を抱いたのも、別れも、全て。

とどのつまり、今の私は、バグだとても？

「それは違う」

間違っていると、イリヤは見つめてきた。

「何度目なのか、それは全然わからないけれど、前に進んでる。あなたは絶対に前に進んでるわ。そして、シロウはシロウを前に進めてきた。時には後戻りもあつたかもしれないけれど、今、ようやくここまで来たのよ」

「終わりに近づいているとても」

「そうよ」

「嘘を、つくな」

「嘘じゃない」

「なぜ、君にそんなことがわかる。聖杯のポテンシャルを擁しているからか？」
「バカ」

泣き笑いのような表情を浮かべて、小さな体が飛び込んできた。椅子がぐらついた。白い世界で私たちに椅子は一つ、ギシリと鳴って、私は懐古に溺れる。

「お姉ちゃんに、わからないことなんてないんだから」

体全部を通して、答えが伝わってきた。私は、不思議と爽やかな気分になった。

諦念と、安堵であった。

私はそつと肩に手をやった。小さかった。そして熱っぽい。胸に顔を埋めたまま、イリヤはいった。

「逆だったのよ。あなたは、シロウに殺されるために、今まで歩いてきたのよ」

それが最後の答え。

薄々、気づいてはいた答え。

いつの間にか再びスクリーンは下りてきていた。ココココ、と映写機が。

向こうでは、苦悶を押し殺した衛宮士郎が、道場でセイバーと真剣を打ち合わせていた。鍛錬の枠を超えていた。戸惑うセイバーと、黙ってそれを見つめるイリヤ。

男は、もう坂を上り始めていた。

第四話

全てを見透かしたような冬の空は、底が知れない。浅い膜の向こうには、きつと夜があるからだ。

劍が板を傷つけるのを嫌って、訓練は道場ではなく庭でやっていた。セイバーに打ちかかる衛宮士郎、力強い太刀捌きだった。その代償として、男はたくさんのものを失いつつある。それは味覚であり、髪や肌の色であったりする。場合によっては、その他多くのものも。今、少年は私より早く力と喪失の両方を手に入れようとしていた。

私は膝の上にイリヤを乗せたまま、静かにスクリーンに見入っていた。
彼女と話あつて通じた、一つの結論がある。

奴が私を超える正義の味方となつたとき、この身は消えるだろう、ということだった。私より上位の英霊としてなのか、あるいは違う形なのかは知る術もないが、きつとそうに違いない、ということで見解は一致した。

セイバーに弾き飛ばされて、男は地面を転がった。砂をかみながら、膝に手をついて立ち上がる。目に深い色が滲んでいた。それは決して濁つてはいない。己の不甲斐なさに苛立ち、弱さに怒る色だった。

己の力の及ばない理不尽に、男は怒っている。

私だけでも、衛宮士郎のせいだけでもない。私を切りつけたセイバー。傷ついた私の同行を許可した凜。それらの布石を経てあの夜、巨大なバーサーカーを引き連れたイリヤが現れた。今では、全てが繋がっているように思えてならない。

綱渡りはか細く、風も吹き、渡りきるにはつらく、狭く、ありえないこともある。

新都でも、深山でもダメだった。あの橋の上、あの戦闘、あの犠牲がなければ、衛宮士郎はこうならなかった。私もここまでなりはしなかった。どこぞで違った道を歩いたに違いない。いつかの誰かのように、どこかの私のように。真つ黒な逃走戦の末に、私が放った一撃が橋を砕いた。狂おしい程の境界面の中で、戦争に全く関係のない命が、失われた。衛宮士郎の変遷の出発点となった、夜である。

そう、全て、あの夜から始まった。聖杯戦争第一夜の、あの橋の上からだ。

「それだけじゃないわ。その後もまた、殺人を止めなかったのね。それも、自分が好きな人が、自分の身を守るために殺したの」

「……あの男か」

蛇蠍のごとき拳を操る男の死。それもまた、衛宮士郎の変遷に関わったというのか。その男を守るために私を止め、だが守ったはずの男に襲われ、守りたかった少女が自分のためにやむなく命を奪った。

無力の上に、また無力が押しかかる。

イリヤが地面に降りて、私の足の上に頭を乗せた。膝を枕に、私にもたれかかる。小さな頭、髪はこの世のものとは思えないほどの白さで垂れた。

「そしてね、アーチャーが消えたこともあるのよ。自分がもつと強ければ、きつとあなたは消えずに済んだ、つて」

彼女の言葉は、私の考えの範疇の外だった。

「サーヴァントはいつか消える。それを肯んじることが出来ないのは、もはや冒涇だ。凜も私も、間違いなどおかしていない。最善をつくした」

「だから、なおのことなんだと思う。シロウ、弱いから」

スクリーンを隔てていても、火花は目の前で弾けているかのようだ。セイバーが打ちかかってくる。全力の何割出しているかはわからないが、それでも士郎の体を吹き飛ばすには十分すぎた。鞠のように転がって、砂を噛んで、だがすぐに立ち上がる。

「でも、なんでかな。すごく悲しそう」

「この先やつが人を殺さないとしても、私が無辜の人間を殺めたから生きている、という十字架を外す日はくるまい」

「一生、背負うのかな」

「あいつは、甘さを捨てきれない男だからな」

「自分の名前を、いつてみて」

「関係ない。あいつと私は、もはや違う生き物だ」

「一緒よ。同じなんだから。シロウが前に進むのは、シロウがいたからなんだから」

「そうだな……だったら、だからこそ私は、狂っててもいいのだよ」

「あなたは」

「私が橋の上で彼らを殺した。相応しい役柄ではあるだろう」

俯いた白い頭を、くしゃつと撫でてやった。命が糧などと、どこまで墮ちたとしても私は、思えない。

一握の砂ほどであろうと、意味があつたと信じたいだけだ。

いつの間にか訓練は終わっていた。庭には、刃傷やえぐられた跡が生々しく残っている。二人はもう屋敷へと戻っていた。

セイバーと衛宮士郎の関係がどうなっているのか、愛し合っているのか、いないのか。興味は当然ある、が、それは表に出すべきものではない。どうなるうとも、私が端役でしかないという事実は動かない。それも、すでに退場してしまつた大根だ。

私は、愛した。それ以上の何が必要であろうか。

ふと映写機の光量が落ちていることに気付いた。付いて従うように、世界の白さも落

ちている。

「終わりが近いんだな」

「うん。聖杯の引力に負けて、あなたはちよつとずつ滑り落ちていく。我慢することも出来るけど……シロウ、いいのね？」

「もういいと、思ったからこうやって落ちていくんだろう」

剣を振るって、私はたくさんの方路を選んできた。

夢は、誰か一人でも欠けたのなら辿りつけはしないのだ。

誰も選べないのが、正義の味方なのだから。

私は選んでしまった。命と、世界とを秤にかけてきた。今さらその愚を悔いることすら、無様だ。

衛宮士郎は誰一人殺さないと叫んだ。

その言葉に嘘がないのなら、本物の正義の味方になる道を選んだということだ。

コントラストが浮き彫りになっていく。自分の過去を思わずにはいられない。殺して、積み上げた命の数は膨大で、救い出した命の数はきつとそれより多いはずだという、一念だけに支えられて走ってきた。命を奪って作られる平和など、薄っぺらいだけだということから目をそむけ続けて。

しかし、もう終わる。

結末は、薄らぼんやり近づいては遠ざかり、ようやくここまでやってきた。

全く根拠はないのだ、だがこの妙な確信はなんと説明すればよいのか。私もイリヤも、方法も過程もわからないが、結末だけは理解していた。私が何のために戦ってきたのか、何のためにこの時代に来たのか、イリヤはそれが今回の聖杯戦争だといった。

「正義の味方、か」

「わたしには、なんだかよくわからない概念」

「ああ。私にも、本当のところ、理解してないのかもしれない」

見果てぬ地平など、ありはしない。

衛宮士郎よ、正義を目指すのだ。そして私の屍を越えていけ。その時こそ、私は完全に消滅する。世界は常に優れているものを選ぶ。使い捨てのゴミのように、この身はくびきから外れ、虚無へと脱落していくだろう。あるいは地獄の業火に投げ込まれる。

夢を目指して敗れた末路が、それでも布石になることが出来るというのなら、喜びを伴ってもおかしくはなからう。

頭上の白さは濁りだし、灰色を混ぜて褐色に近い。最後は夜を迎えることになる。

私の顔の下で、顔を上げて、イリヤが言った。

「シロウ、あなたが何をしたいのか言つて。わたしが今だけあなたの目と口になってあげるから」

赤い瞳と、私の腕を掴む小さな腕。私は頷いた。胸の底からむず痒い感覚が湧き上がってきた。肉親に対する情なのだど気付いて、私は頷いたのだ、たとえば彼女も限界に近いのだと知っていても。

私たちはこの世界で二人きり、儂いまでに優しくなれた。

「言つて」

「話したい」

「誰と？」

「——みんな」

うん、と頷いて少女は私の手の上に手を重ねる。

画面の向こうで、イリヤは立ち上がって居間を出た。全員が居間に揃って、凜が作った昼食をとっているところだった。残されたサーヴァントであるランサーと、ギルガメッシュについて話しながら食べている。

ちよつと、と手を伸ばした凜に向かって、眠い、とだけ返す。それだけで手は止まった。イリヤは頻繁に横になっている。聖杯は、満ちるたびに壊れていく。だから、誰も何も言わない。追いかけてやうとする衛宮士郎を、彼女は一言で遮った。

廊下を渡つて、部屋を求めた。夕日がよく入ってくる家の中、眩しくて、この世界よりも白く見える。張り詰めるものは何もなかった。あつけないまでに障子を開けて部

屋に入り、寝相の悪い顔がいびきをかいている。

「じゃあ、ちよつとだけ呼ぶね」

小さな手が、藤村大河の額に置かれた。私はスクリーンから眼を離して、腰を上げた。すぐ右隣に新しく椅子があつて、ぽかんと口を開けた彼女が座つていた。

「あれれ、ここどこ——あ、夢っぽい」

「夢よ。そしてすぐに忘れる幻」

イリヤが膝の上から降りて、さあと促した。私は立ち上がつて、彼女の前にまで歩いた。いつから、この人を小さく感じるようになったのだろうか。何もなのまま、ずっと大きくある人だと思つて、省みることはほとんどなかつた。

「どちらさん？」

「……」

「……」

私が誰なのかわかるわけもない。藤ねえは腰を上げて首をかしげる。その、仕草が私を射抜く。俺が、藤ねえに告げた別れは、どんな言葉だつただろう。家族だつたんだ。なのに、俺は手紙一枚で片をつけてしまったような気がする。

「……なんだ士郎か」

私の呼吸は、きつと止まっていただろう。

「士郎でしょ」

「全然、違うだろう」

「士郎の目だもん……ふーん」

うんうんと頷きながら、私を上から下まで見る。そしてやおら、バーンと私の胸を両手で強く突いた。数歩よろめく。藤ねえは腰に手を当てて、説教をするように叫んだ。

「ばっかちーん！ 染め直しなさい！ そんな髪の色似合わないんだから！ 肌もなにか違うー！」

彼女の目は、私を、衛宮士郎だと疑っていない。

言葉にならない気分に襲われて、苦笑がもれた。

「似合わないか」

「そしてそんな風に笑うのもダメ。なんかやだ」

「あいにく、これはもう治らない」

「ふんだ、染め直す。そんな不良モード、お姉ちゃんは許さないんだから」

「染め直す、か」

「士郎が不良になるなんて絶対許さないんだからね。ラージャ？」

「……ああ」

「ああじゃないでしょ。ほら、ちゃんとしなさい」

ちやんと。

「謝る時に、あんたは、ああ、で終わる子だったの」

「——ごめんなさい」

うむ、と頷き、えへん、と胸を張って、許す、と勝利の余韻に口を開けて笑う。姿は、笑顔のまま霞んでいった。光量の減りが、藤ねえを隠してしまう。

短い再会だった。

スクリーンの向こうで、小さな手が額から離れた。

私はまた椅子に腰を下ろして、ごめんなさい、ともう一度呟いてみた。

いつて尽きることのない、今まで口に出れなかつた言葉だ。

また一つ、暗くなつていく。

発した言葉をたがえることなく、部屋に戻つてからイリヤは数時間眠つた。あちらで眠ると、内側でも眠っている。椅子は知らぬ間に安楽椅子に変わつていて、小さい体を抱えたまま私はしばらく揺られていた。

昼と夕方の際刻に、目を覚ました。廊下に出ると、ぼつたりと衛宮士郎に出くわした。

「イリヤ、体の調子悪いのか？」

「ちよつと横になつたらすつかり治つちやつた」

迷わず開口一番に答える。だが彼女の容態はもはや末期的だった。内側にいる私だから、わかることでもある。もうどうしようもないことを嘆き悲しむと、当人はさらにつらい。イリヤが笑っている内は、笑つてあげればいい。彼女の周りにはそういう人間ばかりだということは、きつと幸せなことなのだ。

私は衛宮士郎が何を言うのか、おおよその見当が付いていた。

「そつか、ん、じゃあちよつと付き合つてくれないか？ 無理しなくていいぞ」

「どこか行くの？」

「ちよつと教会まで……つて、違うからな。イリヤを教会に預けに行くわけじゃない」

「お墓？」

「……ん。無理にとは言わないけど」

イリヤははしやぐうのように行くと答えて、駆け足で玄関へと向かう。靴を履いた二人は手を繋いで教会を目指す。道。川を渡り、また道。終わりのある道と、終わりのない道がある。いま二人が歩いている道に終わりがあつたとしても、終わらない道に繋がっている可能性はいつだってある。

この坂、一体上るのは何度目になるのか。今まで最も低い視点で上っている、ということだけははつきりしている。そういうと、イリヤは頬を膨らましてむくれた。

極力穏やかに、坂を上っていく。そしていつかのように、チャペルの裏の墓地の、花に囲まれた墓標に立った。

スクリーンの向こうのイリヤは、地面に溢れた一本の花を手にとつて、香りをかいだ。「わたしは、人の死を弔うことなんてしたことないの」

男が答える。

「強制、するわけじゃない」

「うん。でも、あんまり嫌じゃない。多分、こんなにもたくさんの花があるから」

そつと花を戻して、イリヤは歌った。白い喉が震えた。歌は、夕暮れを伝つて天にまで上る。誰に届くことはなかったとしても、少なくとも二人の男には届いていた。

「わたしに神様はいないから、これしか思いつかなかつた」

衛宮士郎は、黙つて小さな頭を撫でた。そしてもう一度手を合わせた。私も——きつと、この少女の中にいるからだ——素朴なままに手を合わせていた。私も——きつ

しばらくそうして、そろそろ視界が覚束なくなつてきた。

視線に気付いたのは私もイリヤも、衛宮士郎も同時だった。生ぬるく不快な眼光が、夜を一層暗いものにする。

「イリヤ、先に帰つててくれ。道わかるよな?」

「シロウは?」

「この神父にちよつと用事があつて、すぐ帰るからさ。先に戻つてくれ」
「……無理はしないでね」

視線の方向には決して意識さえ向けず、イリヤは士郎と別れて坂を下り始めた。

あの二人が何を話すのか私たちにはわからない。その結果如何で、衛宮士郎の生き様が決まるかもしれないと思ひはしても、傍観者でいるしかない。だから、どうでもいいことを私は口にした。

「お腹は減つてないのか？」

「ちよつぱり減つちやつた」

「じゃあ、商店街で何か買つていくといい。金は」

「ないけど、譲つてもらつちやう」

「悪い子だ」

「うん。ふふふ」

たい焼きを、暗示でもつて一個譲つてもらい、それを頬張りながら間桐の家を目指して歩いていく。みんなと話したいといった。だから向かっている。心に何も纏わない私たちには、言葉さえいらなくなり始めている。

冬木の冬は寒くはないが、ときおり風は出る。夕方にもなれば、未遠からの風がこの通りも走り抜けるだろう。

壊れかけの二人が町を歩いていく。

「マキリの聖杯は、今回は動かない」

たい焼きを食べ終えると、イリヤはスウィッチが切り替わったような声で話した。

「ライダーが倒されたからだろう。それに、間桐慎二も死んだものと思っっている。あの老獪は十分な手駒と八分の勝機がなくては動かん虫だ」

「それだけじゃないわ。サーヴァントの魂のほとんどを、もうわたしが回収してしまっただから。聖杯は英霊の魂がなければ動かない。マキリは第六回まで待つ気よ」

そして冬木は再び戦火に包まれる。より大きく、より深く、夜より暗く聳える塔が、世界を血よりも赤く塗り替える。冬木の町を風ではなく、もつとおどろおどろしくて取り返しのつかないものが、駆け抜けるのだ。

あの戦いで、私は桜を殺した。

「他に、やり方がなかったんでしよう」

いつだって、彼女の名前を聞けば手の平に意識が行く。感触を思い出す。

「そうだったかな」

「第六回戦争、見たよ。アーチャーの記憶、全部みたもの。桜を殺さなきゃ、もつとたくさんの方が死んでわ、間違いなく」

「知っっている」

「……わたし、嫌なこと言っちゃったね」

「ああ、だから私の口になつてくれ」

「シロウと、シロウのために」

「私のためになるものなど、もう何も残っていないさ」

全てを捨てた所から、始まった道なのだから。

この時代に戻つて、抜け殻になつてしまった赤い守護者は、けれどようやく終わることが出来る。

桜を貫いて始まった修羅の道、私はその夜を越えた。越えた先にはまた新たな夜が横たわつていて、今でも明けないままだ。私が腰を下ろしているこの聖杯の淵もまた、暗澹としていくように。

間桐の屋敷に着いた。

呼び鈴を押してしばらく待った。ふと、慎二にも会いたいと思つたが、向こうは会いたくもないだろう。

「シロウ、どうするの?」

「君の口からでいい。一言だけ」

「——うん、わかつたわ」

短い応答のあとに、パタパタという足音が聞こえた。徐々に近づいてくる彼女の気配

が、今まで平常だった私の精神を、急速に、簡単にえぐり落としていく。

イリヤが私に聞いた。

「けど、どうしてそこまで間桐桜のことを？」

そんなこと、考えるまでもない。あの顔、あの声、仕草も、過ちまで含めて全部。

——初めて出会ったときの、どこか遠慮しがちな少女。

——次第に仲良くなつて、料理を教え始めたら思った以上に素質があつたこと。

——縁側でのんびりと、一緒に彼女の好物のまんじゅうを食べたこと。

——彼女の料理の味。繊細で、どこかあつたかくて、甘い。

出会った時から知っていた。一緒に過ごしてもつとわかつた。気付けば失えないものになつていた。

心の底から、思える。

「桜は、本当にいいやつだから」

扉が開いた。

紫の髪が目に映えた。スクリーン越しなのかと疑うほどだった。目をそらしたくなる罪深さを、許して欲しい。私は気付けば立ち上がっていた。スクリーンのすぐ前まで歩いた。目が合う。桜の顔。何も変わらない。懐かしさで、話そうとしていたセリフを全て失した。

「あ、あなたは」

「名前くらいは知っているでしょう？」

「……アインツベルン」

イリヤはスカートの裾をつまんでお辞儀しながら、お茶のもてなしは結構よ、と。

「な、何の用ですか。わたしはもうライダーを失って」

「早とちりしないでね。わたしは言伝を頼まれているだけだから」

「……言伝」

「あなたもよく知っている人からの」

「……誰？」

そのきよとんとした表情が、私をさらに揺さぶった。こんなに普通の女の子を、どうして守れなかった。なんでなんだ。君はそこにいるじゃないか。こんなにか弱い少女を守ることが出来なくて、他に何をしようというのか。

口と喉が、イリヤの体と連動していることに気付いた。

涙が一滴、こぼれて落ちた。この世界は、私を丸裸にする。震えた。腰を抜かしそうになるくらい、なんだって俺は弱い。涙が溢れて止まらない。イリヤが、そつと手を繋いでくれなければ、言葉は喉の奥で死んでしまっていたかもしれない。

「桜、気付けなくてごめん。君がそんなにも苦しんでいたなんて、わからなかった。許し

て欲しい、なんて言えないくらいだ。だから、ただ、ただ」

吃った。走馬灯の中を駆け抜けた。血生臭い風に、涙は溶けた。

私は、いえた。

「衛宮士郎には、君が必要だから」

そこで感覚が途切れた。私は言うことが出来た。椅子に身を落とした。二つ三つ言葉をお互いに、イリヤは踵を返した。町の風の中に戻った。丘を登っていく。家を目指して途中で、ひどく寒いと思った。世界は、目を見張るほどに暗さを濃くしていた。

唐突に、誰も死なせたたくない、と強く願う自分を見つけた。

嫌な気配がする、とイリヤがいったのと、ほとんど同時だっただろう。

第五話

彼女に何かを言おうと思った。今なら言えると、そう思っていた。けれど知っていた。そんな素朴な願いが、叶はずもないのだ。

居間は、一万本の牡丹が手折られた時のように赤かった。壁一面を染め上げた血の赤は、生き生きとした絵画のようだった。なんて、言葉にできない絵だ。遠坂凜は、長剣を構えた言峰綺礼の前で、腹を裂かれて転がっていた。生きている。傷は深くない。私
が混乱したところで、何も出来ない。

凜はこんなところでは死なないと、信頼するしかなかった。怒りたかった。走り出したかったが、私にはもう手段は残されていない。ただこのまぶたを閉じないことしか、出来ることはない。

「イリヤ……逃げ、て」

凜が呻いている。

何も出来ないとは知っていても、私は強く思った。

もう一度殺すぞ、言峰綺礼。

「アインツベルン製の聖杯……我が命題の礎となつてもらうぞ」

言峰綺礼の体が流れた。イリヤは身動きが取れなかった。ようやく、逃げ出そうと体を翻した時には、男の体は回りこんで小さな腹に当身を打ち込んでいた。

「あ」

そしてスクリーンが暗転した。膝の上の少女の体がピクンと痙攣して、気を失い、ため息を吐いた。手を当てる。気絶しているだけだった。

もうそれで外界の情報を得る手段は消えた。不意に、凜と話すことは永久に出来ないのだと悟った。

「馬鹿な。私は、何を期待していた」

私が己の無力を嘆くのは、百や千で足りるのか。私は少女を抱きかかえたまま、呆然としていた。

終幕の無頓着さには慣れていたはずだった。この世界は懐かしくて、甘すぎた。ずっと待っていた消滅を間近に控えているとしても、この期に及んで未練が出る。私はもつと凜と話したいと思つて、手を伸ばそうとしたところで、手段も機会も失われた。おあずけにも、慣れていたはずだったのに。

私は何をするともなく、座っていることしか出来なかった。言峰はそれほどの時もかけずに、柳洞寺に辿り着いて結末をこじ開けるだろう。私はもう傍観者としか参加で

きない。後はもう、最後の戦いの終焉を待つだけだ。

心が屈辱で満ちた。

衛宮士郎は、罰を受けている。自分が生きていることは、誰かの確率を奪った挙句のことではしないと、思い知らされている。私もそうして、苦悩した。あの地下を忘れることは出来ない。人は人を家畜にすることが出来る。それさえ知らないで、安穩と生きてきたことは罪以外の何物でもない。戦い続けていくには動機が必要で、多ければ多いほど脱落を許されなくなる。使命ともう一つ、一生前の今日、私は罪悪感で身を鎧った。

衛宮士郎はそこから前に進もうとしている。私は覗き見が精一杯。腕の中の少女を救うことも出来ない。感情の、逆鱗とも呼べる触れてはならない箇所を、おぞましい感触の何かざらざらとなで上げた。腹の底から不快さがこみ上げてきた。イリヤは言った、私が歩いてきたから、衛宮士郎が前に進んだのだと。理解と納得とは、別だった。私はずっと殺そうと思っていた相手に、重大な敗北を喫しようとしている。間違っていた私にも、押し通すべき信念はあるのだと、頑なに信じていた。それを失ってはもう何も、塵芥さえ残らないと、怖れた。

気を失っていたイリヤが、むずがって身じろぎした。長いまつげが痙攣して、ふつとまぶたが開いた。同時に、スクリーンも復活した。スピーカーが風の音を届けた。葉が擦れる音。空気が軋んで、圧縮していく音。ここはもう、決戦場。柳洞寺境内。

「どうやらここまでね」

そういつた少女は暗い瞳で、どこか諦めている風だった。

「何がここまでなんだ」

「聖杯が、呼び起こされるの。あの男は、きっと私を起動させるわ。そうすると、わたしはもう聖杯となる……ランサーが破れたわ。残されたのは、セイバーとイレギュラーだけ。そのどちらかの命を吸って、ホーリーグレイルの輝きは満たされる」

終わりがやってくる。

ことここに至って、最後の一戦が残されるのみ。使命に疾走した騎乗兵。愛に殉じた魔術師。唯一刀を貫いた侍。暴風のような狂戦士。ケルトの蒼い槍兵。引き絞られたまま、放たれることのなかった弓兵。血で血を洗った戦争も、今はもう二人の王を残すのみとなった。そして、神に仕える悪と、一人の少年が。

本当の終わりは、もうすぐそこまで来ている。

少年は階段を登ってやってくるだろう。理想と命を救うために、ここが地獄と知りつつやってくるだろう。最終決戦に、地獄ほど相応しい場はないだろう。

境内は静かだった。

いくら見上げても見飽きない月面と、竹の声だけがあった。

黄金の鎧に身を包んだ、ギルガメッシュが立っていた。一瞥して、残忍な笑みを浮か

べるだけだった。言峰綺礼も、目を閉じているだけだ。

どこにも温かみはなかった。二人がいるのではない。一人と独りがいるだけだ。私に似ている、と思った。私も似たようなものだ、と。孤独を目の当たりにするといつもそう思う。孤高に生きるということは、傍には誰もいなくなるということだ。

きつとそれは間違いなのだ。

やがて打ち壊される静けさがしばらく続いた後に、言峰綺礼は区切りをつけるように言った。

「時間だな」

振り向いて、こちらに歩いてくる。言峰の手が伸びる。

その手が完全に届く前に、小さな体は私から離れて数歩駆けた。たんたんとき軽い足取りだった。くるくると回って、やや遅れてついていく白銀の髪が、神秘的な軌跡を描く。

「黙ってたんだけど」

いたずらっ子は舌を出す。

「……あなたは、受肉してもう一度生きることができる。聖杯の淵にいたままなら、魔力を得るだけであなたはもう一度肉体を得ることができるのよ」

「……嘘をつけ」

「嘘じゃないから、約束してね。わたしに何があっても、じつとして。絶対ね。約束な

んだからね」

自分の胸が切開されそうだというのに、心底嬉しそうに少女は笑った。

世界がどれだけ私を傷つけても。

彼女は私に味方する。

「開け」

そして笑顔を浮かべたまま、その胸に穴ができた。

バクツと、お世辞にも丁寧とはいえない音が響いた。ゴブゴブと血の流れる音。イリヤの薄い胸板に、大きな亀裂が生まれていた。

「あ」

ぽっかりと空いた穴、少女はきよとんとしていた。

変化は一瞬だった。輝いた。白いものが溢れ出した。イリヤの悲鳴すらかき消した。彼女の中から、取り返しのないものがどンドン溢れ出して行く。蛇口から水を流す程度の呆気なきで、イリヤの命が失われていく。流出する白と対照に、少女の純白は奪われて、黒く染まっていく。

「イリヤ！」

「約束……」

「馬鹿か——」

大河を繋いだような奔流が、私を含めた全てのものを押し流さんとあふれ出した。スクリーンもスピーカーもすぐに消えた。見ると、私の体がどんどんと剥げていた。この流れは、純粋な、力なのだ。全てを壊す暴力が、あんな小さな体から、あんな小さな体を壊しながら触れてくる。

それを前にして、ここで、ただ座しているというのか。そんなこと、できるわけがないだろう。

呪文を呟いた。だが剣製はならなかった。この世界は、私の世界ではないからか。

私から剣を取り除いたら、もう何も残らない。だったらやれることは一つしか残らないではないか。

止まらない流出を押し退けて、源に歩いていった。圧力に何度も転びそうになった。熱い。この熱さは、そのまま彼女の命の熱だ。涙してしまうほどに、熱い。失うわけにはいかない。堰き止めるために、私はここにいる。きつと、そうなのだ。

そつと彼女を抱きしめた。

「シロウー」

突き殺す程の勢いで、力が胸を貫いた。それでも、勢いは私の体より後ろに流れはしなかった。この体で、穴を塞ぐ。わかりやすい。ぶちまけてしまいそうになる悶絶の吐息を、飲み込んで、少女の頭を撫でた。

「やめて！ わたしはもういいんだから！」

「何が、いいんだろうな」

「無茶よ！」

「さて、そうは思わんが」

なまじ精神だけでできている今の私だからこそ、壊れの限度が存在しない。果てなく、壊れていく。それは死に続けるということと、かなり近い。熱かった。この痛みを受けするのは、私一人でいい。

こんな薄弱な少女に、味あわせるなんて考えられない。

「……あなたは、受肉してもう一度生きることができると。聖杯の淵にいたままなら、魔力を得るだけであなたはもう一度肉体を得ることができるよう」

その言葉は、私の耳に届いていたが、胸には届かなかつた。

「それは、いいな」

「失ったものを取り戻すことができるし、凜とももつといれる」

「彼女に紅茶を、淹れる約束してたな」

「シロウがどうなっていくか、結末まで見るができる——あなたが一番望んでること！」

私は一瞬だけ、その夢を見た。もう一度この時代に、生きる夢だ。

夢は夢のまま、終わらせるのが美しい。

いい音がして、それが私の背中をゲイボルグが突き破った音など気付いた時には、さすがに戦慄した。槍兵よ、立ちほだかるか。だが、ここは通せないのだな。私の体に穴が開いても、彼女の命を押さえ込み続けた。釘剣と、破呪の短剣、日本刀、私の背中を貫いていく。それを、最後の一枚で押しとどめている。私の背中中、無様に拡張していく。膨らみ続けて破裂などしたら、最低の醜態だ。

「あなたがそんなことをしても、意味ないのよ！ セイバーとシロウはきつと勝って、ここから」

「その前に、君の命が全部流れ出ない保証はない」

「わたしは、どっちみち数年しか生きれない。力が全部流れ出して聖杯が完成しても、でも上手くいけば数ヶ月は生きれるわ。それに比べてあなたは魔力を補給さえすればずっと……」

「御託は、もう終われよ」

かき抱いた。バーサーカーの斧剣だけは、私を攻めなかった。彼女はそれを、知っているのだろうか。

意識が朦朧としていく、なんて段階は元よりない。最初に食らった一撃で、私はもう眼が見えなくなっている。それが絶え間なく、私の体に圧力を加えている。貫かれてい

る。後ろに、こぼれていないことだけはわかる。イリヤの命を溢すことがあるのなら、それは私が、完全に終わつたときだ。話す言葉も、なにを話しているのかすらはつきり把握していない。

「長生き、しないとな。楽しいことなんて数え切れないほどある」

「あなただって、楽しいこと、全然知らない」

「じゃあ、私の代わりに、頼む」

ああなんと愛しい命なのか。か弱さに怖れた。すぐに折れてしまいそうなくらいに、少女は弱いのだ。それが愛しい。命は、かくも弱い。心の底から守りたいと思つた。

だから衛宮士郎、来い。

衛宮士郎。私は貴様が来るまで、耐えると決めた。私の限界が到来するまでに辿りつけたのなら、そのときは貴様の勝ちだ。だが間に合わなかったのなら、貴様の負けだ。こんなところで敗北するのなら、私のように未来永劫苦しむことになると思はれ。

わけのわからない理屈だと、笑いながら、縋るしかない一つの絆。

それだけを信じて、意識さえ攪拌されていく。

眩き続けて、抱きしめて、何時間が経つたのか、私はとうとう幻聴を耳にした。

とても眠たくて、誰だかわからないけれど。多分、正義の味方でもきたんだろう。

遅刻にもほどがあるが、まあいい。あれはいつでも、遅れてくるものと相場が決まっ

ている。

第六話

胸を冒されながら、なぜなのかはわからないが、私は戦いの場を見ることができた。イリヤがそうしているとは、思えない。偶然なのか、はたまた幻なのか。少年の視線の中に、私の意識が埋没していく。

セイバーがギルガメッシュに向かい、衛宮士郎は言峰綺礼と対峙した。

最後の戦いだった。

全てが決する戦いだった。

始まりの合図は、一体なんだっただろう。

剣製は非力だった。想定は矛盾を孕んでいた。原本への冒流のような模倣は、とうてい聖杯の力に太刀打ちできるものではなかった。

膝は、屈しなかった。

無数の触手が全天を覆いつくして迫る。わずかな隙間を切り裂いて駆け抜ける。全てを避けしきることはできず、太ももをおぞましい瘴気が撫で上げた。目の冴えるような鮮血を、振りまいて、少年は止まらない。

油断も傲慢もない、言峰綺礼の投擲した黒鍵が迫った。同時同発の未熟なフェイク

は、半分を相殺した。その間隙を目で見てもかいくぐれるほどの力はない。ただ勤に身を任せて転がり込んだ地面には、劍の影はなかったという、偶然。それが本当に偶然なのかどうか、誰にもわからない。

戦いは、熾烈を極めていた。

憎悪と諦念で染め上げた言峰綺礼の言葉。償え償え。無意味だ無意味だ。死。闇。ただ、私たちにはもはや届かなかった。私はただ白痴のように立ち尽くしていた。イヤを抱きしめたまま、私は何も考えなかった。駆けていく少年の姿を追った。私は、頬を伝った何かの熱さに痺れた。

重い夜の帳、それは破られない。鳥の囀りのような剣戟の響き、溢れる吐息、怒声さえ消えつつある。しじまに私は戦慄した。今ここには、相応しい音楽すらない。衛宮士郎の感情が伝わってくる。怒りと悲しさに、壊れてしまいたいそうだった。

衛宮士郎の投げる出来損ないのスクレープが、おぞましい暗黒を潰す。憎悪の雨に罅を入れる。距離が消えつつある。男は触手を掻い潜り、言峰の腕を浅く切りつける。肉迫する。それでも、やはりわずかな隙を黒い力が、撥ね退けて叩き伏せた。飛来した黒鍵が士郎を鞠のように吹き飛ばした。直前に生み出した概念がなければ跡形もなく消えていただろう。肩に穴が空いた程度で死ぬわけがない。立て。立った。

立ち上がりながら、感情がさらなる幅を持って伝わってきた。教会の地下で、命を飼

い殺された彼と彼女ら。悲しくて、痛い。他にも、もつとたくさんのことが寄り合わさっていく。橋の上。消え行く命。そして、セイバーへの想い。

それがゆつくり怒りへと変わっていく。立った。私はいつか見たことのあるようなその背中に魅入っていた。

そこで気付いた。鳥肌に背筋が悶えた。既視感は全力で私を打ち据えた。理想を持った男の背中とは、そんな風なのだな。私のいつかはお前だった。あの時の私は、そんな背中をしていたのだろうか。駆けていく後姿は、いつか憧れた何かの欠片を、原石のままに。

突き進んだ。叫び声を挙げていた。不意に嘆いた。運命を、砕いてしまいたかった。行け、お前の正義を、貫き通せ。地平の彼方では、理想も後悔も尽きない。運命を、砕くのだ。暗い夜を、越えていけ。

丸ごと飲み干してしまおうと、粘性の悪がのしかかってきた。数千本の触手が生えた。しかし、それが士郎に突き刺さることはなかった。手の平の中で、大きな熱と光を蓄えた、熱が毀れた。

にわかに光。鞘は、湖面と一緒に佇んでいた。

アヴァロン。

魂は、ここにある。

全ての罪は目を背けずにはいられない。輝かしきの前で、罪業はさらけ出されて、聖杯の鞭も、言峰も、私も、時すら、止まった。

少年の足が地を蹴った。両手に握り締めたアゾット剣が鈍い光を放った。あたりが光に包まれた。

その小さな頭を、もう撫でることはできなくなると思うと、妙な気持ちになつて苦笑いがこぼれた。

決着を迎えて、彼女の体からはもう命は溢れ出てはこなかった。出でよ、という意志がなければ動きはしない。私は、朽ち果てた自分の状態を確かめることもなく、イリヤの頭を撫で続けた。彼女はぼろぼろと泣いていた。

聖杯の外、私は衛宮士郎とセイバーの姿を見やった。セイバーも、英雄王に勝利を収めて、ここにいる。二人で言峰綺礼の、吹き飛ばされた右足に止血を施していた。少年は、敵を殺さなかつた。死ぬことを、許さない。これからも、その道を、選択してしまつたのだ。

二人が何を話しているのか、それを聞こうなどと、無粋なことは思わなかつた。最後に残された、わずかな時間だった。別れの時は確実に迫っている。

手当てを終えると、セイバーは剣を携えて、向き直つた。

別れというのなら、私もそうだった。セイバーは今から、聖杯の怨念を絶つ。それは聖杯戦争の終結を意味し、同時に私の終わりを指す。

王が、ゆつくりとこちらに歩いてきて、剣を構えた。勝利と、終わりとを告げる剣閃が今から発せられる。

振りかぶって、振り下ろされた。山の上から、街の全てを照らすほどの光だった。

私は覚悟を決めていたが、なぜか、最後のところで剣は振り切られなかった。まるで時が止まったかのように。

「止まってるの。止めちゃった」

私の腕の中で、イリヤは呟いた。

「なにを」

そこで気付いた。この世界に、私とイリヤ以外の人影があらたに三つも増えていた。

三人はそれぞれ椅子に座っている。

私を待って、座っている。

悪戯っ子の女の子が、泣き笑いの表情で言った。

「聖杯は、願いを叶えられる。今だけ、きつと偶然だけど。いいでしょ？ シロウ、お別れが慌しいのは、嫌だっと思ってたでしょう」

涙を拭いて、イリヤはさあと私の背中を押す。

言葉が見つからなかった。

たたらを踏んで、私は、セイバーの前に立った。あまり理解が追いついていない。

目を合わせた。澄んで、綺麗な瞳だった。虜囚のような暗い影がない。彼女に救いが訪れたということなのか。

私たちに言葉はなかった。何を話せばいいのかわからなかったし、何より恥ずかしさが先に立っていた。

だから私はもう、去ろうとした。背を向けようとした私に、セイバーは溢すようにいった。

「アーチャー、あなたはやはり」

「言うな。それだけは、言わないでくれ」

それをいわれたくないから、立ったのだ。もう一度彼女のほうに向き直った。

セイバーは、口元にほんのりと笑みを浮かべていた。

私も、笑えた。不器用だが、けれど確かに笑えた。

恥ずかしさに出た笑いだった。こんな、みすぼらしい男になってしまった。夢がどこへ行った。ただ、ポロポロに朽ちてしまった男が一人、出来上がった恥ずかしさに笑った。不意にセイバーの手が伸びて、私の手首を掴んだ。

「立派です」

彼女も笑った。私と違い、それは柔らかい笑みだった。

「あなたは、強くなった。本当に、立派です」

「ああ俺は、ずっと、君にそういつて欲しかったのかもしれない」

また、笑えた。

今度の笑いは、決して恥ずかしさを誤魔化すためのものじゃなかった。

ありがとう。そしてセイバーはにっこり笑って薄らいでいった。

セイバー。いったのか。果たして君は救われたのだろうか。昔、客観的には見れなかった。愛した君を忘れないことだけが、俺に出来る全てだったから。

思い出した。君はそうして笑っていった。だったら、疑うべくもない。その微笑を、君ごと信じればいいだけだった。

二つ目の別れは、衛宮士郎とだった。

その顔を、改めて見た瞬間だった。言い知れぬ感情が私を揺さぶった。ふと、頭に電撃が走った。失ったわけではない。悠久の時、己と他人の血反吐の果てに抱いた憎悪と後悔は、真実で、失われたわけではない。

駆け抜けた。その短い距離を、全力でもって駆け抜けた。遅かったのだろうか、それともまだ私は英霊の力を保持していたのか。衛宮士郎は一步も動かなかった。静止し

た時の中、突き出した私の拳が、確かに衛宮士郎の顔面を捉え、貫いていた。「ははは」

感觸は、どこか歪だった。確かに貫いた拳を、私は見やった。透過し、実態すら消えかかっているその手。衛宮士郎は瞬きもせず私を見ていた。ただすり抜けてしまつた拳を、私は引いた。

殺せはしなかった。殺意は、本物だった。だが時が——いや、理由などいい。それほど悔しさはないのだから、どうでもいいという投げやりな気分になんて任せて、私は笑うしかなかった。さつきから、笑つてばっかりだ。

「アーチャー、お前」

「ああ、小僧。お前を殺してやりたかったが、そうもいかない。なにせ拳がなくなった。いや、残念だよ」

「ああ、そうだ。お前は俺を殺せなかった。俺の勝ちだ」
「生意氣、言いやがつて」

本当に、笑うしかない。

この憎悪が、衛宮士郎に向けてのものではないとだけは、わかる。ほぼ全て、己に向けたものだ。あるいは、怒り以外の、口にすることすら恥ずかしい、ある種の劣等感からの子供っぽい気持ちなのかもしれない。

私はこうして、いつまでだって、この道を選んでしまったことを後悔し続けるだろう。すつきり綺麗に忘れるなんて、奪った命の数が許さない。そして、こんな思いをするのは私だけでいい。

「勝ったからには、責任を取れ」

「ああ」

「お前は、生きて、そして死ぬ。間違っても、分を超えたことはしないことだ。死んでもなお戦おうなどというのは、傲慢という犯罪だ。命の合間に、出来ることだけを、しろ」

頷いてから、衛宮士郎はいった。

「一つだけ、教えてくれ」

「なんだ」

「生きてる間に、全ての人間を助ける方法を、お前は知ってるのか？」

殴られたような衝撃だった。腹が痛い。私は大声を上げて笑った。

「知るか」

「こっちは、真面目に聞いてるんだ」

「ああ、だからなお更笑えるのだ」

「わ、笑うな！」

「……そうだな、魔法使いにでもなったら、できるんじゃないか」

冗談半分で答えたのだが、案外それこそが正解なのかも知れないな、とぼんやり考えた。

ひとしきり腹を抱えてから、私は息を正して言う。

「二つだけ、約束しろ。間桐桜の人生は、お前が面倒を見るんだ。他の何が出来なくてもいい。最後まで正義の味方に憧れ、その身を滅ぼすことになったとしてももう私は何も言うまい。ただ、桜のことだけは、お前が最後まで見てやるんだ。私にできなかつたことを、お前に託すのは少々卑怯だがな」

「ああ。約束するよ。俺は」

「もういい、話すな。どうせ、生意気なことしか言えんのだろう——知っているからな」
空を見たくなつた。

少年は、どこまで、いけるだろうか。

私は、永遠という終わらない時刻の果て、それでも憎悪を忘れずにいた。

その渦の中で捻じ曲がってしまったけれど、衛宮士郎、貴様の周りにはたくさんの方がいる。憎悪は人を動かすが、決して幸せにすることはしない。それを、周りの人たちに教えてもらえばいい。正義の味方は、決して一人でなれはしないのだ。

その言葉を口にはしなかった。言わなくても、わかるはずだ。私のような失敗作に教えてもらうまでもない。本当に、なれるのならば。

気付いたことがある。

守護者エミヤの最後の使命、それは英霊エミヤ自身の抹殺に他ならない。

それは、衛宮士郎を殺すことではない。

衛宮士郎という可能性を、昇華すること。

英霊エミヤに殺される人々すら、破滅から救い上げるのが、私の最後の使命だったのだ。

人類を破滅から救うため、多くの間引きを行ってきた守護者でさえ、悪ではない偽善でしかなかった。

ここに、私は正義の可能性を見た。

阿ることなく、自身を蔑むことなく、生きる、正義の存在を。

めぐりめぐり、この時代、この世界。

衛宮士郎はこの先、私を越えるのだろう。

不完全な夢をもち、不完全な道程を歩み、最後まで後悔を抱き続け自分への殺意を消すことの出来なかった私とは違う、正しき正義の味方として。

それがどのような形なのか、私にはわからない。

私の使命はすでに終わったのだから。続きは、あの傷だらけの少年が見つけるのだろう。

私が消え去っていくという事実を元に推論した、そう、仮説にしか過ぎない。もしかすると、奴もまた一つの不幸を背負うのかもしれない。

しかし、私は可能性を見た。それだけで、満たされた。腫を返した。

凜の声。別れに、彼女は名前どおりに凜として向かい合った。

「アーチャー」

「おめでとう、そしてすまない」

「……なだが、おめでとうで、なながすまないのよ」

「生き延びたことに。そして勝利を掴み損ねたことに」

「ふん、全くよ。最初に会ったときに言った言葉、忘れたの？」

わたしを覇者にするだ

んて、出来ないことなら初めから言うもんじゃないわよ」

「まったくだな」

「この世界に、留まりなさいよ」

「最後だからといって、取り乱すな。君は、ただ君らしくあれ。出来ないことをあえて口

にだすのは、遠坂凜の行動ではないぞ」

「ばか、最後まで優しくないんだから」

言葉を探した。

「とはいえ、君は私には過ぎたマスターだった」

「そんなこというの、卑怯じゃない？」

「泣くな」

「泣いてないわ」

また、言葉が途切れた。束の間見詰め合つて、ちようど言葉が重なつた。最後の会話だった。最後まで、ちぐはぐだ。もう消えるだろう。わかる。ここが私の限界なのだ。それでも、目の前の少女の顔だけは鮮明に見えるのだから不思議だった。

「まだ、約束かなえてもらつてないわ」

「ほう」

「そう、まだよ。まだ、あなたはわたしとの約束を果たしていない。言つたじゃない、後悔させるつて。わたし、まだ後悔してないもの。なんであんたなんかを召還したのか、全然、納得できない」

「そうか、それについては謝るしかないな」

「謝つてももう遅いわ。わたしは必ず約束を果たしてもらおう——令呪よ！」

叫びは白い世界、終わりを迎えようという静謐の中で木霊した。

木霊すだけで、ただ何も起きはしなかつた。さざなみのように小さくなつていく彼女

の声が、どこか切なく響いた。

「やれやれ全く。聖杯が消えた今、令呪の縛りなど存在しないというのに——遠坂、お前本当、肝心なときにうつかりするよな」

「うっさいわね……うるさいのよ、ほんと。最後まで」

「後悔したかね？」

「ええ、後悔した。アーチャー、あなたと会えて、本当に良かった」

「そうか、それは良かった。ならば、さよならだな」

「ええ、さようなら」

私は彼女の頭を小突いた。彼女も私の胸を拳で殴った。

遠坂凛と、アーチャーの物語の終わりに、ぴったりの別れだろう。

偶然を装った優しさは終わった。

イリヤは、もう泣いてはいなかった。

この少女を、守れてよかった。見ればいい、幸せな夢を。俺は見せてやるのが出来なかったが、その続きを、彼女が見れるのなら、いつぞやの虚しさがふと溶けていくのを感じた。

「わたしは、やっぱりあなたは残るべきだと思う」

「無理なことをいうものじゃない」

「わたしの命を、分けたら」

「必要ない」

「だって……あなたは何も手に入れてないじゃない！」

「最後に頼みがある。今、別れを告げた全員の記憶を、消してくれ。私の最後など、覚えていて意味はないだろう。私の言葉に力はない」

「……」

「約束してくれ」

納得いかないように、けど仕方なげに少女は頷いた。

信じているからだ。私の助言など、意味はない。きつと正しい道を歩むという、信頼。きつと、これから衛宮士郎が歩む道も果てしなく、そして辛い。この先沢山の困難が待ち受けている。

険しく終わらない道を、けれど君と、君たちの思い出と力添えがあれば、衛宮士郎、あいつがいくら未熟でも、最後まで歩いていけるだろう。

運命の夜さえ、越えていけ。黒い聖杯の悪夢さえ、お前ならば乗り越えていけるだろう。

「しかし、何も手に入れてないとは、辛辣だな。私がここまで身を焦がして、何も手に入

れられなかっただど？」

君に会えた。君にも会えた。君にだって、会うことが出来た。

その凄さを、君はわかってない。

「悔るな。私は、全てを手に入れた。後悔など、欠片もない」

だから、もういいのだ。

イリヤはそれ以上言わなかった。

さらば。

最期の時。笑う私に、笑いきれなかった彼女が、何か言った。

「シロウ、見てね。シロウがなくしてしまった、一番大切だったもの」

手を振ってくれた。

「きつと、見えるから」

口も世界を離れていた。だから、ただ頷くことにした。

それだけで、十分伝わるような気がしたから。

バイバイ。

そして時は動き出した。

瞳を閉じたエクスカリバーの輝きに、私はさらわれた。

エピローグ

契約終了の鐘が鳴る。奔流が消えていく。

理想も現実も、覚束ない意志の外へと拡散して、希望や絶望からすら解放される。

この世においてただ一なる大地、根から幹へ、そして枝から葉へ。再び囚われる感覚とは、しかし全く違った。私は羽ばたいた。なぜだ、ただ消滅するだけではないのか。意識が、この巨木の先端から剥離して——そして私の目には映ったのだ。美しいものが映ったのだ。

なんとという光なのだろう。ここが消滅の場所、地獄の業火の滾る場所とは、到底思えない。私は、敗残者として消え去るのではなかったのか。世界は、私のような者でさえ、救うべき対象だとしたのか。命。広がっていく魂。夢。私は、あの場所に辿りつこうとしているのか。

時を駆け抜けていく。時代から時代へ、渦の中心へ向かいながら、私は目の当たりにした。

時代を駆け抜け、私が殺した人々すら、救い上げる正義の味方。

歴史が書き換えられていく。私の到来する場所が全て消えていく。

そうして、救い出していく、衛宮士郎は、かつこよかった。

最後の時、あらゆる全てを成し遂げ、英霊にすらならず、満足気に果てていく衛宮士郎。

切嗣のように、幸福そうな顔で。

「それが、夢だった」

幸せになりたい。たったそれっぽっちの、本当の、俺の夢。火事で燃えて消えたと
思つて、ひとかけらの灰だけになつてしまつても、気付かない所に残つていた、夢。

原始にして、終着。始まりにして、終わり。

メヴィウスリングは、決して永遠などではなかった。

私のやつて来たことは、決して無意味ではなかったのだ。薄らいでいく意識、役
目を果たした私は、今度こそ、守護者としての役目すら終え、眠る。

ああ、遠き彼方。輝く光。煌くアヴァロンが見える。

その青い草原で、ゆっくりと休もう。もう、私の仕事は何もかも終わったのだから。
差し込む日の光。

甘い香りの木の下。

けむる草。

辿り着いた理想の丘。

座り込んで、胸いっぱい息を吸い込んだ。鳥の鳴き声と、川のせせらぎが聞こえる。今まで懸命に駆けつけてきた。それしか知らないとばかりに前ばかりを見て走っていたので、その通り、それ以外知らない。

もう、疲れてしまった。

まずは、いつかのように少しだけ午睡を。きつと、何もかも温かだろろうから。

寝転がって、空を見上げた。遙か昔に見たことのあるような蒼穹の色。まぶたを閉じて、その青い空を夢寐にさえ閉じ込めてしまおう。

今はもうこの丘で迎える黄昏どき。駆け抜けた日々も今はただの走馬灯。

こんなにも温かい光の下で、いつも心の奥底では見たいと願っていた、けれどついぞ出逢えなかった、遠い夢と出会えるのなら、どれだけ幸せだろうか。

眠りの時。そして、終わりの時。

頬に当たる、風。手の中には、小さな小さな絆と思い出。

いつまでだって、輝く記憶とともに。

この丘で、もうすぐやってくるであろう君を、夢の中で待とう。

私は、瞳を静かに閉じて、失ったいつかの宝物を思った。

プロローグ

落ち着いていられるか、と内心何度も呟いた。

時間が来ると、すぐにドアから飛び出した。駅まで数分、全速力で駆け抜けた。電車の中でも足踏みをやめなかった。周りの視線なんか心底どうでもよかった。

電車を降りると、また駆け出した。タクシーを使うほど、遠くはない。むしろ走りた。今の自分はなにより速い。人波を縫うようにかわしながら、途中から車道を走り続けた。不思議と息は上がらなかった。今のこの瞬間だけは、きつと、誰よりも。

着くと、流石に走ることは出来なかった。その代わり、出来る限りの大股開きで早足の限りをつくした。

途中で、見たことのある看護婦さんとすれ違った。速攻で掴まった。

「廊下のつきあたりですよ」

もうそれからは何も耳に入らなかった。早足もやってられなかった。人がいないのを確認して、もう駆け出していた。

部屋に飛び込んだ。もう、泣きそうになっていた。

「あ、来たな。遅刻魔め」

「あああああのそれぞれで」

「はっ」

混乱して、頭に血が上って視界がぼやけていた。それでも、はい、といわれて彼女から受け取ったとき、一瞬で全てが止まった。

体のいたるところが、震えた。もう止められなかった。泣いていた。ボロボロと泣いていた。

すやすやと、今、生まれたばかりの命。自分と彼女の、子供。

腰に手を当てて、少し疲れた顔の彼女は苦笑していた。みつともないくらいの泣きっぷりが収まるまで、ずっと待っていてくれた。

ようやく落ち着いて、お茶を一杯飲んで、またちよつと泣いて、拭いて、なんとかなった。

あらためて、腕の中の赤ちゃんを見た。男の子だった。どこがどつちに似ているのか、わからない。目元とか、鼻とか、口とか、どつちがどつちに似ているのか全然わからない。わからないけど、こいつ絶対ハンサムで最高の男前になると思った。いや、今の段階でだってそうだ。

デレデレ笑ってばかりでないでさ、と前置きして彼女は言った。そんなにデレデレしているだろうか。

「それで、宿題はどうなったの？」

宿題。名前を考えてくることである。

名前については、二人して唾飛び交う大激論を何度も交わした。向かい合ってダメダメと言ひ合ひ、飛び交ったのが唾だけならまだしも、最後には皿がヒュンヒュンと舞い飛び粗相をかまして、どうしようもない体たらくとなったのだ。

「それが実は」

「あんだ、もしかしてまだ考えてないっていうんなら、離婚もんよこれは。せつかく権利を譲ってやったって言うのに、いい度胸してんじやない」

「まあ考えてきたんだけど。だから胸倉から手を放して」

「聞こうじやない？」

教えれ教えれ、と彼女はずいっと顔を寄せてきた。

はにかんで、子供のほつぺたを撫でた。なんて柔らかいんだろう。世界で、今、一番新しい命。どうしようもないくらい弱くて、どうしようもないくらい温かくて、一番純粹な、命。

抱き上げた。一瞬、腕が上がらなかつた、なんて、重いのだろう。そして不思議なくらいに軽い。

「土郎」

口にしていた。彼女は、笑みを浮かべて頷く。

「シロウ……字は？」

手の平に指で書いた。士と、郎。士郎。

一秒も悩まなかった。彼女はポンと、子供の額をつつついた。

愛らしすぎる仕草で、むずがった。

「……いいんじゃない？ うーん、悔しいけど、離婚はまだ先延ばしかな」

「そりゃありがたい」

そして呟いた。呼び続けた。二人して、飽きることもなく言い合った。

名前を、君の命を、君の、君の全部を。

また涙がこぼれてきた。冷やかされるかと思っただけで、彼女も泣いていた。あふれて止まらないんだ。それでも、君は健やかに眠っている。泣いて、泣いて、嬉しくて泣いて、いや、意味なんてないんだ。笑って、また泣いた。僕たちは交互に感情をぶつけあつて、全てをもつて喜んだ。

そして、祈った。

この命の未来に、ただ光がありますように、と。

士郎。

君の幸せを、心から願う。